

みや がい と い せき
宮 垣 外 遺 跡

たか や い せき
高 屋 遺 跡

一般国道153号飯田バイパス(3工区)建設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

2000年 3月

長野県飯田市教育委員会

平成14年2月

各 位

長野県教育委員会
文化財・生涯学習課長

埋蔵文化財発掘調査報告書について（送付）

時下益々御清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、このたび刊行された下記の発掘調査報告書を各 / 部送付しますので御活用ください。

記

- | | | |
|-------------------------------|---------|-------------|
| 1 宮垣外遺跡高屋遺跡 | 2000年3月 | 長野県飯田市教育委員会 |
| 2 恒川遺跡群他市内遺跡 | 2001年3月 | 長野県飯田市教育委員会 |
| 3 黒田垣外遺跡・ミカド遺跡
増田遺跡・見城垣外遺跡 | 2001年3月 | 長野県飯田市教育委員会 |
| 4 高松原遺跡 | 2001年3月 | 長野県飯田市教育委員会 |
| 5 大門原遺跡Ⅱ | 2001年3月 | 長野県飯田市教育委員会 |
| 6 妙前遺跡 | 2001年3月 | 長野県飯田市教育委員会 |

みや がい と い せき
宮 垣 外 遺 跡

たか や い せき
高 屋 遺 跡

一般国道153号飯田バイパス(3工区)建設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

2000年 3月
長野県飯田市教育委員会



宮垣外遺跡・高屋遺跡調査区全景（南東から）

序

飯田市では、一般国道153号飯田バイパス建設に先立つ発掘調査を継続して実施しており、平成7年度までに松尾地区における調査を終了し、平成8年度から上郷地区について順次行ってきました。本書は、この上郷地区にあります宮垣外遺跡・高屋遺跡の発掘調査報告書です。

飯田市内には多くの遺跡がありますが、の中で注目されているものの一つとして、前方後円墳をはじめとする数多くの古墳の存在があげられます。当地域の古墳を知る上で、欠かすことのできない資料として、故市村威人先生による『下伊那史』第二巻・第三巻があげられますが、近年の発掘調査によりさらに数は増加し、現在700基程が知られています。

県内のみならず、全国的にも注目される当地域の古墳は、当地域が古墳時代において中央と深いつながりを持っていたことの証左となっています。

特に上郷地区には、県史跡の指定を受けている飯沼天神塚古墳が所在しています。これは全長74.5mと伊那谷でも最大級の前方後円墳であり、今回の発掘調査地はこの古墳に程近い所にあり、周辺には他にも古墳が存在したとされています。

このような背景の中で、宮垣外遺跡・高屋遺跡が、古墳時代を中心とする時期に墓域としての性格を有していたことが発掘調査により確認され、当地域の古墳時代の様相を知る上でいくつかの新たな貴重な資料を提供してくれることとなりました。

また、これらの遺跡の調査と併行して実施されました溝口の塚古墳は、当初比較的小さな円墳と考えられていましたが、調査の結果、50m程の規模をもつ前方後円墳であることがわかり、「埋蔵されている文化財」の発掘調査の難しさを強く感じさせられることとなりました。

遺跡の記録保存としての本報告書が、その役割を十分に果たしたかという問題は若干ありますが、文字として後世に残すことで、今後私たちが住むこの地域の歴史を考える一助となれば幸いです。

最後になりましたが、文化財保護に深い理解をいただき、ご協力いただきました関係者の皆様に深く感謝し、刊行の辞とさせていただきます。

平成12年3月

長野県飯田市教育委員会

教育長 富田 泰 啓

例 言

1. 本書は飯田市上郷地区における一般国道153号飯田バイパス（3工区）建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地宮垣外遺跡（溝口の塚古墳を除く）・高屋遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は建設省中部地方建設局の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は平成8年10月から平成11年2月まで実施し、整理作業及び報告書の作成は平成10・11年度に実施した。
4. 調査実施にあたり、基準点測量・空中写真撮影を株式会社ジャステックに委託した。
5. 発掘調査及び整理作業では、遺跡名の略号を宮垣外遺跡はMG T、高屋遺跡はTK Yとした。
6. 本書では、以下の遺構番号を用いている。竪穴住居址－SB、掘立柱建物址－ST、周溝墓－SM、土坑・土墳墓－SK、溝址－SD、集石－SI、その他－SX
7. 本書は、宮垣外遺跡・高屋遺跡のそれぞれについて遺構ごとに記載し、遺構図、遺物図、写真図版は本文末に掲載した。
8. 本書の遺構図の中に記した数字は、遺構検出面・床面からの深さ（単位cm）を表している。土層の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。石器実測図の表記←S→は研磨を、←T→は刃潰し加工を示す。
9. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により渋谷恵美子が行った。なお、金属製品のうち、馬具及び靱金具については、國學院大学大学院博士課程片山祐介が実測・記述を行った。
10. 本書の遺構写真は吉川豊が撮影し、遺物写真のうち、土器・鉄器は西大寺フォト杉本和樹氏、石器は株式会社ジャステックに委託した。
11. 現地での発掘調査は吉川・佐々木嘉和が行い、本書の執筆と編集は調査員の協議により渋谷が行い、小林正春が総括した。
12. SK10の馬骨については、群馬県立大間々高校教諭宮崎重雄先生に分析をお願いし、原稿を賜った。
13. 本書に関連した出土遺物及び図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、遺物については飯田市考古資料館、写真については飯田市上郷考古博物館が保管している。

目 次

本文目次

序	
例言	
目次	
第I章 経過	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	1
3. 調査組織	2
第II章 遺跡の環境	4
1. 自然環境	4
2. 歴史環境	5
第III章 調査の結果	8
宮垣外遺跡	8
1. 調査の方法と概要	8
2. 基本層序	8
3. 遺構	13
(1) 竪穴住居址	13
(2) 掘立柱建物址	16
(3) 周溝墓	16
(4) 土坑及び土壇墓	23
(5) 集石	37
(6) 溝址	37
(7) 周辺ピット	37
4. 出土遺物	38
(1) 土器・陶器類	38
(2) 金属製品	39
(3) 石製品	43
(4) 石器	44
(5) 馬歯骨	45

5. 遺構外出土遺物	46
高屋遺跡	48
1. 調査の方法と概要	48
2. 基本層序	48
3. 遺構	48
(1) 竪穴住居址	48
(2) 掘立柱建物址	50
(3) 周溝墓	51
(4) 土坑及び土壇墓	52
(5) 溝址	58
(6) その他の遺構	59
4. 出土遺物	59
(1) 土器・陶器類	59
(2) 金属製品	60
(3) 石製品	60
(4) 石器	60
(5) 馬歯骨	61
5. 遺構外出土遺物	61
第IV章 まとめ	62
附編	70
1. SK10出土馬骨について	70
2. SM03 (SK64) 出土馬具について	71
3. SK18出土鉄製靱金について	78

図 版 目 次

挿図1	調査遺跡および周辺遺跡位置図	7	第20図	S M19・同遺物出土状況	
挿図2	MGT基本層序	8	第21図	S M21・22・同遺物出土状況	
挿図3	基準メッシュ図区画調査位置	9	第22図	S K01~09	
挿図4	宮垣外遺跡・高屋遺跡調査位置	10	第23図	S K10・11・68	
挿図5	宮垣外遺跡・高屋遺跡遺構分布図	11	第24図	S K12~17・19・20・22	
挿図6	TKY基本層序	48	第25図	S K18・同遺物出土状況・21	
挿図7	弥生~古墳時代遺構分布図・馬歯骨 出土位置図	65	第26図	S K23~30	
挿図8	S K64出土馬骨遺存部位	70	第27図	S K31~36・38・39	
挿図9	面繫復元図	71	第28図	S K42・45~52・56	
挿図10	鏡・尻繫復元図	72	第29図	S K53~55・57~62	
挿図11	伊那谷出土f字鏡板付轡	75	第30図	S K63・65~67・69~75	
挿図12	伊那谷出土鏡	76	第31図	S K76~82・S I 01	
挿図13	胡録金具参考資料	79	第32図	S D01・02・04	
			第33図	S D03・05・09・10	
宮垣外遺跡 (MGT) 遺構図版		85	第34図	V区グリットビット (1)	
第1図	S B01~04		第35図	V区グリットビット (2)	
第2図	S B05・09~13		第36図	V区グリットビット (3)	
第3図	S B14~17		第37図	V区グリットビット (4)	
第4図	S T01~04・06		第38図	V区グリットビット (5)	
第5図	S T07~09		第39図	V区グリットビット (6)	
第6図	S M03・S K64		第40図	V区グリットビット (7)	
第7図	S K64遺物出土状況		第41図	V区グリットビット (8)	
第8図	S K64馬具出土位置図		高屋遺跡 (TKY) 遺構図版	126	
第9図	S M04		第42図	S B01~04	
第10図	S M06		第43図	S B05~09	
第11図	S M07		第44図	S T01~04	
第12図	S M07遺物出土状況		第45図	S T05~08	
第13図	S M08・11		第46図	S M01・02	
第14図	S M10・12		第47図	S M08	
第15図	S M15		第48図	S M09・10	
第16図	S M15遺物出土状況		第49図	S K01~11	
第17図	S M16・17・20		第50図	S K12~14・21・22・24~27	
第18図	S M18		第51図	S K28~33・35~38	
第19図	S M18遺物出土状況		第52図	S D03・05・06	
			第53図	S D04	
			第54図	S D07~09・11~14	

第55図	S D15・16・S X01
宮垣外遺跡遺物図版 143	
第56図	S B04・12・15・S M03出土土器・陶器
第57図	S M04出土土器
第58図	S M06・07・10・15出土土器
第59図	S M07出土土器
第60図	S M18出土土器
第61図	S M19～21出土土器
第62図	S M22出土土器
第63図	S K04・20・24・29・31・51・54・55・ 57・63・77・82出土土器・陶器
第64図	S M04・遺構外出土土器・陶器
第65図	S M03出土金属製品
第66図	S M03・04・07出土金属製品
第67図	S K64出土馬具
第68図	S K64出土馬具
第69図	S K64出土馬具
第70図	S K18出土金属製品
第71図	S K18出土金属製品
第72図	S M19・21・S K19・遺構外出土金属製品 S M04出土石製品
第73図	S M07出土石製品
第74図	S B03・S K54・76・81・遺構外出土銭 貨
第75図	S B04・15・S K13・34・36・57出土石器
第76図	S M03・04出土石器
第77図	S M04出土石器
第78図	S M04・06出土石器
第79図	S M07・12・15・18出土石器
第80図	S M22・S K82・S D01・09出土石器
第81図	遺構外出土石器
第82図	遺構外出土石器
第83図	遺構外出土石器

高屋遺跡遺物図版 171	
第84図	S B01・08・S M08・S K25・29～ 31・S D06・11出土土器・陶器
第85図	S D04出土土器・陶器
第86図	S X01・遺構外出土土器
第87図	遺構外出土陶器 S B08・S D04・06出 土金属製品・石製品
第88図	S M08・S K21・24・32・36・S D04出 土石器
第89図	S D04・06出土石器
第90図	S D11・12・遺構外出土石器

写真図版目次

巻頭	宮垣外遺跡・高屋遺跡調査区全景 (南東から)
----	---------------------------

宮垣外遺跡遺構写真図版 181	
図版1	宮垣外遺跡東側調査区・西側調査区
図版2	S B02・04・09
図版3	S B10・12・13
図版4	S B14～16
図版5	S B11・17
図版6	S M03・同東側周溝上層・出土遺物
図版7	S K64・同出土馬歯・出土馬具
図版8	S M04・同出土遺物1, 2・同南東側
図版9	S M06・08・10
図版10	S M07・同出土遺物1, 2
図版11	S M07出土遺物3, 4, 5
図版12	S M11・12・16
図版13	S M15・同出土馬歯・同南東側
図版14	S M18・同出土遺物1, 2
図版15	S M17・19・同出土遺物
図版16	S M20～22 (つくね塚古墳)
図版17	S K10出土馬骨・04・07
図版18	S K12・13・15

- 図版19 S K11出土馬歯・18・同出土鉄鍔群
 図版20 S K19・21・22
 図版21 S K23・24・45
 図版22 S K46~48
 図版23 S K50・55・61
 図版24 S K65~67
 図版25 S K68・69・74
 図版26 S K77・同出土遺物・78
 図版27 S K80・81・S I 01
 図版28 S D01・05・09

高屋遺跡遺構写真図版 209

- 図版29 S B02・08・S T04・06・S D11
 図版30 S T02近景・S M01・02
 図版31 S K01~03
 図版32 S K04・09土層・14
 図版33 S K21・27~29
 図版34 S K30~32
 図版35 S K33・36・37
 図版36 S D04・09

宮垣外遺跡出土遺物写真図版 217

- 図版37 S M03・04出土土師器・須恵器
 図版38 S M04・07出土土師器・須恵器
 図版39 S M07・15・18出土土師器・須恵器
 図版40 S M18・19・21・22出土土師器・須恵器
 図版41 S M22・S K24・31・77・82・遺構外出土土師器・陶器、S K19出土帯金具
 図版42 S M03・04・07・19・21・S K18・遺構外出土鉄製品
 図版43 S M03・遺構外出土鉄製品、MGT・TKY玉類・金環・石製品
 図版44 S K64出土馬具類（保存処理前）
 図版45 S K64出土馬具類（保存処理後）
 図版46 S B04・15・S K13・34・36・57出土石器
 図版47 S M03・04・06出土石器
 図版48 S M07・12・15・18・22・S K82出土石器

- 図版49 S D01・09・遺構外出土石器 銭貨
 図版50 遺構外出土石器
 図版51 S K10出土馬骨（保存処理後）
 図版52 S K10出土馬骨（保存処理後）

高屋遺跡出土遺物写真図版 233

- 図版53 S B01・04・08・S K30・S D04・遺構外出土須恵器・陶器
 図版54 S M08・S K21・24・32・S D04出土石器・石製品
 図版55 S D06・11・12・遺構外出土石器・石製品
 図版56 重機作業風景 調査風景

第I章 経 過

1. 調査に至るまでの経過

一般国道153号飯田バイパス建設に先立ち実施してきた埋蔵文化財発掘調査は、平成元年度までに、2工区である飯田市鼎地区まで終了した。

3工区は、バイパス建設工事の最終工区であり、飯田市松尾地区と上郷地区が該当する。発掘調査は、松尾地区から順次用地買収の状況に従って実施していった。平成2年度は八幡原遺跡、平成4年度は松尾北の原遺跡、茶柄山古墳群、平成5年度は茶柄山古墳群、平成6年度は上の城跡、平成7年度は茶柄山古墳群について実施し、松尾地区の現地での発掘調査を終了した。

続く上郷地区においても、建設予定地が埋蔵文化財包蔵地宮垣外遺跡・高屋遺跡の範囲内になることから、その保護について建設省飯田国道工事事務所、長野県教育委員会文化課、飯田市教育委員会の3者による現地協議を実施した。宮垣外遺跡には溝口の塚古墳ほか教基の古墳が所在し、高屋遺跡には番神塚古墳がかつてあったとされる。こうした状況から、本発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の経過

上郷地区でも松尾地区と同様に、発掘調査が用地取得済みの箇所から順次入るという状況のため、溝口の塚古墳と宮垣外遺跡・高屋遺跡それぞれについての調査を並行して実施している。従って1つの遺構をいくつかに分けて何度かにわたって調査をしている場合もある。調査区番号は、宮垣外遺跡・高屋遺跡それぞれについて設定している。

年度別の調査状況は次のとおりである。

平成8年度は、溝口の塚古墳の墳丘測量と写真撮影を行い、宮垣外遺跡では平成8年10月29日に資材を搬入し、溝口の塚古墳の周溝にあたる箇所を調査した。高屋遺跡では平成9年2月3日から番神塚古墳があったとされる場所に隣接する上郷別府1695-1番地において、番神塚古墳の周溝と想定される部分についてトレンチを掘り、3月3日に表土剥ぎを行い、3月18日まで現場作業を行った。

平成9年度は、溝口の塚古墳が二重の周溝をもつ前方後円墳であることが確認されたことから、主体部を中心に集中的に調査を行った。宮垣外遺跡では平成9年5月16日から表土剥ぎを行い、平成9年度は12月26日まで、平成10年度には1月8日から3月19日まで現場作業を行った。高屋遺跡では平成9年5月6日から掘り下げを行い、6月24日まで現場作業を行った。

平成10年度は、宮垣外遺跡では平成10年7月7日から9月8日、12月18日から25日、平成11年1月6日から2月12日まで作業を行い、現場作業を終了した。高屋遺跡では平成10年7月22日から30日、11月30日から12月18日、平成11年2月2日から5日まで実測調査を実施した。整理作業は宮垣外遺跡・高屋遺跡について行った。

平成11年度は整理作業のみを行い、溝口の塚古墳を除いた宮垣外遺跡・高屋遺跡について報告書を刊行した。

3. 調査組織

調査主体者	飯田市教育委員会 教育長 小林恭之助（～平成11年12月） 富田 泰啓（平成11年12月～）
調査担当者	吉川 豊 佐々木嘉和 上沼由彦（長野県埋蔵文化財センター派遣 平成7～8年度）
調査員	小林正春 山下誠一 馬場保之 澁谷恵美子 吉川金利 下平博行 伊藤尚志 福澤好晃 坂井勇雄 西山克己（長野県埋蔵文化財センター派遣 平成10年度） 藤原直人（長野県埋蔵文化財センター派遣 平成11年度）
作業員	新井幸子 新井ゆり子 池田幸子 伊坪 節 伊藤孝人 伊東裕子 井上恵資 太田沢男 岡田直人 岡田紀子 片山祐介 金井照了 金子裕子 唐沢古千代 北沢富久男 北原 裕 木下早苗 木下正史 木下力弥 木下玲子 熊谷義章 熊谷三代吉 小池千津子 小島康夫 小平晴美 小平不二子 小平まなみ 小林千枝 斉藤徳子 佐々木一平 佐々木文茂 佐々木真奈美 佐々木美千枝 佐藤知代子 清水三郎 下澤和央 下平由美了 代田和登 杉山春樹 関島真由美 瀬古郁保 高木純子 高橋恭子 竹本常子 橘千賀子 田中 薫 田中博人 筒井千恵子 中沢温子 仲田昭平 中田 恵 中平けい子 中平隆雄 仲村 信 中山敏子 鳴海紀彦 服部光男 羽生俊郎 林勢紀子 林ひとみ 原 昭子 原田四郎八 樋本宣子 平栗陽子 福沢育子 福沢幸子 福沢トシ子 藤田浩明 古林登志子 牧内 修 牧内喜久子 牧内八代 正木実重子 松下省吾 松下省三 松下成司 松下博子 松下光利 松島直美 松本恭子 三浦厚子 三浦照於 南井規子 宮内真理子 森藤美知子 森山律子 柳沢謙二 吉川悦子 吉川紀美子 吉川正実 米山俊輔
指導	奈良国立文化財研究所 長野県教育委員会文化財・生涯学習課 長野県立歴史館
事務局	飯田市教育委員会 関口和雄（教育次長） 横田 穆（社会教育課長 ～平成8年6月） 小林正春（ “ 文化係長 ～平成8年6月） 吉川 豊（ “ 文化係 ～平成8年6月） 山下誠一（ “ “ “ ） 馬場保之（ “ “ “ ） 吉川金利（ “ “ “ ） 下平博行（ “ “ “ ） 伊藤尚志（ “ “ “ ）

福澤好晃	("	"	")
岡田茂子	("	社会教育係	～平成8年6月)	
矢沢与平	(博物館課長	～平成8年度)		
小畑伊之助	("	平成9年度～)		
麦島博晴	("	庶務係長 平成11年度)		
小林正春	("	埋蔵文化財係)		
吉川 豊	("	埋蔵文化財係 ～平成10年度)		
山下誠一	("	" ～平成10年度)		
馬場保之	("	")		
澁谷恵美子	("	" 平成11年度～)		
吉川金利	("	")		
下平博行	("	")		
伊藤尚志	("	")		
福澤好晃	("	")		
坂井勇雄	("	" 平成11年度～)		
牧内 功	("	庶務係 平成8年7月～平成10年度)		
松山登代子	("	" 平成11年度～)		

第Ⅱ章 遺跡の環境

1. 自然環境

長野県飯田市は、長野県南部を南北に並走する伊那山脈と木曾山脈に挟まれた伊那谷の南端に位置し、天竜川はその中央部を南流する。

伊那谷の地形は、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴う盆地と大きな段丘崖とによって構成された複雑な段丘地形であり、さらに天竜川の浸食によって形成された河岸段丘とによって特徴づけられている。この段丘は、『下伊那の地質解説』によると、火山灰土の堆積を基準として、高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・低位段丘Ⅱの5段階に編年されている。

飯田市上郷地区は、飯田市街地の北隣りに位置し、北は飯田市座光寺、東は天竜川を挟んで下伊那郡喬木村、南は飯田市松尾地区と境を接する。

上郷地区は、木曾山脈の支脈、通称野底山塊の標高1500m程を最高点に飯田松川が天竜川に合流する380m程に至るまでの間に位置し、その比高差は1200m程になる。

山間部を除いた地形は、標高500～650m前後のローム層に覆われた台地である高位段丘と、地区内を南北にのびる断層によって形成される比高差約50mの大きな段丘崖を境として俗に上段^{うへだん}と呼ばれる洪積層の中位段丘及び低位段丘Ⅰと、下段^{しただん}と呼ばれる沖積層の低位段丘Ⅱとに分けられ、特に低位段丘Ⅱにおいては模式地となっている。前者には黒田地籍が、後者には別府・飯沼地籍が該当する。

低位段丘Ⅱは標高380～430m程度で、段丘崖下から天竜川までの間を占め、豊かな利水を活用した水田地帯が展開する。この中に5～6面の小段丘があり、それぞれ2～5mの比高差がある。それぞれの段丘面の広さは一様でないが、いずれも南北方向の段丘崖が確認できる。しかし段丘崖からの小河川により、小扇状地が形成されている場合があり、その部分では段丘崖の把握は困難となっている。これらの小河川や段丘崖直下には湧水起源の湿地帯を有する場合が多い。

さらに、低位段丘Ⅱは天竜川現河床よりやや高い海拔398m～405mの南条面、さらに海拔407m～418mの別府面、その上段の飯沼面に大別される。また、海拔398mである天竜川の現河床面との比高差3～30mを測り、段丘崖下を中心に湧水が豊富である。そのため、かつての沼沢の窪地は、現在も水田地帯となっている。この低位段丘Ⅱの中央部を国道153号が、突端部を農免道路が南北に走行する。

気候面で見れば、平均気温は13℃、年間降水量も1,600mm程度で、温和な土地柄といえる。特に低位段丘Ⅱ一帯は、南北にのびる段丘崖によって、冬の西風から守られる格好になっていることも温暖な要因の一つにあげられる。

宮垣外遺跡・高屋遺跡は、飯田市上郷別府地籍に所在し、地質的には飯田松川の氾濫原を南に見下ろす標高427mの低位段丘Ⅱ飯沼面にあたる。この下の南条面から天竜川にかけては現在多くが水田地帯となっており、東に生産域をひかえた段丘上に所在する遺跡といえる。

2. 歴史環境

上郷地区の遺跡を概観すると、天竜川・野底川の氾濫原及び段丘崖を除いてほぼ全面的に包蔵地であり、大正13年鳥居龍藏博士が『下伊那の先史及び原始時代 図版』を編纂するのに先立ち、市村成人氏と郡下を探訪してから特に知られるようになった。戦後は市村・大澤和夫両氏を中心に『下伊那史』第二・三巻、『信濃史料』第一巻、『全国遺跡地図 長野県版』を刊行する過程で、上郷地区内の遺跡や古墳を明確にしてきた。昭和50年代に入ると、この分布図をもとに今村善興氏が『上郷史』で、また岡田正彦氏が『長野県史 考古資料編』で遺跡分布図一覧表の作成にあたった。昭和57年度には、上郷町教育委員会が調査主体者となり遺跡詳細分布調査を実施し、平成5年度に飯田市との合併後、平成7年度に飯田市教育委員会による市内遺跡詳細分布調査が行われている。

上郷地区の遺跡を概観すると、その大半が複合遺跡であるが、旧石器時代の遺構・遺物は現在のところ確認されていない。当地区最古の文化は、上段の姫宮遺跡や黒田大明神原遺跡出土の表裏縄文土器と、黒田柏原遺跡（柏原A遺跡）出土の石器剥片、宮垣外遺跡出土の有舌尖頭器などにより、縄文時代草創期からその黎明を知ることができる。縄文時代早期になると、比較的山麓部に位置する八王子遺跡など5遺跡から、押型文土器・繊維を含む条痕土器・捺糸文土器が出土しており、黒田大明神原・西浦遺跡の発掘調査において概期の住居跡が確認されている。

縄文時代前期の遺跡は、姫宮・日影林・高松原・黒田大明神原遺跡などがある。以前は、遺跡の分布域は野底山系の山麓部から低位段丘Ⅰにあり、下段の飯沼・別府地籍から発見されず、沖積地帯への進出はなかったと考えられてきた。しかし、昭和62年度に実施された矢崎遺跡の発掘調査において前期後半の堅穴住居跡が確認されたことで、段丘地形の大半に人々の営みのあったことが窺える。

縄文時代中期になると、低位段丘Ⅱの南斜面下段を除き、上郷地区全域に遺物の散布が確認されており、人々の生活の舞台が拡散したことを示している。これまで調査された主なものとしては黒田大明神原・平畑・増田・垣外・丹保遺跡などがあげられる。

縄文時代後・晩期になると遺跡は極端に減少し、特に後期では上段を中心として日影林遺跡でまとまった資料が得られているが、晩期については矢崎遺跡に該当資料があるほかは詳細は不明である。

弥生時代は、稲作を主体とする文化であり、飯田・下伊那地方へは東海地方から東漸したものと考えられる。その始まりの時期として、矢崎遺跡から出土した条痕土器は文化の波及を考える上で貴重な資料といえる。稲作が定着する中期になると、丹保・堂垣外遺跡など下段地帯に遺跡が拡大する。南斜面に立地する飯沼棚田遺跡では、弥生時代の水田址が発見されている。概期の遺跡の大半は、低位段丘Ⅱの飯沼・別府地籍に集中することから、この一帯にみられる湿地帯を利用しての稲作が類推される。

弥生時代後期になると、低位段丘面上の遺跡はより発達し、さらに高位段丘面まで遺跡が拡大し、水田による稲作ばかりでなく、雑穀類の畑作も生業の一翼を担ったと考えられる。調査された遺跡も多く、上段の高松原・垣外・原の城遺跡、下段の丹保・兼田遺跡などがある。なかでも、丹保遺跡は後期全般にわたる拠点集落の一つといえる。

古墳時代においては、上郷地区の古墳は現在のところ消滅した古墳を含めて35基が確認されており、その多くは別府地籍の台地端に立地する。中でも、県史跡に指定されている飯沼天神塚古墳は、全長74.5mの伊那谷最大級の前方後円墳として知られており、細長い羨道部を特徴とする横穴式石室を有する。

また、雲彩寺古墳の南東約180mに位置する溝口の塚古墳が、平成8・9年度に実施した発掘調査によって、竪穴式石室を有する墳丘長約50mの二重周溝をもつ前方後円墳であることが確認されたことで、5世紀後半から6世紀にかけての上郷地区の首長墓系列を追うことができ、当地区の重要性も再認識されることとなった。集落そのものの調査例は少なく、実態は不明であるが、低位段丘においては段丘端部を墓域とし、豊かな経済基盤の想定される下段の地域を中心に展開していたものと考えられる。

奈良・平安時代の遺跡は60数カ所を数え、ほぼ地区内全域に分布する。特に、低位段丘Ⅱに位置する堂垣外遺跡は古墳時代から平安時代までの集落であるが、遺物・遺構から伊那郡衙との強い結びつきが考えられる。また矢崎遺跡では、平安時代の住居址が確認されるとともに、大規模な鍛冶遺構と大量のフイゴ羽口や鉄滓が検出され、その役割が注目されている。この低位段丘Ⅱ一帯は、古代伊那郡衙址である座光寺地区の恒川遺跡群と同一段丘面にあたり、古代条里制遺構の存在が地割と地名から推測され、古代史研究上注目すべき地域であるといえる。また、海拔410mラインは都と国府を結ぶ官道東山道の通過候補地である。この地方は『和名抄』、『伊呂波字類抄』などの文献から、古代伊那郡五郷のひとつである麻績郷に所属し、平安時代末には近衛家の郡戸庄であった。今回調査地の所在する別府地名がそうした荘園等に関わるものであることも考えられる。

このように、低位段丘Ⅱの一帯は、上郷地区でも密に遺跡が立地する箇所といえ、縄文時代以降、生産域をひかえた生活域として、あるいは墓域として連続して人間の足跡を追うことができる。

宮垣外遺跡は、縄文時代から中世にわたる遺物が表面採集され、以前から遺跡の存在は知られていた。平成7年度の飯田市教育委員会による遺跡詳細分布調査でも多くの遺物が採取され、かなりの密度での遺構の分布が改めて予想された。また、『下伊那史』第二巻によると、同遺跡内には、溝口の塚（水口の塚）古墳、つくね塚古墳、宮の前垣外古墳が所在するとされる。一般国道153号飯田バイパス建設予定地内には溝口の塚（水口の塚）古墳、つくね塚古墳が含まれており、これにかかわる遺構の存在が想定された。

高屋遺跡は、宮垣外遺跡の北側にあり、かつては湿地であったと考えられる窪地を挟んで接している。上郷町教育委員会が実施した詳細分布調査では、平安時代の遺物が多く採集されており、概期の遺跡としてはかなりの規模のものと考えられた。また古墳時代の遺物も多く、『下伊那史』第二巻によると、同遺跡内には前方後円墳とされる番神塚古墳、円墳の弓矢古墳が所在するとされ、建設予定地は、番神塚古墳があったとされる一面に隣接している。



1. 宮垣外遺跡 2. 高屋遺跡 3. 溝口の塚古墳 4. 天神塚（雲彩寺）古墳 5. 宮の前垣外古墳
 6. 中井遺跡 7. 化石遺跡 8. 古城跡 9. 堀尻遺跡 10. 芝崎遺跡 11. 北浦遺跡
 12. 飯沼南遺跡 13. 高松原遺跡 14. 見晴城跡 15. 飯沼棚田遺跡 16. 高屋下遺跡 17. 矢崎遺跡
 18. 兼田遺跡 19. 久保古墳 20. 上溝遺跡 21. 上溝羽場遺跡

挿図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図

第三章 調査の結果

宮垣外遺跡 (MGT)

1. 調査の方法と概要

道路用地の取得状況に応じて調査を実施したため、調査区はⅠ～Ⅵ区に分かれている。よって、同一遺構が複数の調査区にまたがっている場合もある。

測量用の基準杭設置は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、㈱ジャステックに委託して実施した。なお、基準メッシュ図の区画については、1:5000大縮尺地形図(国土基本図)の区画に準ずる。(社団法人日本測量協会1969『国土基本図図式 同適用規程』参照)。

本調査地の区画は挿図2で示したようにLC-85、2-28、35、36、43、44である。

一般国道153号飯田バイパス建設にかかわる調査と並行して、バイパス建設地の隣接地で補助金(市内遺跡緊急調査)による調査と民間開発に伴う調査を実施している。これらの調査を合わせて宮垣外遺跡において検出された遺構は以下のとおりであるが、そのうち本報告書に記載のないものは、上述の補助事業及び民間開発に伴う発掘調査によるものである。

検出された遺構数は以下のとおりである。

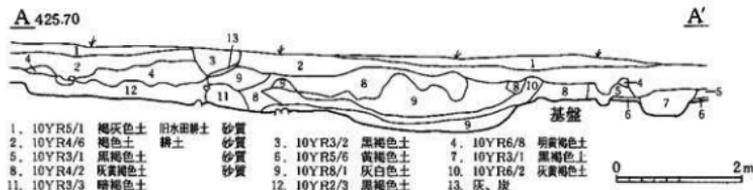
竪穴住居址 (SB)	17	土坑(土城) (SK)	82
掘立柱建物址 (ST)	9	集石 (SI)	1
周溝墓 (SM)	16	溝址 (SD)	10

このうち、SB08、SK40・41・43・44、SD08は個人住宅建設(補助事業)に先立つ調査、SB06・07、ST05、SK37、SD06・07は民間開発に先立つ調査のものである。

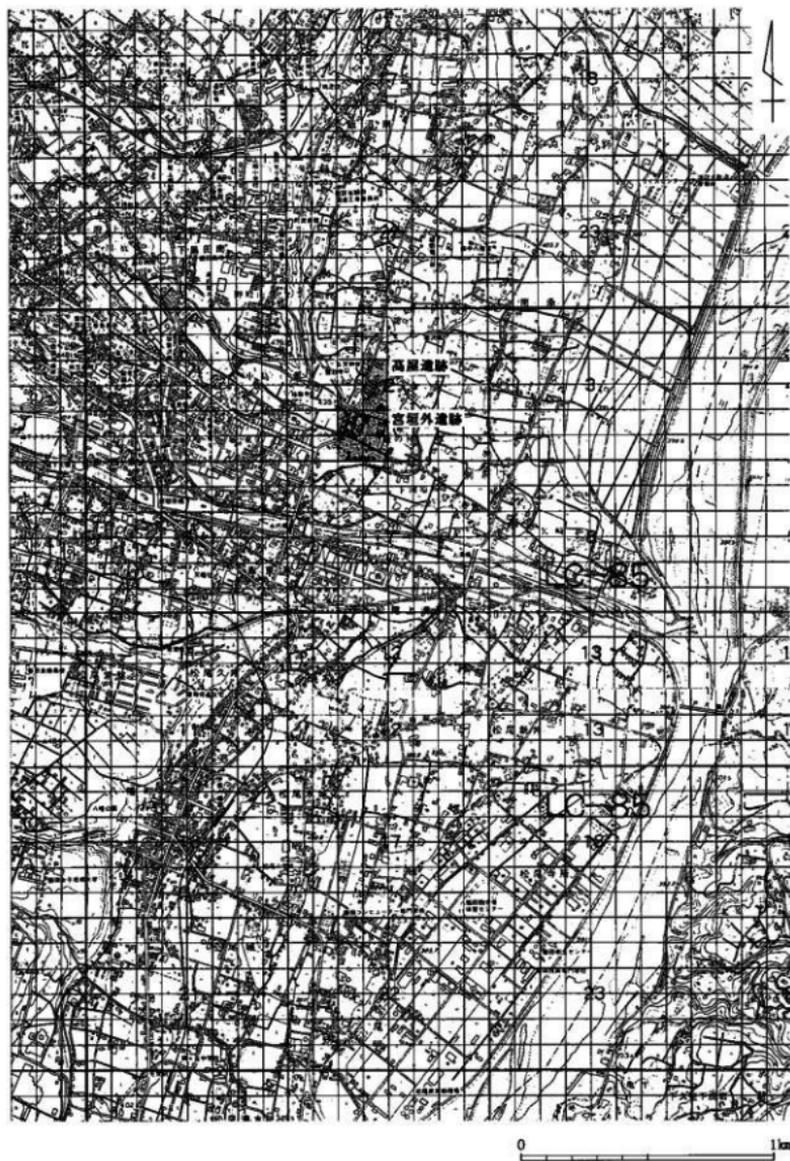
2. 基本層序

基本層序を挿図2で示した。

地表下の水田耕土以下は、0.8~1.2mの厚さで黒色土系の砂質土が複数堆積する。その下部に基盤となる比較的粗粒な黄色砂土があり、部分的に礫石が混じる箇所がある。これは野底川起源の堆積土といえ、自然堤防もしくは扇端部といった地形形成も類推される。大半の遺構は、黒色土と基盤の黄色砂土との境で検出した。



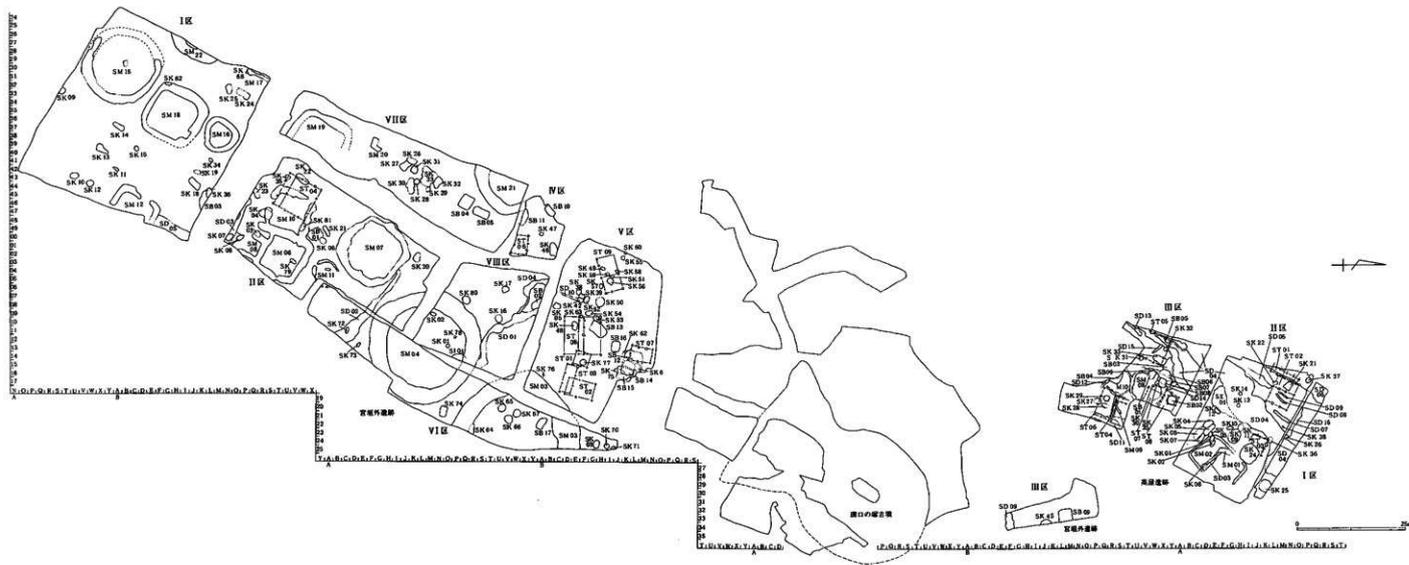
挿図2 MGT基本層序



挿図3 基準メッシュ図区画調査位置



挿図4 宮垣外遺跡・高層遺跡調査位置



挿圖 5 宮内外遺跡・高屋遺跡遺構分布図

3. 遺構

(1) 竪穴住居址 (SB)

住居址としてとらえたものは14軒あるが、遺物が少なく、時期決定の根拠に乏しい。多くは中世のいわゆる方形竪穴といわれるものとみられ、住居址というより建物址という名称の方が適切といえる。後述する掘立柱建物址との関連が考えられる。

① SB01 (第1図)

遺構 II区BX00を中心に検出し、全体を調査した。SK06に切られる。3.3×3.05mの不整形を呈し、支柱穴・炉址等は確認できず、長軸方向はN30°Wを示す。壁高は4~14cmを測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。方形竪穴と考えられる。

遺物 なし

時期 不明

② SB02 (第1図、図版2)

遺構 VII区AY08を中心に検出し、全体の2/3程を調査した。SD01に切られる。北側の大部分が調査区外となることから、規模は現状で2.8mの方形を呈し、支柱穴・炉址等は確認できず、長軸方向はN28°Wを示す。壁高は8~14cmを測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺物 なし

時期 不明

③ SB03 (第1図)

遺構 I区BK46を中心に検出し、一部を調査した。SK36に切られる。北側の大部分が調査区外となることから、規模・プランは不明である。支柱穴・炉址等は確認できず、主軸方向は不明である。壁高は5~13cmを測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺物 覆土中から、銅銭「元豊通宝」が出土している。

時期 出土遺物から中世とみられる。

④ SB04 (第1図、図版2)

遺構 VII区AQ45を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。3.26×2.9mの方形を呈する。長軸方向はN40°Eを示す。壁高は7~24cmを測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。東側隅を除くほぼ床面全体に石が敷かれたような状態がみられる。それらを取り除いた下にはいくつかのピットがあったが、支柱穴・炉址等は確認できなかった。覆土は自然埋没の状況を示す。形態から方形竪穴とみられる。

遺物 石の間から大平鉢、常滑甕片、石臼が出土している。

時期 出土遺物から中世とみられる。

⑤ SB05 (第2図)

遺構 VII区A S47を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。3.96×2.04mの不整長方形プランで、主柱穴・炉址等は確認できず、長軸方向はN30° Eを示す。壁高は12～22cmを測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺物 なし

時期 不明

⑥ SB09 (第2図、図版2)

遺構 III区BM32を中心に検出し、一部を調査した。重複する遺構はない。東側が調査区外となることから、規模は現状で短軸3.15mになり、方形を呈するものとみられる。床面にいくつかのピットがあったが、主柱穴と考えられるものは確認できなかった。炉址等も確認できず、主軸方向は不明である。壁高は8～15cmを測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。方形竪穴とみられる。

遺物 なし

時期 遺構の形態から中世とみられる。

⑦ SB10 (第2図、図版3)

遺構 IV区B B47を中心に検出し、一部を調査した。重複する遺構はない。北側の大部分が調査区外となることから、規模は現状で短軸3.0mになり、方形を呈するものとみられる。主柱穴・炉址等は確認できず、主軸方向は不明である。壁高は5～37cmを測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺物 なし

時期 不明

⑧ SB11 (第2図、図版5)

遺構 IV区A X48を中心に検出し、一部を調査した。重複する遺構はない。南側の大部分が調査区外となることから、規模は現状で3.9mになり、方形を呈するものとみられる。主柱穴・炉址等は確認できず、主軸方向は不明である。壁高は9～14cmを測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺物 なし

時期 不明

⑨ SB12 (第2図、図版3)

遺構 V区BL15を中心に検出し、全体を調査した。SK62を切り、SB14・SK61・ST07に切られる。重複する遺構が多いため、残りは良くないが、4.87×4.35mの方形プランを呈する。主柱穴・炉址等は確認できず、長軸方向はN15° Eを示す。壁高は3～15cmを測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺物 覆土中から古瀬戸の陶器（皿）が出土しており、SB15からのものと接合する。

時期 中世か

⑩ SB13（第2図、図版3）

遺構 V区BG11を中心に検出し、全体を調査した。SK53に切られる。3.99×2.75mの隅丸長方形を呈し、支柱穴・炉址等は確認できず、長軸方向はN42°Eを示す。壁高は4～14cmを測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。方形竪穴とみられる。

遺物 なし

時期 遺構の形態から中世以降とみられる。

⑪ SB14（第3図、図版4）

遺構 V区BK16を中心に検出し、全体を調査した。SB12・SB15・SK61・SK75を切る。3.21×2.85mの隅丸長方形を呈し、支柱穴・炉址等は確認できず、長軸方向はN20°Eを示す。壁高は8～30cmを測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。南西隅にたたき状の硬化面が確認された。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺物 なし

時期 不明

⑫ SB15（第3図、図版4）

遺構 V区BK16を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。SB14・SK75に切られる。3.87×2.83mの隅丸長方形を呈し、支柱穴・炉址等は確認できず、長軸方向はN58°Wを示す。壁高は9～32cmを測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺物 覆土中からSB12のものと同接合する古瀬戸の陶器（皿）、砥石が出土している。

時期 中世か

⑬ SB16（第3図、図版4）

遺構 V区BJ13を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。2.45×2.08mの隅丸長方形を呈する。長軸方向はN80°Wを示す。壁高は55～105cmを測り、壁面はやや傾斜をなす。壁面直下に10本の柱穴が2間×3間で並ぶ。柱間は、梁行0.5～0.7m、桁行は0.6～0.7mになる。炉址等は確認できなかった。覆土は自然埋没の状況を示す。方形竪穴とみられる。

遺物 なし

時期 遺構の形態から中世とみられる。

⑭ SB17（SK68）（第3図、図版5）

遺構 VI区BA22を中心に検出し、全体を調査した。SM03を切る。規模は3.07×1.57の長方形を呈する。長軸方向はN55°Wを示す。壁高は96～99cmを測り、壁面はやや傾斜をなす。壁面直下に6本の柱穴が1×2間で並ぶ。柱間は梁行0.93～1.09m、桁行0.8～0.92mになる。炉跡等は確認できな

かった。北西側に出入口施設として、階段状に傾斜する張り出し部を有する。覆土は自然埋没の状況を示す。方形竪穴とみられる。

遺物 なし

時期 遺構の形態から中世とみられる。

(2) 掘立柱建物址 (ST) (第4・5図)

掘立柱建物址に明確に伴う遺物はなく、時期決定の根拠となるものはほとんどないが、周辺の状況等からほとんどが中世以降になるものとみられる。

遺構 No	検出位置	重複関係	間数	規模 (m) (梁行×桁行)	柱間 (m)	柱の深さ (cm)
01	V区BF14	-	1×2	3.2×3.5	梁3.0~3.2 桁1.7~1.9	23~50
02	V区BE17	-	1×2	4.0×6.5	梁2.5~4.0 桁4.0	11~25
03	V区BE16	-	1×3	2.6×6.7	梁2.5~2.6 桁1.9~2.6	6~67
04	II区BW44	SK22を切る	4×3	6.6×8.2	梁4.5 桁1.5~1.6	15~36
06	IV区AX02	-	2×3	4.4×3.7+	梁1.7~2.0 桁1.0~1.8	9~41
07	V区BM14	SK12・62を切る	2×3	3.7×5.2	梁1.6~2.0 桁1.7~2.9	13~39
08	V区BF13	-	3×2	8.7×9.0	梁1.0~4.0 桁0.9~7.7	16~46
09	V区BH04	-	2×3	4.0×8.5	梁1.5~2.5 桁1.7~3.8	13~64

(3) 周溝墓 (SM)

ここで取り上げる周溝墓は、上部が削平されており墳丘盛土の状況が確認できず、周溝のみを検出したものを一括している。主体部が確認できないため、時期決定の根拠としては不十分な面もあるが、主に、周溝内出土遺物から時期を決定している。

なお、調査時に墓としたものにSMを符して作業進行したが、土坑(土塹)をSKで統一したため、SM01・02・05・09・13・14は欠番となる。

① SM03・SK64 (第6~8図、図版6・7)

遺構 VI区AU21を中心にV・Ⅷ区にまたがって検出し、全体の西側1/2を調査した。周溝の内側にある4基の土坑との前後関係は、SK65・66・67がSM03築造以前のものであり、SB17はSM

03築造後のものである。SK64は南側周溝部の墳丘端部を掘り込んでおり、古墳に伴うものである。

墳丘及び周溝覆土は土層図に示した状況である。周溝内側と外側とで類似した土層の水平堆積が連続するかにみえたが、詳細に観察すると、いくつかの相違点が認められた。周溝内側の基盤層上に黄褐色土・褐灰色土・黄褐色土があり、このうち褐灰色土が築造時の地表層で、黄褐色土は盛土と判断された。また、周溝外側に認められた黄褐色土は本来盛土であったものが、削平時周囲に地均しされたものと推定される。なお、周溝内の埋土状況から、削平時には既に埋没しており、その上に地均しされたことも判断される。以上から、SM03は本来盛土を有する墳墓で、全体規模・高さの確定はできないが、径20mの円墳と判断される。また、本墳の削平時は周溝内側で検出されたSB17の存在から、中世段階にあたるといえる。

周溝は幅3.9～5.2m、深さ0.62～0.88mで舟底形を呈し、西側半分の部分的な調査のため、全体の規模が明確でないが、現状で確認できる南北方向の外径は30.4mで、方形に近い円形を呈する。上部削平により埋葬施設は確認できなかった。

SK64は、南側周溝の墳裾に掘り込まれた土墳で、規模は長軸2.4m、短軸1.12m、深さ1.17mの隅丸長方形を呈する。周溝覆土の状況は、周溝掘削後の残土(13層)の上に土壌掘削土と判断される黄褐色土(11層)の一部が認められることから、周溝掘削後ほとんど時を経ずして掘り込まれたことを示している。また、土壌埋土も基盤層と判断困難な程で、他の土とほとんど混じることなく、掘削後時を経ずに、意図的に埋め戻されたことがわかる。ここから馬歯骨の痕跡と馬具一式が出土しており、馬は本墳被葬者への随想として埋葬されたものといえる。SM03と密接なかわりをもつ土壌である。

遺物 遺物は、周溝内及びSK64から出土している。

周溝内からは、土師器を中心に鉄器等が出土している。

南側周溝内のSK64の南西側より鉄刀と鉄鏃が出土した。直刀はほぼ底部から、鉄鏃は底部より20～30cm程浮いている。鉄刀は切先を東側に向けて置かれ、鉄鏃はそれより西側1～3m離れて18本が分散しており、東にして置かれたという状態ではなかった。出土状況からみて、主体部の破壊による遺物の散乱ではないとみられるが、この場所における埋葬施設等の存在は確認できなかった。また、SK64の南側からも土師器(高坏・甕)が出土しているが、原位置を留めるものではない。鉄製品との関連も考えられ、SK64との関係も検討すべきといえる。

南西側周溝からは土師器(壺)が、北側周溝内からは土師器(小型壺)が底部より浮いて出土している。西側周溝内からは、土師器片が出土している。いずれも周溝内における何らかの祭祀行為にかかわる可能性が考えられる。

SK64からは、馬歯骨と馬具一式が出土している。

馬骨は、中央部と南北両端に骨の痕跡が認められる程度で、それぞれが骨格のどの部位にあたるかを確認できる残存状態ではなかった。唯一部位が確認できるのは南西隅にあった馬歯のみであり、頭部を南側に鼻先を北に向けた状態で確認した。土壌の規模から馬一頭を埋めたものとみられ、頭部が南西隅にあるという状況から、脚部を北側にして横倒しにした状態が考えられるが、他の骨が痕跡程度でそれぞれの部位が特定できないため明確ではない。

馬具は、鉄製f字形鏡板付轡と面繫の金具類・鞍(鞍金具と鞍の一部とみられる漆被膜)・木芯鉄板張輪轡・鉄製環状雲珠・鉄製剣菱形杏葉が出土した。いずれも、唯一部位が確認できた馬頭部の位置と

は反対の北側壁面際に、東側から雲珠と杏葉のセット、轡、鞍、鐙をそれぞれ確認した。出土位置からみて、轡は馬に装着されたものではない。その他の馬具も馬骨のレベルと比較すると、馬骨と同レベルかそれよりも高い位置から出土しており、轡と同様に本来装着されていたものではなく、馬を土壌内に安置した後に、馬具を置いた可能性が高く、その位置は腹部付近と考えられる。鞍については鞍金具が確認されているが、漆被膜の存在から、有機質（木製か）の鞍が本来はあったとみられる。漆の残存状態から、鞍の覆輪部分の厚さは1cm程になる。轡は面繫金具と共に出土していることから、面繫の紐が付いた状態で一括して置かれ、雲珠・杏葉・鞍・鐙はそれぞれの位置関係から、鐙は鞍に付けられ、雲珠と杏葉を含めた尻繫も組まれた状態であったと判断され、いずれも本来はこの馬に装着されていたものを、埋葬に際して副葬品としたと考えられる。

この他に、打製石斧が周溝覆土から出土している。

時期 周溝内出土遺物とSK64出土馬具から古墳中期（5世紀後半）とみられる。

② SM04（第9図、図版8）

遺構 VI区AL12を中心にII区、VIII区とにかかって検出し、ほぼ全体を調査した。SI01に切られる。墳丘及び周溝覆土は土層図によるが、墳丘盛土部分は削平されており、盛土の痕跡は確認できず、周溝を検出したのみである。周溝規模は南北方向外径26.5m・内径18.8m、東西方向外径26.4m・内径18.5mで円形を呈する。周溝は幅3.1~4.75m、深さ0.45~0.86mで舟底形を呈する。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。周溝形状、規模などSM03より若干小規模ではあるが、大方は共通しており、本墳もまた、本来墳丘を有する古墳であったと判断される。なお、本墳の削平時期的特定は困難であるが、近世火葬墓SK78が周溝内側に存在することから、SM03と同時期位には墳丘を留めなかった可能性がある。南側周溝内で確認された石は葺石の転落とみられる。

遺物 遺物は、周溝内から出土している。

東側周溝内より土師器（甕）、北側周溝内よりほぼ完形の土師器（小型壺）と逆位に置かれた須恵器（罎）及び石製品（剣）が底部より出土しており、周溝内における何らかの祭祀にかかわるものと考えられる。また、南東側周溝内の上層~中層にかけて土師器（甕）が出土している。甕や石製紡錘車も出土しているが、周溝覆土中からであり性格は不明である。

なお、周溝覆土上層より須恵器（罎）、灰軸陶器（皿）が出土していることから、周辺に平安時代（9世紀）の遺構の存在が想定される。

打製石斧、有肩扇状形石器等の石器類が周溝覆土から出土している。

時期 周溝内出土遺物から古墳時代中期（5世紀後半）とみられる。

③ SM06（第10図、図版9）

遺構 II区BU03を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。SM06の周溝は、南側の一部をSM08と西側の一部をSM10と共有する。周溝覆土の状況から、3基の周溝墓の前後関係としてはSM06が最も古い。周溝規模は北東・南西方向外径11.7m・内径8.1m、北西・南東方向外径13.5m・内径8.2mの方形を呈する。周溝は幅0.85~2.07m、深さ0.31~0.72mで逆台形を呈する。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はN60°Wを示す。南東側周溝の中央部に1.7mの土橋部

を有する。周溝覆土は土層図による。

遺物 周溝覆土から弥生土器（甕底部片）と打製石斧が出土したのみである。

時期 出土遺物はわずかであるが、弥生時代後期とみられる。

④ SM07（第11・12図、図版10・11）

遺構 II区AF02を中心に検出し、全体を調査した。SD02を切る。周溝規模は北東・南西方向外径15.5m・内径11.9m、北西・南東方向外径16.6m・内径12.2mの方形に近い円形を呈する。周溝は幅1.03～2.92m、深さ0.12～0.7mで舟底形を呈する。北西側周溝内中央付近に、遺物が集中して出土しており、その位置から若干ずれて周溝がふくらむ箇所がある。そこは長楕円形を呈し、溝底からさらに4～9cm深くなっており、二次的埋葬があった可能性もある。

上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はN137°Wを示す。周溝覆土は土層図による。

遺物 遺物は周溝内の3箇所から出土している。

特に北西側周溝内では、周溝に沿って約2.5mの範囲に土師器（小型壺・甕片・甕・坏2点・高坏4点）、須恵器（甕・甕）、玉類（白玉40点、管玉2点、勾玉1点）、石製模造品（有孔円板2点）、鉄器（刀子・鑿・ヤリガンナ3点・鎌・鉄鐵片）が集中して出土している。南端に須恵器類があり、その北側に土師器・玉類・鉄器類が混在している。前者の一群は、近接する土師器（高坏）よりも高いレベルから出土しており、土師器が置かれた後に完形の須恵器（甕）と破砕された須恵器（甕）が配されたものと考えられる。後者の一群は、周溝底部からの出土である。ほぼ完形の状態で残っているもの、一個体がそのまま潰れた状態で出土しているものがあることから、土器類はほぼ原位置を保っているものとみられ、これらは一括遺物として捉えられる。高坏の上に小型壺がのるもの、完形で底部に据え置かれたもの、破砕されたものなどがある。玉類は、高坏の周辺に集中している。土師器と須恵器の配置には若干の時期差があると考えられるが、その差は遺物の時期からみてごく短期間のものであり、ほぼ同時期といえる。性格については周溝内での何らかの祭祀にかかわる可能性が考えられる。

南西側周溝内では、須恵器（蓋坏身）が底部から単独で出土しているほか、南東側周溝内では、覆土から土師器（壺）が出土している。

時期 周溝内出土遺物から古墳時代中期（5世紀後半）とみられる。

⑤ SM08（第13図、図版9）

遺構 II区BQ02を中心に検出し、南西側の一部を除き調査した。SM08の周溝は、北東側の一部をSM06と共有する。SM06のセクション図によれば、SM08はSM06の周溝幅の約半分が重複する。両者の前後関係としてはSM08の方が新しい。さらに、SK03に切られる。南西側周溝が確認できず、全体の規模は明確でないが、現状で北西・南東方向外径6.3m・内径3.5mの方形を呈する。周溝は幅1.03～2.0m、深さ0.28～0.43mで逆台形を呈する。南西側周溝が切れているかのようであるが、この部分は周溝が確認できていないため、状況は不明である。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はN58°Wを示す。周溝覆土は土層図による。

遺物 なし

時期 SM06、SM10との関係から、弥生時代後期に属する可能性がある。

⑥ SM10 (第14図、図版9)

遺構 II区BU47を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。SM10の周溝は、南東側をSM06と共有し、両者の前後関係としてはSM10の方が新しい。さらに、SK04を切り、SM14(SK81)に切られる。周溝規模は北東・南西方向外径11.7m・内径7.6m、北西・南東方向外径11.7m・内径8.0mの方形を早する。周溝は幅0.7~2.37m、深さ0.12~0.63mで逆台形を呈する。南西側周溝の中央部と北西隅にそれぞれ2.3mと1.7mの土橋部を有する。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はN30°Eを示す。周溝覆土は土層図による。

遺物 周溝覆土から弥生時代中期の壺片、後期の壺片が出土したのみである。

時期 周溝内出土遺物はわずかであるが、SM06との関係から弥生時代後期とみられる。

⑦ SM11 (第13図、図版12)

遺構 II区AA04を中心に、一部VI区にかけて検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。周溝規模は、現状で南北方向外径5.9m・内径5.1mの円形を呈する。周溝は、3箇所以北側からそれぞれ1.0m、1.5m、1.6mの土橋部を有する。周溝は幅0.3~0.87m、深さ0.07~0.28mで逆台形を呈する。上部は削平されていたが、埋葬施設1基を確認した。規模は1.2×0.6mで、長方形を呈する。棺材の痕跡はなく、棺構造は不明である。主軸方向はN10°Eを示す。この埋葬施設は西に寄っているため、約2m程東側の中央寄りに別の埋葬施設が存在した可能性がある。

遺物 なし

時期 不明

⑧ SM12 (第14図、図版12)

遺構 I区BC46を中心に検出し、全体の1/2程を調査した。SD05を切る。南東側周溝の1/2は未調査のため、規模は明確でないが、現状で北東・南西方向外径11.4m・内径8.7mの方形を呈する。北西側周溝の中央部に3.6mの土橋部を有する。上部は削平されており、埋葬施設は確認できなかった。周溝は幅0.87~1.77m、深さ0.19~0.33mで逆台形を呈する。形態的には、SM10に類似する。周溝覆土は土層図による。

遺物 打製石斧が周溝覆土から出土している。

時期 形態から弥生時代とみられる。

⑨ SM15 (第15・16図、図版13)

遺構 I区BC29を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。重複する遺構はない。周溝規模は南北方向外径18.7m・内径14.8mの円形を呈する。周溝は幅0.99~2.57m、深さ0.19~1.02mで舟底形もしくは逆台形を呈する。上部は削平されていたが、埋葬施設の一部を確認することができた。しかし、大部分が攪乱を受けており、長軸方向で1.5m程を確認したのみであり、形態及び棺構造は不明である。主軸方向はN64°Wを示す。周溝覆土は土層図による。東側周溝内で確認された石は、葺石(貼石)が

転落したものとみられる。

西側部分がかなり削平され、周溝の残存状況は痕跡程度であるにもかかわらず、埋葬施設の痕跡が認められたことから、ほとんど盛土を有しない墳墓である。墳丘を有する古墳とは異なり、円形周溝墓とすべきものである。

遺物 周溝内からは、土師器・須恵器及び馬歯の一部が出土している。

土師器（甕・坏・高坏）、須恵器（甕）は、周溝内各所から出土しているが、いずれも破片である。葦石とみられる石の間からの出土であり、周溝内の祭祀行為にかかわるものか、墳丘部分に置かれていたものが、葦石と共に転落した可能性が考えられる。

馬歯も土器類と同様、周溝内の石の間から出土している。馬歯はごく一部で、残存状態はかなり悪い。出土状態から本址に伴う可能性はあるが、本来馬がどのような状態にあったかは明確でない。

打製石斧等が、周溝覆土から出土している。

時期 周溝内出土遺物から古墳時代中期（5世紀後半）とみられる。

⑩ SM16（第17図、図版12）

遺構 I区BM38を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。重複する遺構はない。周溝規模は南北方向外径8.1m・内径5.1m、東西南方向外径8.0m・内径6.1mの不整形円形を呈する。周溝は幅0.93～1.79m、深さ0.04～0.37mで逆台形を呈する。上部の削平及び攪乱のため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はN14°Eを示す。周溝覆土は土層図による。

遺物 なし

時期 不明

⑪ SM17（第17図、図版15）

遺構 I区BQ31を中心に検出し、東側周溝のうち5.2m程を確認したのみである。SK68に切られる。周溝が西と北側に延びることから、周溝基本本体は確認された周溝より西側にあり、本来は方形プランを呈するものとみられる。周溝は幅0.53～1.03m、深さ0.16～0.39mで逆台形を呈する。ほとんどが調査区外となるため、埋葬施設は確認できなかった。

遺物 周溝内から土師器片がわずかに出土しているのみである。

時期 古墳時代の可能性が高い。

⑫ SM18（第18・19図、図版14）

遺構 I区BH36を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。重複するSK82（SM23）に切られる。周溝規模は北東・南西方向外径13.4m・内径9.9m、北西・南東方向外径14.1m・内径10.4mの方形を呈する。周溝は幅1.02～2.47m、深さ0.04～0.46mで逆台形を呈する。周溝東隅が攪乱を受けているが、土橋部を有するタイプではないとみられる。上部は削平され、墳丘部分の中央が墓地となっていたため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はN32°Wを示す。周溝覆土は土層図による。周溝の北から西側にかけて確認された石は、SM15と同様に葦石（貼石）の転落したものとみられる。

遺物 遺物は周溝内から出土している。

北西側周溝内から土師器（小型壺、甕、高坏、坏）、須恵器が出土している。いずれも葦石とみられる石の間からの出土であり、何らかの祭祀行為にかかわって墳丘上に置かれていたものが、葦石と共に転落した可能性が考えられるが、他例と比較すると、本来周溝内にあった可能性も否定できない。周溝からは赤色顔料が出土しているが、これよりやや離れて出土した土師器（小型壺）内に赤色顔料の痕跡が認められることから、本来はこの中に入れられていたものといえる。

打製石斧が周溝覆土から出土している。

時 期 周溝内出土遺物から古墳時代中期（5世紀後半）とみられる。

⑬ SM19（第20図、図版15）

遺 構 VII区AA40を中心に検出し、全体の1/3程を調査した。重複する遺構はない。北西側周溝が確認できただけなので、全体規模は不明であるが、現状で周溝規模は北東・南西方向外径16.7m・内径13.7mの方形を呈する。周溝は幅1.05～2.4m、深さ0.29～0.81mで逆台形を呈する。南東側半分が調査区外となり、上部も削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はN32°Eを示す。周溝覆土は土層図による。北西側周溝内で確認された石は、葦石（貼石）が転落したものとみられる。

遺 物 遺物は周溝内から出土している。

北西側周溝から破砕した須恵器（甕）が出土している。甕はほぼ完全に復元できるが、葦石とみられる石と混在していることから、周溝内に置かれたか、墳丘上に置かれていたものが葦石とともに転落したかの双方の可能性が考えられる。この甕と共に須恵器（坏）も出土しているが、平安時代のものであり、周辺部における概期の遺構の存在も考えられる。

また、上述の須恵器（甕）より約2m北東で刀子が出土しているが、周溝覆土からの出土である。南西側から土師器（坏）等の破片が出土しているが、いずれも小破片である。

時 期 周溝内出土遺物から古墳時代中期（5世紀後半）とみられる。

⑭ SM20（第17図、図版16）

遺 構 VII区AG39を中心に検出し、周溝の南隅を確認したのみである。重複する遺構はない。周溝の南側隅を確認しただけなので、全体規模は不明であるが、方形を呈するものと考えられる。周溝幅0.99～1.37m、深さ0.31～0.43mで逆台形を呈する。上部はかなり削平されており、攪乱も受けていることから、埋葬施設は確認できなかった。

遺 物 遺物は周溝内から出土している。

覆土から土師器（坏）、土師器（手捏ね）が出土している。

時 期 周溝のごく一部を確認したのみのため、出土遺物が本址に伴うか問題があり、時期は不明である。

⑮ SM21（第21図、図版16）

遺 構 VII区AV45を中心に検出し、南側周溝の1/4程を調査した。重複する遺構はない。部分的な調査のため、規模は不明であるが、円形を呈する可能性もある。周溝は幅2.03～3.35m、深さ0.3

～0.54mで舟底形を呈する。上部は削平されており、北側の大半が調査区外のため埋葬施設は確認できなかった。周溝覆土は土層図による。

遺物 周溝内から遺物が出土している。

東側周溝内から土師器（高坏）が出土している。破碎しているが、3個体がまとまって出土している。周溝の内壁際からの出土であり、完形品が置かれていたというよりも何らかの祭祀行為にかかわって破壊されてまかれたものか、墳丘からの転落の可能性もある。

周溝覆土から鉄鏝が出土している。

時期 周溝内出土遺物から古墳時代中期（5世紀後半）とみられる。

⑩ SM22（第21図、図版16）

遺構 I区BK29を中心に検出し、南東側周溝の一部を調査した。重複する遺構はない。北西側の大半が調査区外になり、現在墓地のため部分的な調査しかできず規模は不明であるが、推定で直径16m以上の円墳になるとみられる。周溝は幅1.19～2.49m、深さ0.28～0.88mで舟底形を呈する。西側が調査区外のため、埋葬施設は確認できなかった。周溝覆土は土層図による。周溝内で確認された石は葦石の転落とみられる。

本址は、溝口の塚古墳を除いては周溝墓の中では唯一古墳として認識されていたものである。

『下伊那史』第二巻によると、本址はつくね塚（庚申塚）古墳があったとされるところにあたる。これによると、大正11年頃には「直径五間高一丈の封土」があったが、一部は宅地になったという。また、もともと18.2m程ある大塚であったが、地主が土を売るために掘り崩したところ、人骨・鏡・刀の破片・鉄冴などがたくさん出たという。つくね塚の名の由来は、それらをつくねて埋めたことからとも、昔多勢の武士が討死したのでそれをつくねて埋めたからだともいうことである。

また、現在の建物を建てる以前には木の生い茂った丘と、そこに観音を祀る小さなお堂があったこと、そして造成した際に玉類が出土したらしいことが伝わっている。

今回の調査によって、その存在が確認されたことになるが、前述のとおり現状では墳丘部分はほとんど残っていなかった。

遺物 周溝内から遺物が出土している。

周溝内から土師器（壺・坏・鉢）が出土している。葦石とみられる石と混在しており、本来は墳丘に置かれていたものが、葦石と共に転落したものか、周溝内に置かれたものと考えられる。壺形土器のうち3個体は底部が開口している。壺形土器とはやや離れて土師器（鉢）が出土している。

打製石斧が周溝覆土から出土している。

時期 周溝内出土遺物から古墳時代中期（5世紀後半）とみられる。

(4) 土坑及び土墳墓（SK）

調査時に墓と認めたもの一部については、当初SMで番号を符していたが、報告書作成段階では、土坑（土墳）はすべてSKとする基本方針から、SKで番号を付け直している。ただし、調査時にSMで遺物を取り上げている関係上、旧SM番号も付した。遺構の性格については、出土遺物もなく不明なものもあるが、墓と考えられるものについては土墳墓の名称を用い、それ以外については土坑を用いた。

① S K01 (第22図)

遺構 Ⅶ区A O13を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.8m、短軸0.76m、深さ0.6mの円形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

② S K02 (第22図)

遺構 Ⅶ区A M09を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.16m、短軸0.8m、深さ0.55mの楕円形を呈する。土坑内に握り拳大の石が入れられている。

遺物 なし

時期 不明

③ S K03 (第22図)

遺構 Ⅱ区B Q00を中心に検出し、全体を調査した。S M08を切る。規模は長軸1.28m、短軸1.04m、深さ0.41mの楕円形を呈する。

遺物 縄文土器片が覆土からわずかに出土しているのみである。

時期 切り合い関係から、弥生時代以降とみられる。

④ S K04 (第22図、図版17)

遺構 Ⅱ区B S47を中心に検出し、全体を調査した。S M10を切る。規模は長軸3.2m、短軸2.2m、深さ0.44mの不整形を呈する。

遺物 覆土から土師器(甕底部)片がわずかに出土している。

時期 出土遺物と切り合い関係から弥生時代以降、古墳時代とみられる。

⑤ S K05 (第22図)

遺構 Ⅴ区B C08を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.76m、短軸1.44m、深さ0.2mの不整形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

⑥ S K06 (第22図)

遺構 Ⅱ区B Y00を中心に検出し、全体を調査した。S B01を切る。規模は長軸1.6m、短軸1.0m、深さ0.64mの不整形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

⑦ SK07 (第22図、図版17)

遺構 II区BN00を中心に検出し、全体を調査した。SD03を切る。規模は長軸1.84m、短軸1.2m、深さ0.57mの楕円形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

⑧ SK08 (第22図)

遺構 II区BO00を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.84m、短軸1.2m、深さ0.55mの不整形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

⑨ SK09 (第22図)

遺構 I区AS33を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.56m、短軸1.16m、深さ0.47mになる。南西側が調査区外になるが、土坑底部の形態から方形になるとみられる。

遺物 なし

時期 不明

⑩ SK10 (第23図、図版17)

遺構 I区AU43を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.64m、短軸1.04m、深さ0.28mの楕円形を呈する。馬一頭分の骨が出土しており、馬を埋葬した土墳墓である。

遺物 馬骨の遺存状態は良好であり、ほぼ全身の状態を確認することができた。馬はやや中心部がくぼむ土坑底部に頭部を南西側に向け、脚を折り曲げて馬体の左側を下にした横臥姿勢で出土した。土坑規模は馬一頭がちょうど入る大きさであり、馬は廃棄されたものではなく、意図的に埋葬されたものである。馬に伴う遺物はない。馬骨の詳細については、「附編1」に記載がある。

時期 出土遺物がなく時期決定の要因に乏しいが、覆土及びSK64の出土例や周辺の遺構分布から古墳時代中期とみられる。

⑪ SK11 (第23図、図版19)

遺構 I区BA42を中心に検出し、全体を調査した。本址の下部には長軸0.3m、深さ0.15mの小土坑がある。本址はこの小土坑を切っている。規模は長軸1.02m、短軸0.42m、深さ0.2mの不整形を呈する。

遺物 下部にある小土坑の上から馬歯のみが出土している。SK10やSK64の規模と比較しても、一頭全部を埋めたとするには小規模である。馬に伴う遺物の出土はない。

時期 不明

⑫ SK12 (第24図、図版18)

遺構 I区AW44を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.4m、短軸1.2m、深さ0.52mの不整形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

⑬ SK13 (第24図、図版18)

遺構 I区AQ08を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.4m、短軸1.0m、深さ0.12mの楕円形を呈する。

遺物 打製石器が覆土から出土している。

時期 不明

⑭ SK14 (第24図)

遺構 I区BV37を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はないが、攪乱を受けているため、規模は推定で長軸2.88m、短軸0.88m、深さ0.46mの不整形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

⑮ SK15 (第24図、図版18)

遺構 I区BC40を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.32m、短軸0.96m、深さ0.6mの楕円形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

⑯ SK16 (第24図)

遺構 VII区AU09を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.92m、短軸1.64m、深さ0.29mの不整形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

⑰ SK17 (第24図)

遺構 VIII区AV06を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.76m、短軸1.4m、深さ0.27mの不整形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

⑱ SK18 (第25図、図版19)

遺構 I区BJ44を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸3.16m、短軸1.24m、深さ0.72mの不整楕円形を呈する。出土遺物は、類例の少ないものであり、これらから土墳墓の可能性はある。

遺物 土壌の南東側壁際の底部より10cm程浮いたレベルから鉄製靱金具と鉄鏃26本が出土している。

調査中、まずコ字形金具を検出したが、当初はその性格がわからなかった。さらに掘り下げたところ、コ字形金具が出土した地点よりも土壌の壁面寄りから、鉄鏃群が出土した。鉄鏃は、土壌の長軸方向に平行して一括して置かれ、いずれも切っ先を南西方向に向けている。この鉄鏃群と共に2点の鉄製短冊形金具が出土しており、有機質の矢を入れる容器に付けられた吊手金具とみられる。2点の吊手金具は、1点は鉄鏃の横から表を上にした状態で、もう1点はそれと平行して2cm程度離れて鉄鏃群の矢柄のある方から、表を西側に、側面を上に向けて出土した。出土状況から、容器に矢を入れた状態で置かれたものとみられる。これをいわゆる胡籥とするか、靱とするかについては、西側から出土した吊手金具の一端には紐を通すための絞具が残存しており、その位置から想定される矢を入れる容器に対して、鉄鏃は切っ先を上にして入れられていたとみられることから、本例は靱であると考えた。なお、詳細は「4. 出土遺物」に記載がある。

時期 出土遺物から古墳時代中期（5世紀後半）とみられる。

⑲ SK19（第24図、図版20）

遺構 I区BJ42を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.08m、短軸1.0m以上、深さ0.51mの不整形を呈する。出土遺物から土墳墓の可能性はある。

遺物 覆土から銅製帯金具（巡方）が2点出土している。

時期 出土遺物から奈良時代とみられる。

⑳ SK20（第24図）

遺構 II区AL03を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.4m、短軸1.48m、深さ0.24mの不整形を呈する。

遺物 底部から灰軸陶器（瓶）破片が出土している。

時期 出土遺物から平安時代とみられる。

㉑ SK21（第25図、図版20）

遺構 II区AA49を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.64m、短軸0.8m、深さ0.4mの楕円形を呈する。覆土は土層図による。出土遺物から土墳墓の可能性はある。

遺物 北側壁際底部より鉄鏃3本が出土している。

時期 出土遺物から古墳時代中期（5世紀）とみられる。

㉒ SK22（第24図、図版20）

遺構 II区BW44を中心に検出し、全体を調査した。ST04に切られる。規模は長軸3.44m、短

軸1.36m、深さ0.24mの楕円形を呈する。覆土中に礫が混在する。

遺物 なし

時期 不明

㉔ SK23 (第26図、図版21)

遺構 II区BQ45を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.68m、短軸1.08m、深さ0.5mの楕円形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

㉕ SK24 (第26図、図版21)

遺構 I区BP33を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はないが、擾乱を受けているため、推定で規模は長軸3.12m以上、短軸1.4m以上、深さ0.58mの方形を呈する。覆土は土層図による。形状及び遺物出土状況から土壌墓の可能性はある。

遺物 土坑底部より約40～50cm上から、土師器(環・高環)が出土している。環の下からは炭化物が検出されている。

時期 出土遺物から古墳時代中期(5世紀後半)とみられる。

㉖ SK25 (第26図)

遺構 I区BN32を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.36m、短軸1.4m、深さ0.49mの不整形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

㉗ SK26 (第26図)

遺構 VII区AK42を中心に検出し、東側の1/2を調査した。SK27を切る。規模は長軸2.48m、短軸1.08m以上、深さ0.37mの不整形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

㉘ SK27 (第26図)

遺構 VII区AJ42を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。SK26に切られる。規模は長軸2.24m以上、短軸1.44m、深さ0.28mの不整形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

㉙ SK28 (第26図)

遺 構 VII区AK44を中心に検出し、全体を調査した。SK30を切る。規模は長軸1.32m、短軸1.28m、深さ0.31mの円形を呈する。

遺 物 なし

時 期 出土遺物はないが、切り合い関係から中世以降とみられる。

㊸ SK29 (第26図)

遺 構 VII区AL44を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.16m、短軸0.88m、深さ0.17mの不整形を呈する。

遺 物 覆土から土師器(坏)が出土している。

時 期 出土遺物から平安時代とみられる。

㊹ SK30 (第26図)

遺 構 VII区AK44を中心に検出し、全体を調査した。SK28に切られる。重複する遺構が多く、攪乱も受けているが、規模は長軸3.68m、短軸2.04m、深さ0.36mの不整形を呈する。

遺 物 なし

時 期 中世以降か

㊺ SK31 (第27図)

遺 構 VII区AK43を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.84m、短軸1.6m、深さ0.25mの不整形を呈する。

遺 物 覆土から須恵器(坏)、灰軸陶器(碗)が出土している。

時 期 出土遺物から平安時代(9世紀)とみられる。

㊻ SK32 (第27図)

遺 構 VII区AN44を中心に検出し、全体を調査した。SK33を切る。規模は長軸2.76m、短軸1.6m、深さ0.42mの不整形を呈する。

遺 物 漆被膜が出土している。

時 期 不明

㊼ SK33 (第27図)

遺 構 VII区AM43を中心に検出し、全体を調査した。SK32に切られる。規模は最大長で4.0m、深さ0.36mの不整形を呈する。

遺 物 なし

時 期 不明

㊽ SK34 (第27図)

遺 構 I区BL41を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。攪乱を受けているた

め、現状規模は長軸1.76m以上、短軸0.48m、深さ0.45mの楕円形を呈する。

遺物 打製石器が覆土から出土している。

時期 不明

㊸ SK35 (第27図)

遺構 II区BU43を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.16m、短軸1.12m、深さ0.45mの円形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

㊹ SK36 (第27図)

遺構 I区BL45を中心に検出し、北側の一部が調査区外となるが、ほぼ全体を調査した。SB03を切る。規模は長軸2.0m、短軸1.2m以上、深さ0.33mの不整形を呈する。

遺物 砥石が覆土から出土している。

時期 出土遺物は少ないが、切り合い関係から中世以降とみられる。

㊺ SK38 (第27図)

遺構 V区BE07を中心に検出し、全体を調査した。SK39に切られる。規模は長軸1.28m、短軸1.08m、深さ0.32mの隅丸方形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

㊻ SK39 (第27図)

遺構 V区BF07を中心に検出し、全体を調査した。SK38、SK42を切る。規模は長軸1.28m、短軸1.0m、深さ0.69mの隅丸方形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

㊼ SK42 (第28図)

遺構 V区BF07を中心に検出し、全体を調査した。SK39に切られ、SD10を切る。規模は長軸1.32m、短軸1.08m、深さ0.2mの不整形を呈する。

遺物 覆土から馬歯がわずかに出土しているのみである。

時期 不明

㊽ SK45 (第28図、図版21)

遺構 III区BJ33を中心に検出し、東側の大部分が調査区外となるため、一部を調査した。重複する遺構はない。現状規模は長軸2.52m、短軸1.08m以上、深さ0.64mの不整形を呈する。覆土に砂

の堆積がみられることから、貯水機能があったものとみられる。

遺物 なし
時期 近世以降か

④① S K46 (第28図、図版22)

遺構 IV区B B01を中心に検出し、北側の一部が調査区外となるが、ほぼ全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸3.04m、短軸1.64m、深さ0.48mの不整形を呈する。

遺物 なし
時期 不明

④② S K47 (第28図、図版22)

遺構 IV区B A00を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.76m、短軸0.72m、深さ0.16mの不整形を呈する。人骨が出土していることから土壌墓とみられる。

遺物 底部に石が据えられ、人骨片が出土している。
時期 人骨等が残存することから、近世以降とみられる。

④③ S K48 (第28図、図版22)

遺構 V区B E11を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.8m、短軸1.36m、深さ0.54mの不整形を呈する。

遺物 なし
時期 中世か

④④ S K49 (第28図)

遺構 V区B H04を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.2m、短軸0.68m、深さ0.4mの隅丸長方形を呈する。

遺物 なし
時期 中世か

④⑤ S K50 (第28図、図版23)

遺構 V区B H08を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.0m、短軸2.0m、深さ1.06mの円形を呈する。形態から井戸跡の可能性がある。

遺物 覆土からS D01と接合する青磁片が出土している。
時期 中世か

④⑥ S K51 (第28図)

遺構 V区B I05を中心に検出し、全体を調査した。S K56に切られる。東側をS K56に切られているため、現状で規模は長軸1.04m以上、短軸0.56m、深さ0.58mの不整形を呈する。

遺物 覆土から陶器（碗・小瓶）が出土している。

時期 出土遺物から中世とみられる。

㊦ S K52（第28図）

遺構 V区BF07を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.76m、短軸1.0m、深さ0.46mの楕円形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

㊧ S K53（第29図）

遺構 V区BG10を中心に検出し、全体を調査した。SB13を切る。規模は長軸1.6m、短軸1.12m、深さ0.73mの楕円形を呈する。

遺物 なし

時期 出土遺物はないが、切り合い関係から中世以降とみられる。

㊨ S K54（第29図）

遺構 V区BG09を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.68m、短軸1.12m、深さ0.52mの楕円形を呈する。出土遺物から土墳墓の可能性がある。

遺物 銅銭「寛永通宝」、陶器（碗）、磁器（合子蓋）が出土している。

時期 出土遺物から近世以降とみられる。

㊩ S K55（第29図、図版23）

遺構 V区BK03を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.84m、短軸0.72m、深さ0.43mの円形を呈する。

遺物 陶器（皿・摺鉢）が出土している。

時期 出土遺物から中世（16世紀）とみられる。

㊪ S K56（第28図）

遺構 V区BI05を中心に検出し、全体を調査した。S K51を切る。規模は長軸1.32m、短軸1.28m、深さ0.56mの不整形を呈する。

遺物 なし

時期 出土遺物はないが、切り合い関係から中世以降とみられる。

㊫ S K57（第29図）

遺構 V区BH06を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.12m、短軸0.8m、深さ0.72mの隅丸長方形を呈する。

遺物 覆土から陶器（皿）、内耳鍋片が出土している。

時 期 出土遺物から中世（16世紀）とみられる。

㉔ S K 58（第29図）

遺 構 V区B J 04を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.8m、短軸0.56m、深さ0.42mの隅丸長方形を呈する。

遺 物 なし

時 期 不明

㉕ S K 59（第29図）

遺 構 V区B H 05を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.88m、短軸0.52m、深さ0.46mの不整形を呈する。

遺 物 なし

時 期 不明

㉖ S K 60（第29図）

遺 構 V区B K 03を中心に検出し、西側半分が調査区外となり、一部を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.56m、短軸0.2m以上、深さ0.27mの不整形を呈する。

遺 物 なし

時 期 不明

㉗ S K 61（第29図、図版23）

遺 構 V区B L 15を中心に検出し、全体を調査した。S B 14に切られる。規模は長軸1.92m、短軸1.36m、深さ0.66mの不整形を呈する。

遺 物 なし

時 期 不明

㉘ S K 62（第29図）

遺 構 V区B L 13を中心に検出し、全体を調査した。S B 12に切られる。南東側規模は長軸2.08m、短軸1.68m、深さ0.37mの不整形を呈する。

遺 物 なし

時 期 出土遺物はないが、切り合い関係から中世かそれ以前とみられる。

㉙ S K 63（第30図）

遺 構 V区B F 10を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.8m、短軸0.52m、深さ0.48mの楕円形を呈する。

遺 物 覆土から縄文土器片がわずかに出土しているのみである。

時 期 縄文時代か

㉟ SK64

SM03にて記載。

㊱ SK65 (第30図、図版24)

遺構 VI区AU20を中心に検出し、全体を調査した。SM03築造以前に掘削された土坑である。規模は長軸1.84m、短軸1.6m、深さ0.84mの円形を呈する。覆土は土層図による。SK66、67と同時期で、同様の性格を有するものとみられる。

遺物 なし

時期 SK67の状況から、弥生時代とみられる。

㊲ SK66 (第30図、図版24)

遺構 VI区AV22を中心に検出し、全体を調査した。SM03に切られる。規模は長軸1.64m、短軸1.64m、深さ0.18mの円形を呈する。覆土は土層図による。

遺物 なし

時期 SK67の状況から、弥生時代とみられる。

㊳ SK67 (第30図、図版24)

遺構 VI区AW21を中心に検出し、全体を調査した。SM03に切られる。規模は長軸1.68m、短軸1.6m、深さ0.18mの円形を呈する。覆土は土層図による。

遺物 覆土中からわずかに弥生土器片が出土しているのみである。

時期 出土遺物から弥生時代の可能性がある。

㊴ SK68 (第23図、図版25)

遺構 I区BP31を中心に検出し、全体を調査した。SM17を切る。規模は長軸0.51m、短軸0.49m、深さ0.08mの円形を呈する。本址は、SM17の周溝掘削後に掘り込まれているが、SM17に直接伴うものか明確ではない。

遺物 底部より10cm程上から馬歯の一部が出土している。土坑の規模からすると、頭部のみの可能性も考えられるが、本来の状況は不明である。

時期 馬歯以外の遺物は出土していない。切り合い関係にあるSM17もほとんど遺物の出土がなく、古墳時代の可能性もあるが、時期を決めがたい。そのため、本址の時期も不明である。

㊵ SK69 (第30図、図版25)

遺構 VI区BG24を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.8m、短軸1.36m、深さ0.24mの隅丸長方形を呈する。底部に石が据え置かれていた。

遺物 なし

時期 不明

㊦ S K70 (第30図)

遺 構 VI区B H24を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.2m、短軸1.2m、深さ0.18mの円形を呈する。底部に石が据え置かれていた。

遺 物 なし
時 期 不明

㊧ S K71 (第30図)

遺 構 VI区B I 25を中心に検出し、東側約1/3が調査区外となり、一部を調査した。重複する遺構はない。一部が調査区外となるため、現状で規模は長軸1.2m、短軸0.8m以上、深さ0.19mの不整形を呈する。底部に石が据え置かれていた。

遺 物 なし
時 期 不明

㊨ S K72 (第30図)

遺 構 VI区A C11を中心に検出し、全体を調査した。SD02を切る。規模は長軸1.6m、短軸0.52m、深さ0.22mの長方形を呈する。花崗岩を削り出して掘り込まれており、墓の可能性がある。

遺 物 なし
時 期 不明

㊩ S K73 (第30図)

遺 構 VI区A D13を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.92m、短軸0.76m、深さ0.29mの円形を呈する。底部よりやや浮いてはいるが石が据え置かれている。

遺 物 なし
時 期 不明

㊪ S K74 (第30図、図版25)

遺 構 VI区A N20を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.36m、短軸1.6m、深さ0.37mの隅丸長方形を呈する。

遺 物 なし
時 期 不明

㊫ S K75 (第30図)

遺 構 V区B J16を中心に検出し、全体を調査した。S B14に切られ、S B15を切る。規模は長軸2.52m、短軸0.84m、深さ0.49mの楕円形を呈する。

遺 物 なし
時 期 切り合い関係から中世以降とみられる。

㉑ SK76 (SM01) (第31図)

遺構 V区BA16を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.6m、短軸0.32m、深さ0.29mの楕円形を呈する。銅銭の出土から土壌墓の可能性はある。

遺物 覆土から銅銭「皇宋通寶」「元符通寶」「紹聖通寶」各1枚及び「皇宋通寶」「嘉祐通寶」とみられる3枚が出土しており、いわゆる六道銭である。

時期 出土遺物から中世とみられる。

㉒ SK77 (SM02) (第31図、図版26)

遺構 V区BF15を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.36m、短軸1.28m、深さ0.24mの円形を呈する。上部に掘り拳から人頭大の石が置かれており、土壌墓の可能性はある。

遺物 石の下から瀬戸陶器(皿)が出土している。

時期 出土遺物から中世(15世紀中)とみられる。

㉓ SK78 (SM05) (第31図、図版26)

遺構 VIII区AP12を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.12m、短軸1.08m、深さ0.35mの円形を呈する。土壌内に人頭大の石が積み重ねられていた。人骨の出土から土壌墓と考えられる。

遺物 最下部の石の下から人骨片(火葬骨)、陶器(皿)が出土している。

時期 出土遺物から近世とみられる。

㉔ SK79 (SM09) (第31図)

遺構 II区BV03を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.4m、短軸0.84m、深さ0.43mの不整形長方形を呈する。底部には石が据え置かれており、遺構の状況から土壌墓の可能性はある。

遺物 なし

時期 不明

㉕ SK80 (SM13) (第31図、図版27)

遺構 VIII区AQ08を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.8m、短軸1.64m、深さ0.4mの不整形円形を呈する。土壌内全体に掘り拳大の石が入れられており、人骨の出土から土壌墓と考えられる。

遺物 北西隅から人骨が出土しているほか、古瀬戸陶器小片、摺鉢破片がある。

時期 出土遺物から中世とみられる。

㉖ SK81 (SM14) (第31図、図版27)

遺構 II区BW49を中心に検出し、全体を調査した。SM10を切る。規模は長軸1.68m、短軸

1.0m、深さ0.19mの不整形を呈する。銅銭の出土から土墳墓と考えられる。

遺物 覆土から銅銭「景祐元寶」が出土している。

時期 出土遺物から中世とみられる。

㊦ SK82 (SM23) (第31図)

遺構 I区BG32を中心に検出し、全体を調査した。SM18を切る。規模は長軸2.0m、短軸1.08m、深さ0.64mの不整形を呈する。土壌墓の可能性ある。

遺物 西側壁際の底部から底部に「田中」の墨書のある灰釉陶器(小瓶)が出土している。

覆土から打製石斧、横刃型石器が出土している。

時期 出土遺物から平安時代(9世紀後半)とみられる。

(5) 集石(SI)

① SI01 (第31図、図版27)

遺構 VII区AP15を中心に検出し、一部を調査した。SM04を切る。北側はSM04との重複、東側半分は調査区外となっているため全体規模は明確でなく、確認できたのは南北方向で2.6m、深さは0.3mである。南側隅で握り拳大から人頭大の石の集石が確認された。性格は不明である。

遺物 なし

時期 不明

(6) 溝址(SD) (第32・33図、図版28)

溝址からは遺物の出土がほとんどないため、時期および周辺の遺構との関係は明確にできなかった。

遺構 No.	検出位置	重複関係	規模(m) (長さ×幅×深さ)	時期	出土遺物
01	VII区AV11	SD04を切る	21.2以上×2.4~0.6×0.15	不明	陶器(皿) 石器
02	II区AF08	SM07に切られる	20.9以上×3.5~0.6×0.18	不明	—
03	II区BP47	SK07に切られる	11.6以上×0.8~0.6×0.31	不明	—
04	VII区AY06	SD01に切られる	11.2以上×1.5~0.4×0.12	不明	—
05	I区BG49	SM12に切られる	9.2以上×—×0.24	不明	—
09	III区BF33	—	3.76以上×—×0.29~	不明	埴輪片
10	V区BD07	SK42に切られる	4.4以上×0.3~0.6×0.12	不明	—

(7) 周辺ピット (第34~41図)

V区では、中世の方形竪穴及び同時期とみられる掘立柱建物址が複数検出されている。掘立柱建物址

面繫吊金具 面繫吊金具は6鋸長方形板を使用する。最大長5.5cm、最大幅は2.0cmだが、立間へ向かうほど広がる。上端は角を裁断し、丸くおさめてある。立間との連結は、表側に鍛接した鉤による。面繫金具下端は、やや立間にかぶさる。鋸は径4.5mm、裏側で上方へ90°曲がる。

b. 面繫

4鋸方形板辻金具、鉸具と半円形留金具の組み合わせである。

4鋸方形板辻金具 (第67図3～5)

4鋸方形板辻金具は3点、貴金具は5点出土している。やや錆彫れが進んでおり、鋸は軸を残した欠損が認められる。辻金具1・辻金具2の組み合わせと、辻金具1・貴金具1の組み合わせからなる。

4鋸方形板辻金具は1辺1.7cm、鋸径0.4cm。裏面に、おそらく革と思われる有機物が付着している。貴金具は無装飾の鉄製である。内側は平らで、断面半円形に整えてある。

小型鉸具 (第67図1)

やや錆化は進むが、全体的に残存状態は良好である。輪金左端を折り曲げて横棒を作り出したもので、横棒を差し込む箇所は平らに潰されている。最大長5.8cm、最大幅3.0cm。

1鋸半円形留金具 (第67図2)

小型鉸具とセットで使用されたものと思われる。中央に径不明の1鋸を留めたもので、鋸の裏面は欠損している。最大長1.4cm、最大幅1.4cm。

c. 鐙

木で作った鐙本体の一部を、鉄で覆った木芯鉄張輪鐙である。鉸具、柄、輪の組み合わせが、左右1組出土している。柄と輪は、左右で大きさが若干異なる。北側鐙には、柄と輪の間に最大長4.0cmの釘が付属する。

鉸具 (第68図7)

残存状態は良好で、錆彫れも少ない。鉸具は最大長6.6cm、刺金長6.5cm、横棒長3.6cm。輪金は、横棒を通す箇所まで平らに潰してある。

柄 (第68図8)

左右側面のみに鉄張りを施したものである。残存状態は良好で、錆彫れも見られない。木質が残っており、南側のものは吊り下げ孔も認められる。柄は中央が狭く、上下端ほど幅広の鉄板を、頂部方形の柄形状に合わせて折り曲げて制作する。さらに正・背面側端部は、心持ち断面コ字形に整えてある。北側が若干大きく、最大長7.0cm、幅3.3cm。南側は小さく、最大長6.5cm、幅3.0cm。鉄板最大幅は、2点とも1.4cm。下端隅は裁断して、半裁六角形状をしている。径0.3cmの釘を上下2本貫通させており、1本は上から1.2cm、もう1本は下から1.2cmの箇所に打ち込んである。頭は潰してあるが、北側のものは、径が小さく整った形状をしている。内部の木質は目が縦方向に流れている。南側の柄内部木質には、吊り下げ孔が確認できる。吊り下げ孔は上部釘の直下、柄上端から1.5cmほどの箇所に横長方形で開口する。推定1.7×0.8cm。

輪 (第68図10)

柄の付け根付近内面と正背面を、補強するため鉄張りにしたものである。残存状態は良好で、錆彫れも認められず、南側のものには木質が残存している。輪鐙上部形状に合わせてゆるく湾曲させ、さらに正・背面側は木質を包むように断面コ字形に整えてある。南側が若干大きく、断面が半裁台形に近い。

最大長6.5cm、最大幅2.5cm、高さ0.7cm。北側は小さく、最大長6.0cm、幅2.2cm、高さ1.1cm。いずれも左右端から0.8cmほどの個所に2本、長さ2.0cmの鋸を留めてある。鋸は鉄板側から打ち込み、木質を突き抜けて反対側は細環で留めてある。南側に残存している木質は、木目方向が鉄板方向に等しく、柄の木目とは直交する。

釘 (第68図9)

北側の柄と輪の中間にのみ付属する。断面横長方形の短い鉄棒で、最大長3.5cm、径0.4cm、左右端部径0.6cm。木質が錆着しているが、木目方向は約80°の角度でハ字形に開いている。

d. 鞍金具 (第68図11)

輪金と脚が一体化した鞍である。やや錆化が進み、1点は脚先端が、1点は脚間の釘が欠損している。鞍金 最大長は2点とも6.0cm、輪金幅は1点が3.5cm、もう1点は3.2cmで若干小さい。輪金の一部は5.0mmほど瘤状に膨らんでおり、そこへT字形刺金を差し込む。瘤は正面方向のみ飛び出し、左右と背面方向への突出はなく、鍛接痕もない。おそらく裁断の際に、刺金を差し込む部分を残して瘤状に仕上げたものと思われる。座金より下側にあたる脚は、ゆるく外反する。また、左右に開かず、座金から2.0cmほどの個所で、脚同士をつなぐ釘を打ち込んでいる。

座金 座金は空豆形で、脚を通す部分は長方形に穿孔している。断面の盛り上がりは低い。最大長4.0cm。

e. 尻繫

3鋸半円形留金具をとまなう7脚鉄製環状雲珠と、3点の剣菱形杏葉の組み合わせである。

環状雲珠 (第69図13)

雲珠は断面長方形の鉄環で、留金具が1点錆着している。残存状態は良好だが、環の鍛接個所は不明である。径5.6cm、厚み0.4cm。通常の鉄地金銅張環状雲珠とは異なり、留金具は固定装着されていない。

3鋸半円形留金具 (第69図12)

全体的に錆膨れが進み、鋸頭と鋸裏ともに欠損が多い。1点は鋸裏の鉤先端までよく残っている。

留金具は、半円形板の表側に貴金具を鍛接、一体化したものである。最大長1.9cm、貴金具の正面幅2.3cm、前後幅1.3cm。貴金具は面繫金具とは異なり、断面が平たい。半円形板に径4.0mmの鋸を3点打ち込むが、裏側で各々中央へ向かう方向へ90°曲がる。

剣菱形杏葉 (第69図14)

おおむね残存状態は良好だが、吊金具は錆膨れが進んでいる。

杏葉は、剣菱の先端へ向かうカーブはあまり顕著ではない。1点は、円形部分と剣菱部分の中間点が左右非対称のゆがみを持つ。3点とも最大長12.0cm、頭部最大幅6.0cm。吊金具は、1点は最大長2.5cmの4鋸方形板を使用し、2点は最大長1.8cmの3鋸半円形板を使用する。いずれも表側より鉤を鍛接し、鉤端部はやや平らに潰されている。鋸は径4.0mm、裏側で各々中央へ向かう方向へ90°曲がる。

② SK18出土遺物 (第70～71図、図版42)

a. 鉄鏃 (第70図、第71図1～8)

26本のすべて逆刺付片刃頭鏃で、平根系や尖矢はない。サイズはおおむね整えられている。

なお、SK18出土鉄鏃のうち、茎に矢柄が残存している1本 (第70図-17) についてパリノ・サージェ

イ株式会社により分析を行った結果、材質はイネ科タケ亜科であることが確認された。さらに、内部の中空部分に薄い植物質の物質を四角に巻いたものが入れている様子が観察された。植物質の物質は、その特徴から樹皮などと考えられるが、詳細は不明であるということである。

b. 靱金具

鉄條の上左右より、吊金具1対とコ字形金具が出土している。吊金具の鉸具の方向が鉄條の鋒と一致しているため、矢を上向きにして入れる「靱」とした。

吊金具 (第71図9・10)

吊金具は片側端部に鉸具が装着され、もう一端が半円形に裁断調整された、短冊形である。吊金具の鉸具には刺金がなく、単に輪金に通されているのみである。1点は鉸具が残存し、もう1点は鉸具の大半が欠損する。幅は両者とも2.0cmで同じだが、鉸具が残存するものは長さがやや短い。短い方の全長は14.8cm。短冊形鉄板長は、短いものは13.7cm、長い方は14.5cm。両者とも、左右縁と中央軸に沿って3列の銚が打たれている。短い方は各列7銚ずつだが、長い方は短いものよりも各列1銚多い。また、長い方は鉸具輪金の長さが左右で異なるため、もっとも鉸具に近い位置の銚は、鉸具に合わせて左右不均衡に並んでいる。鉸具を取り付けるため、上端は左右の縁を切り欠き、残った中央部分を表から裏へ回して軸通しを作成している。輪金に鍛接痕はなく、軸通しに左右からはめ込んだものと思われる。

コ字形金具 (第71図11)

コ字形金具は、細長鉄板を曲げたもので、片側の端部は欠損する。縁は内側へ返り込んでおり、内面には木質が残存している。木目方向は、鉄板長軸と一致する。端から1.0cmの位置に、径0.6cmの銚を打ってある。端部ほど幅広く、中央の辺は幅が狭い。端部側の辺は長さ5.5cm、中央辺は長さ3.0cm、端部幅1.5cm、中央幅1.0cm。

③ 金属製品観察表 (第65・66・72図、図版41~43・49)

遺構 No	図版 No	形 態	法 量 (cm)									
			刃 部			頭 部			基 部			
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
SM03	65-1	逆刺付片刃長脚鏃	2.9	0.9	0.3	9.5	0.5	0.35	5.5+	0.3	0.25	
	-2	逆刺付片刃長脚鏃	3.4	0.9	0.9	10.1	0.6	0.4	3.5+	0.4	0.3	
	-3	逆刺付片刃長脚鏃	3.1	0.8	0.2	9.5	0.5	0.3	3.4+	0.35	0.2	
	-4	逆刺付片刃長脚鏃	3.3	0.8	0.2	9.5	0.5	0.35	3.3+	0.4	0.35	
	-5	逆刺付片刃長脚鏃	3.2	0.8	0.2	10.4	0.5	0.35	2.0+	0.4	0.3	
	-6	逆刺付片刃長脚鏃	-	0.8	0.2	-	0.5	0.35	1.6+	0.4	0.3	
	-7	逆刺付片刃長脚鏃	3.1	0.9	0.2	9.8	0.55	0.3	1.7+	0.45	0.25	
	-8	逆刺付片刃長脚鏃	3.0	0.8	0.2	9.8	0.5	0.35	2.0+	0.4	0.3	
	-9	逆刺付片刃長脚鏃	3.3	0.8	0.2	9.7	0.5	0.4	2.0+	0.4	0.4	
	-10	逆刺付片刃長脚鏃	3.1	0.8	0.2	9.3	0.5	0.4	3.2+	0.35	0.25	
	-11	逆刺付片刃長脚鏃	3.2	0.8	0.2	9.2	0.45	0.4	3.6+	0.4	0.25	
	-12	逆刺付片刃長脚鏃	1.9+	0.8	0.2	9.3	0.45	0.35	1.2+	0.4	0.3	
	-13	逆刺付片刃長脚鏃	1.9+	0.86	0.25	-	0.5	0.4	-	-	-	
	-14	逆刺付片刃長脚鏃	3.7	0.85	0.2	5.2+	0.5	0.4	-	-	-	
	-15	逆刺付片刃長脚鏃	3.2	0.8	0.2	7.2+	0.5	0.3	-	-	-	
	-16	逆刺付片刃長脚鏃	-	-	-	5.3+	0.5	0.3	3.2+	0.3	0.25	
	-17	逆刺付片刃長脚鏃	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	-18	逆刺付片刃長脚鏃	-	-	-	8.1+	0.5	0.4	2.7+	0.45	0.3	
SK18	70-1	逆刺付片刃長脚鏃	2.2+	0.7	0.2	-	0.45	0.3	2.3+	0.35	0.3	
	-2	逆刺付片刃長脚鏃	2.5	0.8	0.25	7.5	0.5	0.35	5.9	0.35	0.3	
	-3	逆刺付片刃長脚鏃	2.1+	0.9	0.2	7.9	0.5	0.4	5.9	0.3	0.3	
	-4	逆刺付片刃長脚鏃	2.6+	0.75	0.2	7.4	0.6	0.35	2.7+	0.3	0.3	
	-5	逆刺付片刃長脚鏃	2.5	0.75	0.2	7.8	0.35	0.3	4.4	0.3	0.3	
	-6	逆刺付片刃長脚鏃	2.2+	0.8	0.2	8.1	0.45	0.4	3.4+	0.3	0.3	
	-7	逆刺付片刃長脚鏃	2.6	0.7	0.2	6.9	0.6	0.3	6.75	0.3	0.3	
	-8	逆刺付片刃長脚鏃	1.3+	0.65	0.2	7.7	0.4	0.3	5.2+	0.25	0.25	
	-9	逆刺付片刃長脚鏃	2.4	0.65	0.2	6.9	0.4	0.3	5.1+	0.35	0.35	
	-10	逆刺付片刃長脚鏃	2.2+	0.65	0.2	-	0.4	0.4	-	0.25	0.25	
	-11	逆刺付片刃長脚鏃	2.7	0.6	0.2	7.25	0.4	0.3	4.5+	0.2	0.2	

遺構No	図版No	形態	法 量 (cm)			穿孔方向	材 質
			直 径	総長さ	孔 径		
SM07	73-22	白玉	8.0	2.5	2.0	片側	滑石
	-23	白玉	5.0	3.6	2.0	片側	滑石
	-24	白玉	6.0	4.5	2.0	片側	滑石
	-25	白玉	5.0	3.6	2.0	片側	滑石
	-26	白玉	5.0	3.0	2.0	片側	滑石
	-27	白玉	5.0	2.0	2~2.5	片側	滑石
	-28	白玉	5.0	3.5	2.0	片側	滑石
	-29	白玉	5.0	3.0	2.0	片側	滑石
	-30	白玉	5.0	4.0	2.0	片側	滑石
	-31	白玉	5.0	2.5	2.0	片側	滑石
	-32	白玉	5.0	2.5	2.0	片側	滑石
	-33	白玉	5.0	4.0	2.0	片側	滑石
	-34	白玉	5.0	3.5	2.0	片側	滑石
	-35	白玉	5.0	4.0	2.0	片側	滑石
	-36	白玉	5.0	2.5	2.0	片側	滑石
	-37	白玉	5.0	4.0	2.0	片側	滑石
	-38	白玉	5.0	4.0	2.0	片側	滑石
	-39	白玉	5.5	2.0	2.5	片側	滑石
	-40	白玉	5.0	2.5	2.0	片側	滑石
	-41	白玉	5.0	3.5	2.0	片側	滑石
	-42	白玉	5.0	1.0	2.0	片側	滑石
-43	白玉	-	3.0	2.0	片側	滑石	
-44	碧玉	4.0	17.5	1.5~2	片側	碧玉	
-45	碧玉	4.0	23.0	2.0	片側	碧玉	
-46	勾玉	8~10.5	26.5	2~3.5	片側	碧玉	

遺構No	図版No	形 態	法 量 (cm)			石 質
			長 径	幅	厚 径	
SM04	72-9	石製品(串)	7.8	1.7	0.3	緑灰色
	-10	石製品(串)	4.4	4.5	1.0	滑石
SM07	73-1	石製品(串)(有孔内版)	2.5	3.0	0.5	滑石
	-2	石製品(串)(有孔内版)	2.4	3.0	0.6	滑石

(4) 石器

石器観察表 (第75~80図、図版46~50)

遺構No	図版No	形 態	法 量 (cm)			石 質
			長 径	幅	厚 径	
SB04	75-1	石白	8.9+	16.3	6.1	花崗岩
SB15	75-2	砥石	5.9+	2.75	1.6	-
SX13	75-3	打製石斧	8.0+	5.1	1.3	硬砂岩
SX34	75-4	打製石斧	9.0+	4.3	1.5	硬砂岩
SX36	75-5	砥石	14.0	5.4	5.0	流紋岩
SK57	75-6	磨石	10.4	4.0	2.9	硬砂岩
SM03	76-1	打製石斧	18.4	8.0	3.2	硬砂岩
	-2	打製石斧	11.5+	6.6+	3.0	硬砂岩
SM04	76-3	打製石斧	14.6	7.2	2.1	硬砂岩
	-4	打製石斧	18.7+	9.3	4.3	硬砂岩
	-5	打製石斧	21.0+	8.6	2.8	硬砂岩
	-1	打製石斧	17.1+	7.6	4.0	硬砂岩
	-2	打製石斧	18.3	8.25	3.4	硬砂岩
	-3	打製石斧	13.6	6.7	2.0	硬砂岩
	-4	打製石斧	11.9	5.8	1.4	硬砂岩
	-5	打製石斧	12.1	4.9	1.8	硬砂岩
	-6	打製石斧	11.1	5.2	1.6	硬砂岩
	-7	打製石斧	8.9+	5.8	1.45	硬砂岩
	-8	打製石斧	10.1	4.1	0.7	緑色片岩
	-9	打製石斧	9.9	4.55	1.5	硬砂岩
	-10	打製石斧	9.8	4.3	1.5	硬砂岩
	-11	打製石斧	8.9	4.3	1.3	緑色片岩
	78-1	打製石斧	8.6	4.6	1.7	硬砂岩
	-2	打製石斧	11.2	4.3	1.8	緑色片岩
	-3	打製石斧	8.2+	4.6	1.0	硬砂岩
-4	打製石斧丁	3.8	5.9	0.9	硬砂岩	
-5	有柄磨状形石器	8.4	11.7	2.0	緑色片岩	
-6	有柄磨状形石器	9.2	15.4	2.1	硬砂岩	
-7	磨石	6.5+	3.65	1.3	凝灰岩	
-8	磨石(未製品)	10.4+	7.2+	3.5	緑色片岩	
SM06	78-9	打製石斧	13.6+	7.2	2.8	硬砂岩
	-10	打製石斧	10.6+	6.2	2.4	硬砂岩
	-11	打製石斧	8.3+	4.8	1.7	硬砂岩

遺構No.	図面No.	形 態	法 量 (cm)			石 質
			長 さ	幅	厚 さ	
SM07	79-1	打製石斧	11.8+	7.1	3.7	硬砂岩
	-2	打製石斧	8.0+	14.8	1.7	緑色片岩
	-3	鎌刃磨石器	6.6	9.45	1.4	硬砂岩
SM12	79-4	打製石斧	11.6	5.2	2.7	緑色片岩
SM15	79-5	打製石斧	16.0	6.3	3.6	緑色片岩
	-6	打製石斧	5.8+	4.7	2.0	緑色片岩
	-7	打製石斧	8.0+	5.3	2.1	硬砂岩
	-8	打製石斧	11.2	4.0	1.8	緑色片岩
	-9	打製石斧丁	4.2	10.1	1.7	硬砂岩
SM18	79-10	打製石斧	17.2	9.45	2.2	硬砂岩
	-11	打製石斧	14.1	7.8	2.1	硬砂岩
SM22	80-1	打製石斧	11.5+	14.9	1.6	硬砂岩
SK02	80-2	打製石斧	12.7+	8.4	3.45	硬砂岩
	-3	打製石斧	9.4	5.6	2.3	硬砂岩
	-4	鎌刃磨石器	6.9	10.2	1.75	硬砂岩
	-5	打製石斧	10.4	3.8	1.3	硬砂岩
SD01	-6	蓋石	1.9+	1.0	0.7	流紋岩
SD09	80-7	鎌刃磨石器	7.4	6.2+	1.9	硬砂岩

(5) 馬歯骨

馬歯骨は、以下の6ヶ所で確認された。

① SK64

規模は2.4×1.12mのSM03の周溝に掘り込まれた土壇。馬歯および骨の痕跡を検出した。骨の遺存状態は極めて悪く、唯一部位がわかるのは、切歯および臼歯が確認できた頭部のみである。これは、土壇の南西隅にあり、北側を向いていることがわかる。それ以外は、部位を特定することはできなかった。頭部の位置および土壇の規模からみて、本来は馬一頭の全身があったものとみられる。共伴して馬具一式が出土している。SM03に伴う馬を埋葬した土壇である。

② SM15

南東側周溝内の転落した葦石の間から土器類と共に出土している。遺存部位は馬歯残片のみである。遺存状態は悪い。出土状態からSM15に伴うものである可能性が高いが、葦石が転落している状況からみても、馬歯は原位置を保っているとは考えられない。本来の状況および位置は明確ではない。

③ SK10

規模1.64×1.04mの単独の土壇。馬骨一体分が確認された。遺存状態は良好であり、各骨の部位も確認できる。馬骨の詳細については「附編1」によるが、横臥姿勢で一体分をそのままの状態で埋めている。共伴遺物はないが、出土状態から馬は埋葬されたものとみられる。

④ SK11

規模1.02×0.42mの単独の土坑。切歯・臼歯および下顎骨の一部が出土したが、遺存状態はあまり良くない。規模は、SK64、SK10と比較しても若干小規模であり、本来馬一頭分があったかどうかは不明である。

⑤ SK42

規模1.32×1.08mの土坑。馬歯の一部残片が出土したのみで、遺存状態も悪い。本来の状態は不明である。

⑥ SK68

規模0.51×0.49mでSM17を切る土坑である。馬歯が確認されたが、臼歯の残片のみで遺存状態は悪い。土坑の規模からみて、本来一頭分の全身があったとは考えられない。SM17の一部を調査したのみ

のため時期が特定できず、S K 68との関係も明確ではない。

最も遺存状態の良いS K 10については、宮崎重雄氏に性別・体高等について鑑定を依頼した。それ以外については、いずれも馬歯の一部のみのため、馬が本来どのような状態にあったのかを判断することは難しい。

馬の属層時期については、S K 64が共伴する馬具の年代から古墳時代中期（5世紀後半）の年代が与えられる。また、S M 15出土例が周溝墓に伴うものであるとすれば、やはり古墳時代中期のものである。S K 10は、S K 64出土例との形態等の類似から、古墳時代の可能性が高い。それ以外は、時期は明確でない。

5. 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物には、土器・陶器類、金属製品、石器がある。

陶器類は、平安時代の灰釉陶器と中世の陶器である。平安時代については、今回の調査では土壌墓であるS K 82のほか土坑が3基確認できたが、さらなる該期の遺構の存在が推定される。また、今回の調査地がある一帯は、中世に大きく削平されていることが確認されており、中世以前の遺構はこの際に削平または破壊されている可能性が考えられる。中世の遺物は播鉢等があり、該期の集落域として捉えられる。

金属製品は、鉄剣（第72図8）がグリットA F 30から出土している。周辺の周溝墓群又は溝口の塚古墳との関連が考えられる。ほかは中世の遺物であり、集落あるいは墓域にかかわるものである。

石器については、第81図1～4に特筆すべきものがある。いずれも出土状況は明確でないが、石器の形態等から、旧石器時代最終末から縄文時代草創期に属する可能性があり、該期の資料の少ない中で、貴重な資料といえる。

① 土器・陶器類観察表（第64図、図版41）

遺構No.	図版No.	器種	器形	口径 (cm)			手法	胎土	焼成	色調			残存
				口径	胴径	底径				器高	外面	断面	
遺構外	64-6	土師器	壺	20.0	-	-	ハケ/ロクロナデ	黄母・小石粒	良	褐色	暗褐色	褐色	2/3残
-7	土師器	杯	12.6	-	3.4	4.3	ロクロナデ, 回転糸切り/ロクロナデ	黄母・小石粒	良	黄褐色	暗褐色	黄褐色	2/3残
-8	土師器	杯	12.8	-	-	-	ロクロナデ/ロクロナデ	小石粒	良	灰褐色	灰褐色	灰褐色	1/4残
-9	灰釉陶器	杯	-	-	5.0	-	ロクロナデ, 回転糸切り/ロクロナデ	小石粒	良	褐色	褐色	褐色	1/3残
-10	灰釉陶器	皿	-	-	6.6	-	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1/4残
-11	灰釉陶器	皿	-	-	5.8	-	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1/4残
-12	灰釉陶器	皿	-	-	8.0	-	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1/4残
-13	灰釉陶器	皿	-	-	5.4	-	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	良	明灰色	明灰色	明灰色	1/3残
-14	陶器	皿	7.4	-	3.3	1.6	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	良	褐色輪	褐色輪	褐色輪	2/3残
-15	陶器	皿	-	-	4.8	-	ロクロナデ, 削り出し成形/ロクロナデ	小石粒	良	鉄輪	灰白色	灰白色	无形
-16	陶器	罍	-	-	4.6	-	ロクロナデ, 削り出し成形/ロクロナデ	小石粒	良	鉄輪	灰白色	灰白色	ほぼ残
-17	陶器	罍	-	-	10.0	-	ロクロナデ/ロクロナデ	小石粒	良	鉄輪	黄褐色	黄褐色	1/4残
-18	陶器	罍鉢	-	-	9.5	-	ロクロナデ/ロクロナデ	小石粒	良	鉄輪	黄褐色	黄褐色	1/2残
-19	陶器	罍鉢	-	-	10.4	-	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	良	鉄輪	黄褐色	黄褐色	1/2残
-20	陶器	罍	15.6	-	11.2	4.2	ロクロナデ/ロクロナデ	黄母・小石粒	良	灰褐色	灰褐色	灰褐色	1/4残
-21	陶器	灯明	4.6	-	3.5	3.3	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	良	鉄輪	灰褐色	鉄輪	2/3残

② 金属製品観察表 (第72・74図、図版42・43・49)

図版No	図版No	材質	形 態	法 尺 (cm)						
				全 長	刀 部			基 部		
				長 さ	幅	厚 さ	長 さ	幅	厚 さ	
図版外	72-7	鉄	鑿	20.2+	5.2	1.8~2.1	0.8	15.0+	0.8	1.1~1.6
	8	鉄	剣	43.6+	39.6+	2.2~2.5	0.4	3.4+	1.6	0.35

図版No	図版No	材質	職 業 名	時代 初 期 年	法 尺 (cm)		備 考
					長 さ	厚 さ	
図版外	74-10	鉄			2.25	0.15	
	-11	鉄			2.3	0.15	
	-12	銅	許符通寶	北宋 1008	2.4	0.1	
	-13	銅	淳化元寶	北宋 990	2.35	0.1	
	-14	銅	許符元寶	北宋 1008	2.4	0.1	
	-15	銅	許符元寶		2.45	0.15	

③ 石器観察表 (第81~83図、図版49・50)

図版No	図版No	形 態	法 尺 (cm)			石 質
			長 さ	幅	厚 さ	
図版外	81-1	鑿器	6.3	3.3	1.2	凝灰岩
	-2	尖頭器	4.7+	2.5	0.7	ナ+ト
	-3	有舌尖頭器	7.1	2.5	0.6	凝灰岩
	-4	尖頭器	13.6	4.0	1.2	緑色片岩
	-5	石鏃	2.2+	1.4	0.5	黒曜石
	-6	石鏃	2.9+	1.2	0.5	ナ+ト
	-7	石鏃	2.3+	1.2	0.5	黒曜石
	-8	石鏃	2.2+	-	0.3	黒曜石
	-9	石鏃	1.8	1.4	0.4	黒曜石
	-10	石鏃	1.4+	1.5	0.3	黒曜石
	-11	石鏃	1.2	1.5	0.2	黒曜石
	-12	削片	2.4	2.5	0.3	黒曜石
	-13	削片	1.8	1.9	0.5	黒曜石
81-1	打製石斧	17.5+	6.6	3.1	硬砂岩	
	-2	打製石斧	15.15+	7.6	3.3	硬砂岩
	-3	打製石斧	12.7	6.6	3.0	硬砂岩
	-4	打製石斧	8.9+	5.95	3.5	硬砂岩
	-5	打製石斧	10.9+	5.1	1.4	緑色片岩
	-6	打製石斧	10.3+	4.45	1.4	硬砂岩
	-7	打製石斧	9.3	5.0	1.8	硬砂岩
	-8	打製石斧	9.9	4.4	1.4	硬砂岩
	-9	打製石斧	10.8	4.1	1.45	緑色片岩
	-10	打製石斧	9.3	4.7	1.2	硬砂岩
	-11	打製石斧	8.5	4.4	1.85	硬砂岩
	-12	打製石槌丁	4.25	7.8	1.0	硬砂岩
83-1	有翼扁状形石斧	8.1	9.1+	1.75	硬砂岩	
	砥石	3.8+	2.2	1.55	-	
	-2	砥石	11.65	5.1	1.4	流紋岩
83-1	磨打器	17.55	7.8	5.0	硬砂岩	
	-4	磨打器	9.3+	5.1	3.0	硬砂岩

高屋遺跡 (TKY)

1. 調査の方法と概要

宮垣外遺跡と同様、道路用地の取得状況に応じて調査をしており、Ⅰ～Ⅲ区に分かれている。基準杭設置は、宮垣外遺跡と同様である。本調査地の区画は挿図3で示したように、LC-85 2-20、28である。

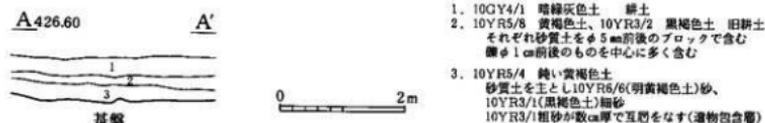
検出された遺構数は以下のとおりである。

竪穴住居址 (SB)	9
掘立柱建物址 (ST)	8
周溝墓 (SM)	5 (SM03～07は欠番)
土坑 (土坑) (SK)	30 (SK15～20・23・34は欠番)
溝址 (SD)	13 (SD01・02・10は欠番)

2. 基本層序

基本層序を挿図6で示した。

地表から基盤層の黄色砂土までの深さは、1～1.5mと隣接する宮垣外遺跡より深い。基本的な堆積土も宮垣外遺跡と共通するが、調査地が傾斜地を含むこともあり、砂粒が粗い傾向にある。



挿図6 TKY基本層序

3. 遺構

(1) 竪穴住居址 (SB)

住居址としてとらえたものは9軒あるが、遺物が少なく、時期決定の根拠に乏しいが、多くは中世のいわゆる方形竪穴といわれるものであるとみられ、住居址というより、建物址という名称の方が適切といえ、後述する掘立柱建物址との関連が考えられる。

① SB01 (第42図)

遺 構 Ⅲ区BW17を中心に検出し、全体を調査した。SM08を切る。2.67×1.52mの不整形方形を呈し、主柱穴、炉址等は確認できず、長軸方向はN65°Wを示す。壁高は25～32cmを測り、壁面はやや

緩やかな傾斜をなす。形態から方形竪穴とみられる。覆土は土層図による。

遺物 覆土から陶器(皿)が出土している。

時期 出土遺物から中世(16世紀)とみられる。

② SB02 (第42図、図版29)

遺構 Ⅲ区BY20を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。2.1×1.9mの方形を呈し、内部に主柱穴は確認できなかったが、外側に軸のずれた4本の柱穴が確認できた。床面中央に炭化物があり、その上に10~15cm浮いた位置に粘土が敷かれていた。さらにそれらを取り除くと北西側と南東側の床面直上に握り拳大の集石がみられた。床面の中央にはたたき状の硬化面が確認できたが、炉址等はなかった。長軸方向N63°Wを示す。壁高は10~34cmを測り、壁面はやや緩やかな傾斜をなす。覆土は土層図による。

遺物 住居址の南隅と北西隅より馬歯の一部が出土しているが、覆土からの出土であり、本址に直接伴うものかは明確ではない。西側のP1より播鉢片が出土している。

時期 出土遺物から中世とみられる。

③ SB03 (第42図)

遺構 Ⅲ区BY16を中心に検出し、全体の3/4程を調査した。SB06、SK33、SD04に切られる。北西側の一部がSD04に切られているため、規模は不明であるが、現状で2.15×3.3mの方形を呈し、主柱穴、炉址等は確認できず、長軸方向はN65°Wを示す。壁高は6~24cmを測り、壁面はやや緩やかな傾斜をなす。覆土は土層図による。

遺物 なし

時期 切り合い関係から中世とみられる。

④ SB04 (第42図)

遺構 Ⅲ区BS17を中心に検出し、全体の1/3程を調査した。SD12を切る。西側の大部分が調査区外となるため、規模は不明であるが、3.03mの方形を呈し、主柱穴、炉址等は確認できず、主軸方向は不明である。壁高は76~79cmを測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺物 なし

時期 不明

⑤ SB05 (第43図)

遺構 Ⅲ区BY13を中心に検出し、全体の2/3程を調査した。SD04に切られる。北西側をSD04に切られるため、規模は不明であるが、現状で短軸方向1.1mの方形を呈し、主柱穴、炉址等は確認できず、長軸方向はN67°Wを示す。壁高は16~29cmを測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺物 なし

時期 不明

⑥ SB06 (第43図)

遺構 Ⅲ区BX17を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。SB03、SB07を切り、SB08に切られる。重複する遺構が多いため、規模は明確でないが、長軸方向2.72mの不整形を呈し、遺構内にくっつかのピットが確認できたが、炉址等は確認できず、長軸方向はN30° Eを示す。壁高は18~35cmを測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺物 なし

時期 切り合い関係から中世とみられる。

⑦ SB07 (第43図)

遺構 Ⅲ区BX17を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。SB06、SB08に切られ、SM08、SD14、SK35を切る。重複する遺構が多いため、規模は明確でないが、長軸方向3.35mの方形を呈し、主柱穴、炉址等は確認できず、長軸方向はN30° Eを示す。壁高は27~49cmを測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は土層図による。

遺物 なし

時期 切り合い関係から中世とみられる。

⑧ SB08 (第43図、図版29)

遺構 Ⅲ区BX17を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。SB06、SB07、SM08、SK35を切る。重複する遺構が多いため、規模は明確でないが、2.03×1.65mの隅丸方形を呈し、主柱穴、炉址等は確認できず、長軸方向はN73° Wを示す。壁高は13~50cmを測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。北側床面に焼土と炭化物が確認され、火を受けたものとみられる。床面より20cm程浮いた位置から集石が確認された。

遺物 覆土から、内耳鍋、天目茶碗、摺鉢、銅銭「永楽通寶」が出土している。

時期 出土遺物から中世(16世紀)とみられる。

⑨ SB09 (第43図)

遺構 Ⅲ区BV16を中心に検出し、北側の一部を調査した。SM08を切る。南側が攪乱を受けているため、規模は不明であるが、現状で短軸方向1.2mの隅丸方形を呈し、主柱穴、炉址等は確認できず、長軸方向はN25° Eを示す。壁高は40~51cmを測り、壁面はやや緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺物 なし

時期 不明

(2) 掘立柱建物址(ST) (第44・45図、図版29・30)

掘立柱建物址に明確に伴う遺物はなく、時期決定の根拠となるものはほとんどないが、周辺の状況等から、ほとんどが中世以降になるとみられる。

遺構 No.	検出位置	重複関係	間数 ()は 確認数	規模 (m) (梁行×桁行)	柱間(m)	柱の深さ (cm)
01	Ⅱ区AN18	SK21を切る	(1)×4	7.7×1.3	梁1.3 桁1.6~1.8	19~67
02	Ⅱ区AM20	-	3×3	6.8×5.5	梁1.6~2.0 桁1.7~2.7	27~50
03	Ⅱ区AJ26	-	4×(4)	3.9×4.0+	梁0.4~1.2 桁0.7~1.4	15~56
04	Ⅲ区BS21	-	2×(2) 庇付か	3.7×2.4+	梁1.7~1.9 桁1.0~1.1	27~42
05	Ⅲ区BX13	-	3×(3)	6.3×5.6+	梁1.8~2.3 桁1.7~1.9	13~67
06	Ⅲ区BR20	SD11を切る	2×3	6.7×4.3	梁1.2~1.9 桁1.9~4.5	23~49
07	Ⅲ区BV19	-	1×(2)	4.2×3.2+	梁4.2 桁1.1~1.8	15~75
08	Ⅲ区BY20	-	2×(1)	3.4×2.0+	梁1.4~2.0 桁2.0	22~47

(3) 周溝墓 (SM)

ここで取り上げる周溝墓は、上部が削平されているため、主体部及び墳丘盛土が確認できず、周溝のみが確認されたものを一括している。周溝墓に伴う遺物もほとんどなく、遺構の切り合いによる前後関係は把握できるものの時期決定の根拠には極めて乏しい。

なお、調査時に墓と認めたものについてSMを符して対応したが、土坑についてはSKに統一したためにSM03~07は欠番になる。

① SM01 (第46図、図版30)

遺構 Ⅱ区AF28を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。SM02、SD03、SK08を切る。南東側周溝が確認できなかったため、規模は不明であるが、現状で南西・北東方向外径8.0m、内径6.9mの方形を呈する。周溝は幅0.37~1.1m、深さ0.11~0.37mで舟底形を呈する。北西側周溝も攪乱等により全体を確認することはできなかったが、中央部付近に土橋部を有する可能性がある。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はN52°Wを示す。周溝覆土は土層図による。

遺物 なし

時期 不明

② SM02 (第46図、図版30)

遺構 II区AD26を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。SM01、SK01、SK03に切られる。北東側周溝が確認できなかったので、規模は明確でないが、北西・南東方向で外径9.1m、内径7.8mの方形を呈する。周溝は幅0.35～0.67m、深さ0.09～0.38mで舟底形を呈する。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はN40°Wを示す。周溝覆土は土層図による。

遺物 なし

時期 不明

③ SM08 (第47図)

遺構 III区BV18を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。SM10を切り、SB01、SB06、SB07、SB08、SB09に切られる。南側周溝の一部をSM09、SM10と共有し、両者との前後関係はSM08が最も古い。規模は南北方向で外径8.6m、内径7.0m、東西方向で外径8.2m、内径6.2mで円形を呈する。周溝は幅0.27～1.35m、深さ0.14～0.48mで逆台形を呈する。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はN20°Wを示す。周溝覆土は土層図による。

遺物 周溝覆土から弥生土器(甕)破片、灰釉陶器(皿)、打製石斧が出土している。

時期 本址に確実に伴う遺物がなく、時期は不明である。

④ SM09 (第48図)

遺構 III区BT19を中心に検出し、周溝の一部を調査した。北西側周溝の一部をSM08、SM10と共有し、両者との前後関係はSM08より新しく、SM10とほぼ同時期となる。周溝の一部を確認しただけなので、正確な規模は不明であるが、北西・南東方向外径5.4m、内径4.1mの円形を呈する。周溝は幅0.2～0.51m、深さ0.12～0.48mで逆台形を呈する。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はN27°Wを示す。周溝覆土は土層図による。

遺物 なし

時期 不明

⑤ SM10 (第48図)

遺構 III区BS17を中心に検出し、全体の2/3を調査した。北東側周溝の一部をSM08、SM09と共有し、両者との前後関係はSM08より新しく、SM09とほぼ同時期となる。南西側周溝が調査区外のため正確な規模は不明であるが、北西・南東方向外径6.25m、内径5.45mの隅丸方形を呈する。周溝は幅0.4～0.7m、深さ0.14～0.2mで逆台形を呈する。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はN42°Wを示す。周溝覆土は土層図による。

遺物 なし

時期 不明

(4) 土坑及び土墳墓 (SK)

調査時に墓と認めたものの一部については、当初SMで番号を符していたが、報告書作成段階では、土坑(土墳)をSKとする基本方針から、SKで番号を付け直している。ただし、SMで遺物を取り上

げている関係上、旧SM番号も付した。遺構の性格について、出土遺物もなく明確ではないものもあるが、墓と考えられるものについては土墳墓の名称を用い、それ以外については土坑を用いた。

① SK01 (第49図、図版31)

遺 構 II区AE23を中心に検出し、全体を調査した。SM02を切る。規模は長軸1.6m、短軸0.8m、深さ0.17mの楕円形を呈する。

遺 物 なし

時 期 不明

② SK02 (第49図、図版31)

遺 構 II区AE25を中心に検出し、全体を調査した。規模は長軸1.6m、短軸0.76m、深さ0.25mの楕円形を呈する。

遺 物 なし

時 期 不明

③ SK03 (第49図、図版31)

遺 構 II区AD24を中心に検出し、全体を調査した。SM02、SK05を切る。規模は長軸1.24m、短軸0.72m、深さ0.2mの楕円形を呈する。

遺 物 なし

時 期 不明

④ SK04 (第49図、図版32)

遺 構 II区AD23を中心に検出し、全体を調査した。SK05、SK06を切る。規模は長軸2.2m、短軸1.44m、深さ0.32mの楕円形を呈する。覆土は土層図による。

遺 物 なし

時 期 不明

⑤ SK05 (第49図)

遺 構 II区AD23を中心に検出し、全体を調査した。SK06、SK07を切り、SK03、SK04に切られる。規模は長軸3.2m、短軸1.28m、深さ0.18mの楕円形を呈する。

遺 物 なし

時 期 不明

⑥ SK06 (第49図)

遺 構 II区AC23を中心に検出し、南側半分が攪乱を受けているが、ほぼ全体を調査した。SK04、SK05に切られる。攪乱により規模は明確でないが、現状で長軸3.44m以上、短軸1.4m、深さ0.2mの不整形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

⑦ SK07 (第49図)

遺構 II区AC24を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。SK05に切られる。規模は長軸2.44m以上、短軸0.88m、深さ0.13mの不整形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

⑧ SK08 (第49図)

遺構 II区AC28を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。SD03を切り、SM01に切られる。北側をSM01に切られているため、規模は現状で長軸0.68m以上、短軸1.0m、深さ0.25mの不整形を呈する。覆土は土層図による。

遺物 なし

時期 不明

⑨ SK09 (第49図、図版32)

遺構 II区AG25を中心に検出し、北側が攪乱を受けているため、南側の1/2を調査した。重複する遺構はない。1/2の調査のため、規模は現状で長軸3.44m、短軸1.68m以上、深さ1.57mの円形を呈する。覆土は土層図による。

遺物 なし

時期 不明

⑩ SK10 (第49図)

遺構 II区AG23を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.48m、短軸0.68m、深さ0.48mの楕円形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

⑪ SK11 (第49図)

遺構 II区AH24を中心に検出し、北側が攪乱を受けており、南側の1/3を調査した。重複する遺構はない。攪乱により規模は明確でないが、長軸1.48m、短軸0.44m以上、深さ0.41mの不整形を呈する。覆土は土層図による。

遺物 なし

時期 不明

⑫ SK12 (第50図)

遺 構 II区AH19を中心に検出し、北西側の一部を除いて、ほぼ全体を調査した。SX01に切られる。規模は長軸1.56m、短軸0.8m以上、深さ0.38mの不整形を呈する。

遺 物 なし

時 期 不明

⑬ SK13 (第50図)

遺 構 II区AH21を中心に検出し、全体を調査した。SD04を切る。規模は長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.34mの円形を呈する。

遺 物 覆土から土師器破片が出土している。

時 期 出土遺物から古墳時代とみられる。

⑭ SK14 (第50図、図版32)

遺 構 II区AH18を中心に検出し、全体を調査した。SD04を切る。規模は長軸0.8m、短軸0.8m、深さ0.37mの円形を呈する。上部に石が配されている。覆土は土層図による。

遺 物 なし

時 期 中世以降か

⑮ SK21 (第50図、図版33)

遺 構 II区AM17を中心に検出し、全体を調査した。ST01、ST02に切られる。規模は長軸2.04m、短軸1.4m、深さ0.35mの不整形を呈する。

遺 物 打製石斧が覆土から出土している。

時 期 不明

⑯ SK22 (第50図)

遺 構 II区AL17を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.2m、短軸0.76m、深さ0.13mの不整形を呈する。

遺 物 なし

時 期 不明

⑰ SK24 (第50図)

遺 構 II区AI25を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸4.72m、短軸4.48m、深さ1.76mの円形を呈する。

遺 物 打製石斧が覆土から出土している。

時 期 不明

⑱ SK25 (第50図)

遺 構 I区AK30を中心に検出し、北側の一部が調査区外になるが、ほぼ全体を調査した。重複

する遺構はない。一部調査区外のため明確でないが、規模は長軸2.2m以上、短軸2.84m、深さ1.4mの楕円形を呈する。覆土は土層図による。

遺物 覆土から須恵器(坏)が出土している。

時期 出土遺物から古墳時代とみられる。

⑭ SK26 (第50図)

遺構 I区AK22を中心に検出し、南側の一部が調査区外になるが、ほぼ全体を調査した。SD16を切る。規模は長軸0.88m以上、短軸0.8m、深さ0.4mの円形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

⑮ SK27 (第50図、図版33)

遺構 III区BP19を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.6m、短軸1.2m、深さ0.29mの楕円形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

⑯ SK28 (第51図、図版33)

遺構 III区BQ20を中心に検出し、北側が攪乱を受けており、南側の一部を調査した。重複する遺構はない。攪乱のため規模は明確でないが、長軸1.24m以上、短軸0.84m、深さ0.2mの不整形を呈する。

遺物 なし

時期 不明

⑰ SK29 (第51図、図版33)

遺構 III区BQ19を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.28m、短軸1.16m、深さ0.08mの方形を呈する。覆土は土層図による。

遺物 覆土から陶器(皿)が出土している。

時期 出土遺物から中世(16世紀)とみられる。

⑱ SK30 (第51図、図版34)

遺構 III区BW17を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.6m、短軸0.48m、深さ0.38mの楕円形を呈する。炭化物が認められることから、火葬墓の可能性がある。

遺物 覆土から陶器(皿)が出土している。

時期 出土遺物から中世(16世紀)とみられる。

⑲ SK31 (第51図、図版34)

遺 構 Ⅲ区B V14を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.96m、短軸0.92m、深さ0.29mの円形を呈する。

遺 物 覆土から陶器（碗）が出土している。

時 期 出土遺物から中世（16世紀）とみられる。

㊸ SK32（第51図、図版34）

遺 構 Ⅲ区B X13を中心に検出し、全体を調査した。SD04を切る。規模は長軸1.08m、短軸0.72m、深さ0.62mの楕円形を呈する。

遺 物 打製石斧が覆土から出土している。

時 期 不明

㊹ SK33（第51図、図版35）

遺 構 Ⅲ区B W14を中心に検出し、全体を調査した。SB03を切り、ST05に切られる。規模は長軸3.32m、短軸1.52m、深さ0.49mの楕円形を呈する。

遺 物 なし

時 期 不明

㊺ SK35（第51図）

遺 構 Ⅲ区B W17を中心に検出し、全体を調査した。SB08に切られる。規模は長軸2.4m、短軸1.28m、深さ0.55mの不整形を呈する。

遺 物 なし

時 期 不明

㊻ SK36（SM03）（第51図、図版35）

遺 構 I区A K24を中心に検出し、SD04と重複しているため、全体の1/2程を確認したのみである。SD04に切られる。規模は長軸1.16m、短軸0.72m以上、深さ1.18mの円形を呈するものと考えられる。形態等から土壌墓の可能性はある。

遺 物 覆土から磁石が出土している。

時 期 中世以降か

㊼ SK37（SM04）（第51図、図版35）

遺 構 II区A P16を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.4m、短軸1.12m、深さ0.33mの楕円形を呈する。形態等から土壌墓の可能性はある。

遺 物 なし

時 期 中世以降か

㊽ SK38（SM05）（第51図）

遺構 I区AM22を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.44m、短軸0.32m、深さ0.37mの楕円形を呈する。

遺物 なし

時期 中世以降か

(5) 溝址(SD)(第52～55図、図版36)

溝址については時期不明のものもあるが、その性格については、ある程度推定できるものもある。特に、SD04とSD06については、「第四章 まとめ」の項でも触れているが、これらは覆土の状況から旧河道の可能性が考えられるが、周辺状況とも合わせてその性格を考えるべきといえる。

SD01・02・10は、調査当初はSDとして認識していたが、調査途中でSMとなることが確認され、SMで番号を付け直した。そのため欠番となっている。

遺構 No	検出位置	重複関係	規模(m) (長×幅×深)	時期	出土遺物	備考
03	Ⅱ区AE27	SK08に切られる SM01に切られる	4.16×0.3～0.65 ×0.18～0.44	不明	—	
04	Ⅱ区AH21	SB03、SB05を切る SK32に切られる	45.6×4.1～10.2 ×0.04～1.48	古墳～ 平安時代	縄文土器・ 土師器・須 恵器・灰釉 陶器・石器 類・金環・ 石製紡錘車	旧河道
05	Ⅱ区AJ16	—	6.72×0.8～0.96 ×0.09～0.18	不明	—	
06	Ⅱ区AO16	ST02に切られる	16.16×—×0.29 ～0.96	平安時代	土師器・須 恵器・灰釉 陶器・石器 類・石製紡 錘車	旧河道
07	Ⅱ区AM21	—	4.8×0.55～0.75 ×0.21～0.59	不明	—	
08	Ⅱ区AM19	—	3.4×0.36～0.4× 0.1～0.19	不明	—	
09	Ⅱ区AM18	—	2.72×0.24～0.3× 0.03～0.16	不明	—	
11	Ⅲ区BR22	ST06に切られる	6.0×1.3～1.54× 0.06～0.21	古墳時代	須恵器・装 飾須恵器片 ・石器類	
12	Ⅲ区BQ17	SB04に切られる	2.28×0.37～0.48 ×0.14～0.19	不明	石器類	
13	Ⅲ区BU10	—	4.8×0.4～0.96× 0.08～0.24	不明	—	旧河道
14	Ⅲ区BY17	SD04に切られる	2.84×0.88～0.98 ×0.03～0.28	不明	—	

遺構 No	検出位置	重複関係	規模(m) (長×幅×深)	時期	出土遺物	備考
15	Ⅲ区BW13	S D04に切られる	2.96+×0.4~0.56 ×0.2~0.25	不明	-	
16	Ⅰ区AN21	S K26を切る	8.3+×0.88×0.05 ~0.21	不明	-	

(6) その他の遺構

① S X01 (第55図)

遺 構 Ⅱ区AF20を中心に検出し、全体を調査した。流路であるSD04から張り出した平坦な遺構である。規模は最大で6.5m、深さ0.48~0.71mの不整形を呈する。SD04に関連する遺構の可能性も考えられたが性格は不明である。

遺 物 西側から土師器(甕)が一括して出土している。

時 期 出土遺物から古墳時代中期(5世紀後半)とみられる。

4. 出土遺物

出土遺物については、以下の項目にそって基本的に遺構番号順に観察表を載せた。

(1) 土器・陶器類

土器・陶器類観察表 (第84~86図、図版53)

遺構 No	図版 No	器 種	器 形	径 寸 (cm)				手 法		胎 土	装 飾			備 考
				口径	胴径	底径	器高	外面/内面	外面		内面			
SD01	84-1	陶器	甕	12.2	-	5.6	2.5	ロクロナデ、回転糸切り成/ロクロナデ	砂粒	灰	灰褐色	灰青色	灰青色	4/5枚
	SD08	84-6	陶器	天目毒罈	10.8	-	5.0	5.5	ロクロナデ、削り出し高台/ロクロナデ	砂粒	緑	鉄褐色	鉄褐色	1/6枚
		7	陶器	天目毒罈	11.4	-	-	-	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	灰	鉄褐色	暗褐色	1/3枚
SD08	8	陶器	内耳罈	25.7	-	15.0	13.1	ロクロナデ(スス)/ロクロナデ(スス)	砂粒	黄	明黄褐色	明褐色	明黄褐色	1/5枚
	8	陶器	燗鉢	31.6	-	-	-	ロクロナデ(スス)/ロクロナデ	砂粒	黄	鉄褐色	鉄褐色	1/4枚	
	10	陶器	燗鉢	-	-	10.0	-	ロクロナデ(スス)/ロクロナデ(スス)	砂粒	黄	鉄褐色	鉄褐色	1/3枚	
	SM08	84-11	弥生土器	甕	-	-	7.6	-	1ガキ/楽懸丸	雲母・小石粒	黄	褐色	褐色	2/3枚
		12	弥生土器	甕	-	-	7.8	-	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	黄	灰白色	灰白色	1/3枚
SK25	84-2	須置窯	坏	-	-	-	-	底面へう切り/ロクロナデ	小石粒	黄	灰褐色	灰白色	1/2枚	
SK29	84-3	陶器	甕	8.3	-	4.8	2.1	ロクロナデ、底面へう切り/ロクロナデ	小石粒	黄	灰褐色	灰白色	4/5枚	
SK30	84-5	陶器	甕	-	-	6.6	-	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	黄	灰褐色	灰白色	2/3枚	
SK31	84-4	陶器	甕	13.4	-	-	-	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	鉄	鉄褐色	灰白色	1/5枚	
SD04	85-1	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	-	雲母・小石粒	黄	暗褐色	暗褐色	1/2枚	
	2	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	-	雲母・小石粒	黄	黄褐色	暗褐色	黄褐色	-
	3	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	-	雲母・小石粒	黄	黄褐色	暗褐色	黄褐色	-
	4	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	-	雲母・小石粒	黄	黄褐色	暗褐色	黄褐色	-
	5	土師器	坏	12.2	-	-	-	へう1ガキ/へう1ガキ	雲母・小石粒	黄	黄褐色	暗褐色	内皿	1/5枚
	6	土師器	坏	-	-	6.2	-	へう1ガキ/へう1ガキ	雲母・小石粒	黄	赤褐色	赤褐色	赤褐色	1/5枚
	7	土師器	高坏	-	-	-	-	ナデ/へう1ガキ	雲母・小石粒	黄	褐色	褐色	褐色	3/4枚
	8	土師器	高坏	-	-	-	-	へう1ガキ/へう1ガキ	雲母・小石粒	黄	褐色	褐色	褐色	3/4枚
	9	土師器	高坏	-	-	-	-	へう1ガキ/へう1ガキ	雲母・小石粒	黄	褐色	褐色	褐色	1/2枚
	10	土師器	高坏	-	-	-	-	へう1ガキ/へう1ガキ	雲母・小石粒	黄	褐色	褐色	内皿	3/4枚
	11	土師器	高坏	-	-	4.8	-	へう1ガキ/ナデ	雲母・小石粒	黄	褐色	褐色	内皿	3/4枚
	12	須置窯	坏(蓋)	-	-	-	-	ロクロナデ/ロクロナデ	小石粒	黄	暗褐色	暗褐色	暗褐色	1/4枚
	13	須置窯	高坏	10.6	-	-	-	ロクロナデ/ロクロナデ	小石粒	黄	灰褐色	灰褐色	灰褐色	1/5枚
	14	須置窯	高坏	-	-	-	-	ロクロナデ/ロクロナデ	小石粒	黄	黄褐色	黄褐色	明褐色	1/4枚
	15	須置窯	坏	-	-	7.6	-	ロクロナデ、底面へう切り/ロクロナデ	小石粒	黄	黄褐色	暗褐色	暗褐色	1/4枚
	16	須置窯	鉢	15.0	-	-	-	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	黄	灰白色	灰白色	灰白色	1/4枚

遺構№	図版№	部 種	形 態	寸 法 (cm)			手 法	胎 土	施 成	色 澤			検 査
				口径	胴径	器高				外面	内面	断面	
SD04	85-17	須恵器	長頸壺	-	15.1	-	ロクロナテ/ロクロナテ	小石粒	黒	灰白色	褐色	灰白色	1/2検
	-18	須恵器	壺	-	7.6	-	ロクロナテ/ロクロナテ	小石粒	黒	褐色	褐色	緑灰色	緑灰色
	-19	須恵器	器台	-	23.8	-	ロクロナテ/ロクロナテ	砂粒	黒	褐色	灰白色	灰白色	1/4検
	-20	灰釉陶器	皿	-	6.8	-	ロクロナテ/ロクロナテ	砂粒	黒	灰白色	灰白色	灰白色	1/5検
	-21	灰釉陶器	皿	-	7.8	-	ロクロナテ/ロクロナテ	砂粒	黒	灰白色	灰白色	灰白色	1/4検
	-22	灰釉陶器	皿	-	9.2	-	ロクロナテ/ロクロナテ	砂粒	黒	灰白色	灰白色	灰白色	1/4検
	-23	陶器	罎	22.4	-	-	ロクロナテ/ロクロナテ	砂粒	黒	褐色輪	灰白色	褐色	1/5検
	84-13	須恵器	埴輪(蓋)	15.9	-	-	ロクロナテ/ロクロナテ	砂粒	黒	褐色	灰白色	灰白色	1/5検
	-14	須恵器	埴	11.7	-	-	ロクロナテ/ロクロナテ	小石粒	黒	褐色	褐色	褐色	1/5検
	-15	須恵器	埴	-	5.8	-	ロクロナテ、回転糸切り織/ロクロナテ	砂粒	黒	灰白色	灰白色	灰白色	1/4検
-16	灰釉陶器	碗	15.7	-	-	ロクロナテ/ロクロナテ	砂粒	黒	灰白色	灰白色	灰白色	1/4検	
-17	灰釉陶器	碗	-	6.4	-	ロクロナテ/ロクロナテ	砂粒	黒	灰白色	灰白色	灰白色	1/5検	
-18	灰釉陶器	碗	-	7.6	-	ロクロナテ/ロクロナテ	砂粒	黒	灰白色	灰白色	灰白色	1/3検	
-19	土師器	埴	-	5.0	-	ロクロナテ、回転糸切り織/ロクロナテ	雲母・小石粒	黒	褐色	褐色	内黒	1/4検	
-20	土師器	埴	-	7.8	-	ロクロナテ/ロクロナテ	雲母・小石粒	黒	褐色	褐色	内黒	1/4検	
84-21	須恵器	埴	-	9.4	-	ロクロナテ、糸切り織/ロクロナテ	小石粒	黒	褐色	褐色	褐色	1/4検	
SX01	86-1	土師器	罎	26.4	-	-	ナテ/ナテ	雲母・小石粒	黒	褐色	褐色	褐色	1/2検
	-2	土師器	罎	-	8.4	-	ナテ/ナテ	雲母・小石粒	黒	褐色	褐色	褐色	1/3検

(2) 金属製品

金属製品観察表 (第87図、図版43)

遺構№	図版№	材質	形 態	法 厚 (cm)
S D04	87-10	金銅	金環	全長2.6 幅2.9 径0.6

遺構№	図版№	材質	鉄 質 名	時代 初周年	寸 法 (cm)		備 考
					径	厚 さ	
S B08	87-11	鋼	永楽通寶	明1408	2.45	0.15	

(3) 石製品

石製品観察表 (第87図、図版54)

遺構№	図版№	形 態	寸 法 (cm)			石 質
			長 寸	幅	厚 さ	
S D04	87-13	石製輪軸車	6.6	6.6	0.9	砂岩
S D06	87-12	石製輪軸車	4.1	4.0	1.2	滑石

(4) 石器

石器観察表 (第88~90図、図版54・55)

遺構№	図版№	形 態	寸 法 (cm)			石 質	
			長 寸	幅	厚 さ		
S K36	88-5	砥石	6.9	6.9	1.7	凝灰岩	
S M08	88-1	打製石斧	11.2	3.9	1.2	緑色片岩	
S K21	88-2	打製石斧	12.3	8.1	3.0	硬砂岩	
S K24	88-3	打製石斧	16.5+	5.4	1.4	硬砂岩	
S K32	88-4	打製石斧	12.3	5.1	1.5	硬砂岩	
S D04	88-6	打製石斧	16.2	7.6	2.96	硬砂岩	
	-7	打製石斧	17.3	7.1	1.7	硬砂岩	
	-8	打製石斧	16.8	6.5	2.96	硬砂岩	
	89-1	打製石斧	13.6	5.35	2.65	硬砂岩	
	-2	打製石斧	12.25	5.6	1.5	硬砂岩	
	-3	打製石斧	10.8+	6.95	1.9	硬砂岩	
	-4	石鏃	8.0	4.85	2.0	硬砂岩	
	90-6	磨製石鏃未製品	5.3	2.5	0.6	硬砂岩	
	S D06	89-5	打製石斧	18.8+	10.2	4.0	硬砂岩
		-6	打製石斧	11.9	4.65	1.25	緑色片岩
-7		粗製石鏃	8.96	3.3	1.1	緑色片岩	
-8		磨製石鏃	5.6	9.0	1.15	硬砂岩	
-9		砥石	17.5	6.7	6.75	凝灰岩	
S D11	90-1	打製石斧	10.2	3.4	1.1	緑色片岩	
S D12	90-2	打製石斧	16.4+	6.5	1.6	硬砂岩	

(5) 馬歯骨

S B02から馬歯の残片が出土している。遺構の時期から中世以降とみられる。

5. 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物としては、土器・陶器類、石器が出土している。

土器・陶器類としては、土師器（高坏）、須恵器では坏・平瓶のほか、底部に「万」の墨書のある坏が出土している。灰釉陶器の出土もあり、遺構としては明確に捉えられなかったが、古墳時代から平安時代に至る遺構の存在が推定される。中世の遺物としては天目茶碗が出土しており、高屋遺跡と同様に中世の遺構が確認されている宮垣外遺跡との関係を示唆させるものといえる。

① 土器・陶器類観察表（第86・87図、図版53）

遺構 No.	図版 No.	器種	器形	法 量 (cm)				手 法	胎 土	装 成	色 調			残存
				口径	胴径	底径	器高				外面/内面	外面	器底	
遺構外	86-3	土師器	高坏	-	-	-	-	1ガキ/ヘラナデ	黄母・小石粒	黄	黄褐色	暗褐色	坏部内面	1/3残
	-4	土師器	高坏	-	-	-	-	ヘラ1ガキ/ヘラナデ	黄母・小石粒	黄	赤褐色	赤褐色	赤褐色	ほぼ残
	-5	土師器	坏	-	-	6.0	-	ロクロナデ、刮削糸切り/ロクロナデ	空母・小石粒	黄	褐色	暗褐色	褐色	1/4残
	-6	須恵器	坏	-	-	5.2	-	刮削糸切り、巻留/ロクロナデ	砂粒	黄	灰白色	灰白色	灰白色	ほぼ残
	-7	須恵器	壺	-	24.2	-	-	平行タキ/ナデ	小石粒	黄	暗灰色	暗灰色	暗灰色	1/4残
	-8	須恵器	壺(坏身)	12.2	-	-	-	ロクロナデ/ロクロナデ	小石粒	黄	暗灰色	暗灰色	暗灰色	1/5残
	-9	須恵器	平瓶	-	13.8	-	-	ロクロナデ/ロクロナデ	小石粒	黄	灰白色	灰白色	灰白色	ほぼ残
	87-1	灰釉陶器	瓶	13.8	-	6.2	2.9	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	黄	灰白色	灰白色	灰白色	1/3残
	-2	灰釉陶器	瓶	13.8	-	5.8	2.9	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	黄	灰白色	灰白色	灰白色	1/5残
-3	陶器	天目茶碗	12.8	-	-	-	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	黄	鉄褐色	暗灰色	鉄褐色	1/5残	
-4	陶器	瓶	11.4	-	-	-	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	黄	灰褐色	灰白色	灰褐色	1/5残	
-5	陶器	瓶	10.4	-	6.0	2.5	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	黄	灰褐色	灰白色	灰褐色	1/5残	
-6	陶器	瓶	-	-	6.4	-	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒(鉄分含)	黄	灰白色釉	灰白色	灰白色釉	1/4残	
-7	陶器	瓶	-	-	4.2	-	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒	黄	暗灰色釉	暗灰色	暗灰色釉	ほぼ残	
-8	陶器	罐鉢	27.2	-	-	-	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒(鉄分含)	黄	鉄褐色	暗灰色	鉄褐色	1/6残	
-9	陶器	大平鉢	-	-	14.3	-	ロクロナデ/ロクロナデ	小石粒	黄	褐色	明褐色	明褐色	1/4残	

② 石器観察表（第90図、図版55）

遺構No.	図版No.	形 態	法 量 (cm)			石 質
			長 さ	幅	厚 さ	
遺構外	90-3	打製石斧	10.6	7.5	1.9	硬砂岩
	-4	打製石斧	6.7	4.1	0.95	緑色片岩
	-5	礫石	5.6	3.3	2.2	滑石

第IV章 まとめ

宮垣外遺跡と高屋遺跡は、異なる遺跡名が付けられているが、その性格を考えた場合、2つの遺跡を一つのものとして捉えることができる。ここでは、当遺跡の主要部分である墓域としての性格および集落のあり方について述べることでまとめたい。

(1) 番神塚古墳について

今回の調査地区内には、前方後円墳である溝口の塚古墳が存在するが、最初の経過のところで触れたように、さらにもう一つ前方後円墳であったとされる番神塚古墳が、高屋遺跡のⅠ・Ⅱ区の北西側隣接地にかつて所在したという。

『下伊那史』第二巻によると、番神塚古墳は雲彩寺（天神塚）古墳の東南約100mの畑の中にあった石室を有する古墳で、もとは北村井の番神山と呼ぶ山林であったが、今は形なく東西24m、南北35m程が小高く残っているばかりで、その中心部に石室の天井石らしいものを台石として「三十番神」と刻んだ石碑が立ててあったという。また、明治34年に地主がこの古墳を発掘し、奥行き5.5m程の石室からたくさんの遺物（須恵器・金銅製杏葉等馬具・直刀・玉類・遺骸の頭部と思われる所に五鈴鏡）が出てきたというが、これらは現在すべて散逸している。周囲は水田で、その間に古墳の跡である所が長楕円形の小高い畑となって残っているという。『下伊那史』の筆者は、この周辺で円筒埴輪の破片を表採しており、前述の状況からも前方後円墳の可能性を指摘している。

今回の調査時点では、番神塚古墳があったとされる所には建物が建っており、古墳の存在を推定させるものはないが、前述の状況から、調査前には番神塚古墳の周溝が調査用地内で確認されることが予想された。調査の結果、調査区の北側でS D04・06の2本の溝を確認した。出土遺物としては須恵器片・土師器片等があるが、埴輪片や転落した葺石などは確認できなかった。また、覆土は粒子の極めて粗い砂が層をなしており、かなり強い流れがあったこともわかった。粗い砂からは表面がかなり摩滅した土器片や石器が出土し、自然か人為的な掘削かはわからないが、ここがかつて流路であったことが判明した。以上のことから、確実に番神塚古墳に関連する遺構は確認できなかったものの、2本の溝については旧河道以外の性格も考慮すべきであり、今後の周辺部の調査でも注意を要する。

(2) 周溝墓の名称について

墓域としての性格を述べる前に、本報告書で使用した「周溝墓」という名称について触れておきたい。

今回の調査で確認された円墳、周溝墓はすべて上部が削平されているため、埋葬施設及び墳丘の状態は不明であり、周溝墓に本来どの程度の盛土がなされていたかを確認することができなかった。古墳としたものは、SM03・04にかつてつくね塚古墳があったとされる場所に位置するSM22の溝で、SM22の盛土の残存状況は、未調査であるが他の周溝墓と変わりはないと推測される。

本遺跡の調査以前にも墳丘が削平され、周溝をもつ墓が確認されている。これまでに飯田市においては古墳時代のもので、墳丘盛土が削平され、周溝のみが確認されたものについて、方形周溝墓・円形周溝墓・墳丘墓・古墳という名称を使用してきた。また、葺石状に石が貼られた方形の周溝墓を方形台状

墓または貼石を持つ方形低墳丘墓と呼称してきた。

こうした墓の盛土の状況について、SM22のようにかつては3～4 m程の墳丘を有していたにもかかわらず、調査時点では盛土は削平され、周溝のみが確認されるものがあることを考えると、他の周溝墓も本来は多少なりとも盛土を有していた可能性を否定できない。また、墳丘と同様に埋葬施設についても、飯田市寺所遺跡のSM04では、良好な状態で埋葬施設が確認できているが、その検出レベルの低さから、報告書では「築造当初の盛り土の状況を判断することはできないが、主体部の検出位置からすれば、際だった高さがあったとは想定しにくい。現状では、周溝の土を盛った程度と考えておく。」としている。同市物見塚古墳では、調査開始時点では2～3 m程の墳丘を有していたが、墳丘上部からは埋葬施設の掘り込みが確認できず、調査により埋葬施設は地山に掘り込まれ、その上から盛土をするという構造であり、そのため埋葬施設の検出レベルは低かった。このような構造の埋葬施設を有する場合、墳丘盛土を削平されても、埋葬施設の一部は残る可能性が高いといえる。こうしたことから、埋葬施設検出レベルのみで盛土の有無を判断することは難しいと思われる。

以上の点から、同時期の墳墓に対し、遺構検出時点での状況からだけで、基準もあいまのまま古墳と周溝墓という異なる名称を用いることには問題があるといえる。しかし、古墳時代中期においては複数の墳墓形態が併存しており、その形態差が被葬者の地位等に関連することも勘案すると、古墳とは異なる墓の存在もまた無視はできない。本報告書では、便宜上周溝規模をめどに古墳・周溝墓を類別したが、類例につき整理・検討を深めることにより、個々の墳墓形態名を冠すべきものといえる。

(3) 墳墓群としての遺跡の性格について

今回調査地区内における宮垣外・高屋両遺跡の主たる性格は、墳墓群であるということである。調査の結果、弥生時代から中世に至る墓が確認された。

〔弥生時代〕

弥生時代の周溝墓として、SM06、SM10があり、SM12が形態的に類似する。(挿図7) いずれも、周溝の一辺の中央部に土橋部を有するタイプであり、古墳時代に属するものとは形態を異にする。周囲では、同時期の方形周溝墓群は確認されていないため、墓域の範囲を知ることはできないが、SM12の東側半分が調査区外になるという状況から、墓域も東側に広がる可能性が考えられる。ただし、地形としては今回の調査地点から東へはだんだんと低くなっており、今回確認できた範囲を中心として大きくは広がらないであろう。

〔古墳時代〕

本遺跡の中心をなす古墳時代においては、前方後円墳・円墳・方形周溝墓・円形周溝墓・土墳墓が確認された。(挿図7)

周溝墓はいずれも上部が削平されており、埋葬施設が確認できたものはSM15のみである。周溝墓の時期も周溝内からの出土遺物によっているため、築造時期決定要素としては不十分な面があるが、その出土状況から、築造の時期とは大きく隔たらないものとみられる。出土遺物を根拠に時期の把握できる墳墓は以下のとおりである。

①SM03 (SK64)

規模は外径30.4 mの円墳と判断される。周溝内から、土師器(壺・甕・高坏)、直刀・鉄鍔等が出土

している。周溝内における祭祀行為にかかわるものとみられる。また、南側の墳丘裾部から周溝にかけて掘り込まれた古墳築造時期と一致するSK64からは、馬歯骨と馬具一式が出土している。

②SM04

規模は外径で26.5×26.4mの円墳と判断される。周溝内から土師器（壺・甕）、石製品（剣）等が出土している。周溝内における祭祀行為にかかわるものとみられる。

③SM07

規模は外径で15.5×16.6mの円形周溝墓。土師器（壺・甕・坏・高坏）、須恵器（甕・甕）、玉類、石製模造品（有孔円板）、鉄器（工具類）が出土している。周溝内における2次埋葬もしくは祭祀行為にかかわるものとみられる。

④SM15

規模は外径で18.7mの円形周溝墓。土師器（甕・坏・高坏）、須恵器（甕）、馬歯が出土している。周溝内における祭祀行為にかかわるものか、もしくは本来墳丘にあったものが転落したとみられる。

⑤SM18

規模は13.4×14.1mの方形周溝墓。周溝内から土師器（壺・甕・坏・高坏）、須恵器が出土している。周溝内における祭祀行為にかかわるものか、もしくは本来墳丘にあったものが転落したとみられる。

⑥SM19

規模は外径で16.7mの方形周溝墓。周溝内から須恵器（甕）等が出土している。周溝内における祭祀行為にかかわるものか、もしくは本来墳丘にあったものが転落したとみられる。

⑦SM21

規模は不明、円形を呈するものとみられる。周溝内から土師器（高坏）等が出土している。周溝内における祭祀行為か、もしくは本来墳丘にあったものが転落したとみられる。

⑧SM22（つくね塚古墳）

規模は不明、円形を呈する。周溝内から土師器（壺・坏）、底部穿孔壺形土器等が出土している。周溝内における祭祀行為にかかわるものか、もしくは本来墳丘にあったものが転落したとみられる。

⑨SK18

規模は3.16×1.24m、不整楕円形を呈する土墳墓である。靱金具と鉄鏃が出土している。

⑩SK21

規模は2.64×0.8m、楕円形を呈する土墳墓である。鉄鏃が出土している。

⑪SK24

規模は3.12×1.4m、方形を呈する土墳墓である。土師器（高坏・坏）が出土している。

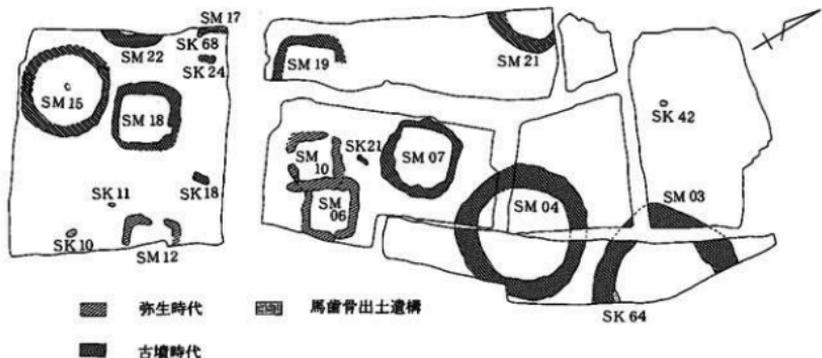
また、本書では扱わないが、墳丘長約50mの前方後円墳である溝口の塚古墳が上記墳墓群の北辺に位置している。

以上、11の遺構は出土遺物から、5世紀中葉から後半にかけて築造されたものであり、大きく3段階に分けることができる。

1段階－SM22

2段階－SM03（SK64）、SM07、SM19、SM21、SK18、SK21、SK24、溝口の塚古墳

3段階－SM04、SM18、SM15



挿図7 弥生～古墳時代遺構分布図及び馬歯骨出土位置図

今回の調査が幅約50mのトレンチ調査であり、遺跡全体の実態を把握できておらず、また詳細な分析を経てはいないが、墳墓群は前方後円墳・円墳・円形周溝墓・方形周溝墓・土墳墓とて構成される。

これを見ていくと、同時期に前方後円墳・円墳・円形周溝墓・方形周溝墓・土墳墓という複数の墳墓形態が併存（混在）するという状況が捉えられる。これまで、4世紀後半から5世紀前半の方形周溝墓群である飯田市八幡原遺跡のあり方から、弥生時代の墓制を継承する方形周溝墓の建造が古墳時代にも引き続き行われ、その後八幡原遺跡の場合は茶柄山古墳群へと推移するものと想定された。墳墓形態としては、八幡原遺跡では方形周溝墓から方墳への移行、そして茶柄山古墳群に至って前方後円墳・円墳へと変化する、基本的には方から円へと変化するものと考えられた。しかし、宮垣外遺跡の様相をみると、方から円への一方的な変遷だけで捉えきれられるのではなく、同様の状況は、市内田圃遺跡でも確認されている。これまでに確認された周溝墓あるいは墳丘墓が、5世紀中頃から6世紀初頭にかけてのものが多いことから、古墳時代中期の墳墓形態の多様性を考えないわけにはいかない。

墳墓形態の差は、被葬者の集団内での位置付けの差によることは、様々な観点で認められてきており、当然その頂点は前方後円墳に葬られた人物ということになる。以下に円墳、次に円形及び方形周溝墓、そして土墳墓の順に埋葬者の階級差があったものと理解される。しかし、前述したとおり円墳と円形周溝墓との見極めをどうするのか、円形と方形の周溝墓の被葬者間に差があるのか、今後の検討課題である。また、形態差による被葬者の差については、階級差が基本的事項と考えられるが、同種形態墳墓にあっても、副葬品（周溝内遺物も含む）内容に変化があり、集団内での役割差などにも思慮すべきといえる。

さらに、土墳墓については遺物の出土したもののみを墓として扱ったが、遺物の出土がない土坑の中に本来は墓であるものが含まれている可能性も十分に考えられることから、今後調査時点での詳細な分析が必要であるといえる。副葬品の有無も被葬者の性格を考える上で問題となろう。

いずれにしても、宮垣外遺跡は近隣に集落を構えた集団による最上位から下位までの集団構成員の奥津城とされ、集団にとってこの地は特別のエリアとして位置付けられていたことが明らかである。

集団の墓域としての姿は、土墳墓のいくつかは重複する可能性があるものの、古墳時代に属する主な

墳墓のいずれも重なり合うことがないことから、それぞれの築造にあたっては、既存する墓の存在を認知した上で、築墓位置に一定の約束事があったことも窺える。

また、溝口の塚古墳との関係について、多くは別刊の報告書によるが、古墳の埋葬施設から出土した副葬品から考えられる時期から、宮垣外遺跡の墳墓群が形成された時期に築造されたことは明らかである。その位置関係から、多様性が明らかな墳墓形態の中でも、前方後円墳の存在は特別視されていたものといえる。

最後に、所属時期の不明な周溝墓のうち、弥生時代の可能性のあるものを除いたSM11・SM16・SM20についても、他墳墓と重複関係がなく、5世紀代の墓域を構成するものである可能性が高いことを指摘しておく。

〔奈良・平安時代以降〕

奈良・平安時代の土墳墓としてはSK19・SK82がある。中世以降については、宮垣外遺跡では銭貨が出土したSK76・81やSK77・78・80・82、高屋遺跡ではSK30・36・37・38が土墳墓とみられる。

古墳中期以降中世まで、この一帯が連続して墓域としての性格を持ち続けたことが明らかとなったわけではあるが、集落との関連でみると中世末期には、この辺一帯に大きな開発が入り、居住域へと土地利用の姿を変じている。

いずれにせよ、居住域との関連の中で、それぞれの時代の全体像の理解が進むであろう。

(4) 周溝内出土遺物について

周溝を有する墳墓の周溝内からは土師器、須恵器、鉄器類等が出土している。これらの出土状況については、「3. 遺構」の項で述べているが、特徴的ないくつかの状況について、以下のように類別が可能と考えられる。

- ①一定の範囲に複数の遺物が集中して出土し、それらは原位置もしくはほとんど移動のない状態と判断されるもの。(SM03・07・21)
- ②単独もしくは2点程度の土器が、原位置もしくはほとんど移動のない状態と判断されるもの。(SM03・04・07)
- ③周溝内の隙間に単独もしくは散在し、原位置の可能性もあるがある程度の移動も考えられるもの。(SM15・18・19・22)
- ④周溝覆土中に単体あるいは散在するもの。(SM04・07・17・19・20)

以上の4つ程度の状況が捉えられるが、それぞれの墳墓によりその状況は異なり、上記のうち2つ以上のパターンにあてはまる場合もある。また、同一の墳墓にあっても、同じパターンが場所を変えて複数確認されるものもある。

上記4つのパターンについて検出時の状況に至る姿を考えると、またいくつかに分けて考えられる。

①～④のすべてが該当する可能性として、周溝内もしくは墳墓外側での祭祀行為が行われたことによるもの。この場合は周溝内の検出位置により、墳墓築造時期から周溝がある程度埋没するまでの間のいくつかの段階で行為があったことを考えなければならない。

①・②に関しては、周溝内で2次的な埋葬が行われたと考えられるもの。

③は、本来墳丘肩部付近に置かれていた土器類が、墓石(貼り石)の周溝内への転落とともに落ち

込んだもの。

④は、人為的な行為ではなく、周辺に存在したものが転入したと考えられるもの。

以上の状況が整理されるが、それぞれの位置付けについては、今後他の例も併せて詳細に検討した上で、具体的にしていかなければならないといえる。

なお、武器・工具などの鉄製品や玉類を伴出する例などは、土器類のみを出土する場合とは異なる性格を有する可能性もあり、SM03の武器類の集中的出土とSM07の溝溝底部からの遺物出土状況や工具類・玉類を含む遺物内容から、周溝内への2次的な埋葬の可能性が高いことも考えられる。

最後に、各遺構から出土した遺物個々については特に触れないが、SM22から出土した底部穿孔壺形土器の存在が目されるので、ここで若干の整理を行いたい。

本資料に類する土器は当地方での出土は皆無といえる。あえて、類型を地域内で求めるとすれば、市内座光寺地区高岡4号古墳出土の小形壺形埴輪がその系列上で考えられるかもしれないが、調整・器形等の隔たりは大きい。一方、伊那谷以外でみると、かなり共通する例として、北信地域にいくつかの類例が求められる。長野市見山砦遺跡・大星山古墳・坂城町東平1・2号墳などであり、これらは関東地方との関連も含め、最近注目を集めている資料群である。これらの例は、いずれも形態的には壺に近いが、底部の成形方法は埴輪と同様に、最初にドーナツ状に粘土紐を設置し、その上に粘土を積み上げていくというもので、その成形方法から「底部開口壺」とも呼称される一群である。今回出土したSM22の壺形土器は、底部成形方法が若干異なるものの底部をあらかじめ開けることを意図して作られているとみられることから、前述の例と類似するものといえる。

なお、壺形の他に鉢としたものがある。下部を欠損するため全体形は不明であるが、坂城町東平2号墳出土の円筒埴輪が形態的に類似する可能性もある。

SM22出土の壺形土器と鉢の存在は、本遺跡内の他墳墓からの出土資料より時期的に先行する可能性が高く、本遺跡群の初期の墳墓と位置付けられる。

また、これらの資料を当地方の埴輪出現期の姿と捉えると、松尾・座光寺地区のいくつかの古墳から出土し、伊那谷的な埴輪と呼ばれる土師器製作技術を踏襲した5世紀代の埴輪の原形となっていることも考えられるが、本例のみで特定はできず、今後解明すべき課題といえる。

(5) 古墳時代の馬骨葬について

今回の調査で馬骨が確認されたのは、宮垣外遺跡では、SM03(SK64)・SM15・SK10・SK11・SK42・SK68、高屋遺跡では、SB02がある。このうち、出土遺物などから古墳時代と特定できるものは、SM03(SK64)、SM15、SK10であり、埋土状態や他の遺構分布状況からSK11・SK68も同時期の可能性が高い。SB02は中世以降、SK42は中世と考えられる土坑の集中する一面にあり、その形態も他と同様に小規模・不整形であり、中世に属する可能性が高い。(挿図7)

馬の全身骨格なし、出土状況から全身骨格が埋められたと判断されるものは、SK10とSK64の2例である。SM15は周溝内からの出土であり、頭部のみか全身かの判断は難しい。SK11とSK68についても頭部のみか全身であるか明確にはわからない。その中で、SK10は共伴遺物こそないが、古墳時代の馬骨の好例として注目されるものであり、今後当地域の出土例や他地域の例との比較を行っていきたい。

共伴遺物のあるものはSK64であり、馬具一式が出土している。これまでも、当地域において馬に伴う馬具の出土例はあるが、轡・鞍・鏡・雲珠・杏葉のすべてを出土したのは今回が初めてである。馬具は馬体からはずされ、副葬されたとみられるが、馬具の一括資料として、また装着状態を復元できるという点において、今後の馬具研究に対して極めて重要な資料の提供となった。これまでに飯田市内で発見された古墳時代の馬に関して、馬具を伴うものは新井原遺跡4号土壙・茶柄山古墳群馬の墓10、物見塚古墳例があるが、これらは馬に装着されていたものとみられる。新井原遺跡4号土壙・茶柄山古墳群馬の墓10は単独の土壙で、近接する新井原12号古墳・茶柄山2号古墳との関連が考えられる。一方、本例は土層状況などからSM03の築造と同時に埋葬されたことが明らかで、古墳への随葬馬であることを直接明らかにすることができた好例である。

今回の調査例も含め、飯田市内で現在までに発見された古墳時代の馬骨は、すべて人を葬った墓域内からのものである。個々の状況に若干の相違点はあるが、その多くが関連する墳墓を特定することができ、随葬馬としての位置付けが可能である。しかし、各遺跡における馬の出土状況には相違点もあり、墓域全体としての構成要素の1つとして捉えるべきともいえる。

馬(馬の墓)の性格をどうとらえるかについては、今次調査資料も含め飯田市内の出土例のすべてについての考究が必要であり、県外を含む他地域例とも比較検討する中で、論じられるべきものといえる。

(6) 集落について

調査範囲内からは、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の墳墓が確認されたが、該期の住居址等は確認できず、おそらく集落は、今次調査箇所より東側の宮垣外遺跡内及び、より東側の水田可耕地をひかえた別府面あるいは南条面にある矢崎遺跡・兼田遺跡か、今次調査箇所より北側の高屋遺跡・高屋下遺跡に求められるものとみられる。

今回の調査で集落が確認できたのは中世のもので、方形竪穴と掘立柱建物址がある。16世紀を中心におおむね3時期に分かれるようである。方形竪穴の性格については明確でないが、該期の集落の一端を知ることができた。溝口の塚古墳が大規模に削平されたのは中世のことであり、この時期にこの地域に大きな開発が入ったことを示しているものと考えられる。また、この地が「別府」という地名である事とも関わりがあると考えられる。

最後に、全体としてみると、今回の発掘調査結果により宮垣外遺跡・高屋遺跡で確認されたものは、ある意味では、これまでの飯田市内で集積されてきた発掘調査の成果に大きな変更をもたらすものではないといえる。しかし、これまで考えられてきた状況に再考を促すべき面を多く持っている。一つには上郷地区における古墳時代の様相についてである。これまでは飯沼天神塚古墳を中心に6世紀代の横穴式石室導入以降に小規模古墳群が形成されていくという程度の捉えで、深く考究されることはなかった。しかし、飯沼天神塚古墳が伊那谷でも最大級の前方後円墳であり、群馬県などとの関連も考えられる特異な形態の初期横穴式石室を有するにもかかわらず、その築造に至る経緯は十分に整理されておらず、それに先行する5世紀代については、北側の座光寺地区と南の松尾地区との関連が取り上げられる程度であった。今回の調査結果により、座光寺とも松尾とも切り離した形で、上郷地区内の一画にあって5世紀代に墳墓群を形成した集団が存在し、その世紀内で前方後円墳を築造するまでに至った姿を捉える

ことができ、さらにその集団が継続して、当地方最大級の前方後円墳築造を可能にする地位を保ち続けたことをより明確にしたといえる。

しかも、5世紀代に全国屈指の馬生産地として認識されている当地方の中心部にあって、馬そのものが複数頭発見されていることは、墳墓群の背景にある集団が馬生産と深くかかわり、伊那谷の古墳時代の中枢として、大和王権との関係にあっても一翼を担っていた重要な地区としての姿が具体的に示されたといえる。

参考文献

- 市村成人 1955 『下伊那史』第二巻
飯田市教育委員会 1992 『八幡原遺跡 物見塚古墳』
飯田市教育委員会 1992 『八幡原遺跡』
飯田市教育委員会『寺所遺跡』
飯田市教育委員会『田圃遺跡』
長野県埋蔵文化財センター 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21-上田市内・坂城町内-』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書41
平成12年度長野県考古学会秋季大会 2000『発掘された科野の首長墓』資料
岩井市史編さん委員会 1996 『岩井市の遺跡Ⅱ』岩井市史遺跡調査報告書 第2集

附編 1. SK10出土馬骨について 群馬県立大間々高校教諭 宮崎重雄

体高：約127cm 中型在来馬の木曾馬のうちでも小型の方に相当する大きさである。

また、群馬県子持村白井遺跡群出土の馬跡から推定された6世紀半ばの馬の体高が平均130.0cmであるのと比べても、3cmほど下回る。古墳時代としてはやや小型の個体といえよう。

性別：牡 犬歯の存在が確認されることから、牡馬であることがわかる。

年齢：11歳前後と推定され、壮令馬である。

中手骨の長幅指数：比較的保存の良い中手骨で長幅指数（中央幅/骨長）を求めてみると13.5で、細めの肢をしていたことを示している。現生木曾馬のもっとも指数の小さい個体に近い。

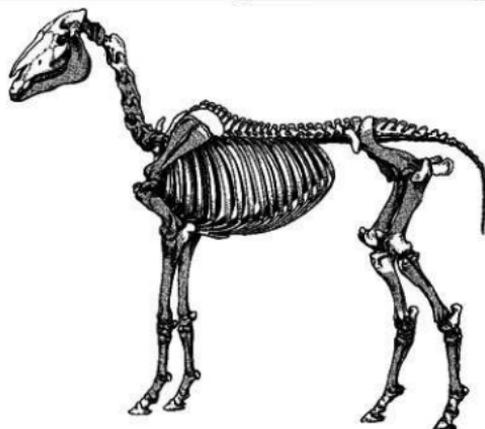
埋葬姿勢：左を下にした横臥姿勢で、土坑に埋葬された馬としてはごく一般的な姿勢である。

他の所見：第2前臼歯の近心側には上顎歯・下顎歯とも、ハミによる摩耗痕は観察されずハミを常時つけていたということはなかったようである。

現存状態で見る限り、切り痕など人工的な加工痕、動物などによる咬み痕などは観察されない。

長野県飯田市宮垣外遺跡出土馬骨計測値（単位：mm）

頭骨基底の長さ	445.0	肩関節窩の縦径	45.0
Diastemaの長さ	93.7	上腕骨生理的な長さ	256.0
上顎後臼歯・前臼歯の長さ	160.4	上腕骨体最小幅	36.8
後臼歯・切歯の長さ	304.0	橈骨全長	320.0
口の幅	—	橈骨骨体中央最小幅	31.0
下顎骨の長さ	415.2	中手骨最大長	207.0
下顎後臼歯・前臼歯の長さ	170.0	中手骨骨体最小幅	28.0
第2前臼歯での下顎高	45.0	前肢基節骨最大長	74.6
第4前臼歯・第1後臼歯間での下顎高	61.6	大腿骨最大長	264.0
第3後臼歯での下顎高	118.0	大腿骨頭縦径	50.0
肩甲骨の長さ	254.0+	脛骨最大長	206.0+
肩甲骨頭部の幅	57.0+	距骨滑車最大長	48.5
肩関節部の頭尾方向の径	79.0	中足骨最大長	252.0
肩関節窩の横径	37.4		



挿図 8 SK10出土馬骨遺存部位（加藤嘉太郎・山内昭二 1995「改著 家畜比較解剖図説 上巻」を一部改変）

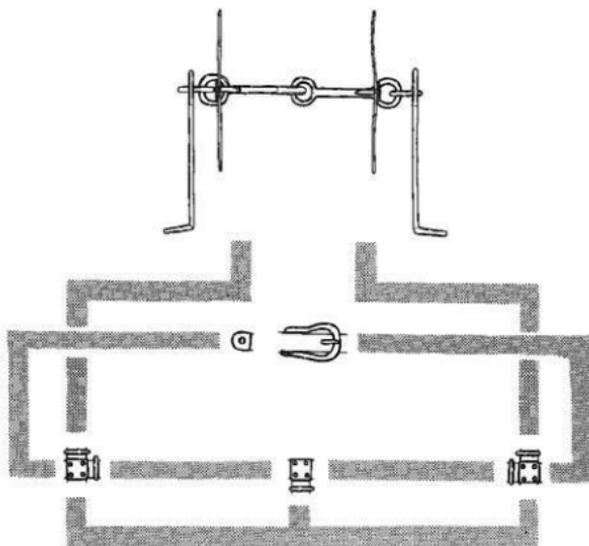
伊那谷は馬具・馬骨とも出土事例が豊富であるが、馬骨に馬具が装着された状態で出土したものは約半数である。今回のように古式鉄製馬具が、確実な組み合わせとしてフルセット出土することは全国的にも珍しく、非常に重要な資料であることは疑いえない。また通常、古式馬具は古墳主体部内より一括して出土するため復元が困難だが、本例は装着されて埋納したかどうかについて判断はできないものの、装着状態の復元が可能である。ここでは、馬具の復元および、年代を含めた位置づけについて考察を加える。

(1) 馬装復元 (挿図9・10)

馬墳はまったく攪乱を受けておらず、馬具はおおむね原形を留めた位置から出土した。欠損も少ないため、繋の復元を行うことができた。

① 轡へ面繋

轡の引手の延長線上、南西に辻金具が3点、三角形を形成する位置で出土していることから、単条系辻金具3点装着(宮代1997)と思われる。鍔金具は、左右辻金具に付属するものは各2点、中央は1点のみである。中央額に付属するものは辻金具の後方に位置し、左右辻金具に付属するものは、1点は耳の後ろから中央辻金具へ回る繋を安定させるもの、1点は顎下へ回す繋を安定させるものと推定した。さらに西側より1銚半円形留金具と小型鉸具が出土しているが、これは顎下で留めたものと考えられる。留金具と鉸具は、それぞれベルトの両端に取り付けられていたと推定される。留金具は鉸具の輪金を通るサイズではあるが、おそらく刺金を通した後に留金具で固定したのであろう。留金具と鉸具が離れて出土している点からも、轡は馬から外されて埋納されたことがわかる。



挿図9 面繋復元図

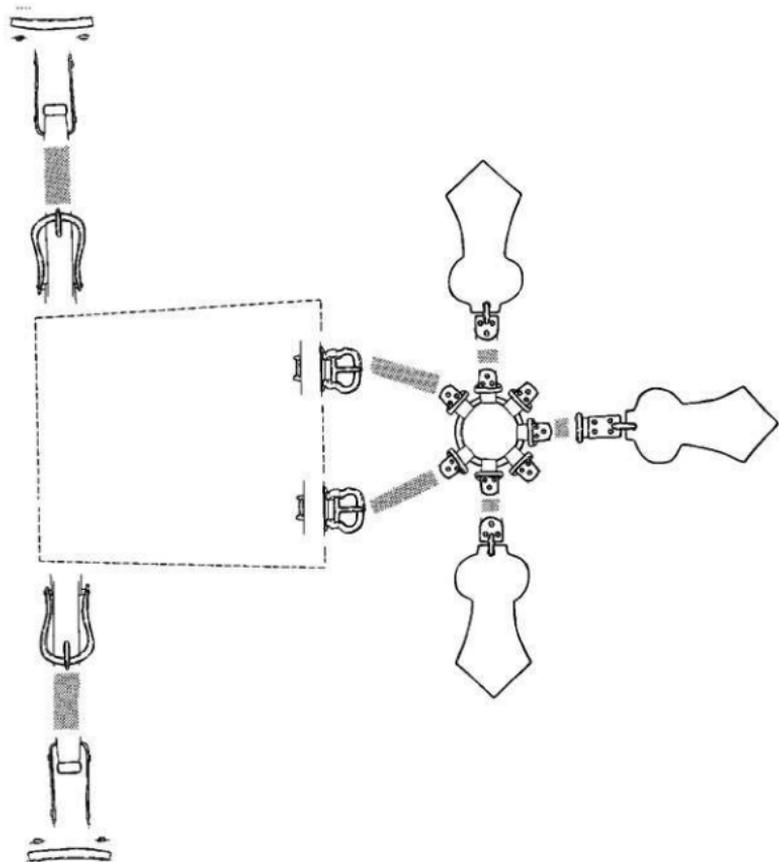


插图10 鍍·尻繁復元図

② 鐙

鐙は、北側のものが本来の形状をよく残しているものと考えられる。鉸具は刺金先端を下に向けて出土したことから、鞍から下げたベルトに装着したものであろう。柄と輪に残存する木目方向が直交することにより、木製鐙本体は、棒をたわめて柄と踏み込み部分を作り出す、通有の製作方法を採用した可能性が高い。また、北側の鐙は柄が小さいため、さらに釘を柄の付け根に打ち込んで補強している。本来の設計にあったと考えるよりは、状況に応じた処置の結果と考えたい。北側鐙の配列から、金具と木芯に大きなサイズの違いはないと思われる。したがって、柄の長さ7.0cm、柄の厚み1.5cm、輪上部の厚み2.5cmと推定され、おそらく踏み込み部はさらに厚みを増し、側面台形に近い形状をしたものと考えられる。

③ 鞍

海や磯を覆う金具はなく、後輪のみ鉄製金具を使用する木装鞍である。脚が外反しており、装着したときに輪金が若干尻繫側を向くように作られている。漆膜の痕跡から、前輪と後輪の間隔はおよそ50cm、鞍の脚の長さから、後輪鞍橋の厚みは1.5cm程度と推定される。後輪幅は、北側鞍金具の位置が不明だが、おそらく40cm程度であろう。

④ 尻繫～雲珠・杏葉

胸繫に関連する金具は出土していない。

尻繫を雲珠に留める方法は半球形雲珠とは異なり、一度貴金具を通して雲珠に巻き付け、さらに貴金具に戻したのち留金具で固定したものと思われる。杏葉と雲珠の間に辻金具はない。貴金具は、留金具に対応しないものが1点存在する。最後部に位置する4鋸方形板吊金具付剣菱形杏葉に付属するものと推測した。出土位置は鞍金具より50cmほど離れており、馬の腰よりかなり後方に付けられたものと思われる。雲珠と杏葉に辻金具を介さないことは、この構造によるものと考えられる。

(2) 検討

復元した馬具を元に、年代的な位置づけを行う。通常、古墳時代の馬具は古墳より出土するが、本例は馬葬に伴うものである点が決定的に異なる。したがって、伝世といった時間差を考慮する必要がない反面、他の資料との年代差をある程度考慮に入れる必要があるかもしれない。

① 槽

本例は、鏡板に大きな特徴を認められる。銜通しが∞形をしており、銜留めが非常に大きく幅1.0cmに達する。∞形銜通し孔の例は確認していないが、銜留めの大きいものとして京都府宇治二子山南墳出土槽がある。宇治二子山出土槽は鏡板長14.5cm、引手壺は兵庫鎮を介した別作りである。それに対し本例は、鏡板長13.0cmと短いことから、宇治二子山例に比べて古い様相を示している。

鉄製f字鏡板付槽は、銜と引手の連結が鏡板の外で行われ、引手壺は兵庫鎮を用いず、f字の屈曲の小さいものが古相を示すとされる(坂本1985)。鏡板の屈曲の小さいものは、f字端部の返りがほとんど見られない福岡県塚本1号墳例、銜通し孔から左右の長さが大きく異なる宮崎県小木原3号地下式横穴墓例など微妙な点でバランスを欠くことがある。そうした中で本例は、飯田市新井原遺跡4号土壇(挿図11-1)、韓国福泉洞23号墳など初現期のf字鏡板に近い形状をしており、鉄製f字鏡板の中でも最も古相に位置づけることが出来る資料と言える。しかし、本例の引手壺は香川県川上古墳例と同じ一

体型であり、新井原・福泉洞例が別作り式である点が異なる。また、伊那谷からは塚原古墳群より2点の鉄製f字鏡板付轡が出土している（挿図11-3・4）。鏡板形状や引手臺の構造などから、本例を含めた4点の伊那谷出土f字鏡板付轡は、いずれも時期が近接し、かつ当該型式轡の初現期の製品であると考えられる。

鉄製f字鏡板付轡は横切板飯留短甲を共伴することも多く、湾曲の強いものも少ないため、5世紀中葉から後半に限定される遺物と見られる。宇治二子山・小木原3号例がTK47型式期に当てられ、香川県川上古墳からはTK208型式期の須恵器を共伴している。そうした点から、本例は遅くともTK208型式期を下ることはないものと考えられる。

② 雲珠・杏葉

f字鏡板付轡は剣菱形杏葉とセットになることが多く、本例も例外ではない。しかし、f字鏡板付轡は鉄地金銅張が一般的で、鉄製のものは単独で出土することが多い。京都府宇治二子山南墳より鉄製f字鏡板付轡と剣菱形杏葉のセットが出土しているのがほとんど唯一の類例である。宇治二子山例は剣先が鋭く突出して付け根が細く、かつ円形部分が全長の1/2を占めるほど大きい。剣菱形杏葉は、古相に位置するものは小型で剣先部分の突出が弱く鈍角である。本例は全長12.0cmの小型品で、剣先の突出が弱く、立間孔は円形である。また吊金具は2点が3鈔半円形板を使用しており、こうした特徴はすべて、飯田市新井原遺跡4号土墳出土例に類似する（挿図11-2）。しかし新井原4号土墳、宇治二子山例ともに杏葉は1点のみである点が異なる。また本例は、3点中最後尾に位置する1点が4鈔方形板吊金具を使用している。

剣菱の突出から、本例は新井原4号土墳、岡山県築山古墳出土例などとほぼ同時期のものと思われ、おそらくTK208型式期を下ることはないと思われる。したがって、f字鏡板付轡とのセット関係を考慮しても、両者の年代は一致する。

③ 鞍

鞍金具は後輪の鞍のみで、いわゆる木装鞍である。鞍金具は、輪脚一体型、脚先端に横棒を当てたもので、この型式はTK73~47型式期の初期馬具を特徴づけるものとされている。同様の構造を持つ京都府宇治二子山南墳は脚の長さが輪金の1/3ほどで、鞍具の輪金が円頭形、座金は栗形である。本例は、宇治二子山例とは異なる形態を持つ。もっとも特徴的な点は、輪金に瘤が作り出され、そこにT字形刺金が差し込まれていることである。こうした例は他に確認していないが、後出する各型式の鞍金具にも見られず、試作の域を出なかったものと考えられる。また脚が若干長く輪金の半分ほどの長さを持ち、外反して鞍具が少し雲珠側へ向くように作られている。こうした例も他になく、やはり瘤と同様に試作されただけで終わったものであろう。

TK23型式期に入ると、脚一体型鞍金具も佐賀県関行丸古墳に見られるように形状が多様化することから、本例の試作的形態も同時期の所産として見るができる。しかし馬骨に伴うものであることから、他の古墳出土遺物の年代より若干早まるかもしれない。したがって、TK208~TK23型式期に当てることが妥当と思われる。

④ 鐙

鐙は鞍具、柄と輪を別作りにしたものである。木芯鉄張輪鐙は、本体と踏み込みを一体化させて作ることが一般であり、全面的いし側面のみを鉄張にする。しかし、本例のように柄と輪の側面のみを金具

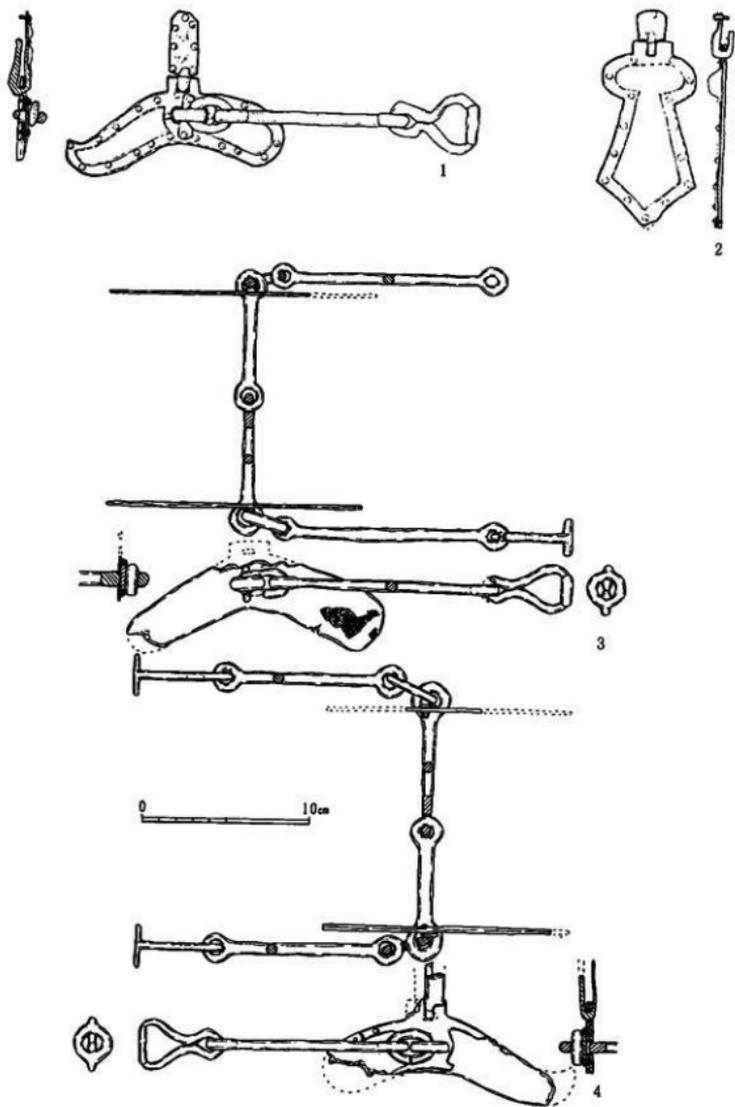
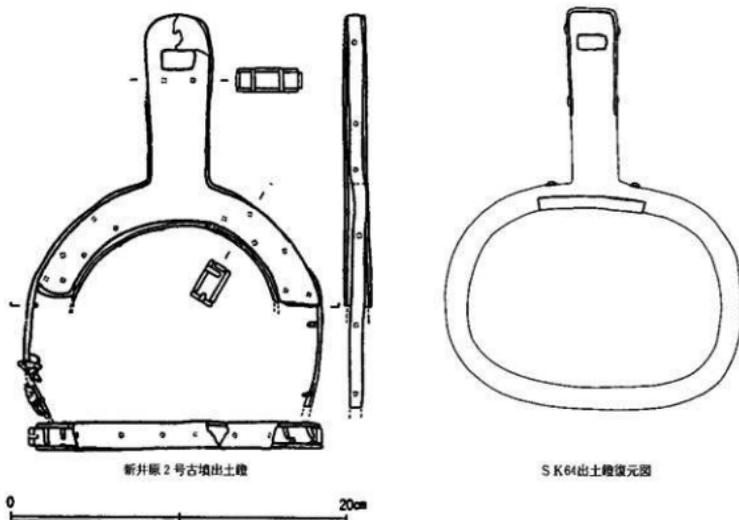


插图11 伊那谷出土f字鍍板付轡



挿図12 伊那谷出土籠

で作成するものは少ない。類例は、京都府宇治二子山南墳より出土している2点のうち1点があげられる。ほかに韓国良洞里78号墳、同107号墳などに認められ、韓国の編年で5世紀前葉に比定されている。初期段階の柄頂部が丸く、柄と輪の厚みが同じ籠は、新井原2号古墳より出土している。本例は柄頂部が方形をしており、柄と輪の側面厚みが異なる。したがって、TK73～TK216型式期に当てられる新井原2号古墳出土籠(挿図12)よりも一段階遅れ、TK208型式期と考えられる。5世紀前葉の朝鮮半島における金具型式が、5世紀中葉から後半にかけた段階の木芯型式に合わせて変化したものとも思える。

⑤面繫金具

4 鋌方形板辻金具3点と、小型鉸具・半円形留金具の組み合わせである。方形板辻金具は、出土位置から顔面左右と頤の3点に装着された3点留めであることは確実で、TK208型式期よりTK209型式期まで存続して確認されており、もっとも一般的な面繫装着方法であったと考えられている。

面繫に伴う小型鉸具は2点セットで出土することが多く、馬の頸下を留めるもの、左右頬革の中間点、項革中央部3点交差などが使用方法として考えられている(宮代1997)。本例は面繫辻金具より左右へ外れた地点から、半円形留金具と対になる形で1点のみ出土しており、頬革左右および項革3点交差は考えにくい。一方、面繫金具に伴う留金具は通常、鉸具のすぐ近くから出土し、鉸具の後ろに取り付けられたものと推定される。以上から、鉸具と留金具は馬の頸下に取り付けられ、埋納に際して外されたものと推定した。留金具と鉸具がそれぞれベルトの両端に留められた例として、宮崎県馬頭13号横穴出土面繫金具があげられる。しかし馬頭13号例は刺金がなく、刺金の代わりに留金具で固定してあったものと推定されている。本例は鉸具に刺金を持つため、装着状態と構造は若干異なる。

(3) まとめ

S K64出土馬具は、各部位でも類似品を多く持ち、かつ組み合わせとしても類似している宇治二子山南墳よりも古く遡るものと考えられる。しかし、鐙が新井原2号古墳出土品よりも新しい様相を示していることから、新井原2号古墳、高岡4号古墳、松尾物見塚古墳など飯田地域のTK73~TK216型式期の例よりも1段階遅れ、新井原4号土墳出土馬具とほぼ同時期であろう。したがって、各遺物ごとに得られた年代でもあるTK208型式期に位置づけられる。

f字鏡板付轡+剣菱形杏葉のセットは、甲冑を伴うことが多いが、本例は古墳出土遺物ではなく、馬葬に伴うものであるため、馬具以外の共伴遺物はない。しかし、隣接する溝口の塚古墳からは三角板鋸留短甲と横剗板鋸留衝角付冑、横剗板鋸留短甲の甲冑セットが出土している。新井原12号古墳と新井原4号土墳の状況を鑑みても、溝口の塚古墳出土甲冑とSK64馬具が無関係であったとは考えにくい。

5世紀代の甲冑に馬具が共伴する確実な事例は、伊那谷において意外に少ない。それは、馬具があくまで「ウマ」に伴うものとして出土していることと、相互関係が不明瞭なほど複数の古墳、低墳丘墳、馬塚が密集しているケースが多いこと、発掘調査による甲冑の出土事例が少ないことが理由としてあげられる。確実な事例としては、川路月の木1号古墳があるが、これは韓国玉田20号墳出土品と同型の鉄製楕円形鏡板付轡が出土している。また、鉄製f字鏡板付轡と鉄地金銅張f字鏡板付轡は時間的・地理的に隣接する関係を持つことが多い。本例は新井原4号土墳出土馬具との関連が指摘され、また轡と杏葉の形状が類似している点を先に述べた。しかし新井原古墳群と宮垣外遺跡は異なる墓域群に捉えられる(白石1988)ことを考えると、相関は認められても、直接的な因果関係を結論づけるには慎重になる必要があるかもしれない。

附編 3. SK18出土鉄製鞆金具について 國學院大学大学院 片山 祐 介

(1) 復元

鞆金具は、鉸具付き短冊形吊手飾金具とコ字形金具のセットが鉄鏃に共伴した状態で出土した。

吊手飾金具は、鉸具の残存するものは表を上にして鉄鏃群の横から出土し、鉸具の欠損した長いものは3～4cmほど下がった位置より、側面を上に向けた状態で出土した。鉸具の位置は鉄鏃茎先端付近で、鉸具の方向が鋒方向と一致している。「鞆」としたが、2点の吊手金具の長さが異なるため、いわゆる背中に背負う鞆とは構造が異なるものと思われる。むしろ、時代は下るが唐代李重潤墓墓道東壁に見られる盛矢具（挿図13-1）に近い形態をしていた可能性がある。

コ字形金具は鉄鏃より離れた、鉄鏃の頸部付近より出土したことから、鞆本体の口の部分に取り付けられていたものとも思えるが、木目方向が金具長軸方向と一致していることを考えれば、全く異なる部品であった可能性も否定できない。通常の「コ字形胡録金具」とは異なり、縁断面の形態や内面木目方向などから木芯鉄張輪籠の柄頭に類似するが、類例がないため、よくわからない。

(2) 吊手金具

本例は、短冊形吊手飾金具に分類される。鉸具が共伴することはあっても、本例のように一方の先端に鉸具が「取り付けられている」ことはあまりない。

①類例

岡山県総社市法蓮40号墳（挿図13-3）

2群の鉄鏃のうち、B群に胡録金具が付属する。短冊形吊手飾金具と鉸具のセットが、片刃長頸鏃と椿葉長頸鏃とともに出土している。鉸具と吊手金具は別作りである。鉸具に刺金がなく、鏃は2個の並列と鉄板中央の1個を組み合わせている。

横切板鉸留短甲を共伴することから、5世紀後半に位置づけられている。

韓国陝川玉田M3号墳（挿図13-2）

玉田M3号墳からは10群の鉄鏃が出土しており、このうちI群の鉄鏃群に共伴する胡録金具は、中円部造り出し形吊手飾金具と鉸具、裾板鍔金具が各1点ずつセットで出土している。吊手金具には、3列の鉸が交互に打たれている。上端は左右端を切り欠いた軸受けを造り出し、刺金のない鉸具が取り付けられている。下端はし字形に切り欠かれている。

古墳は韓国編年で、5世紀第4四半期に位置づけられている。

韓国東萊福泉洞11号墳（挿図13-4）

福泉洞11号墳は5群の鉄鏃が出土しているが、そのうちB群に胡録金具が共伴する。短冊形吊手飾金具と山形前立飾金具、大小の鉸具2点、偏円偏方形金具がセットで出土している。長方形吊手金具は端部が丸くおさめられ、鉸が千鳥状に打たれていることなどから、最古相を呈しているものと考えられている。2点の鉸具は、1点は肩紐に使用され、1点は矢を束ねる目的で使用されたものと想定されている。鉸具はいずれも刺金を付けた通有のものである。

韓国編年で5世紀30年代に位置づけられている。

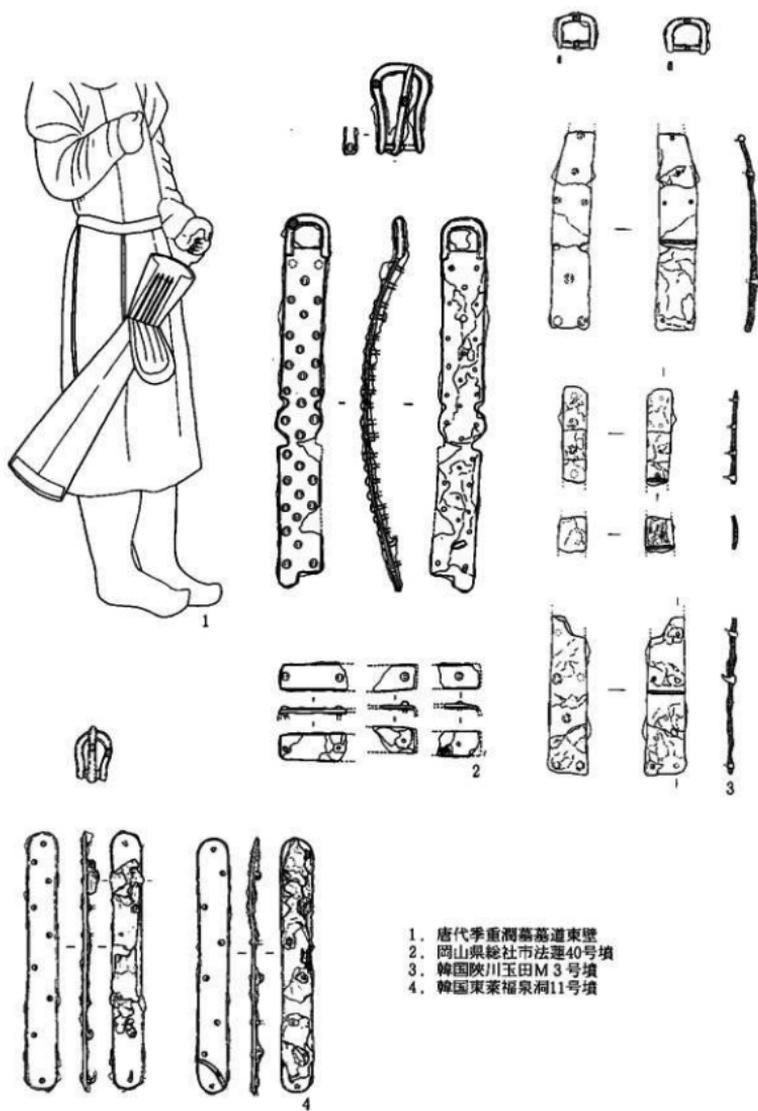


插圖13 胡鐮金具參考資料

②小結

鉄製短冊形吊手飾金具の法蓮40号、福泉洞11号、稲荷台1号出土例は、いずれも鉸具が別作りで、吊金具と一体化していない点が共通する。短冊形吊手飾金具は、福泉洞11号に見られるように初現段階から鉸具と短冊形金具が別作りであったと考えられる。また、鉸は中円造り出し形に比べて少ない。

鉸具と吊手金具が一体化し、飾り鉸の多いものは中円部造り出し形に認められる。しかし、この型式は金銅製ないし鉄地金銅張製が一般的であり、鉄製のものは少ない。玉田M3号墳例は、上端に軸受けを作りつけた鉸具一体型であるが、鉸具に刺金を持たない。鉸はSK18出土例と同じ配列を持つ飾り鉸的要素が強い。下端をL字形に切り欠いた点は、5世紀後半の新羅に出土例の多い金銅製胡蹄金具と同じである。

SK18例は刺金のない鉸具を作りつけている点、鉸配列が列点文装飾を持たない中円部造り出し形に類似していることなどから、短冊形と中円部造り出し形の中間の性格を持ち、玉田M3号墳例に近い構造を持つものと言える。

鉄製短冊形吊手飾金具は、5世紀後葉の限られた時期に製作・使用されたものと考えられており、また鉸具の刺金が簡略化されたものは、中円部造り出し形を含めて、いずれも5世紀後半に位置づけられる。玉田M3号墳は5世紀第4四半期に位置づけられていることを考えれば、本例もほぼ同時期の製品と見て大過はないものと思われる。

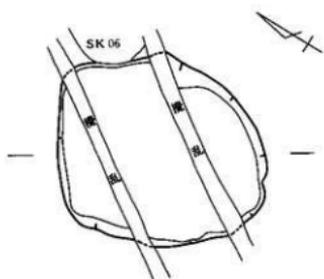
また本例は、胡蹄金具を逆転させた状態で出土した「鞆」金具と考えられることから、金具は類似型式であっても、本体の構造が同じであるとは限らないという点において、今後の注意を促す遺物とも言えよう。

参考文献

- 飯田市教育委員会 1992 『八幡原遺跡 物見塚古墳』
- 飯田市美術博物館・飯田市上郷考古博物館 1997 『伊那谷の馬・科野の馬—古墳時代における受容と広がり—』
- 宇治市教育委員会 1991 『宇治二子山古墳』
- 内山敏行 1996 『古墳時代の轡と杏葉の変遷』『黄金に魅せられた倭人たち』鳥根県立八雲立つ風土記の丘資料館
- 内山敏行・岡安光彦 1997 『下伊那地方の初期の馬具』『信濃』49-4・5
- 岡安光彦 1986 『馬具副葬古墳と東国舍人騎兵』『考古学雑誌』71-4
- 榎原考古学研究所 1976 『葛城・石光山古墳群』
- 金斗詔 1996 『韓国と日本の馬具—両国間の編年調律—』『4・5世紀の日韓考古学』九州考古学会・嶺南考古学会
- 慶尚大学校博物館 1990 『陝川玉田古墳群Ⅱ M3号墳』慶尚大学校博物館調査報告 第6輯
- 早乙女雅博 1987 『古代東アジアの盛欠具』『日本考古学会第35回例会資料』
- 坂本実夫 1985 『馬具』考古学ライブラリー-34
- 藤谷恵美子 2000 『馬の文化論—伊那谷を中心として—』『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』
- 杉原清一 1991 『仁多・川子原横穴』『鳥根県埋蔵文化財調査報告書』第XVIII集
- 総社市教育委員会 1987 『法蓮40号墳』
- 田中茂 1974 『えびの市小本原地下式横穴3号出土品について』『宮崎県総合博物館研究紀要』2
- 田中新史 1988 『古墳出土の胡蹄・鞆』『井上コレクション 弥生・古墳時代資料図録』

- 千賀久 1992 「日本出土の初期馬具の系譜」『橿原考古学研究所論集』九
- 千賀久 1994 「日本出土の初期馬具の系譜2」『橿原考古学研究所論集』十二
- 橋本達也 1995 「古墳時代中期における金工技術の変革とその意義」『考古学雑誌』80-4
- 花谷浩 1991 「3)馬具-日本出土鉄製鏡板付轡に関する覚え書き」『川上・丸井古墳発掘調査報告書』
- 釜山大学校博物館 1982 「東萊福泉洞古墳群1」釜山大学校博物館遺跡調査報告 第5編
- 松尾昌彦 1983 「下伊那地方における馬具の一様相」『長野県考古学会誌』45
- 柳昌煥 1994 『伽耶古墳出土鍔子に関する研究-木心鉄板被輪鍔を中心として-』東義大学校大学院
- 宮代栄一 1986 「古墳時代雲珠・辻金具の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号
- 宮代栄一 1993 「5・6世紀における馬具の『セット』について-『字鏡板付轡・鉄製楕円形鏡板付轡・剣菱形杏葉を中心に』『九州考古学』第68号
- 宮代栄一 1995 「宮崎県出土の馬具の研究」『九州考古学』70
- 宮代栄一 1996 「飾り馬の繫構造の研究-面繫構造を中心に-」『日本考古学協会第62回大会研究発表要旨』
- 宮代栄一 1996 「古墳時代金属装鞍の研究-鉄地金銅装鞍を中心に-」『日本考古学』第3号
- 桃崎祐輔 1999 「日本列島における騎馬文化の受容と拡散-殺馬儀礼と初期馬具の拡散に見る慕容鮮卑・朝鮮三國伽耶の影響-」『渡来文化の受容と展開-5世紀における政治的・社会的変化の具体相(2)』第46回埋蔵文化財研究集会
- 嶺南考古学会 1995 『伽耶古墳の編年研究Ⅲ-甲冑と馬具-』

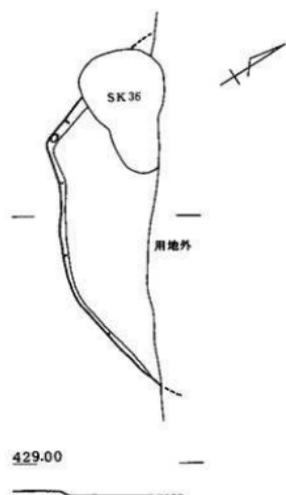
遺 構 図 版



429.00



SB 01



429.00



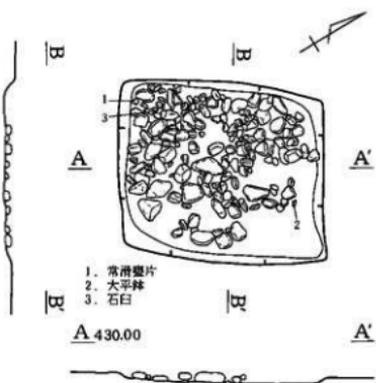
SB 03



429.00

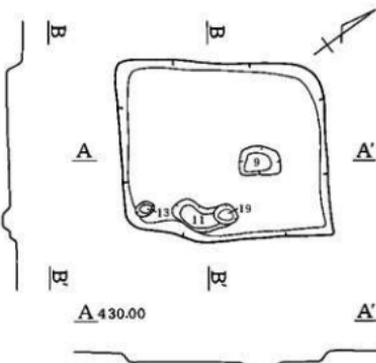


SB 02



1. 常滑壘片
2. 大平鉢
3. 石臼

A 430.00



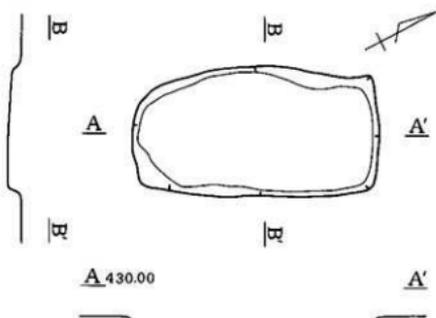
A 430.00



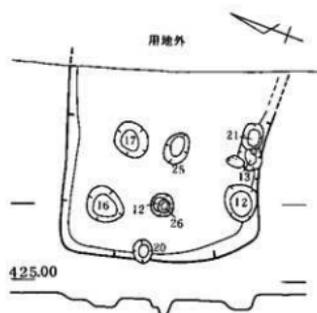
SB 04

0 2m

第1圖 MGT SB01 SB02 SB03 SB04



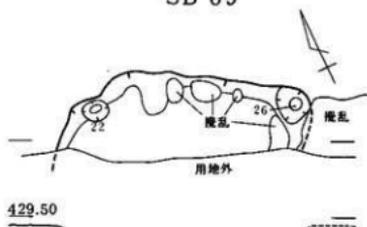
SB 05



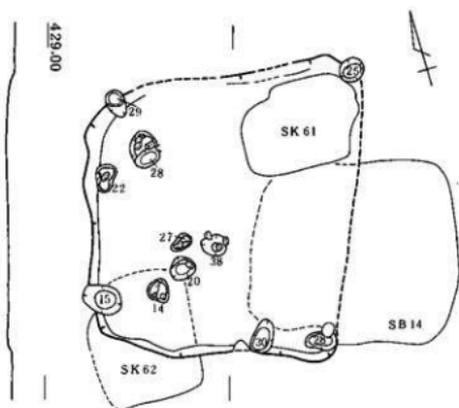
SB 09



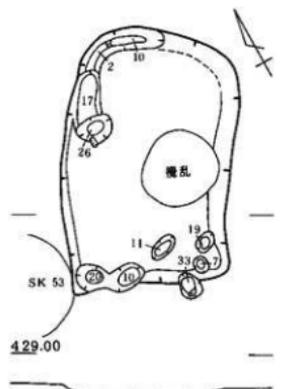
SB 10



SB 11



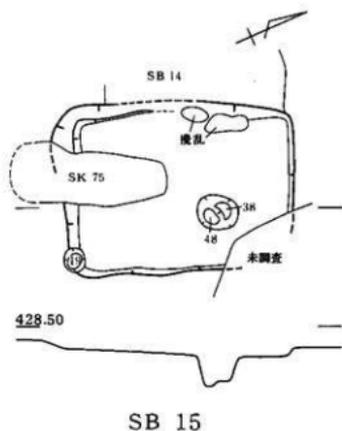
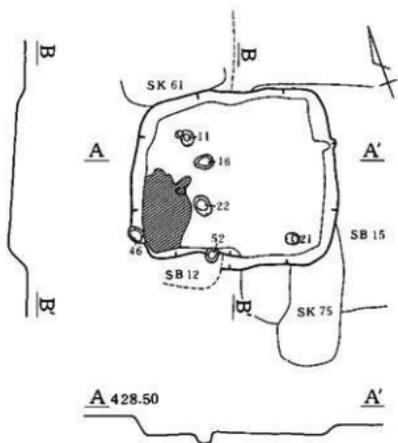
SB 12



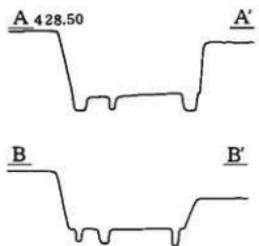
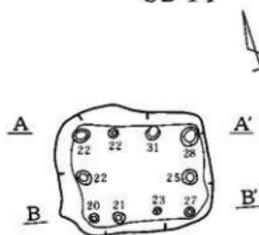
SB 13



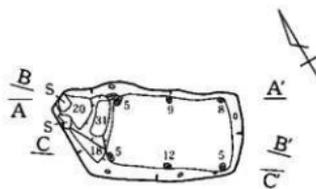
第2圖 MGT SB05 SB09 SB10 SB11 SB12 SB13



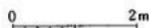
SB 14



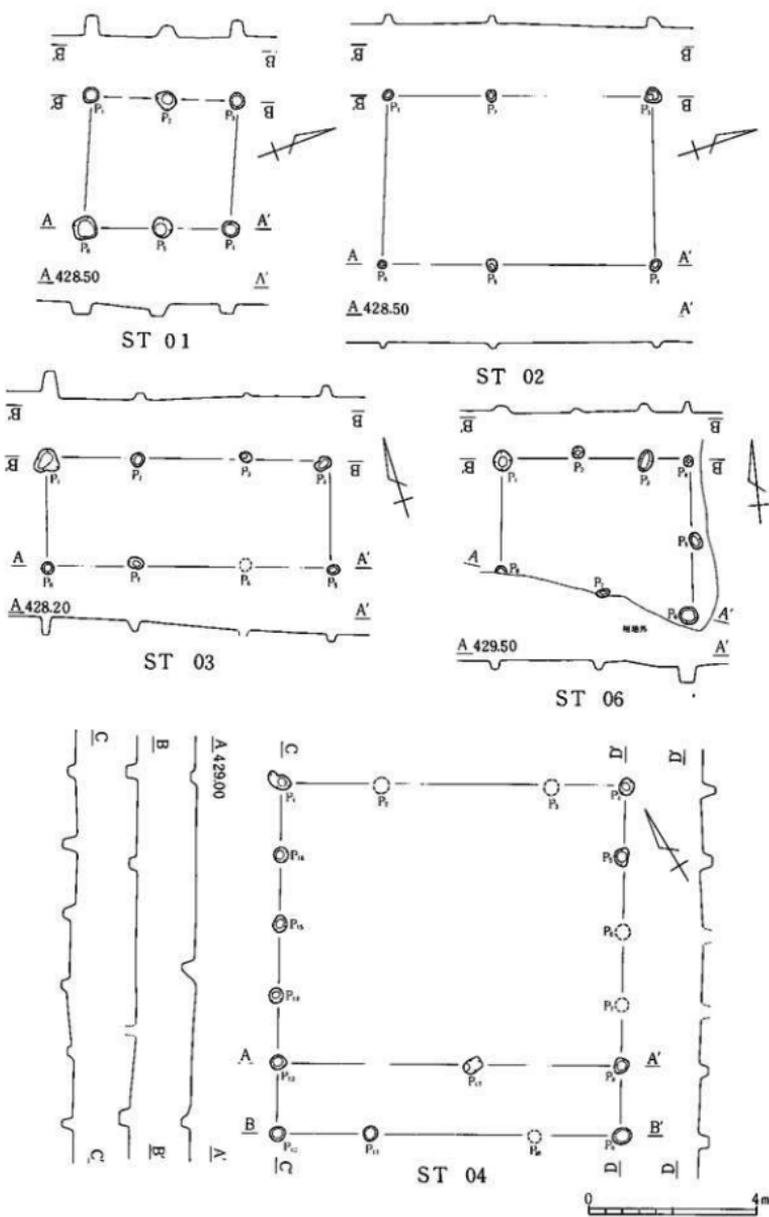
SB 16



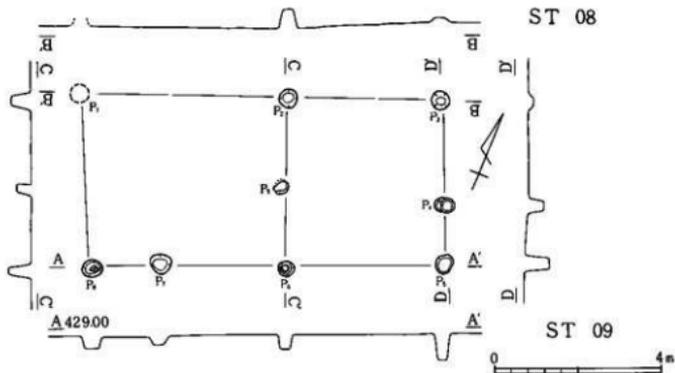
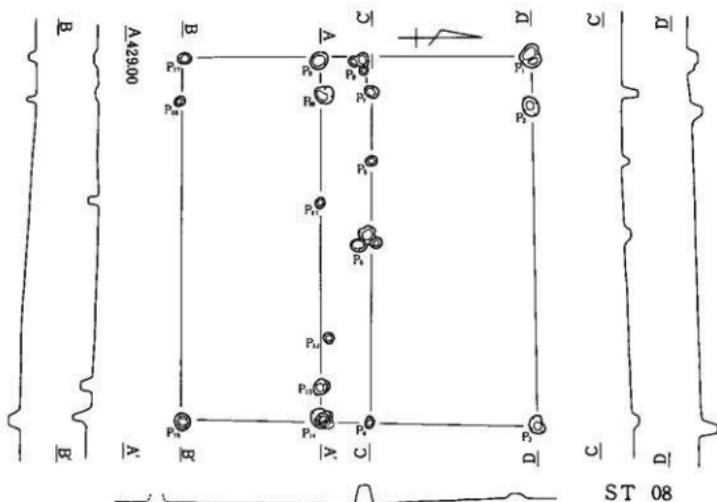
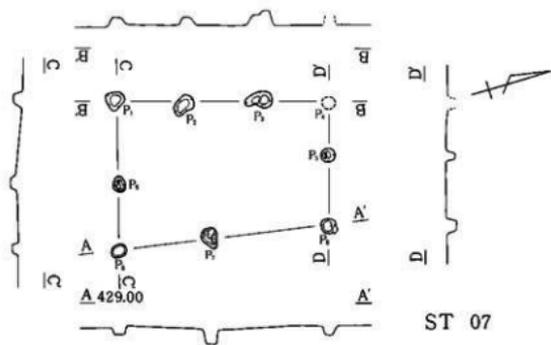
SB 17



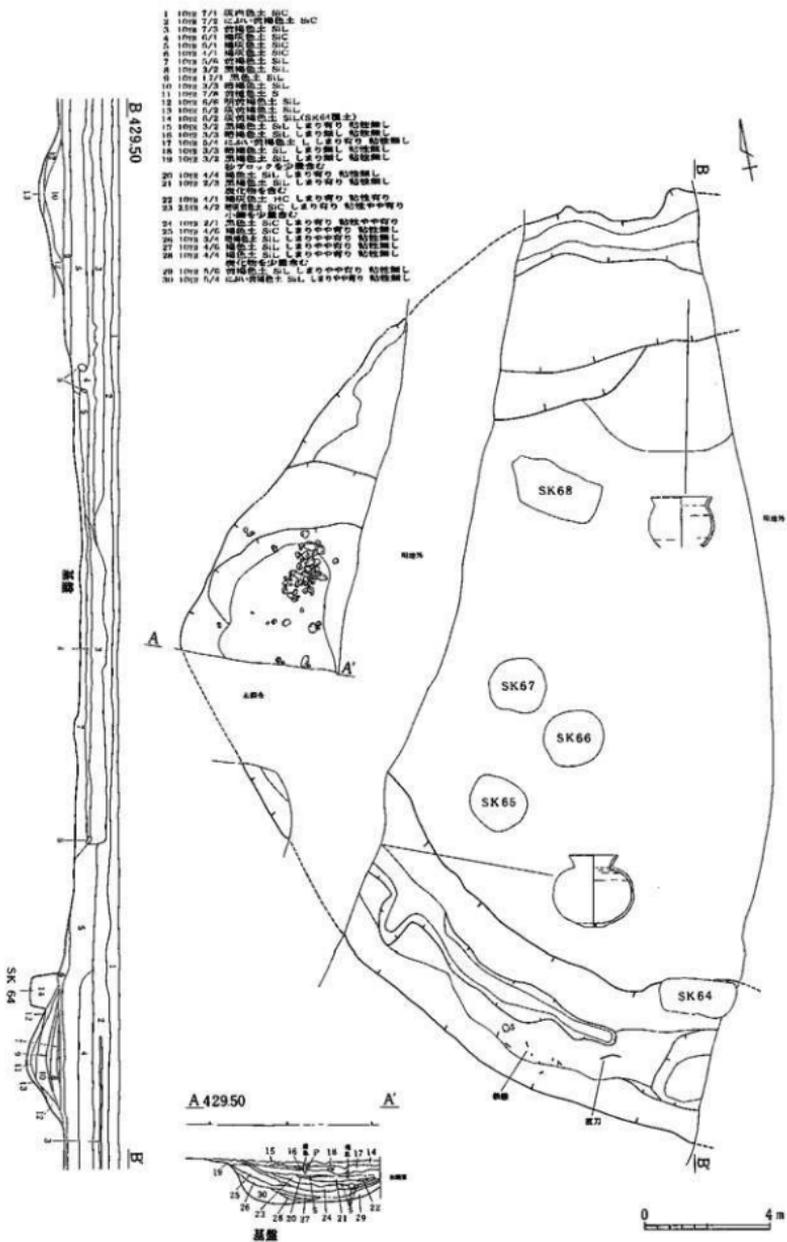
第3圖 MGT SB14 SB15 SB16 SB17

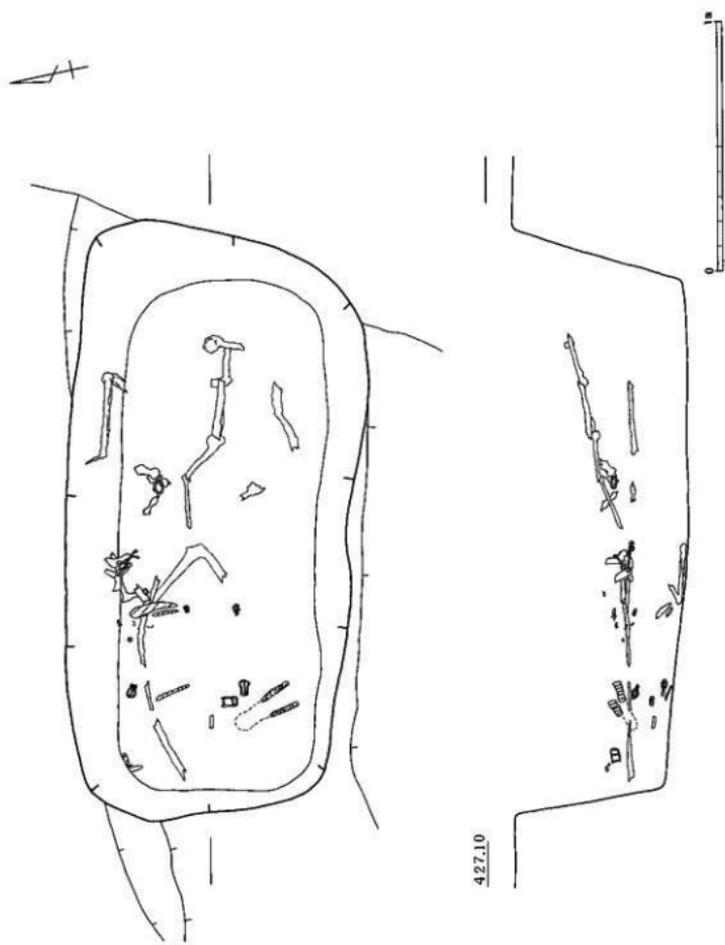


第4图 MGT ST01 ST02 ST03 ST04 ST06

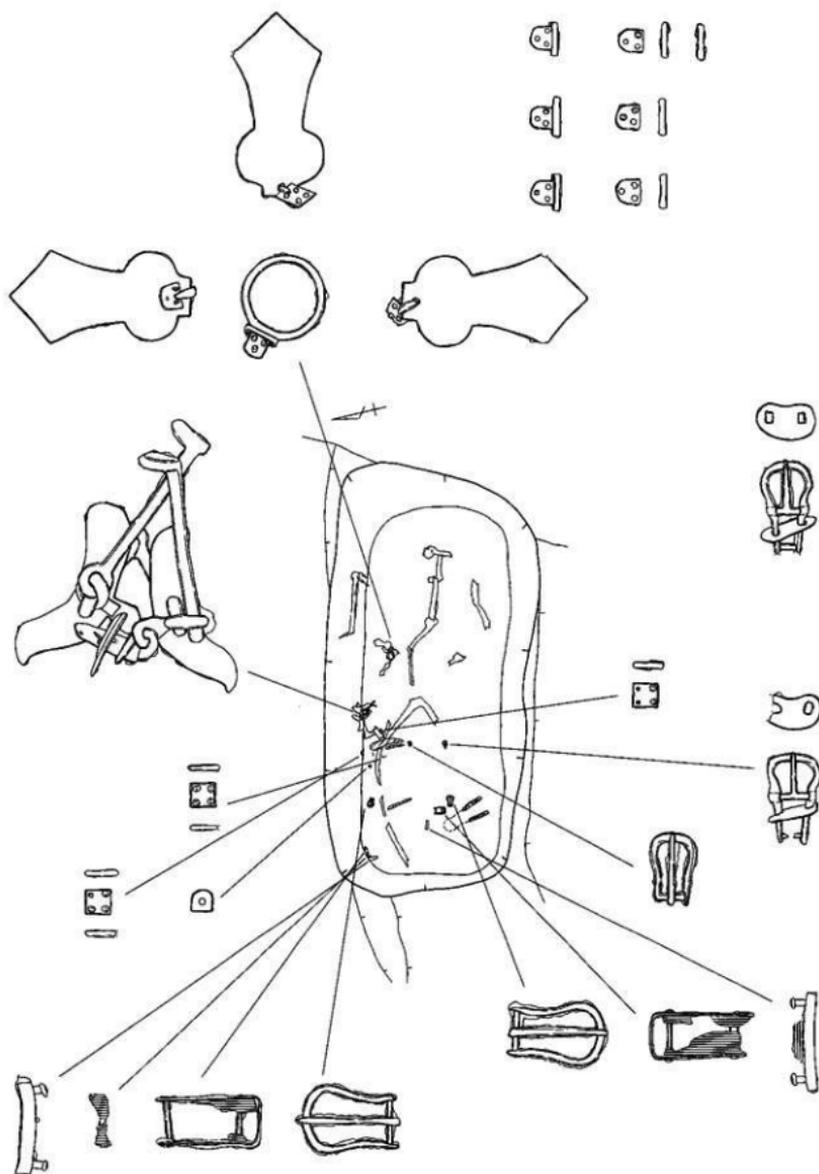


第5圖 MGT ST07 ST08 ST09

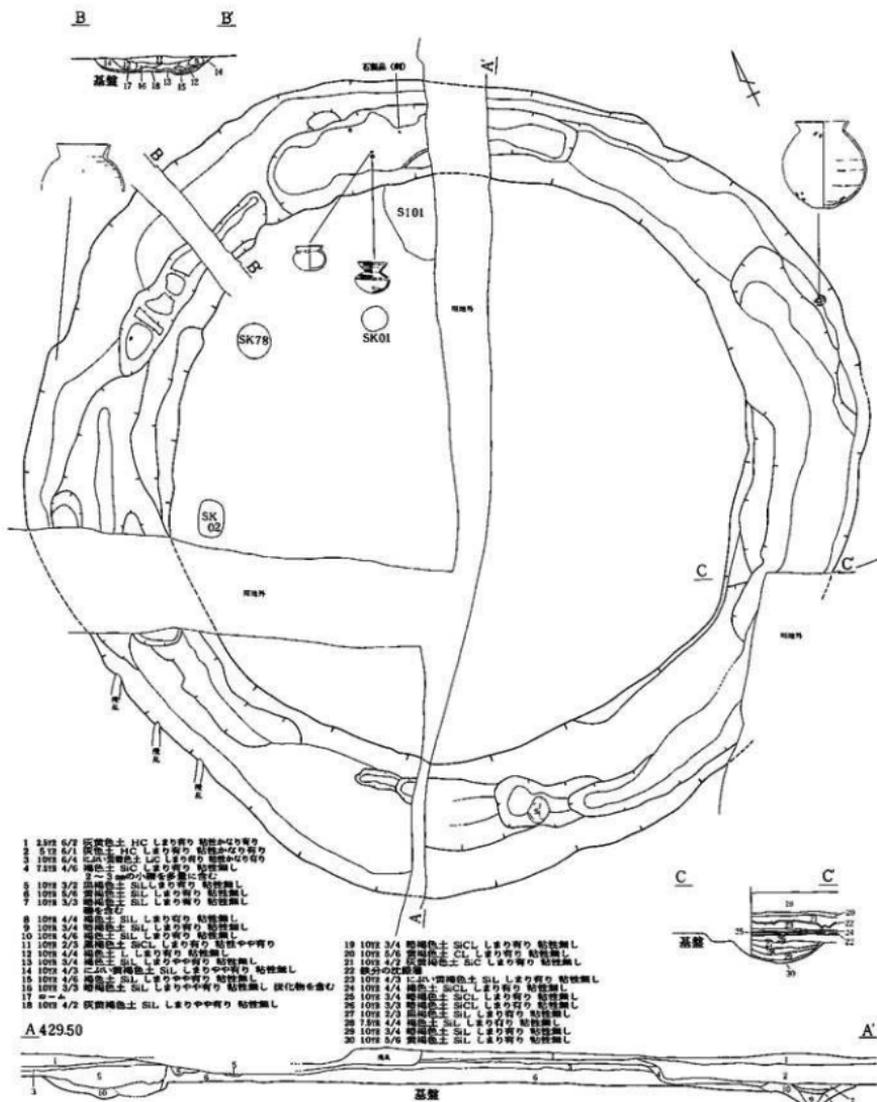




第7図 MGT SK64 遺物出土状況



第8圖 SK64 馬具出土位置圖

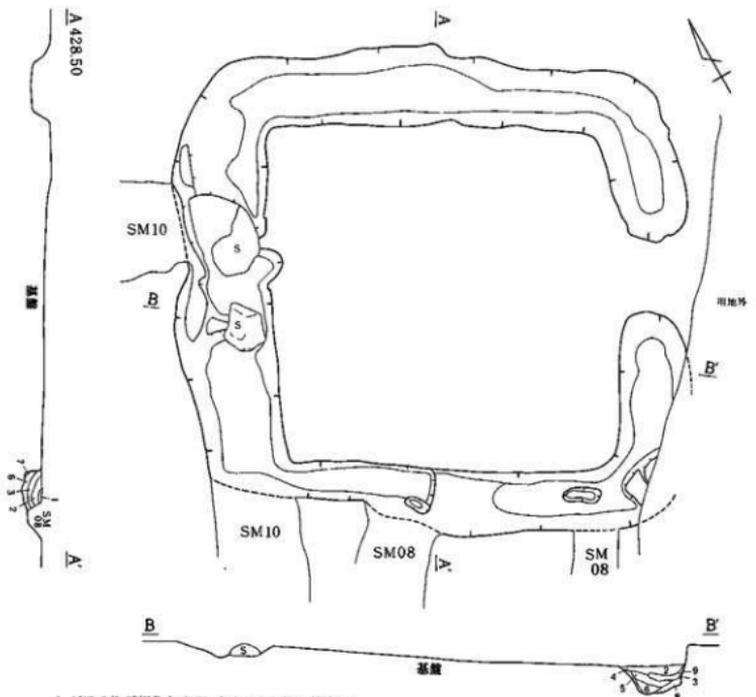


- 1 2.5m 6/7 灰褐色土 HC しまり有り 粘質中〜やや有り
- 2 5.12 6/1 灰褐色土 HC しまり有り 粘質中〜やや有り
- 3 10.78 6/4 灰褐色土 SL しまり有り 粘質中〜やや有り
- 4 7.28 4/6 褐色土 SiCL しまり有り 粘質無し
- 5 10.78 3/2 褐色土 SiL しまり有り 粘質無し
- 6 10.78 3/6 褐色土 SiL しまり有り 粘質無し
- 7 10.78 3/2 褐色土 SiL しまり有り 粘質無し
- 8 10.78 4/4 褐色土 SiL しまり有り 粘質無し
- 9 10.78 3/4 褐色土 SiL しまり有り 粘質無し
- 10 10.78 6/4 褐色土 SiL しまり有り 粘質無し
- 11 10.78 2/3 褐色土 SiCL しまり有り 粘質中〜やや有り
- 12 10.78 4/4 褐色土 SiL しまり有り 粘質無し
- 13 10.78 3/4 褐色土 SiL しまり有り 粘質無し
- 14 10.78 4/2 灰褐色土 SiL しまり有り 粘質無し
- 15 10.78 4/6 褐色土 SiL しまり有り 粘質無し
- 16 10.78 3/3 褐色土 SiL しまり有り 粘質無し 炭化物を含む
- 17 同〜
- 18 10.78 4/2 灰褐色土 SiL しまり有り 粘質無し

- 19 10.78 3/4 褐色土 SiCL しまり有り 粘質無し
- 20 10.78 5/6 褐色土 CL しまり有り 粘質無し
- 21 10.78 4/2 灰褐色土 SiCL しまり有り 粘質無し
- 22 同〜
- 23 10.78 4/3 灰褐色土 SiL しまり有り 粘質無し
- 24 10.78 4/4 褐色土 SiCL しまり有り 粘質無し
- 25 10.78 3/4 褐色土 SiCL しまり有り 粘質無し
- 26 10.78 3/3 褐色土 SiCL しまり有り 粘質無し
- 27 10.78 3/3 褐色土 SiL しまり有り 粘質無し
- 28 7.28 4/4 褐色土 SiL しまり有り 粘質無し
- 29 10.78 3/4 褐色土 SiL しまり有り 粘質無し
- 30 10.78 5/6 褐色土 SiL しまり有り 粘質無し

A 429.50

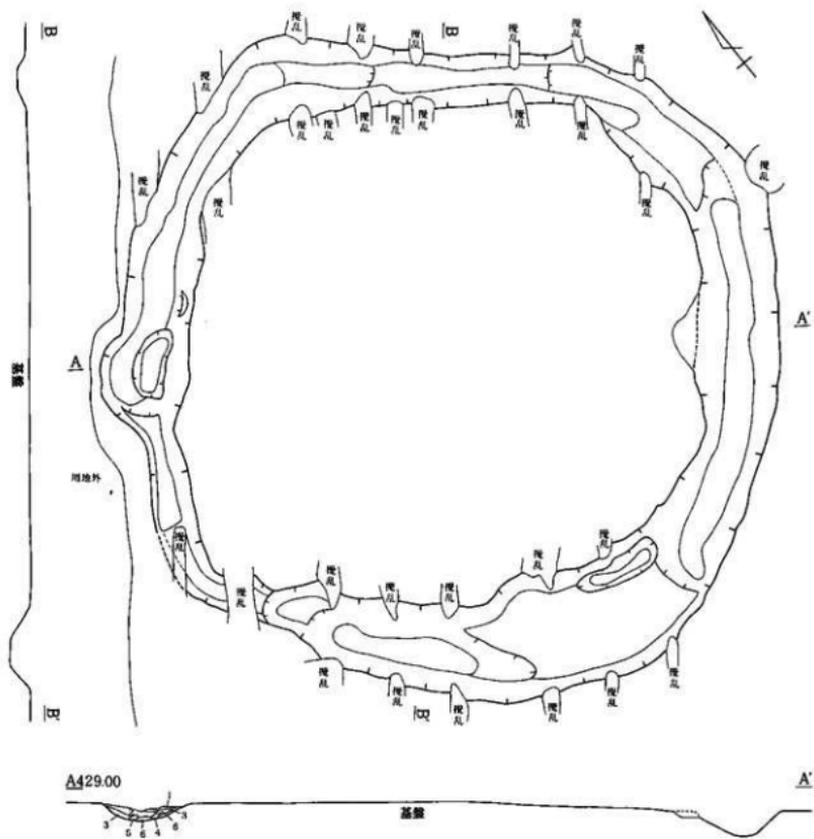
第9図 MGT SM04



- 1 10ⅡR 3/3 暗褐色土 SiCL しまりやや有り 粘性無し
- 2 10ⅡR 3/4 暗褐色土 SiL しまり有り 粘性無し 10mmの小礫を含む
- 3 10ⅡR 3/2 暗褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
- 4 10ⅡR 3/2 暗褐色土 SiL しまり有り 粘性無し 炭化物を少量含む
- 5 10ⅡR 4/4 にぶい暗褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
- 6 10ⅡR 4/4 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
- 7 10ⅡR 4/3 にぶい黄褐色土 SiL しまり有り 粘性無し 炭化物を少量含む
- 8 10ⅡR 4/4 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
- 9 10ⅡR 4/2 灰黄褐色土 SiL しまりやや有り 粘性無し



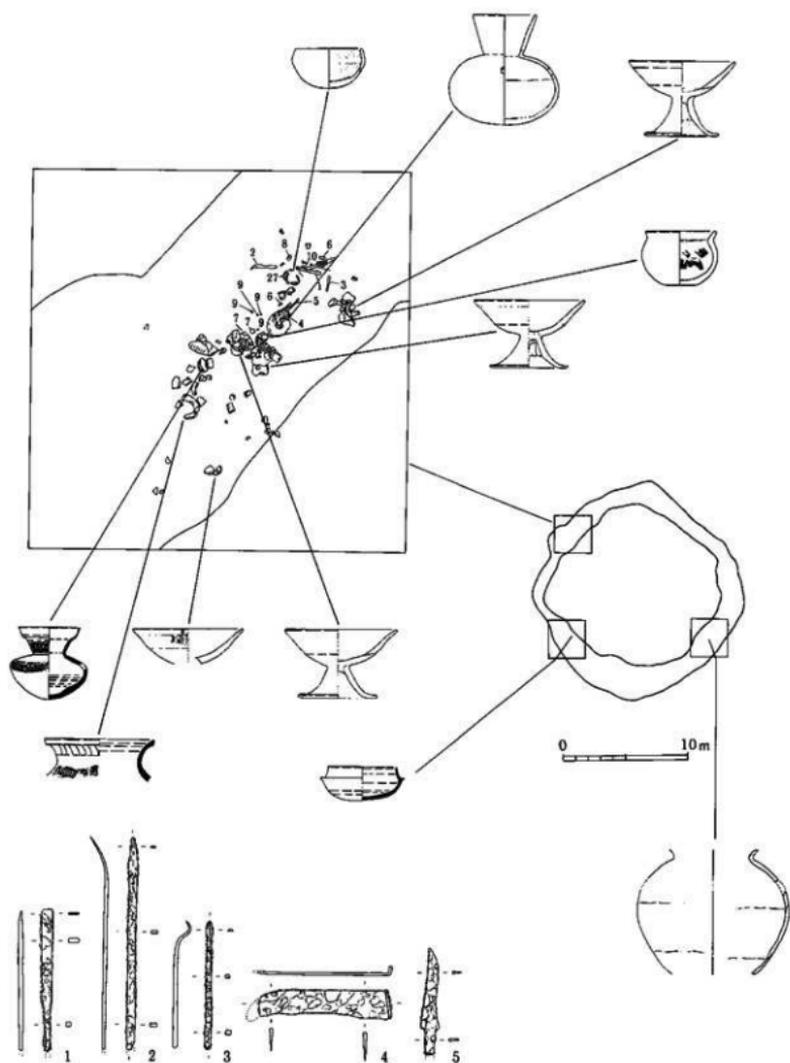
第10図 MGT SM06



- 1 10R 3/4 暗褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
- 2 10R 3/2 黒褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
- 3 10R 4/3 濃い黄褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
- 4 10R 3/3 暗褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
- 5 10R 2/3 黒褐色土 SiL しまりやや有り 粘性無し
- 6 10R 4/6 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し

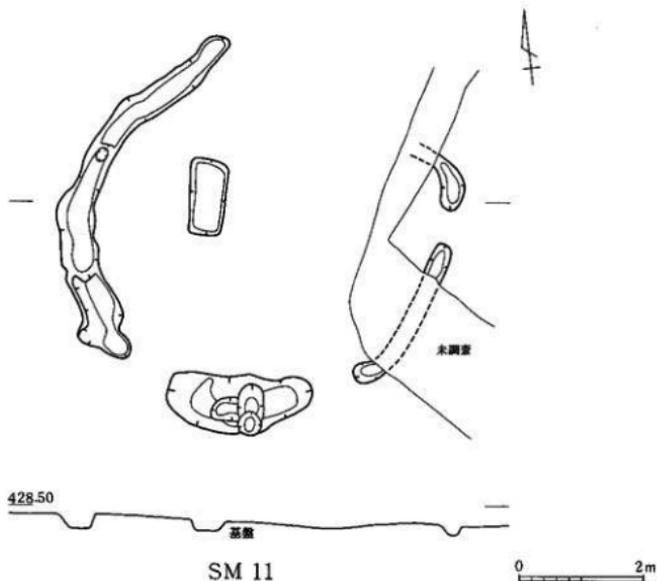
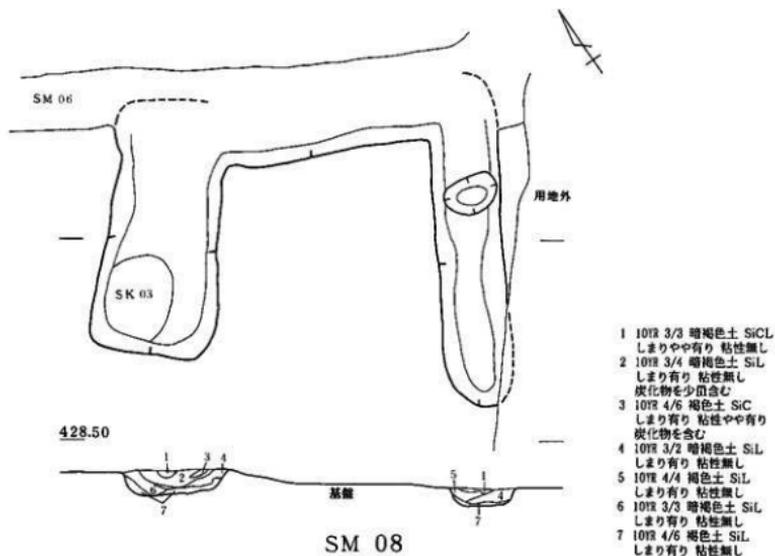


第11図 MGT SM07

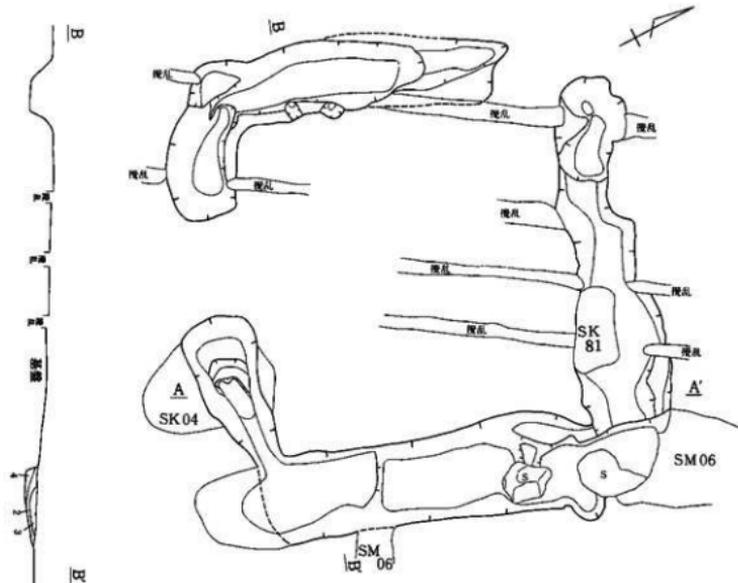


6 鉄鍔片 7 石製模造品(有孔円板) 8 勾玉 9 白玉 10 管玉

第12図 MGT SM07 遺物出土状況



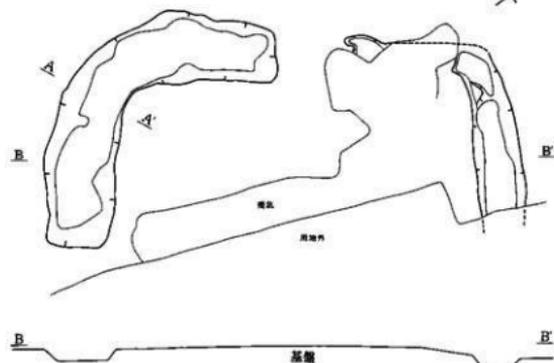
第13図 MGT SM08 SM11



- A42900
- 1 10YR 3/4 暗褐色土 SiL
しまりやや有り 粘性無し
小礫を多量に含む
 - 2 10YR 4/3 黄褐色土 SiL
しまりやや有り 粘性無し
小礫を多量に含む
 - 3 10YR 2/2 黒褐色土 SiL
しまり有り 粘性無し
 - 4 10YR 4/4 褐色土 SiL
しまり有り 粘性無し



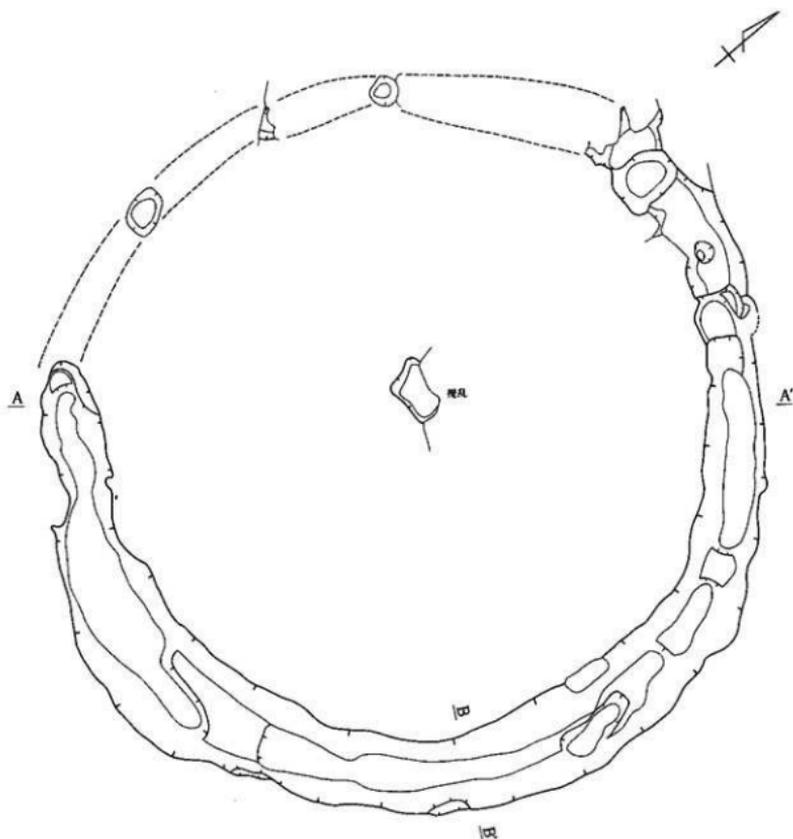
- A42900
- 1 7.5YR 3/4 暗褐色土 SiL
しまり有り 粘性强し
 - 2 10YR 4/4 褐色土 SiL
しまりやや有り 粘性無し
 - 3 10YR 5/6 黄褐色土 SiL
しまりやや有り 粘性無し
2~5mmの小礫を多量に含む



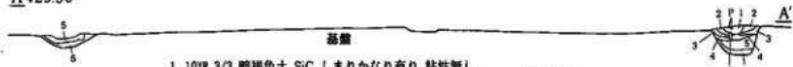
SM 12



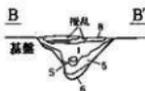
第14図 MGT SM10 SM12



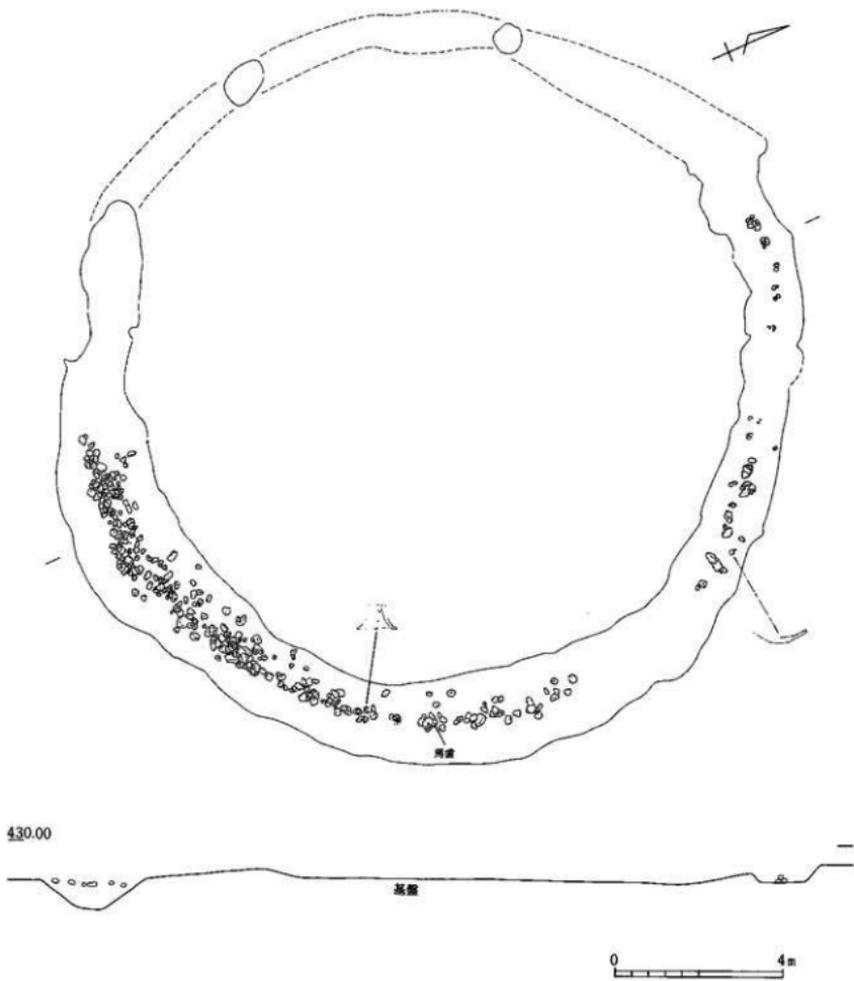
A 429.50



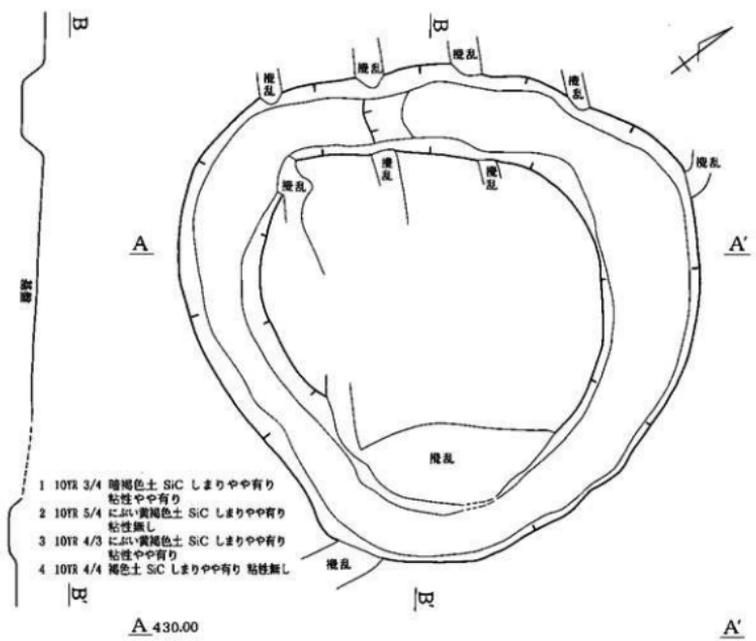
- 1 101# 3/3 暗褐色土 SiC しまりかなり有り 粘性無し
- 2 101# 3/4 暗褐色土 SiC しまりかなり有り 粘性無し 1mmの小礫を含む
- 3 101# 4/4 褐色土 SiC しまりかなり有り 粘性無し
- 4 101# 4/6 褐色土 SiC しまりかなり有り 粘性無し
- 5 101# 4/3 におい・鉄褐色土 SiC しまりやや有り 粘性無し
- 6 101# 5/4 におい・黄褐色土 SiC しまり無し 粘性無し
- 7 101# 2/3 黒褐色土 SiC しまりやや有り 粘性無し
- 8 101# 4/3 におい・黄褐色土 SiC しまりかなり有り 粘性無し



第15図 MGT SM15

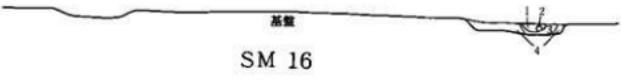


第16圖 MGT SM15 遺物出土狀況

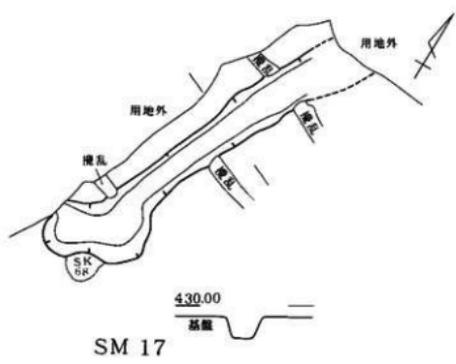


- 1 10TR 3/4 暗褐色土 SiC しまりやや有り
粘性やや有り
- 2 10TR 5/4 におい黄褐色土 SiC しまりやや有り
粘性無し
- 3 10TR 4/3 におい黄褐色土 SiC しまりやや有り
粘性やや有り
- 4 10TR 4/4 褐色土 SiC しまりやや有り 粘性無し

A 430.00 A'

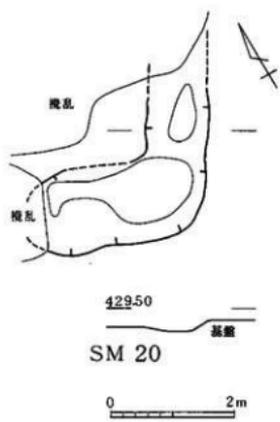


SM 16



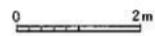
430.00 基盤

SM 17

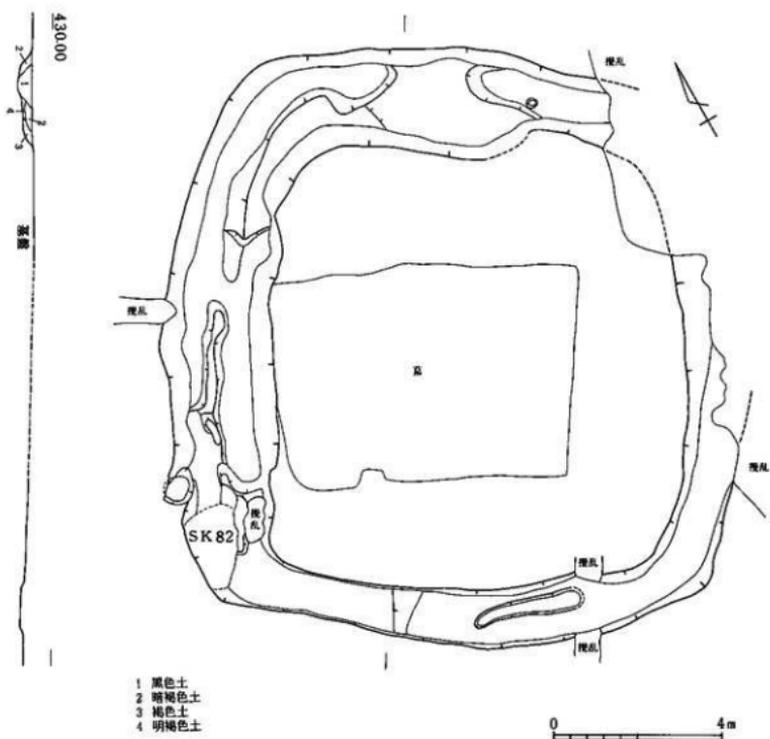


429.50 基盤

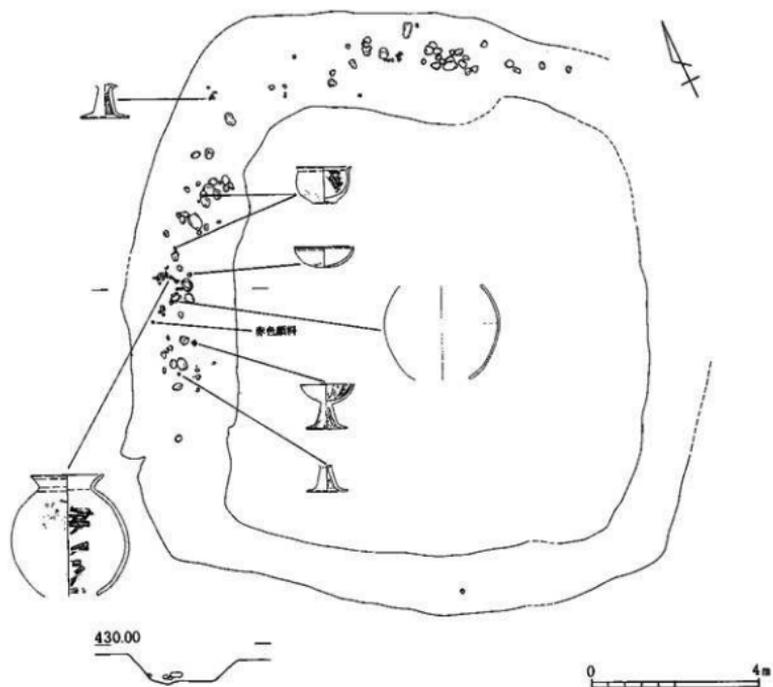
SM 20



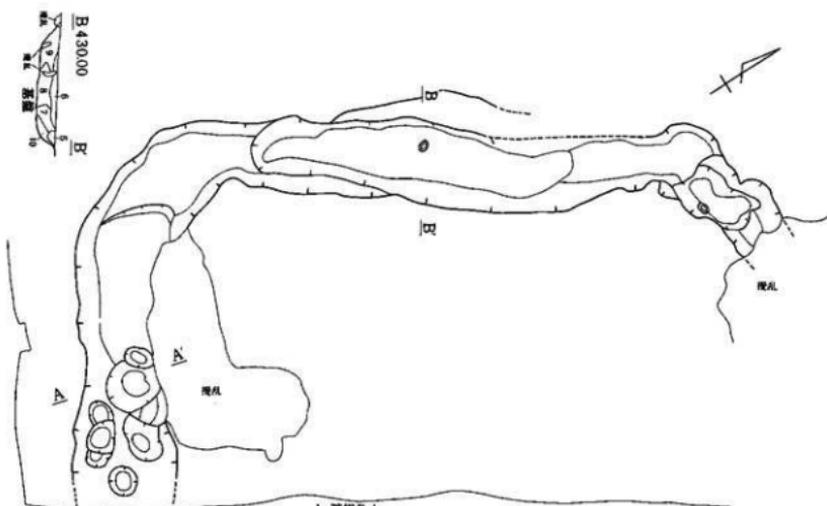
第17図 MGT SM16 SM17 SM20



第18圖 MGT SM18



第19圖 MGT SM18 遺物出土状況

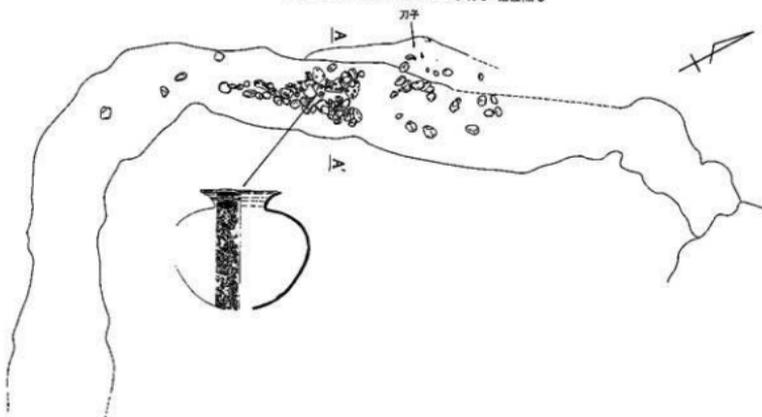


A 430.00

A'



- 1 暗褐色土
- 2 黄色土 湖域外
- 3 暗褐色土
- 4 黒色土
- 5 101R 3/2 黒褐色土に4/4褐色土との混じる
- 6 101R 2/2 黒褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
- 7 101R 4/4 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
- 8 101R 3/4 暗褐色土 SiL しまりやや有り 粘性無し
- 9 101R 4/3 におい黄褐色土 SiL しまりやや有り 粘性やや有り
- 10 101R 4/6 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し



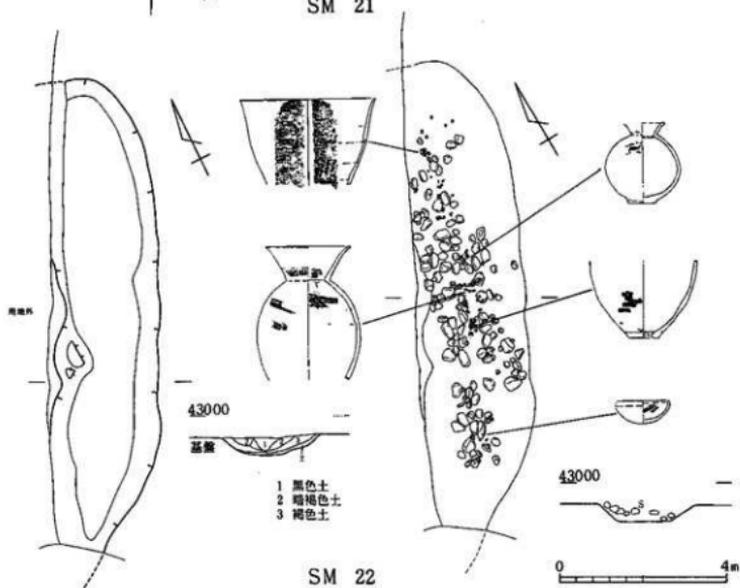
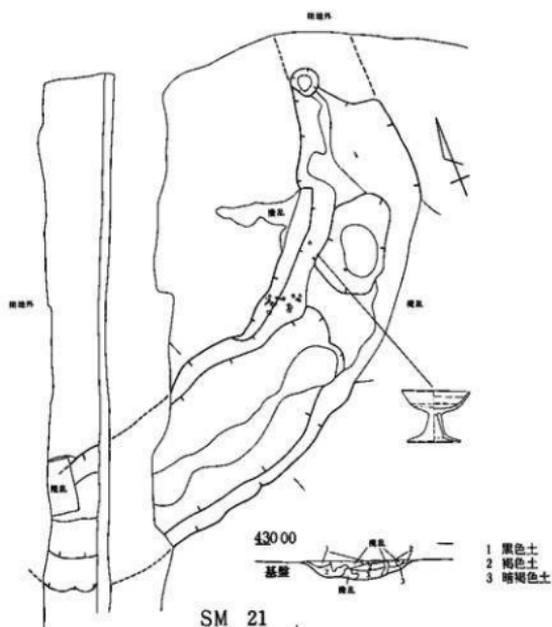
A 430.00

A'

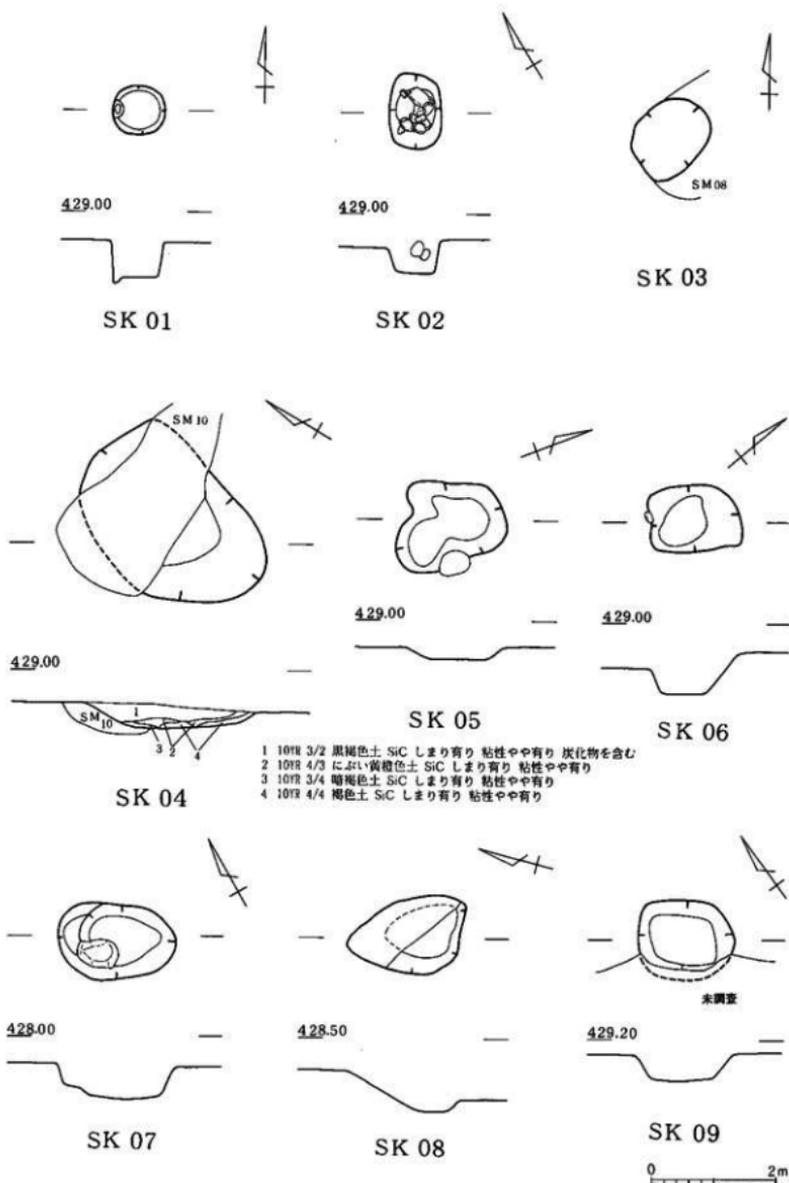


0 4m

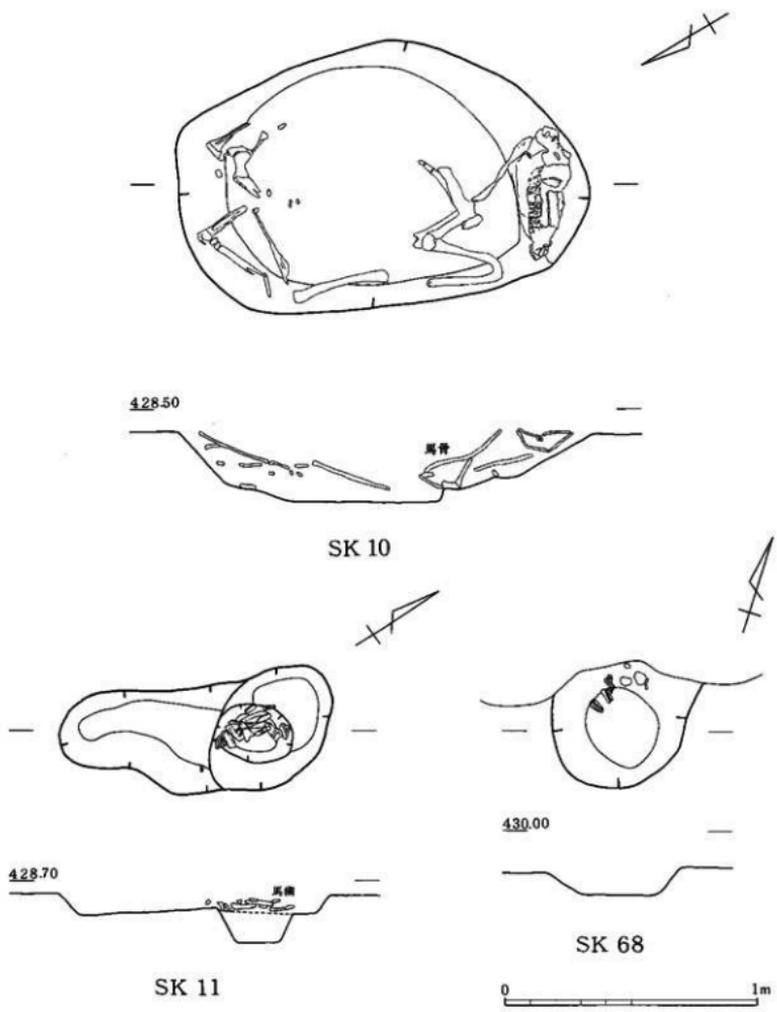
第20図 MGT SM19



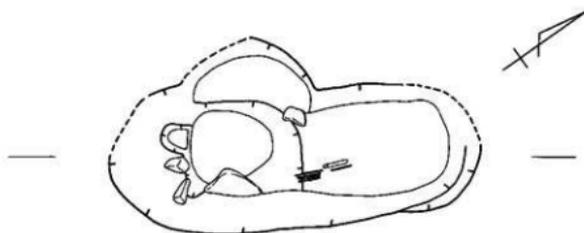
第21圖 MGT SM21 SM22



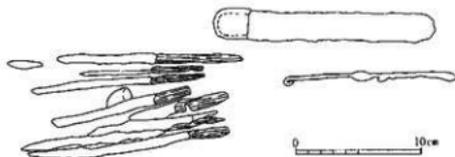
第22図 MGT SK01 SK02 SK03 SK04 SK05 SK06 SK07 SK08 SK09



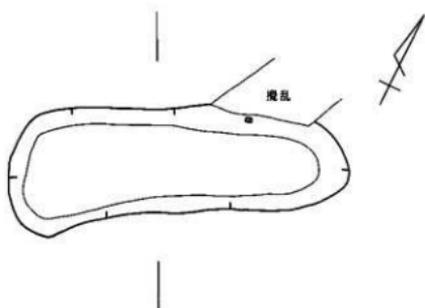
第23圖 MGT SK10 SK11 SK68



429.00



SK 18

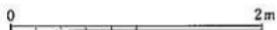


428.70

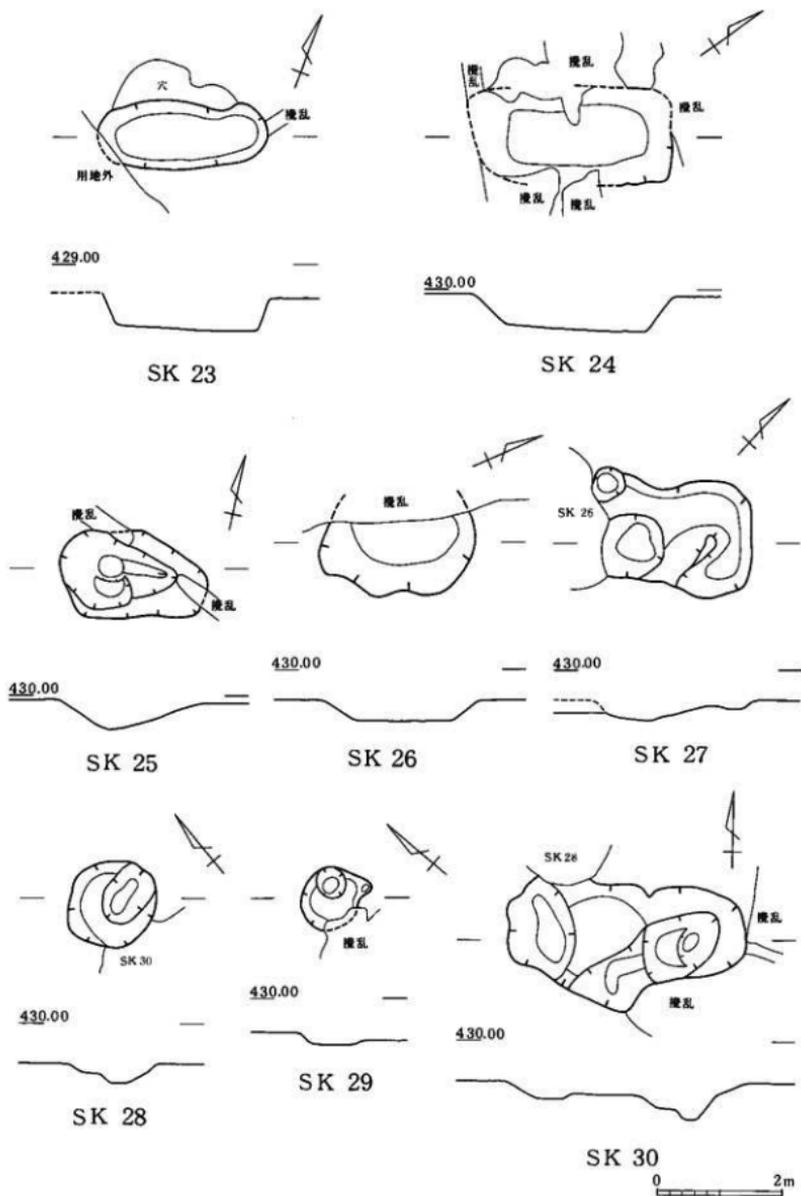


1 黒色土 シルト
2 褐色土 砂質

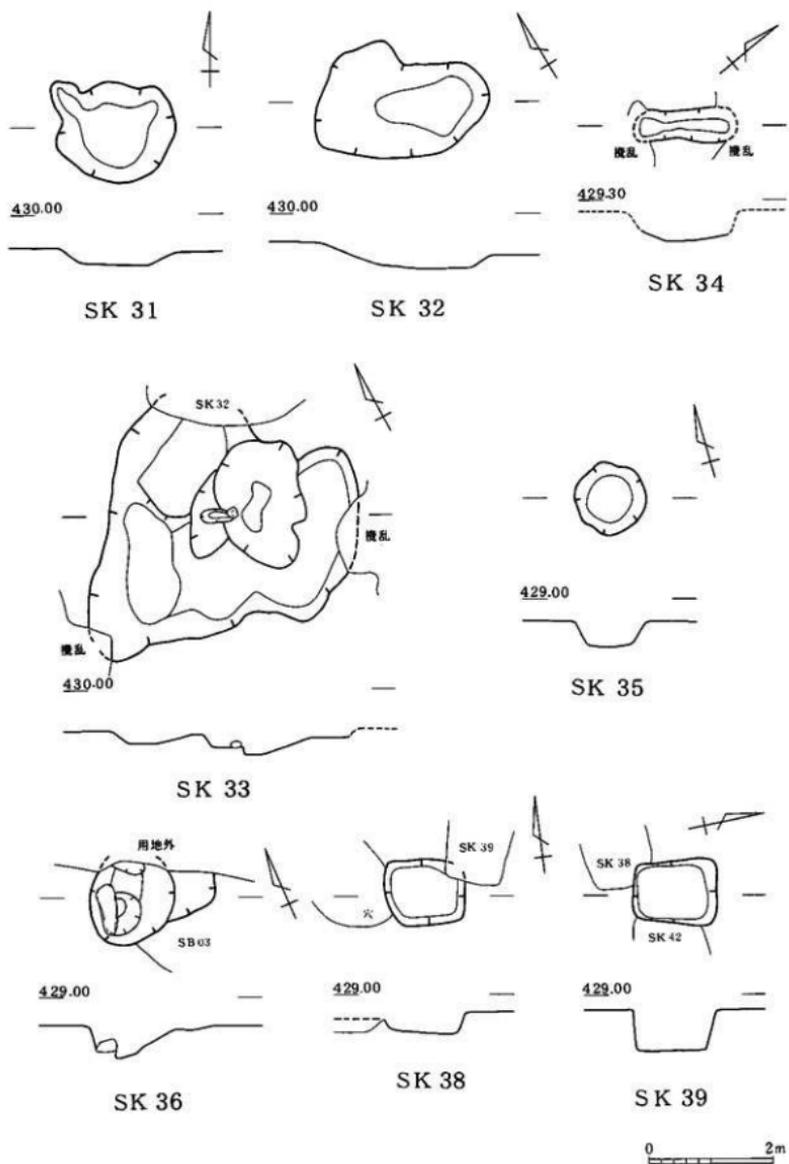
SK 21



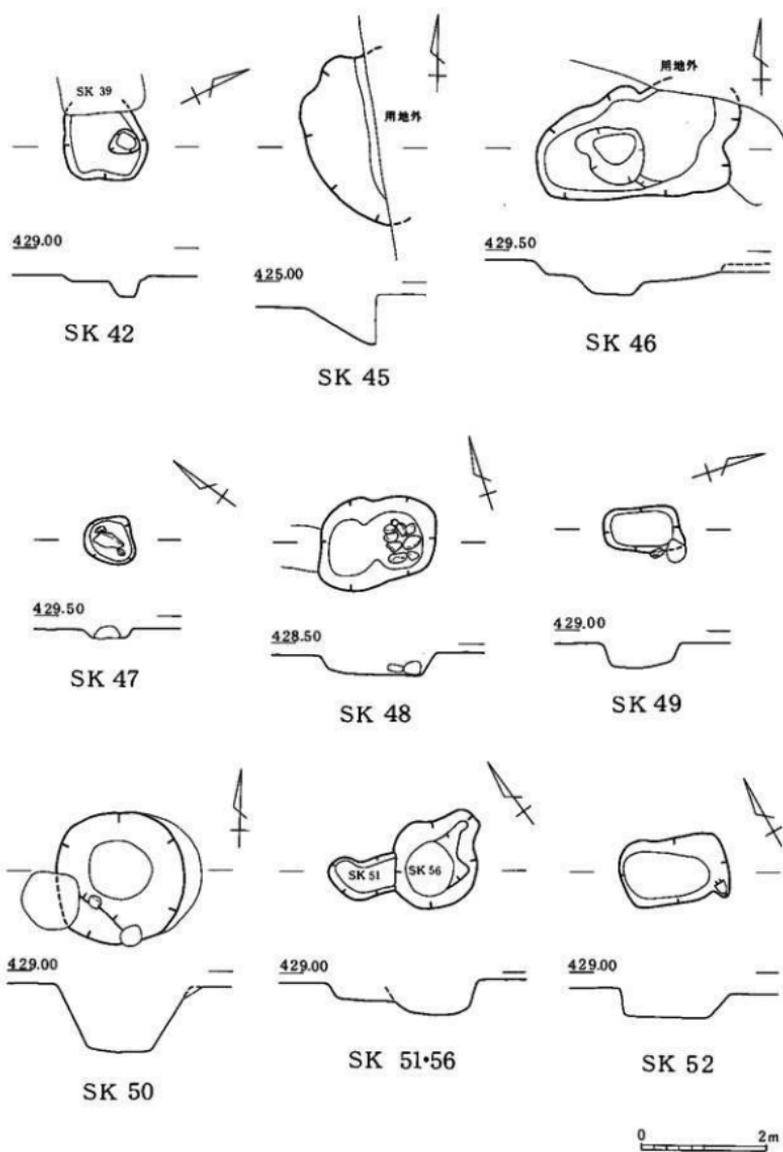
第25図 MGT SK18 SK21



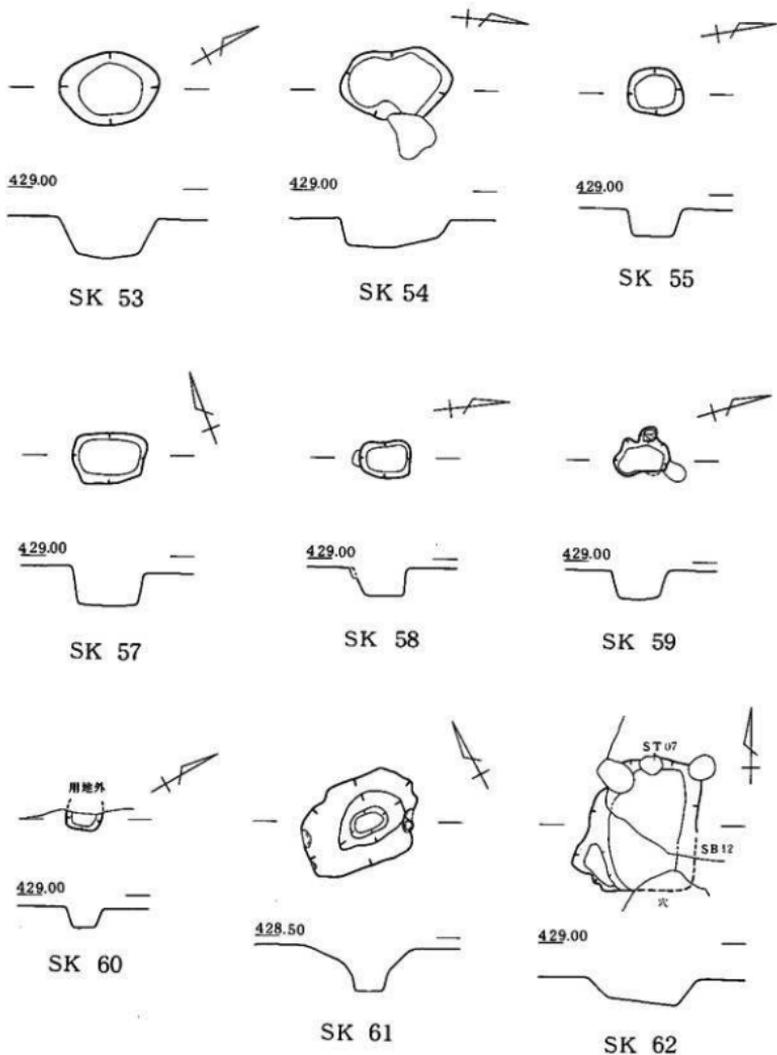
第26圖 MGT SK23 SK24 SK25 SK26 SK27 SK28 SK29 SK30



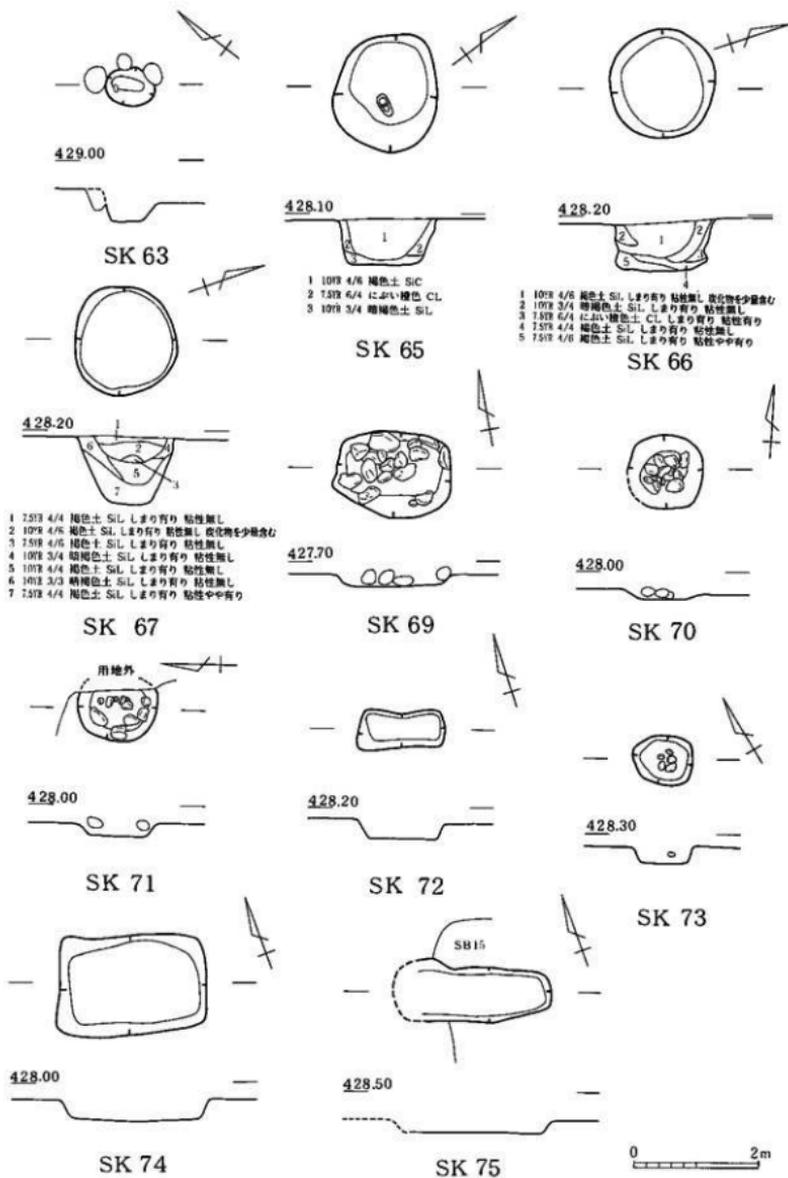
第27図 MGT SK31 SK32 SK33 SK34 SK35 SK36 SK38 SK39



第28圖 MGT SK42 SK45 SK46 SK47 SK48 SK49 SK50 SK51 SK52 SK55 SK56



第29図 MGT SK53 SK54 SK55 SK57 SK58 SK59 SK60 SK61 SK62

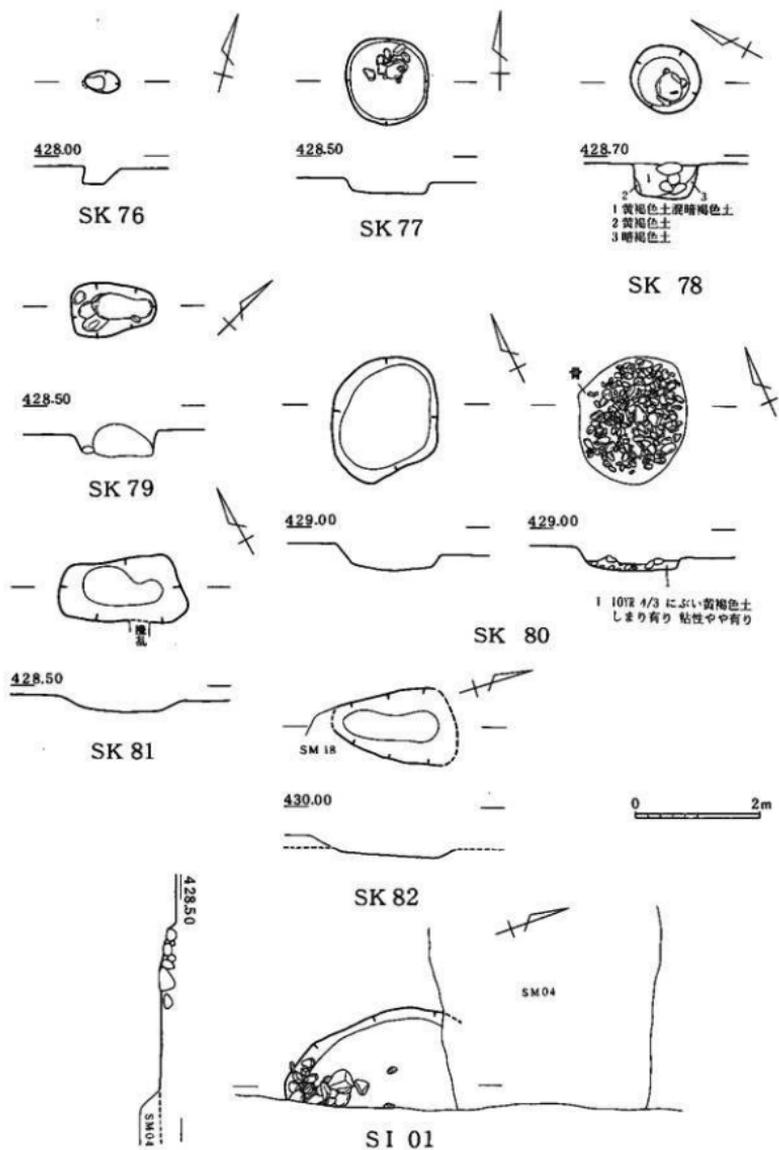


- 1 101R 4/6 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
 2 101R 4/6 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し 灰化物を少量含む
 3 101R 4/6 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
 4 101R 3/4 暗褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
 5 101R 4/4 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
 6 101R 3/3 暗褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
 7 101R 4/4 褐色土 SiL しまり有り 粘性やや有り

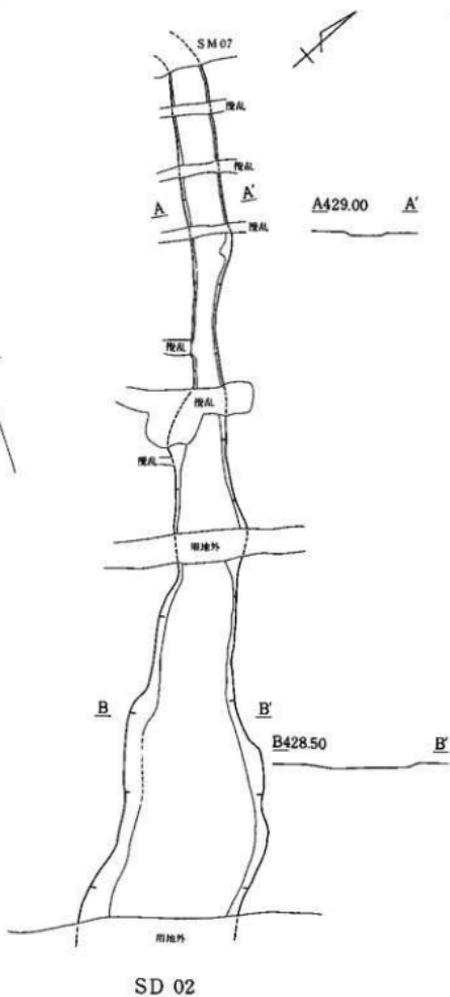
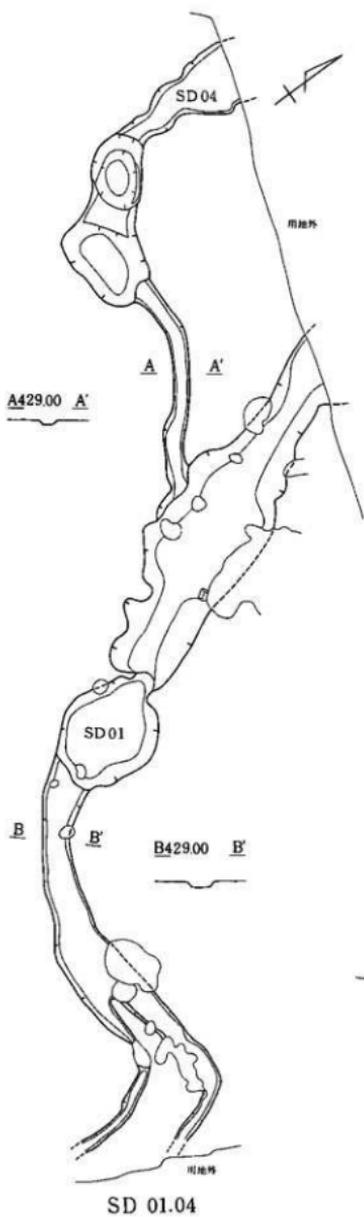
- 1 101R 4/6 褐色土 SiC
 2 101R 4/4 にじみ褐色 CL
 3 101R 3/4 暗褐色土 SiL

- 1 101R 4/6 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し 灰化物を少量含む
 2 101R 3/4 暗褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
 3 101R 4/4 にじみ褐色土 CL しまり有り 粘性有り
 4 101R 4/4 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
 5 101R 4/0 褐色土 SiL しまり有り 粘性やや有り

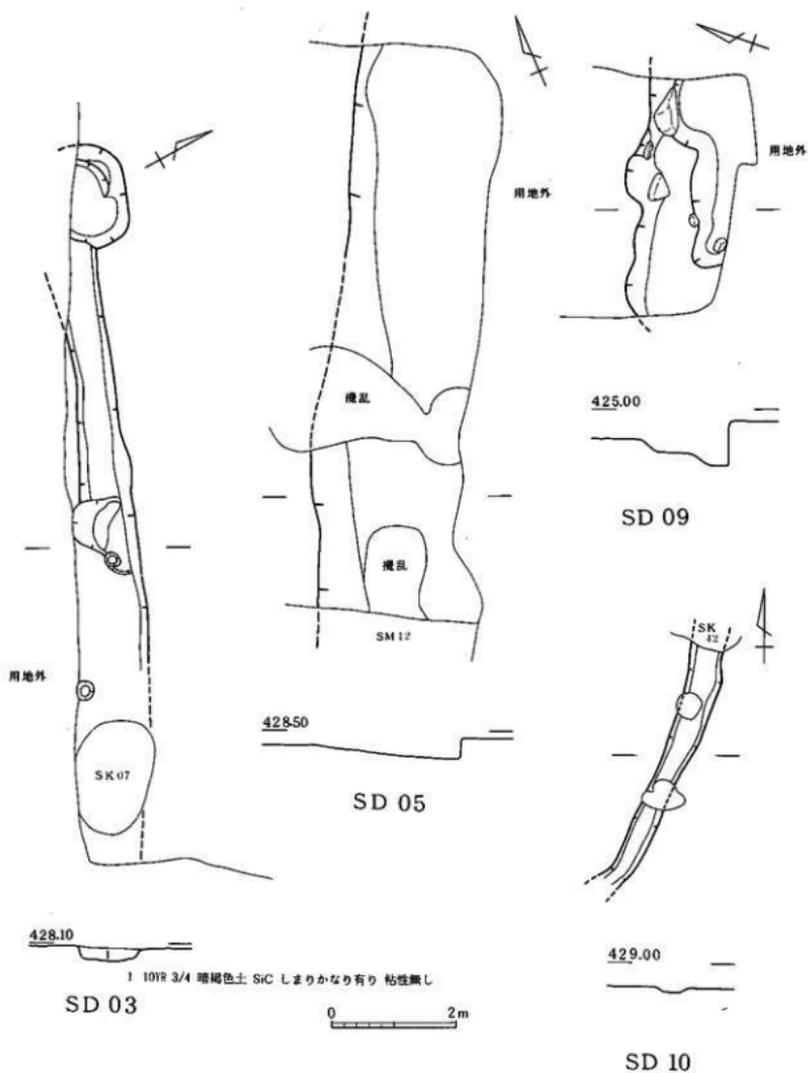
第30図 MGT SK63 SK65 SK66 SK67 SK69 SK70
 SK71 SK72 SK73 SK74 SK75



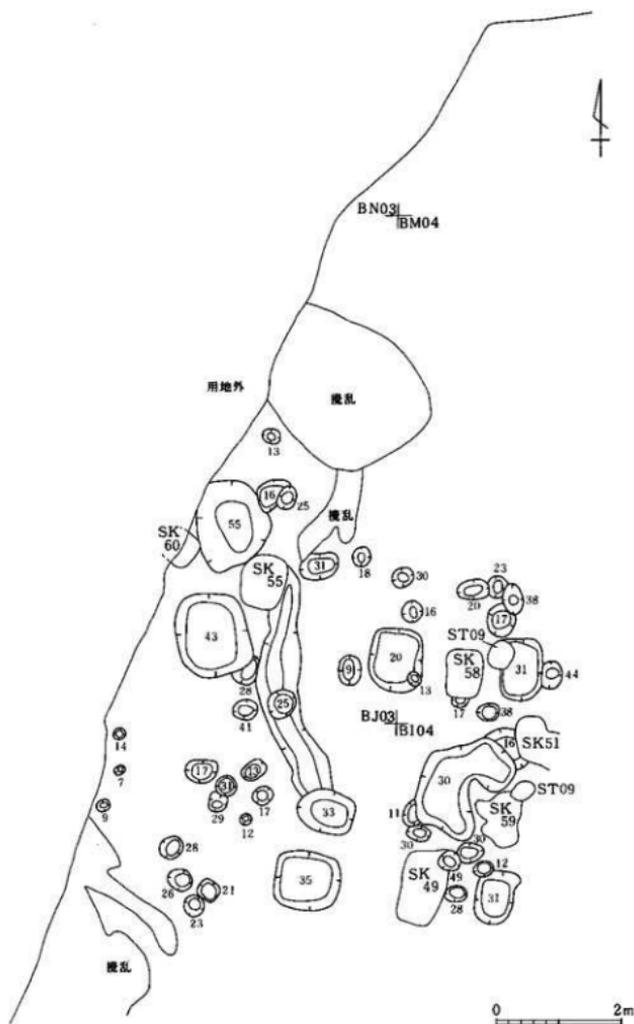
第31図 MGT SK76 SK77 SK78 SK79 SK80 SK81 SK82 SI 01



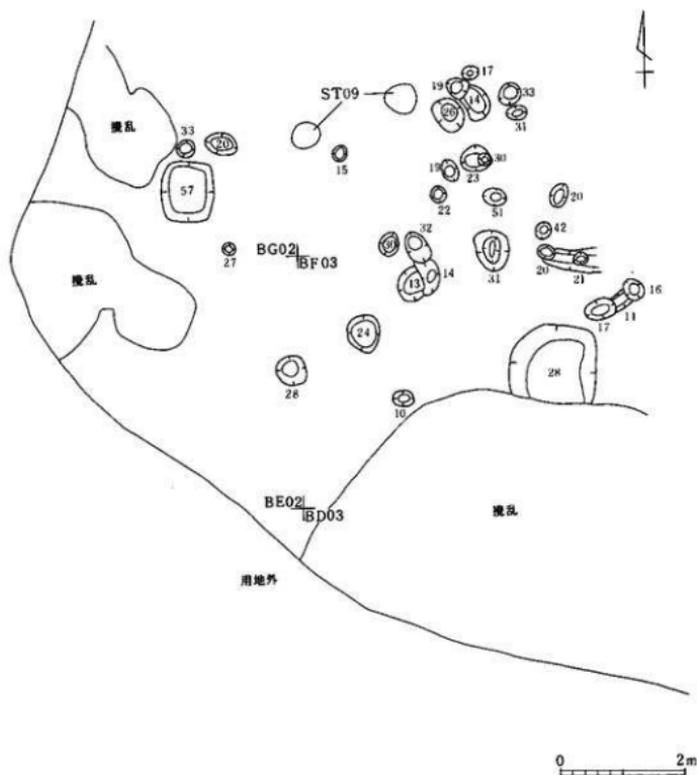
第32圖 SD01 SD02 SD04



第33図 MGT SD03 SD05 SD09 SD10

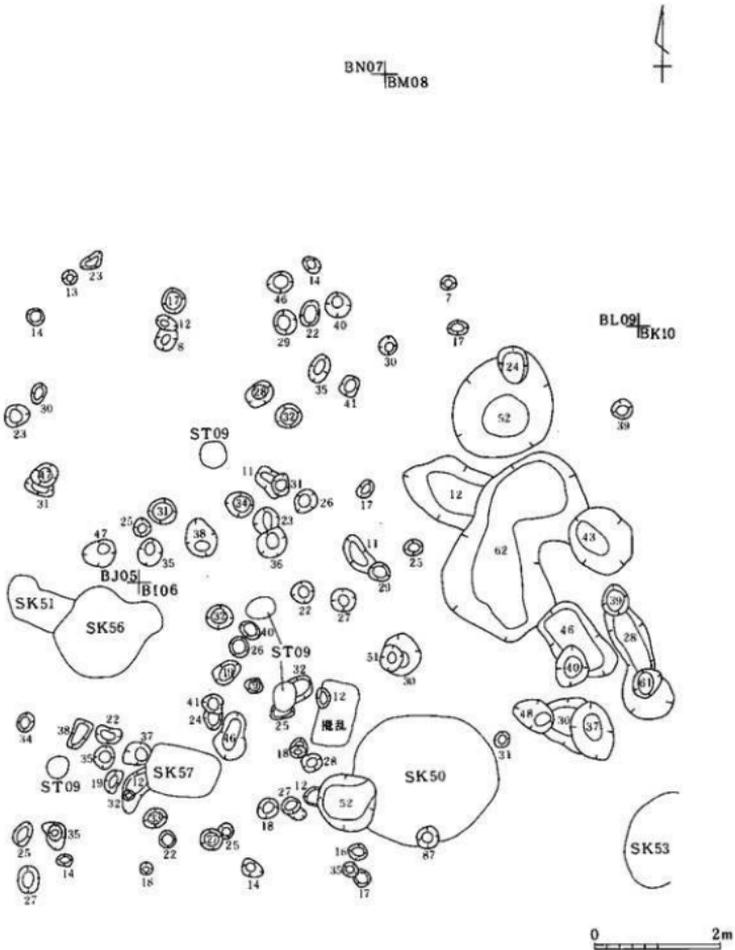


第34図 MGT V区グリットピット(1)

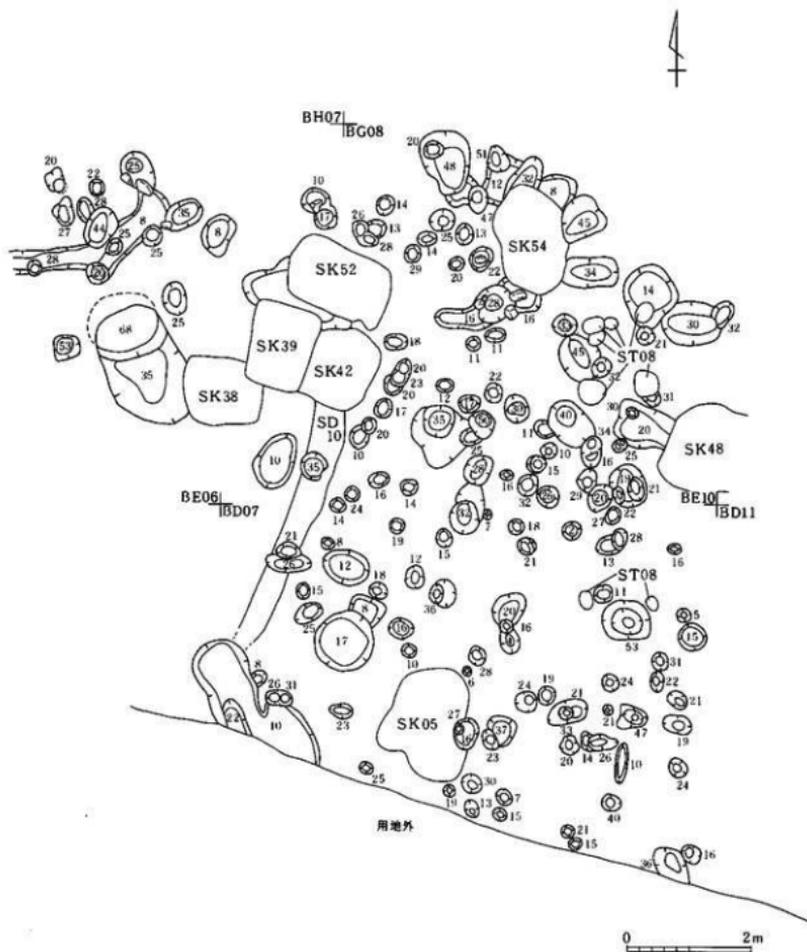


第35図 MGT V区グリットピット(2)

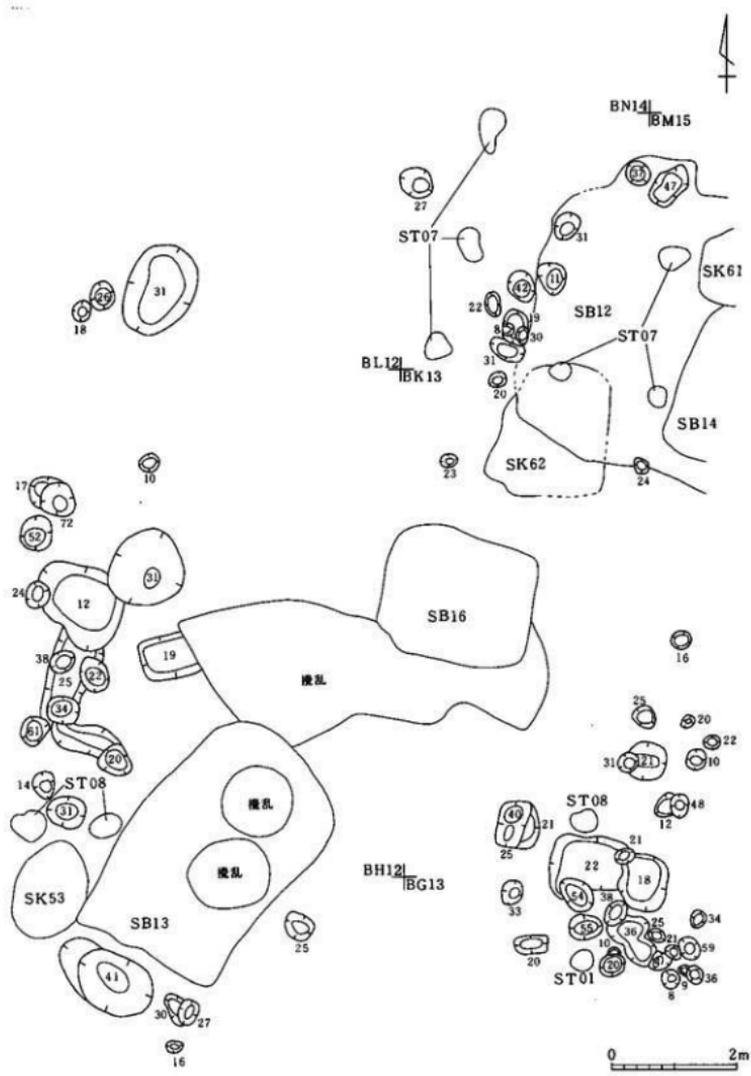
用地外



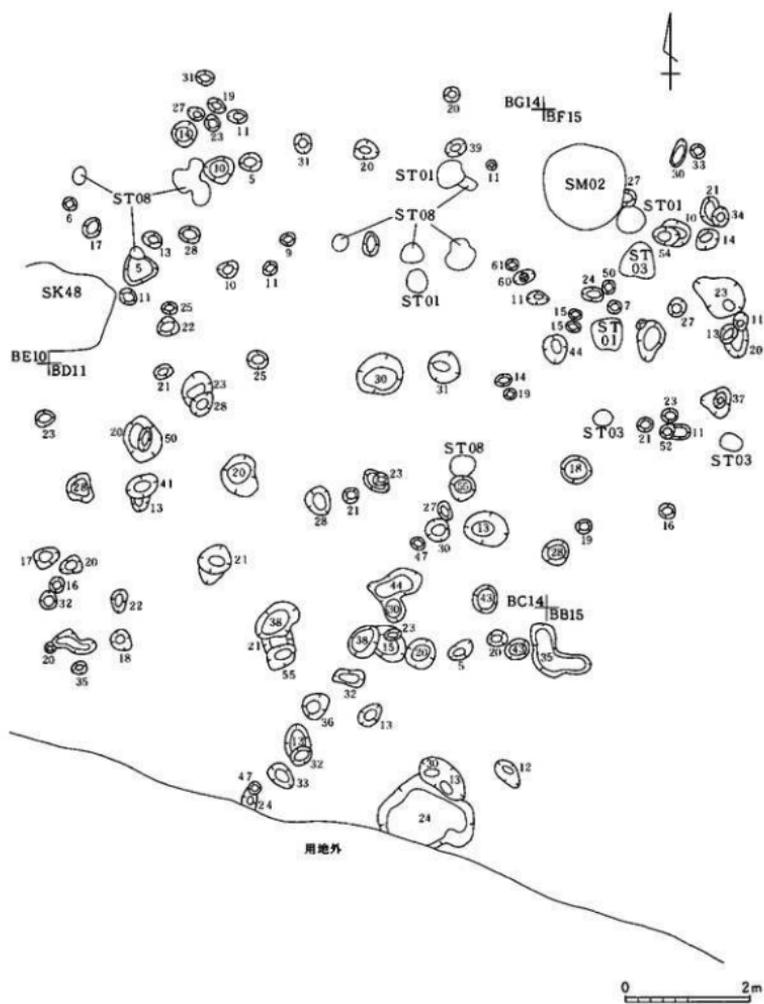
第36図 MGT V区グリットピット(3)



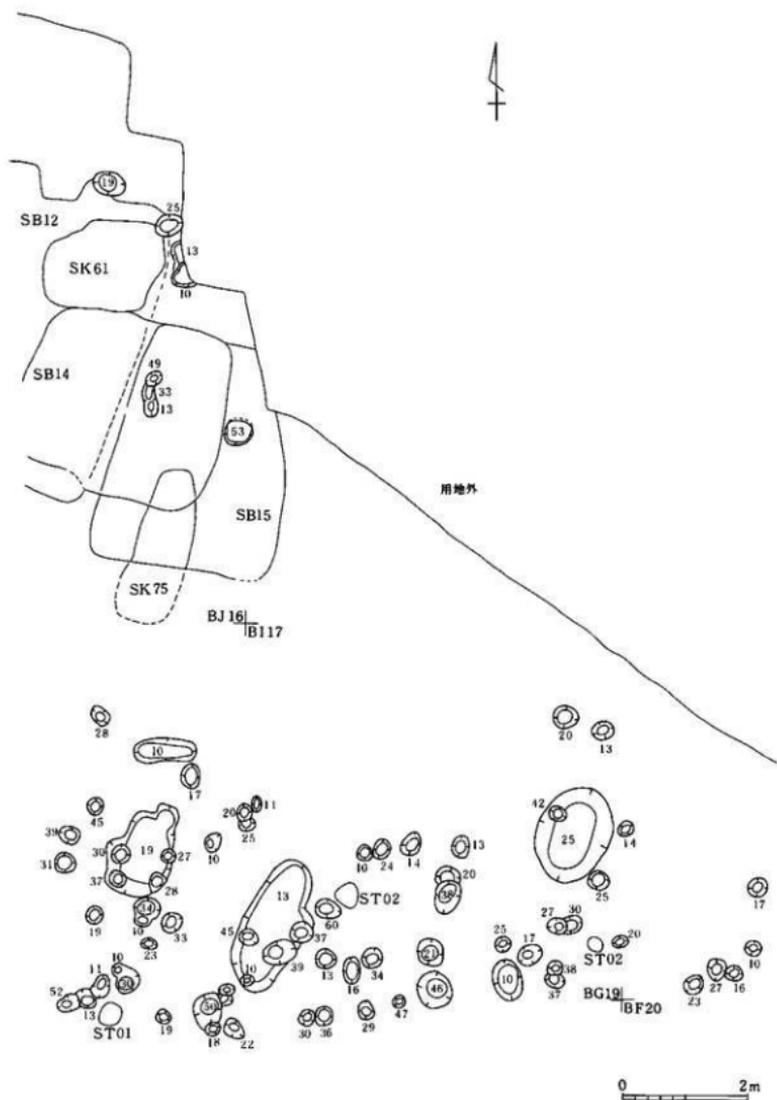
第37図 MGT V区グリットピット(4)



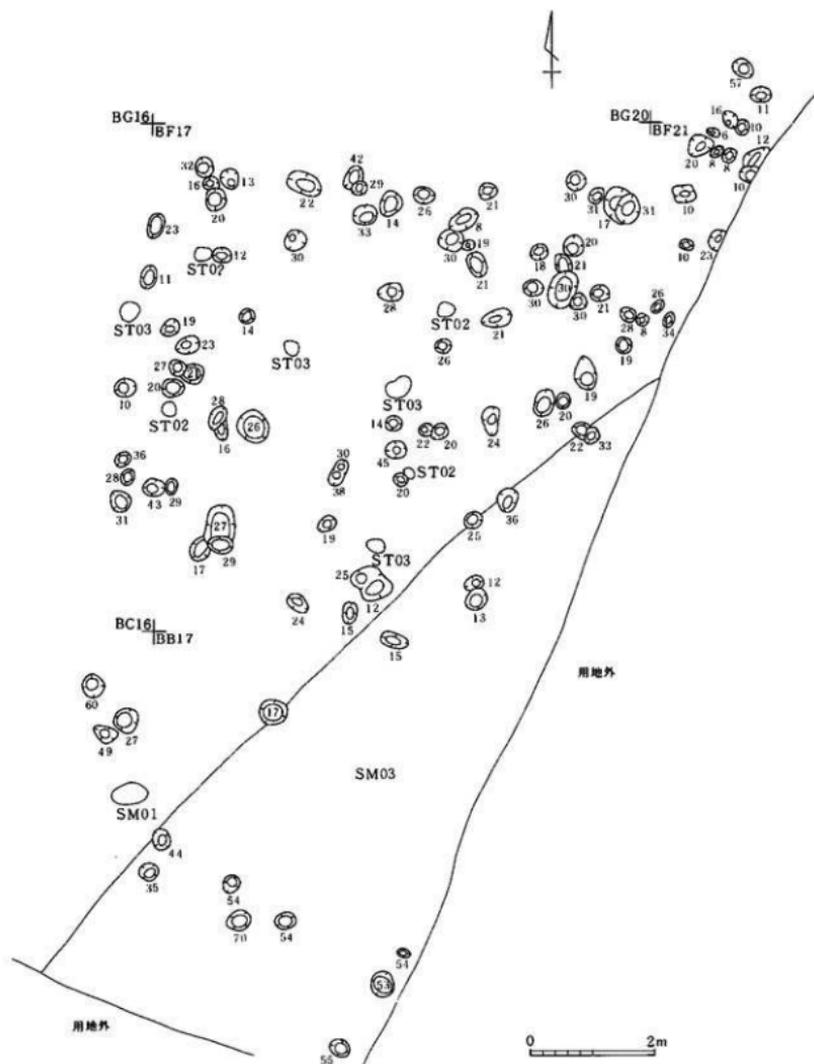
第38図 MGT V区グリットビット(5)



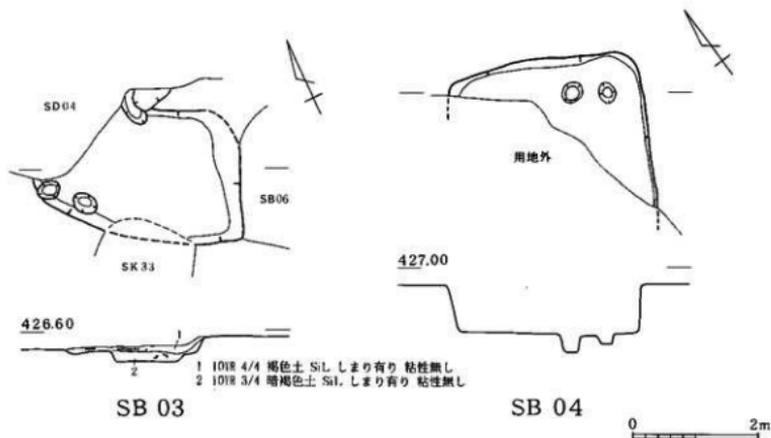
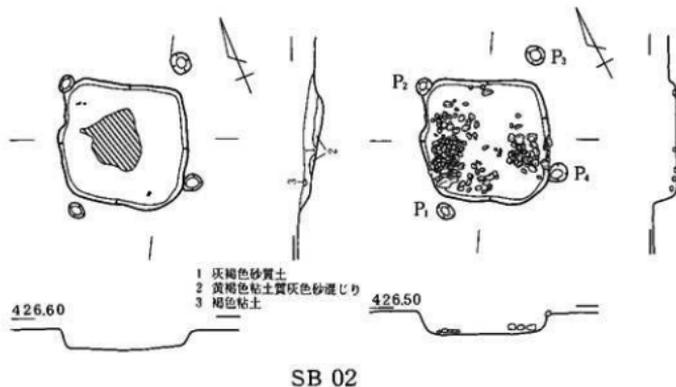
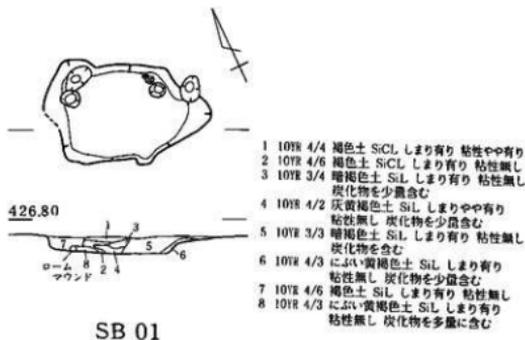
第39図 MGT V区グリットピット(6)



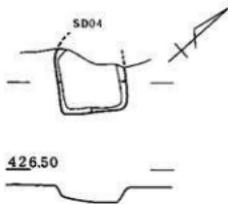
第40図 MGT V区グリットピット(7)



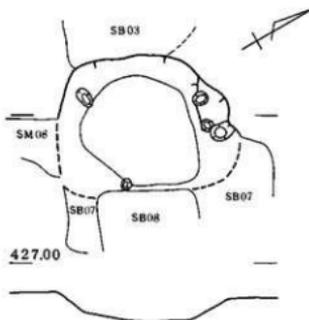
第41図 MGT V区グリットピット(8)



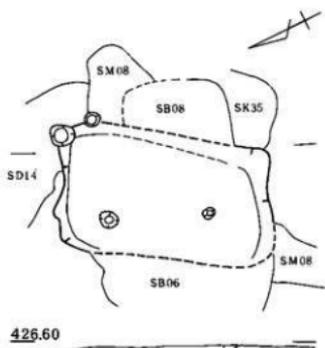
第42図 TKY SB01 SB02 SB03 SB04



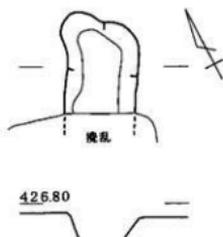
SB 05



SB 06

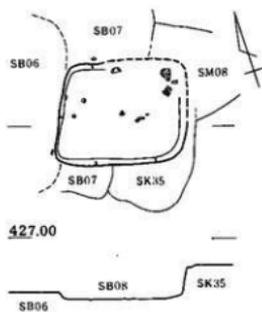


SB 07

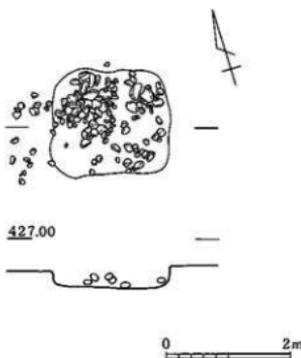


SB 09

- 1 101R 3/3 暗褐色土 SiL しまり有り 粘性無し 礫も少量含む
 2 101R 4/3 濃い黄褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
 3 101R 4/6 暗色土 SiL しまり有り 粘性無し
 4 251R 4/2 暗灰黄色土 SiL しまり有り 粘性有り
 5 101R 3/2 黒褐色土 SiL しまり有り 粘性無し 炭化物を含む

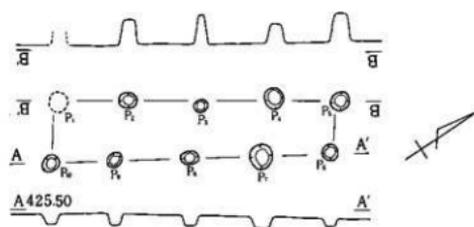


SB 08

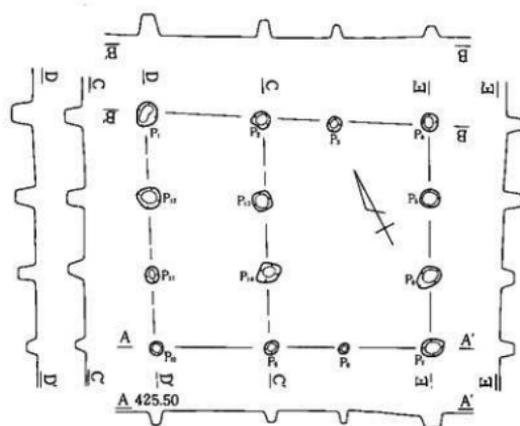


0 2m

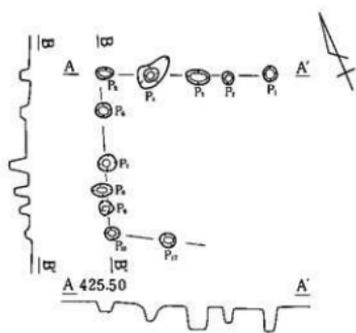
第43図 TKY SB05 SB06 SB07 SB08 SB09



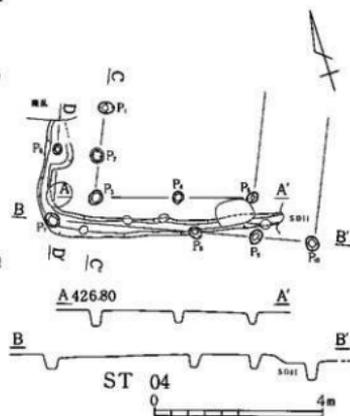
ST 01



ST 02

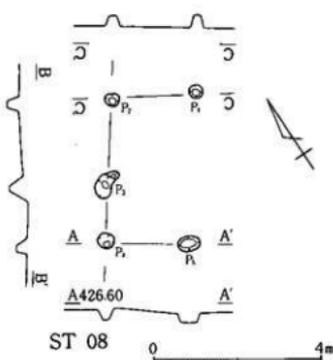
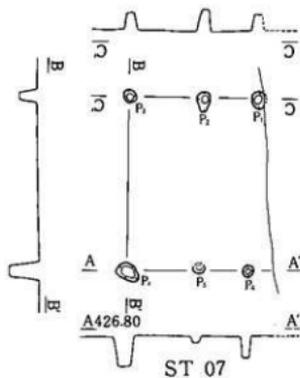
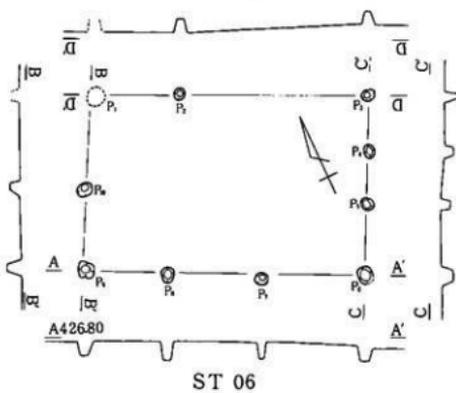
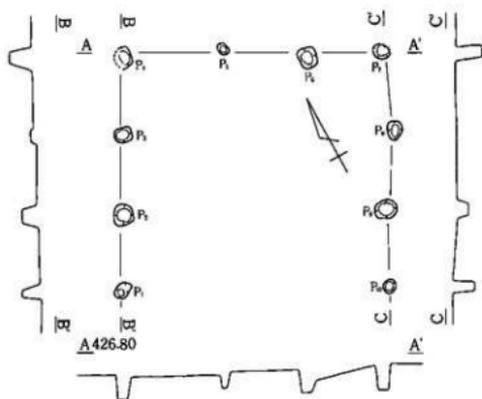


ST 03

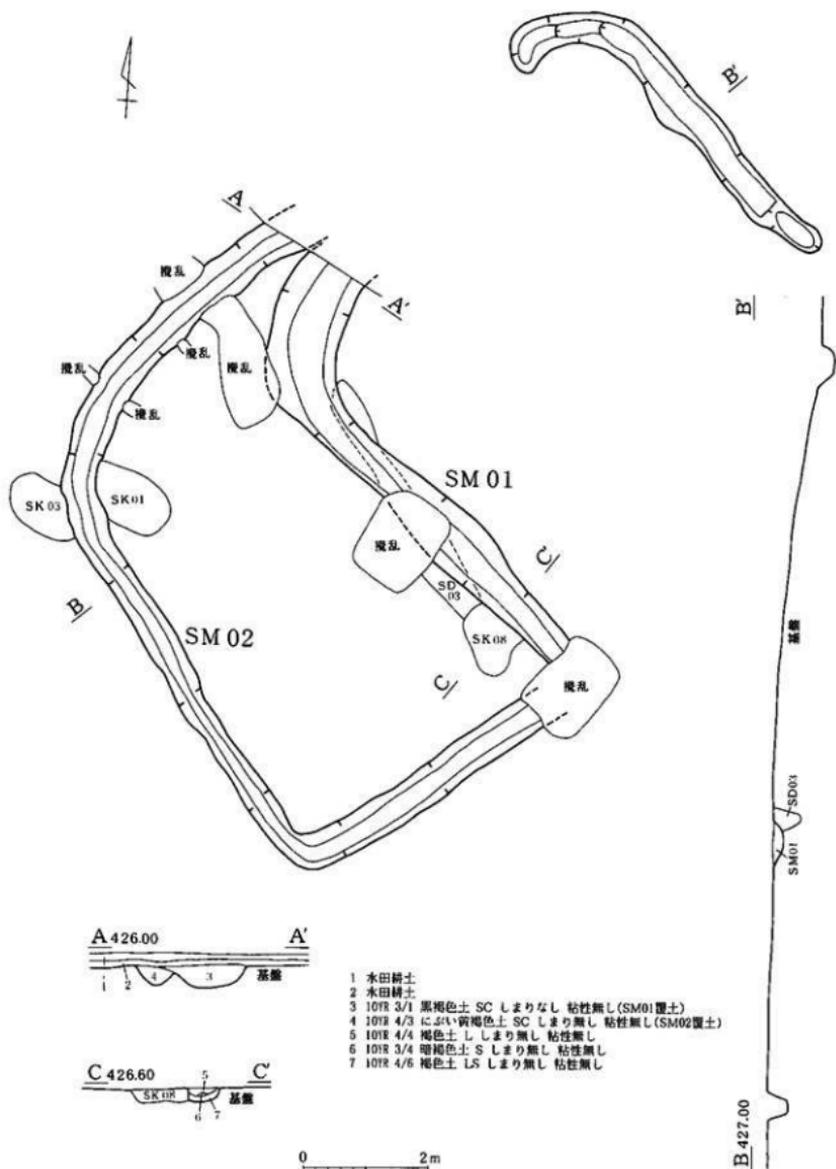


ST 04

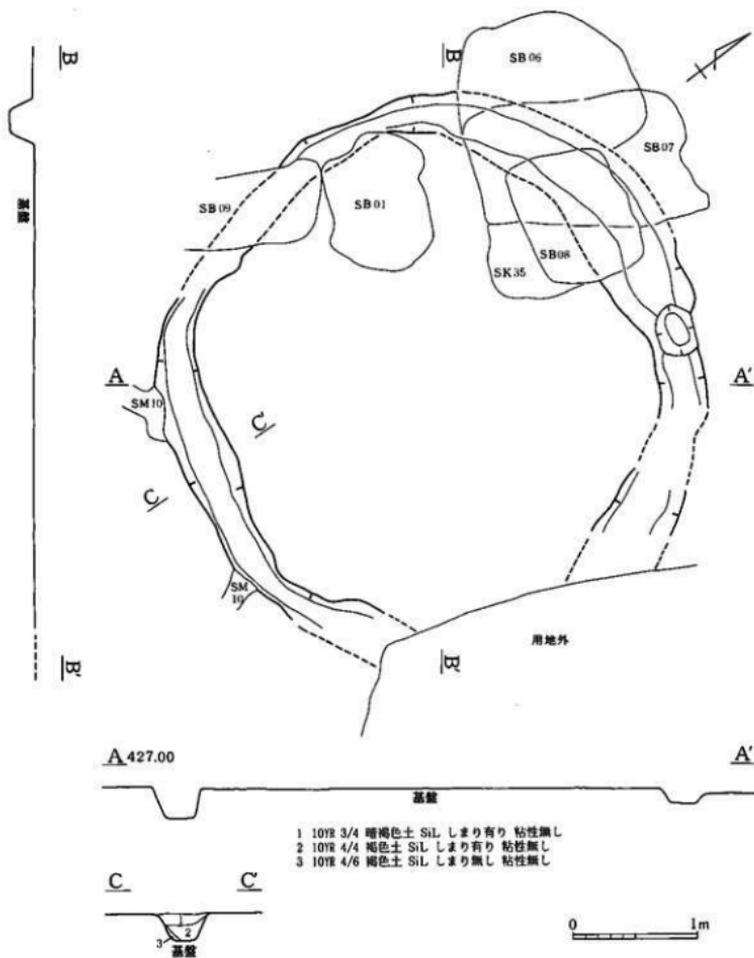
第44圖 TKY ST01 ST02 ST03 ST04



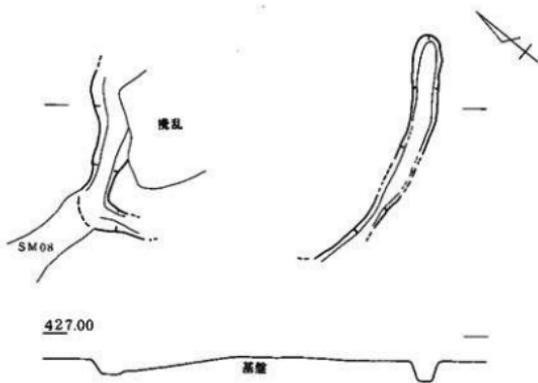
第45图 TKY ST05 ST06 ST07 ST08



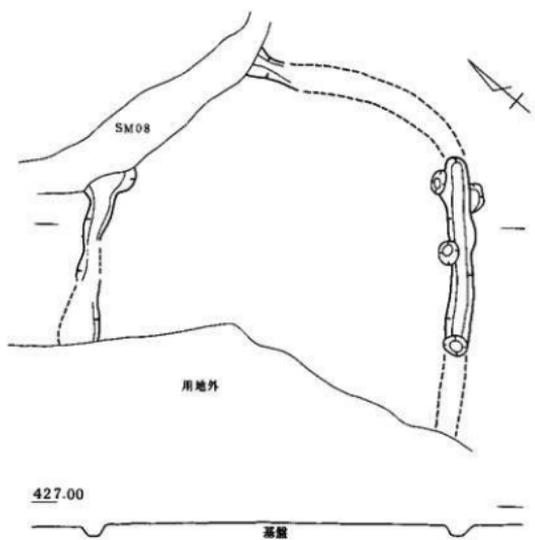
第46図 TKY SM01 SM02



第47図 TKY SM08



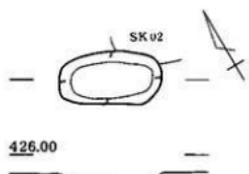
SM 09



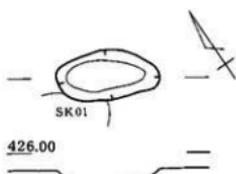
SM 10

0 2m

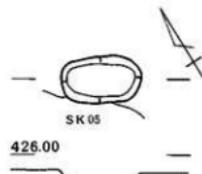
第48図 TKY SM09 SM10



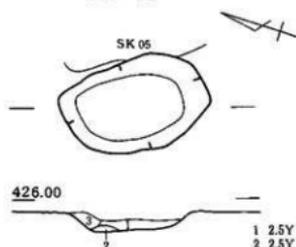
SK 01



SK 02

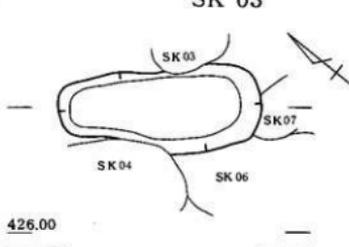


SK 03



SK 04

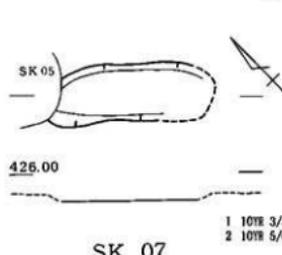
- 1 2.5Y 4/2 暗灰黄色土
- 2 2.5Y 4/2 暗灰黄色土
- 3 10YR 5/4 におい黄褐色土



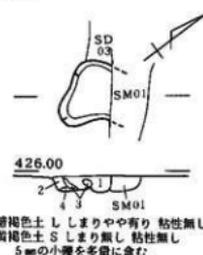
SK 05



SK 06



SK 07



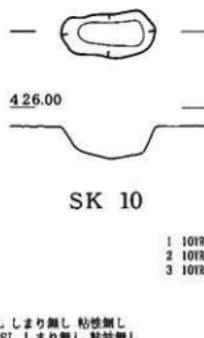
SK 08

- 1 10YR 3/3 暗褐色土 しまりやや有り 粘性無し
- 2 10YR 5/6 黄褐色土 しまり無し 粘性無し
- 3 2.5Y 4/2 暗灰黄色土 5mmの小礫を多数を含む
- 4 10YR 4/4 褐色土 SL しまりやや有り 粘性無し



SK 09

- 1 10YR 2/1 黒色土 SL しまり無し 粘性無し
- 2 10YR 3/4 暗褐色土 SL しまり無し 粘性無し
- 3 10YR 3/3 暗褐色土 SL しまり無し 粘性無し
- 4 10YR 3/4 暗褐色土 SL しまり無し 粘性無し



SK 10



SK 11

- 1 10YR 3/3 暗褐色土に10YR 4/4 褐色土と10YR 2/3 黒褐色土が混じる
- 2 10YR 3/3 暗褐色土に10YR 5/4 におい黄褐色土が混じる
- 3 10YR 4/4 褐色土

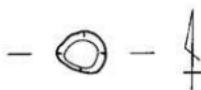
第49図 TKY SK01 SK02 SK03 SK04 SK05 SK06
SK07 SK08 SK09 SK10 SK11

0 2m



426.00

SK 12



426.00

SK 13



425.50

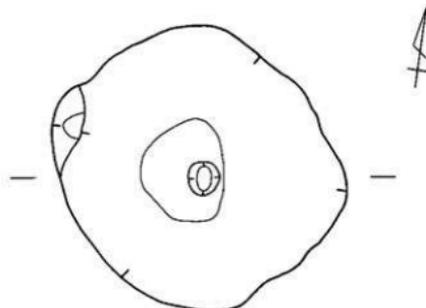
SK 14

1 10TR 3/2 黒褐色土 SL しまり有り 粘性無し



426.00

SK 21



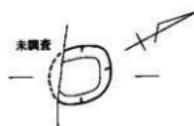
426.00

SK 24



426.00

SK 22



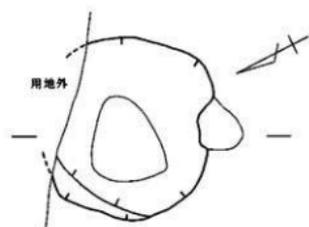
425.50

SK 26



426.80

SK 27



425.20

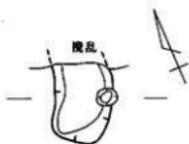
用地外

SK 25

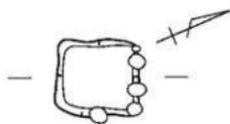
- 1 10TR 3/3 暗褐色土 SL
- 2 10TR 4/6 褐色土 SL
- 3 10TR 3/2 黒褐色土 SL

0 2m

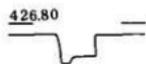
第50図 TKY SK12 SK13 SK14 SK21 SK22 SK24 SK25 SK26 SK27



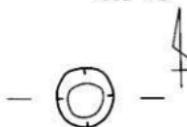
SK 28



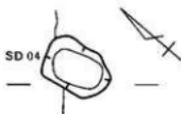
SK 29



SK 30

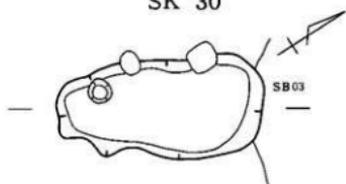


SK 31

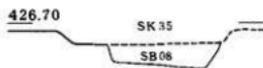
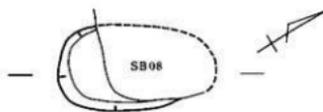


- 1 黒色土
- 2 褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 薄灰土

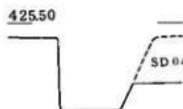
SK 32



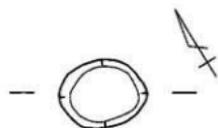
SK 33



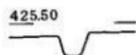
SK 35



SK 36



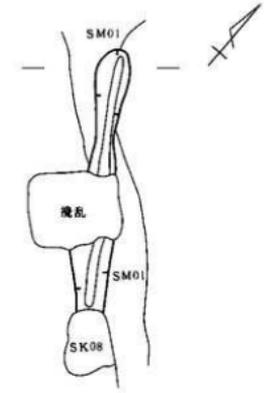
SK 37



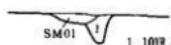
SK 38



第51図 TKY SK28 SK29 SK30 SK31 SK32 SK33 SK35 SK36 SK37 SK38



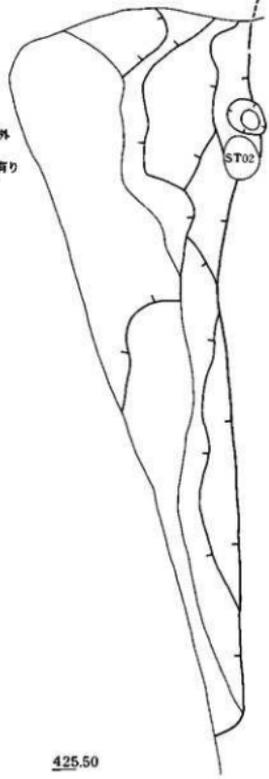
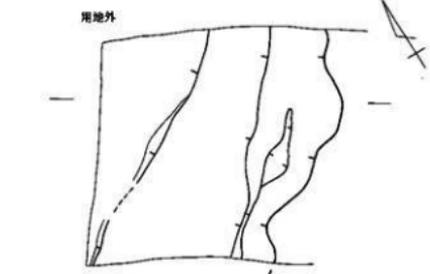
427.00



SD 03

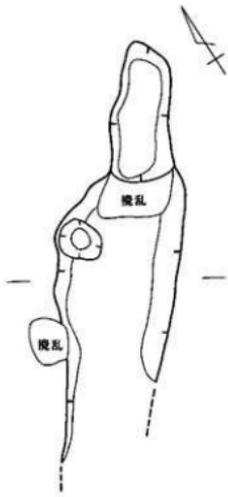
1 10R 4/6 褐色土 LS しまりやや有り
粘性やや有り 小礫含む

用地外



425.50

SD 06

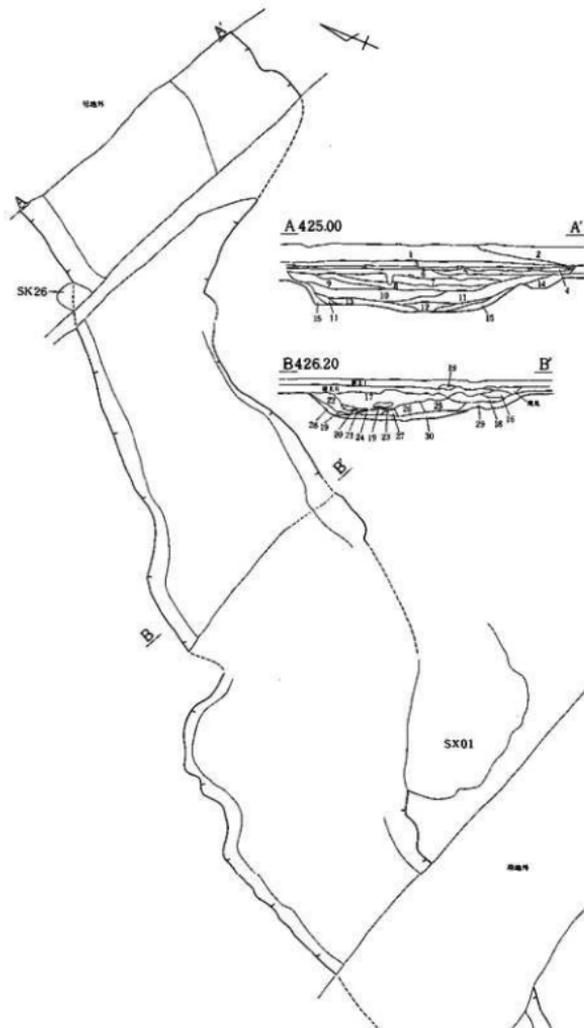


426.00

SD 05



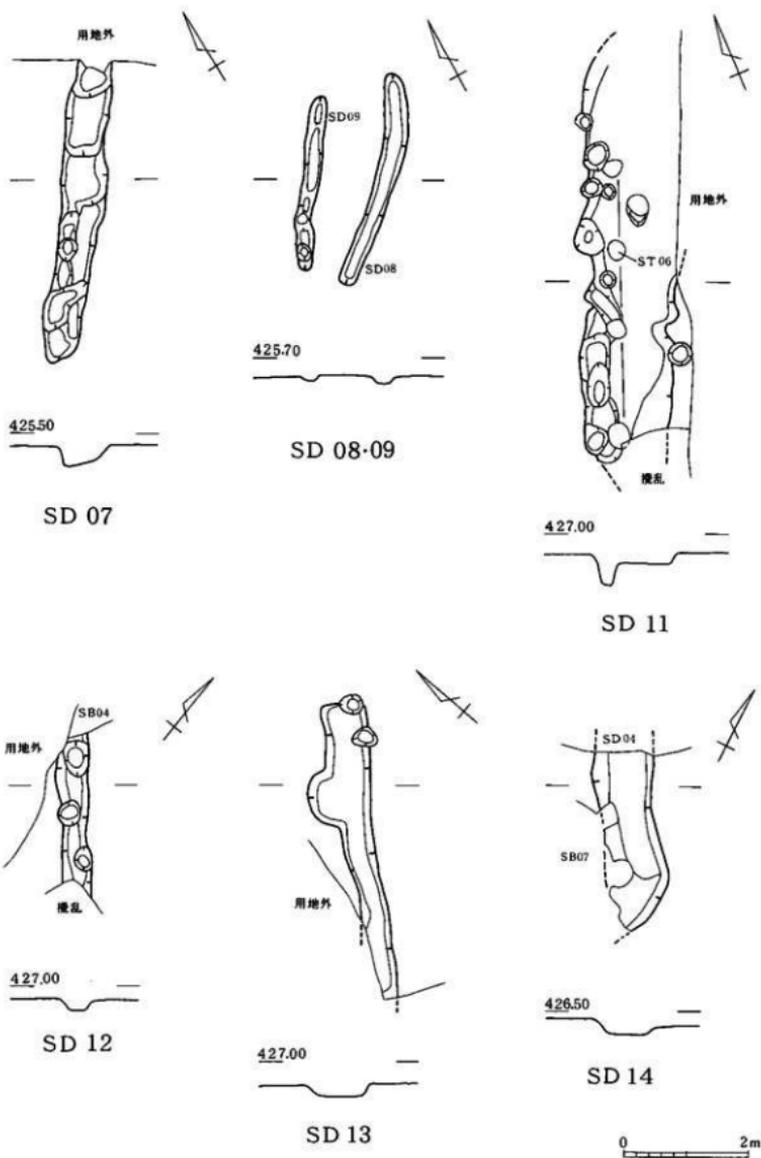
第52図 TKY SD03 SD05 SD06



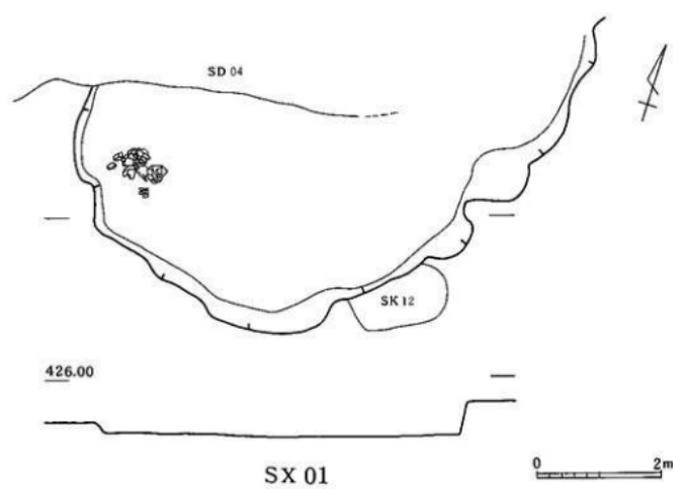
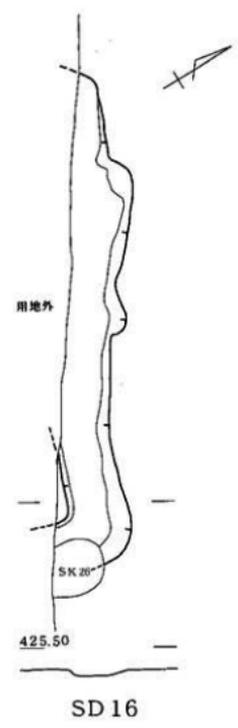
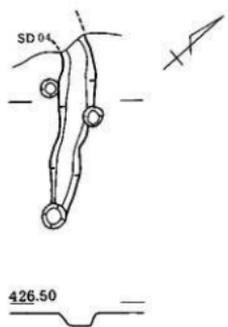
- 1 造成土
- 2 10YR 5/8 黄褐色土 礫を含む
- 3 10YR 4/1 褐灰色土
- 4 10YR 4/4 褐色土 水田跡
- 5 10YR 5/2 灰黄褐色土 砂質土
- 6 10YR 5/6 黄褐色土 土
- 7 10YR 5/6 黄褐色土 褐色土ブロック少量含む
- 8 10YR 4/4 褐色土
- 9 10YR 4/3 にぶい黄褐色土
- 10 10YR 4/2 灰黄褐色土
- 11 10YR 3/2 黒褐色土 礫少量含む
- 12 10YR 7/4 にぶい黄褐色土 礫を多く含む
- 13 10YR 4/2 灰黄褐色土 礫を含む
- 14 10YR 3/1 黒褐色土 浅灰褐色土ブロックを含む
- 15 10YR 4/2 灰黄褐色土 砂礫を含む
- 16 10YR 4/6 褐色土 砂質土 礫を多く含む
- 17 10YR 4/6 褐色土に暗褐色土が混じる 砂質土 礫を含む
- 18 10YR 4/6 褐色土 砂質土
- 19 10YR 4/2 灰黄褐色土 砂礫を含む
- 20 10YR 4/2 灰黄褐色土 砂質土
- 21 10YR 6/6 明黄褐色土 砂質土 礫を多く含む
- 22 10YR 3/3 暗褐色土 砂質土
- 23 10YR 7/6 明黄褐色土 砂質土
- 24 10YR 7/6 明黄褐色土 砂質土 礫を多く含む
- 25 10YR 3/1 黒褐色土
- 26 10YR 3/3 暗褐色土 砂質土
- 27 10YR 6/4 にぶい黄褐色土 砂質土
- 28 10YR 4/2 灰黄褐色土 砂質土
- 29 10YR 3/4 暗褐色土 砂質土 礫を多く含む
- 30 10YR 3/3 暗褐色土とにぶい黄褐色土との互層 砂質土

第53図 TKY SD04



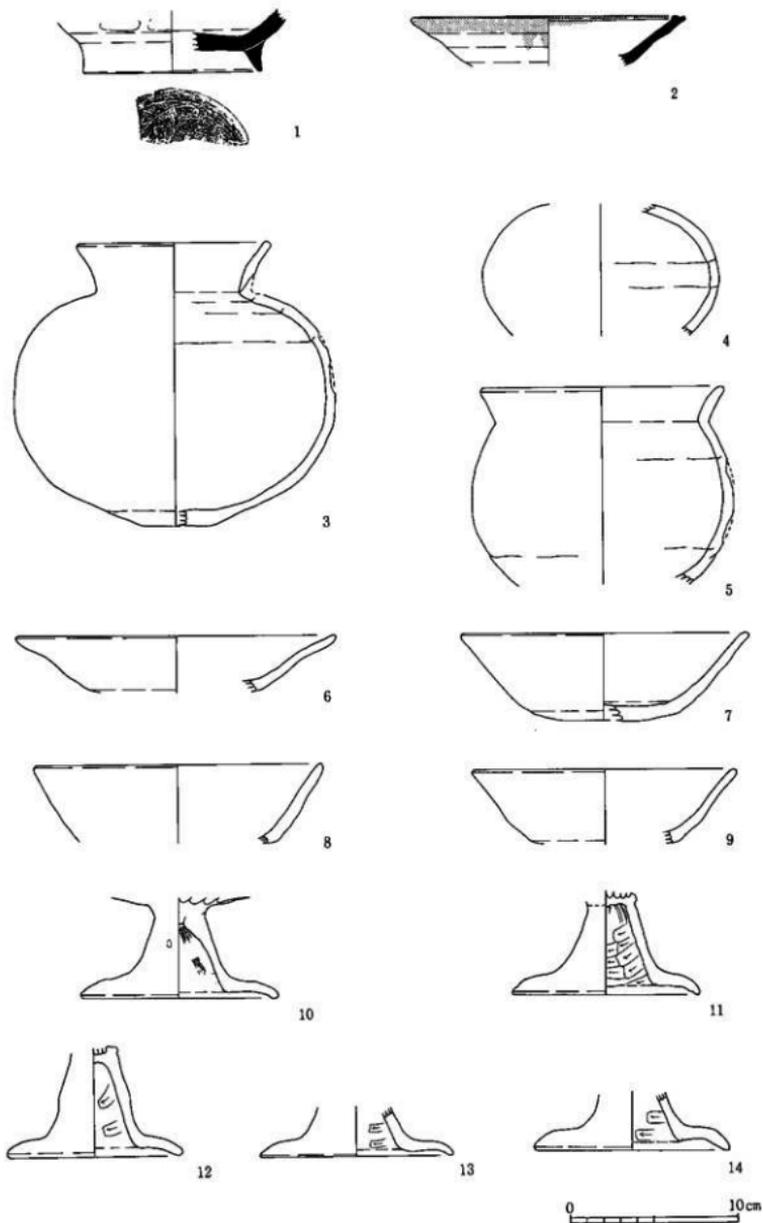


第54図 TKY SD07 SD08 SD09 SD11 SD12 SD13 SD14

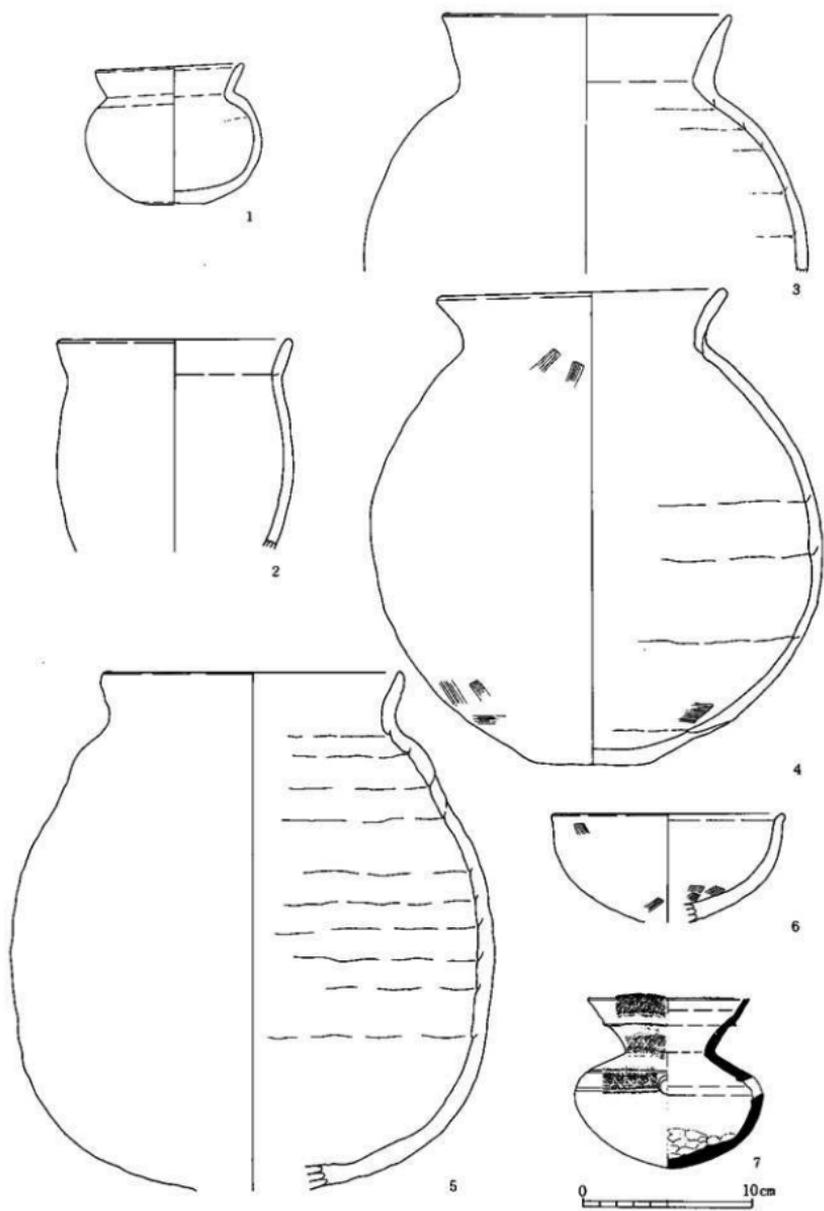


第55圖 TKY SD15 SD16 SX01

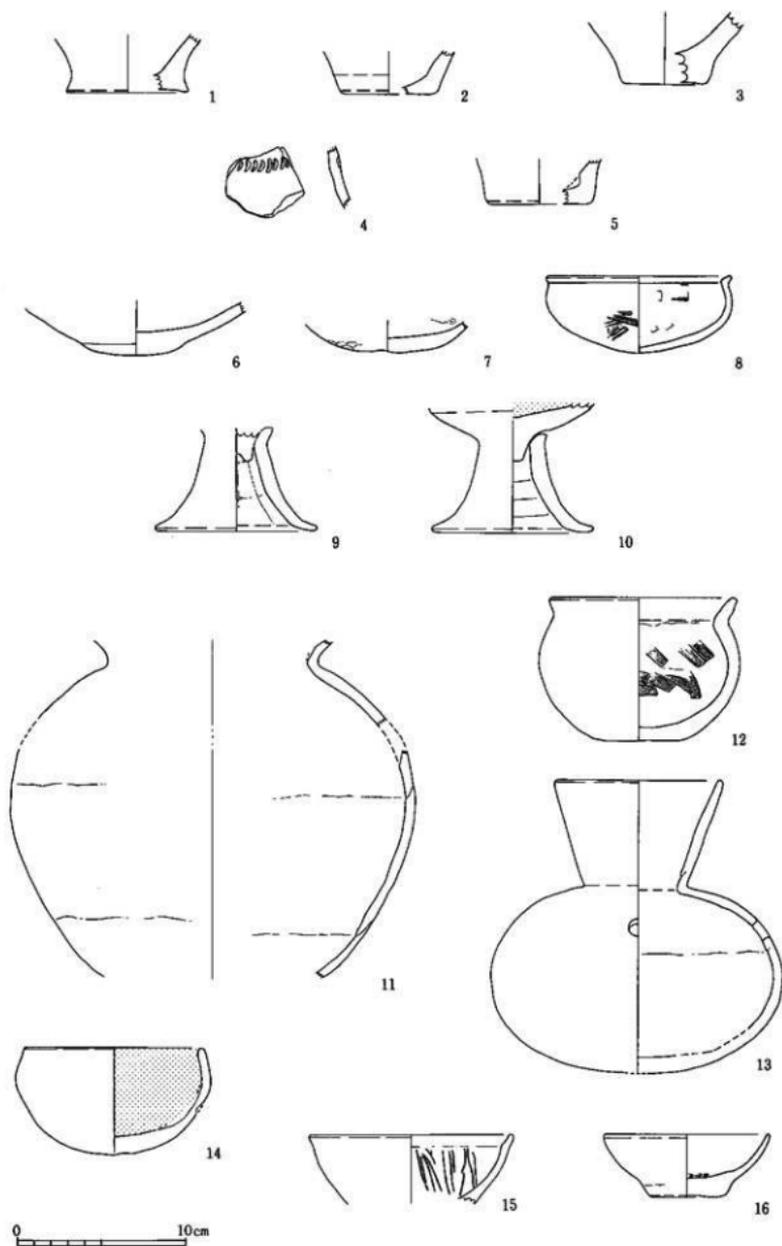
遺 物 図 版



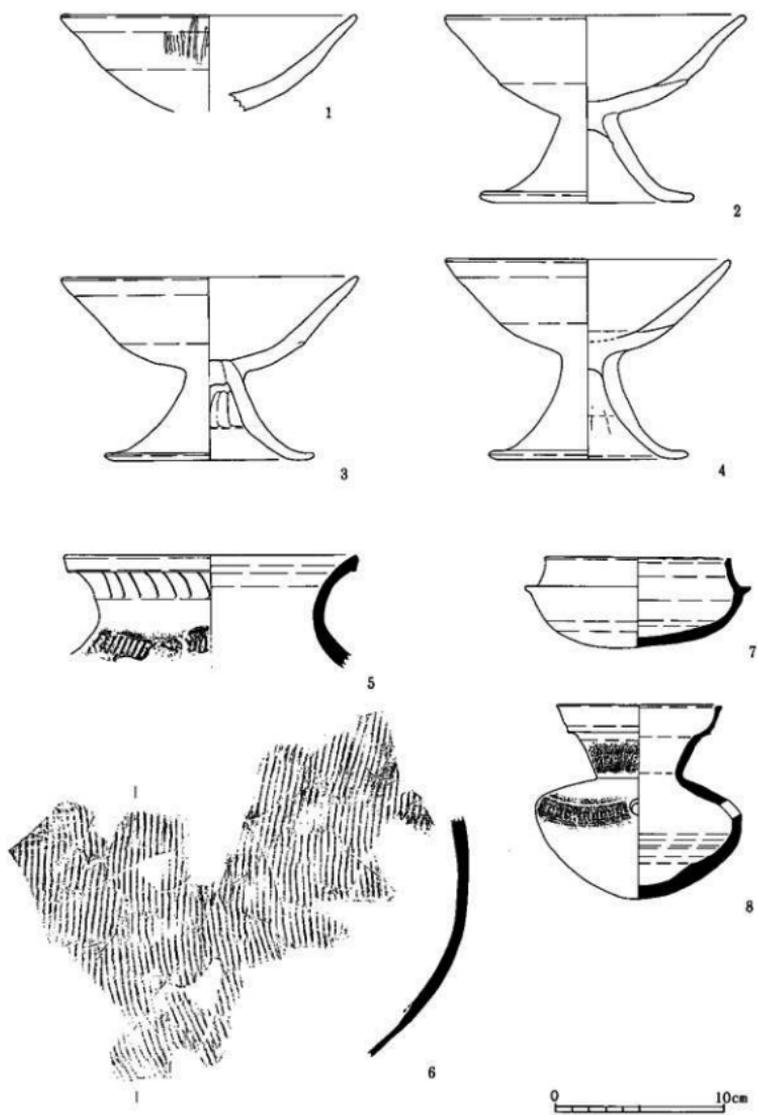
第56圖 MGT 1 SB04 2 SB12·15 3~14 SM03



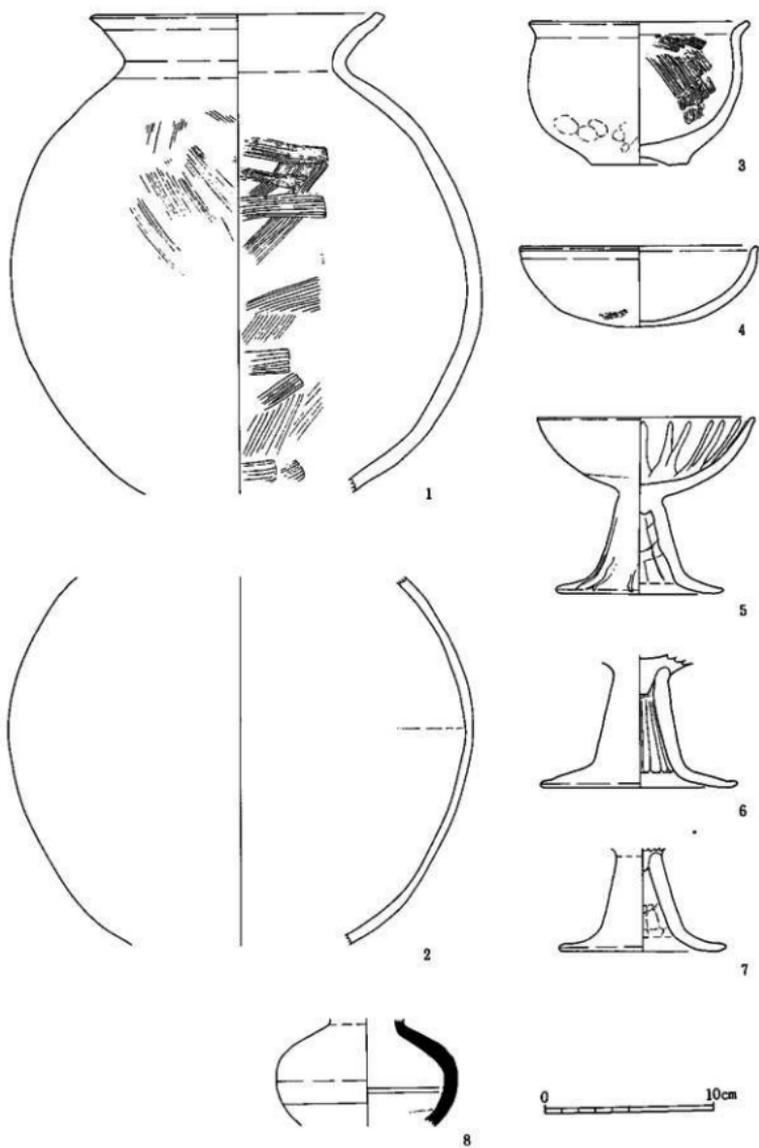
第57図 MGT SM04



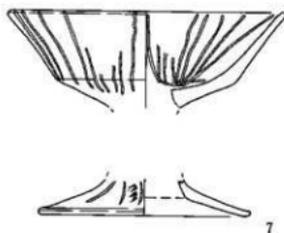
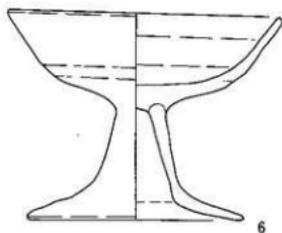
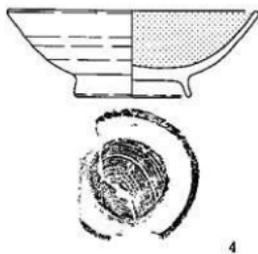
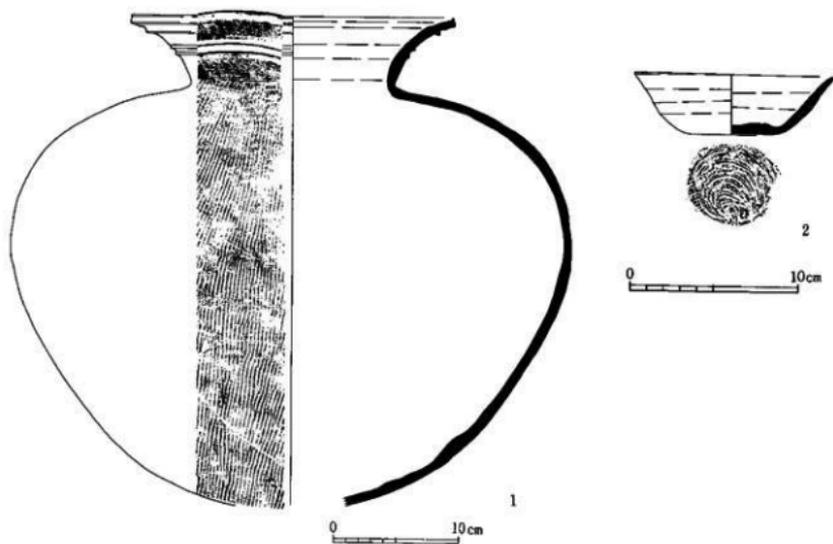
第58圖 MGT 1~3 SM06 4・5 SM10 6~10 SM15 11~16 SM07



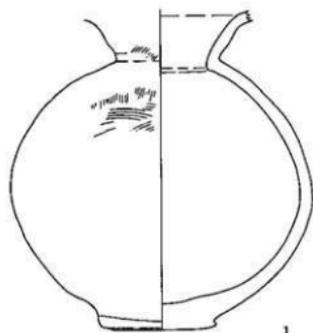
第59圖 MGT SM07



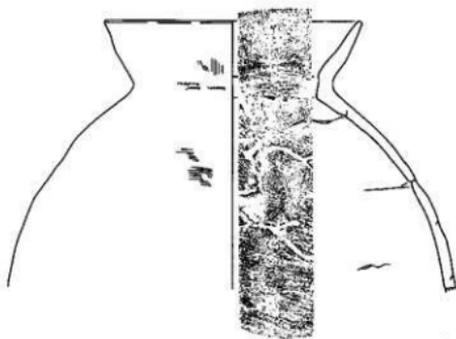
第60图 MGT SM18



第61圖 MGT 1・2 SM19 3・4 SM20 5~7 SM21



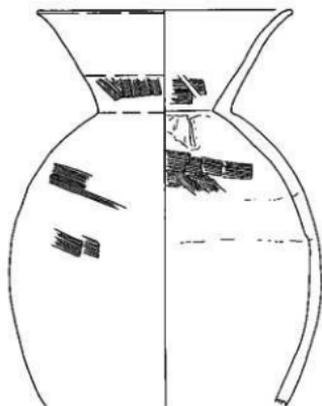
1



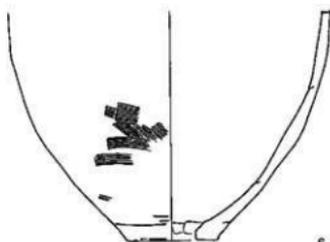
2



3



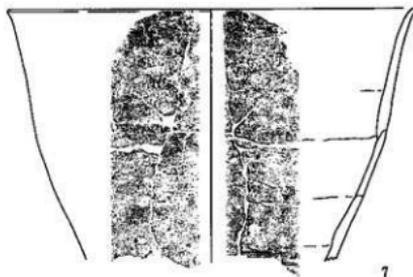
4



6



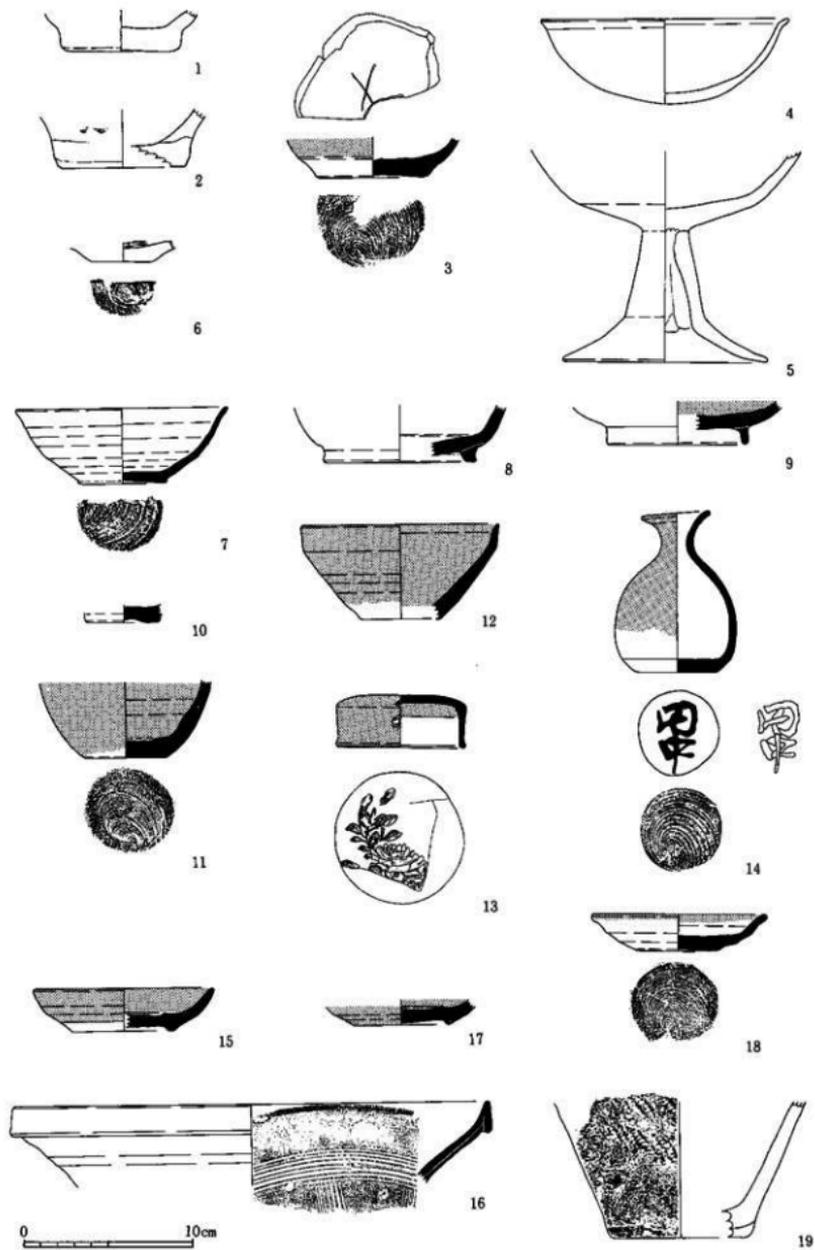
5



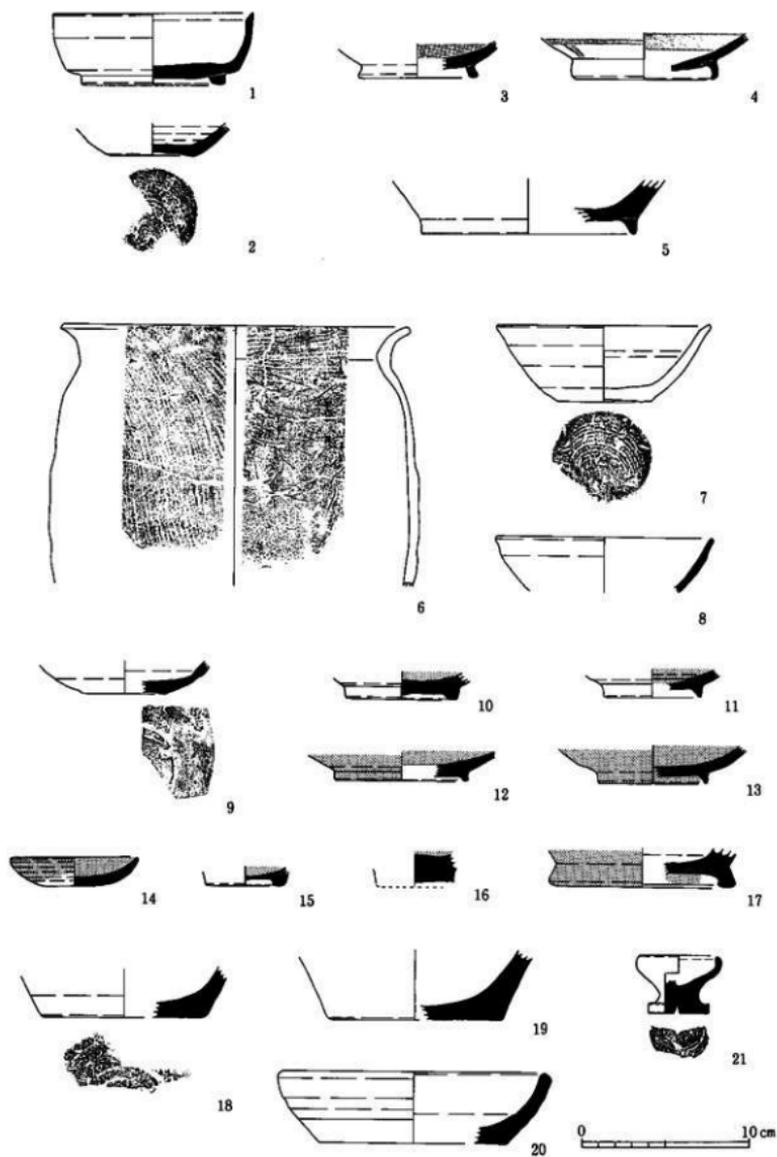
7



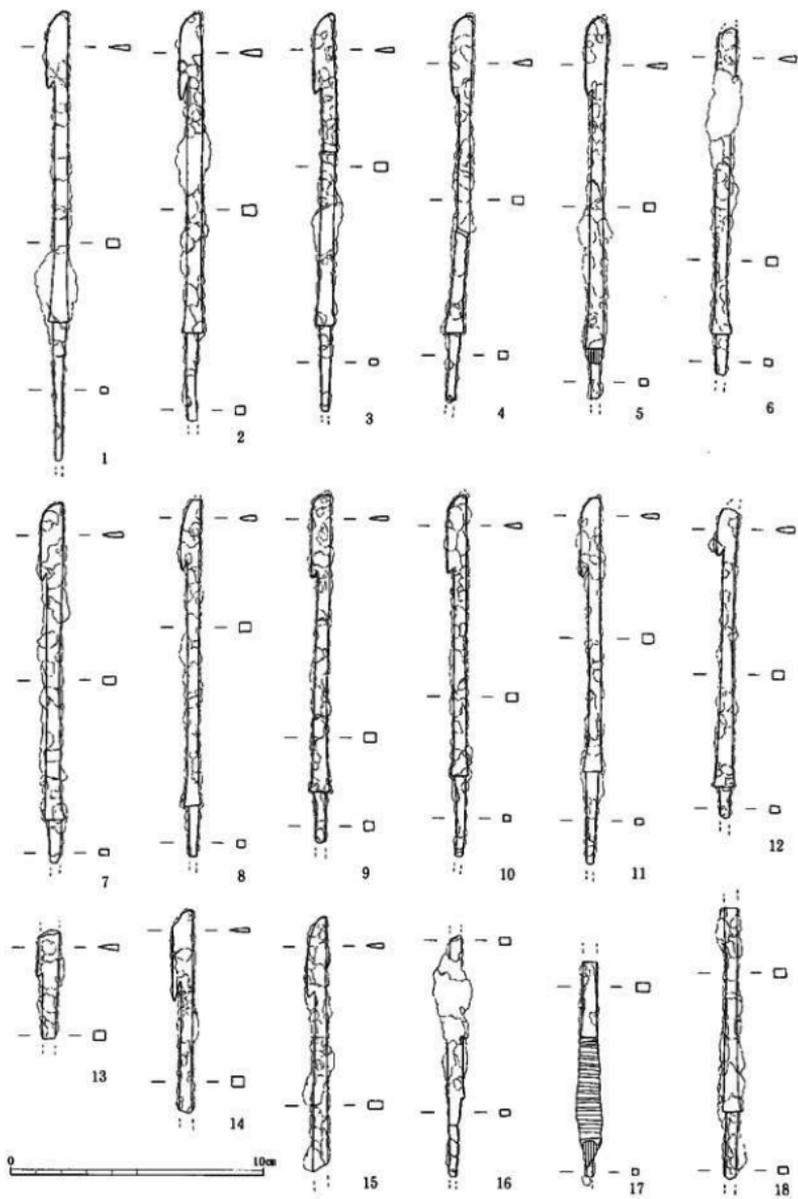
第62図 MGT SM22



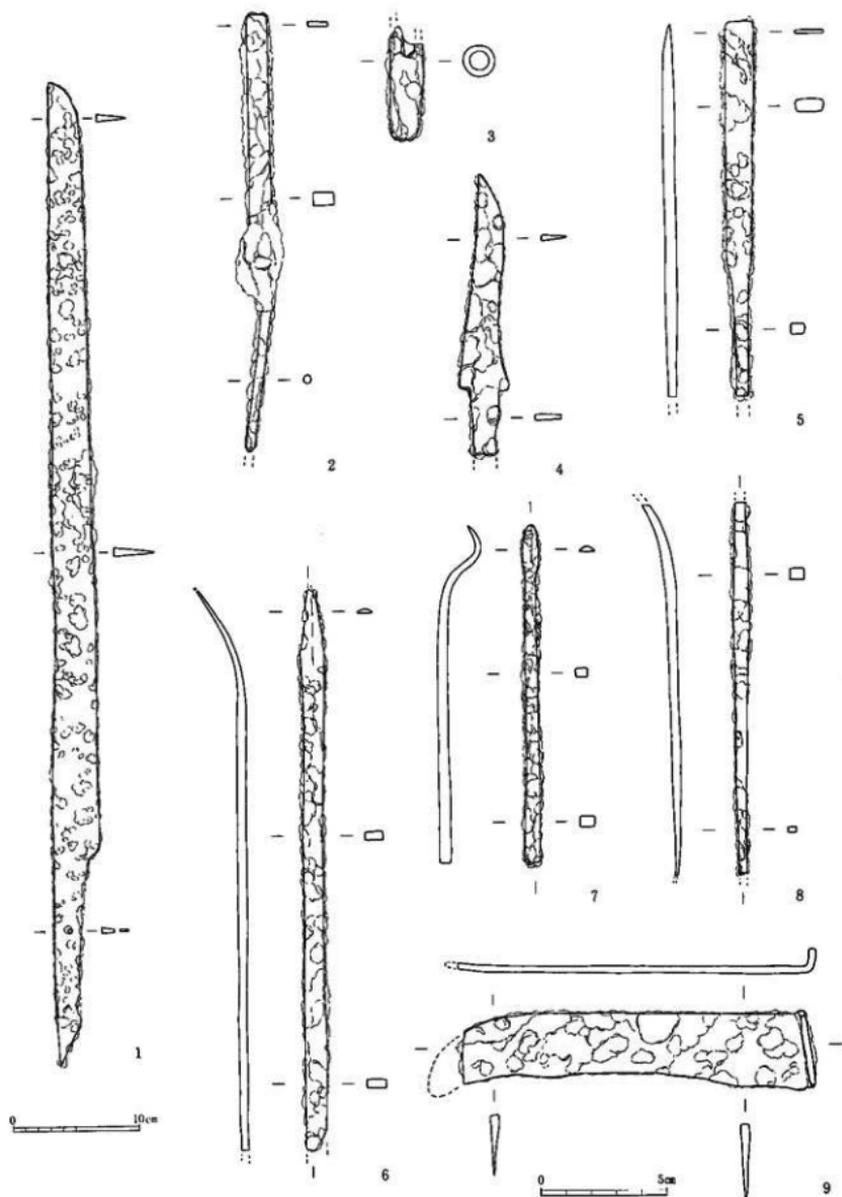
第63図 MGT 1・2 SK04 3 SK20 4・5 SK24 6 SK29 7~9 SK31 10-11 SK51
 12-13 SK54 14 SK82 15-16 SK55 17 SK57 18 SK77 19 SK63



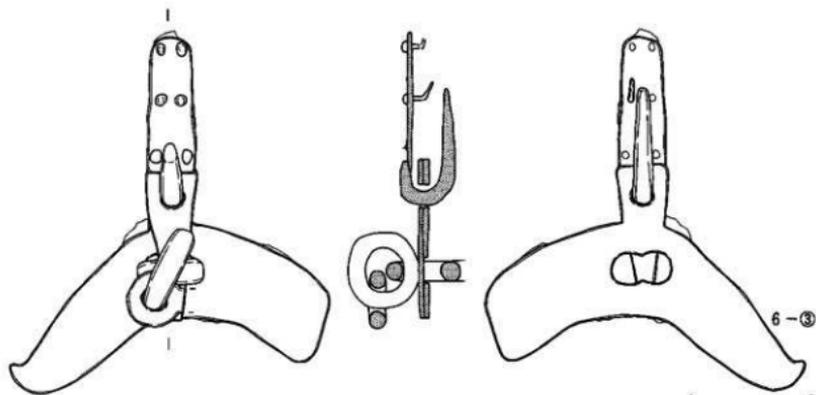
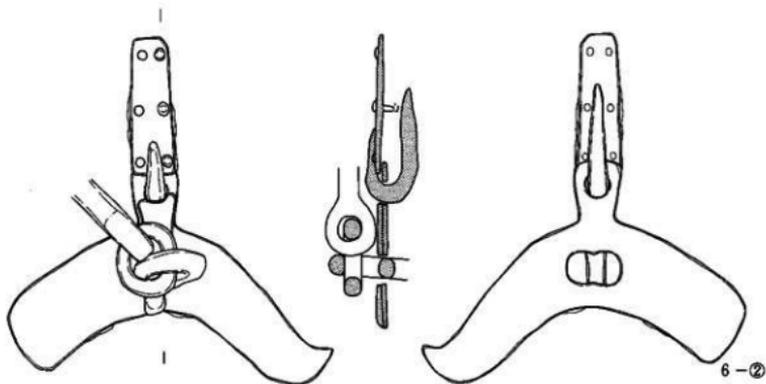
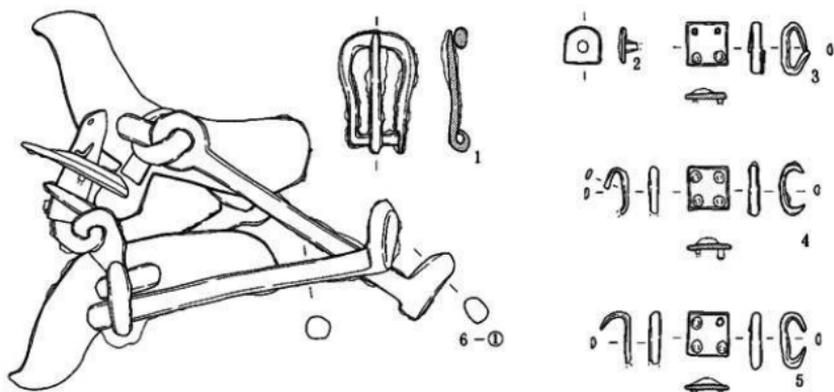
第64図 MGT 1~5 SM04(覆土) 6~21 遺構外



第65圖 MGT SM03

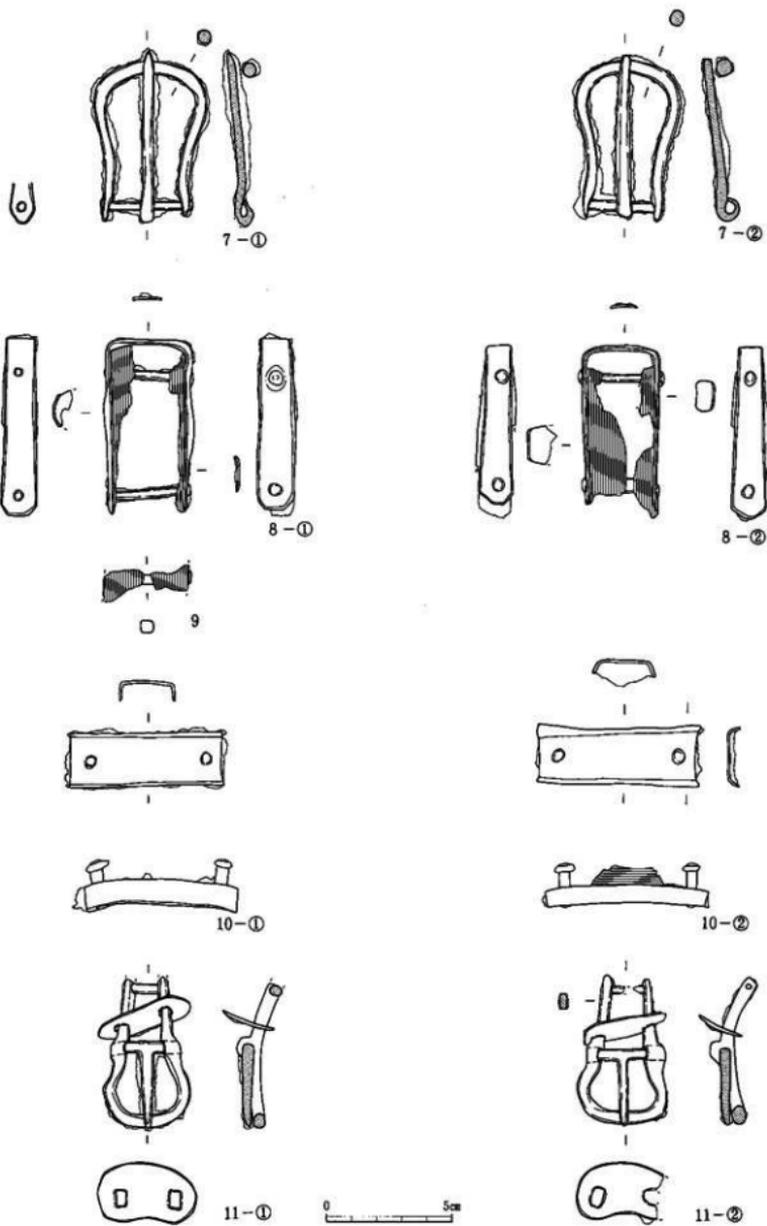


第66圖 MGT 1 SM03 2·3 SM04 4~9 SM07

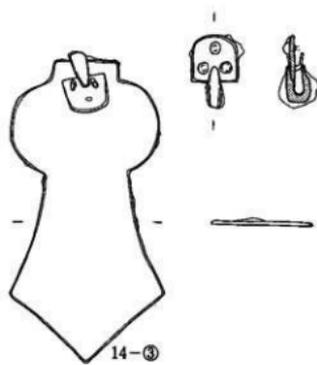
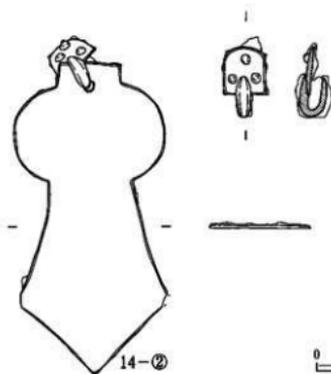
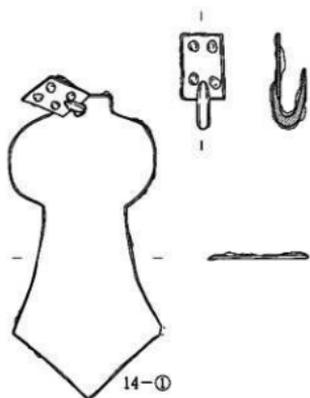
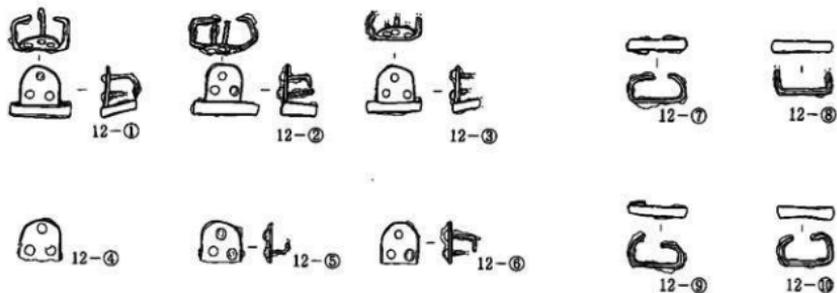


第67圖 SK64



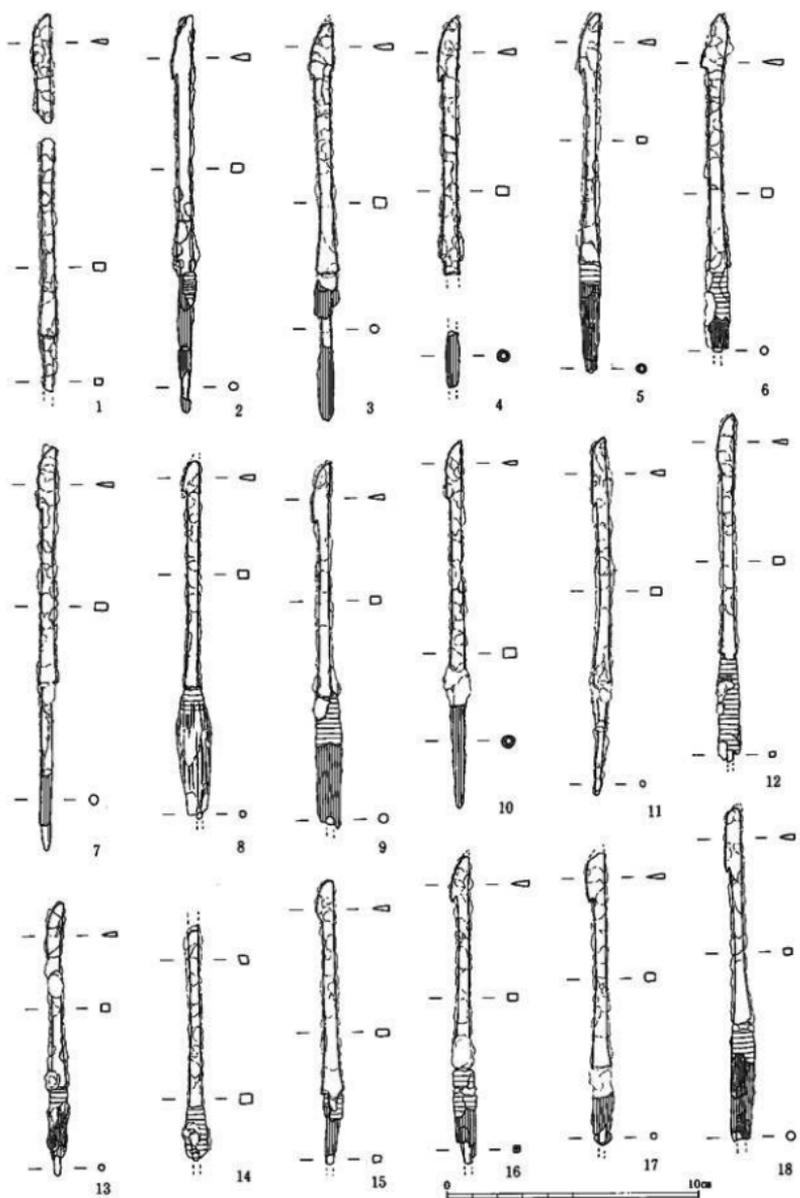


第68图 SK64

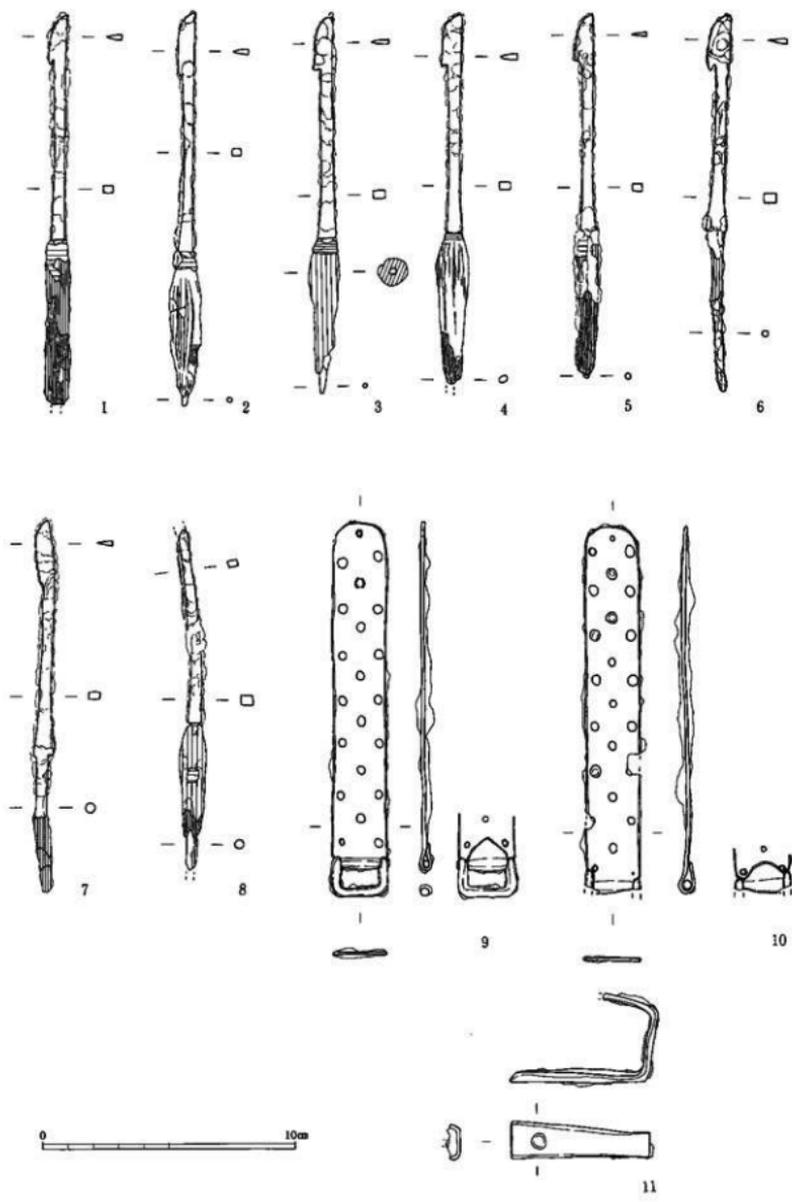


0 5cm

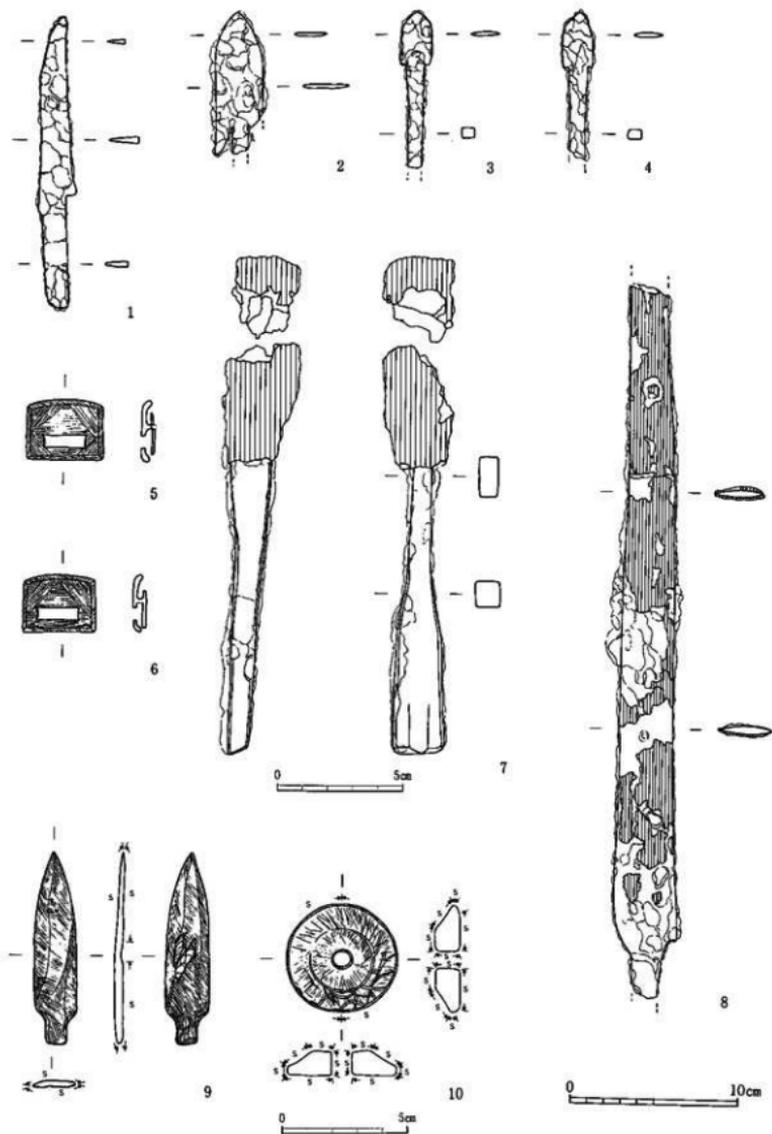
第69圖 SK64



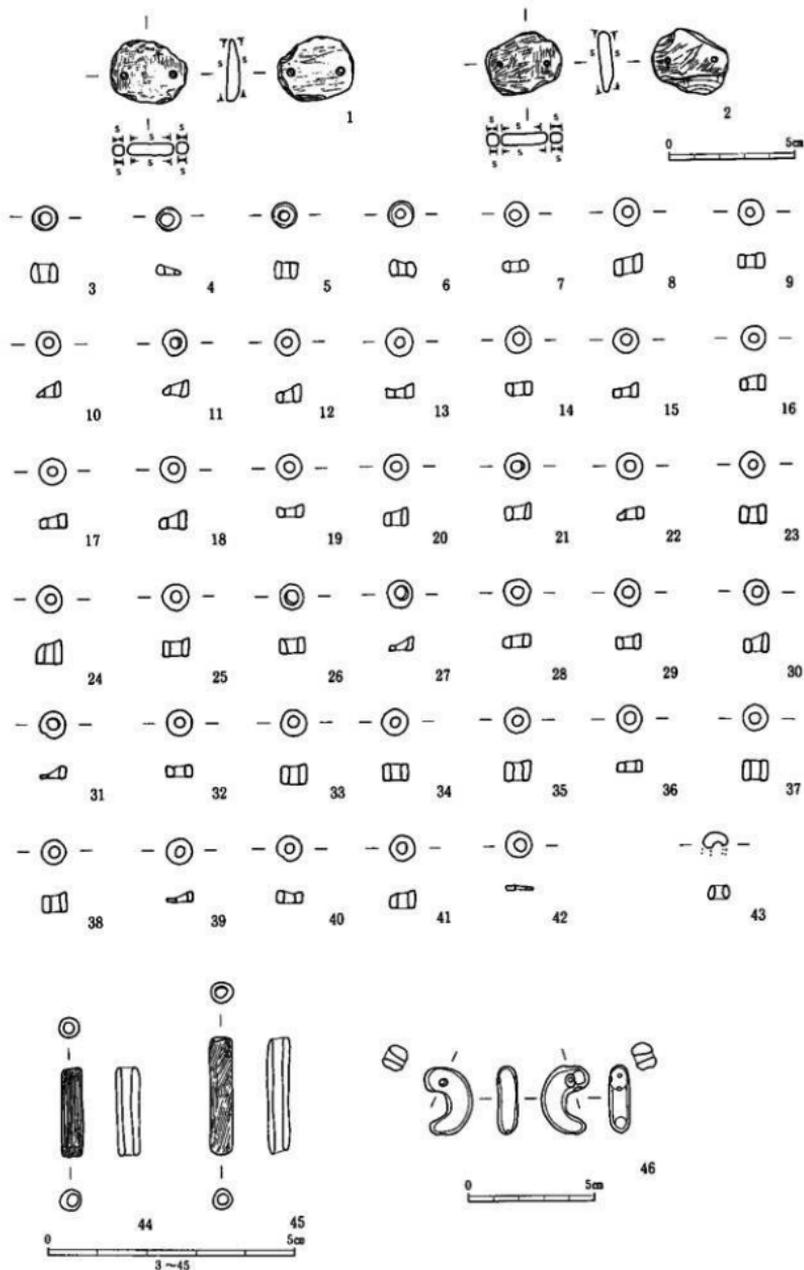
第70图 MGT SK18



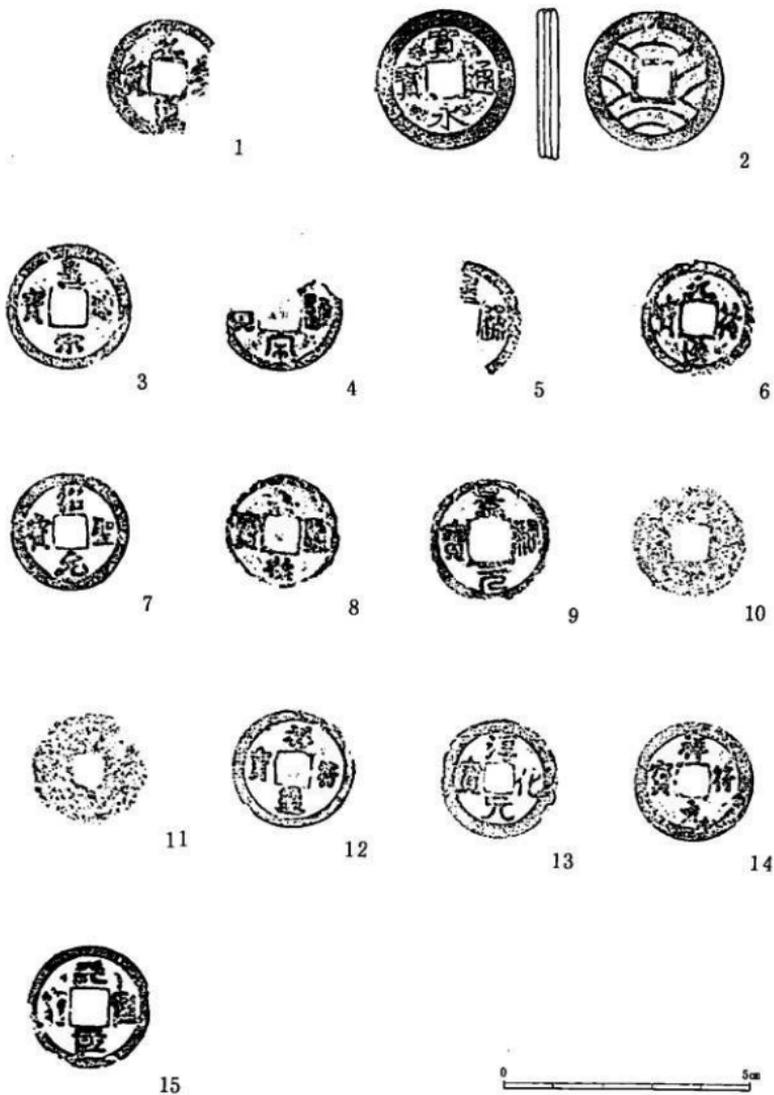
第71圖 MGT SK18



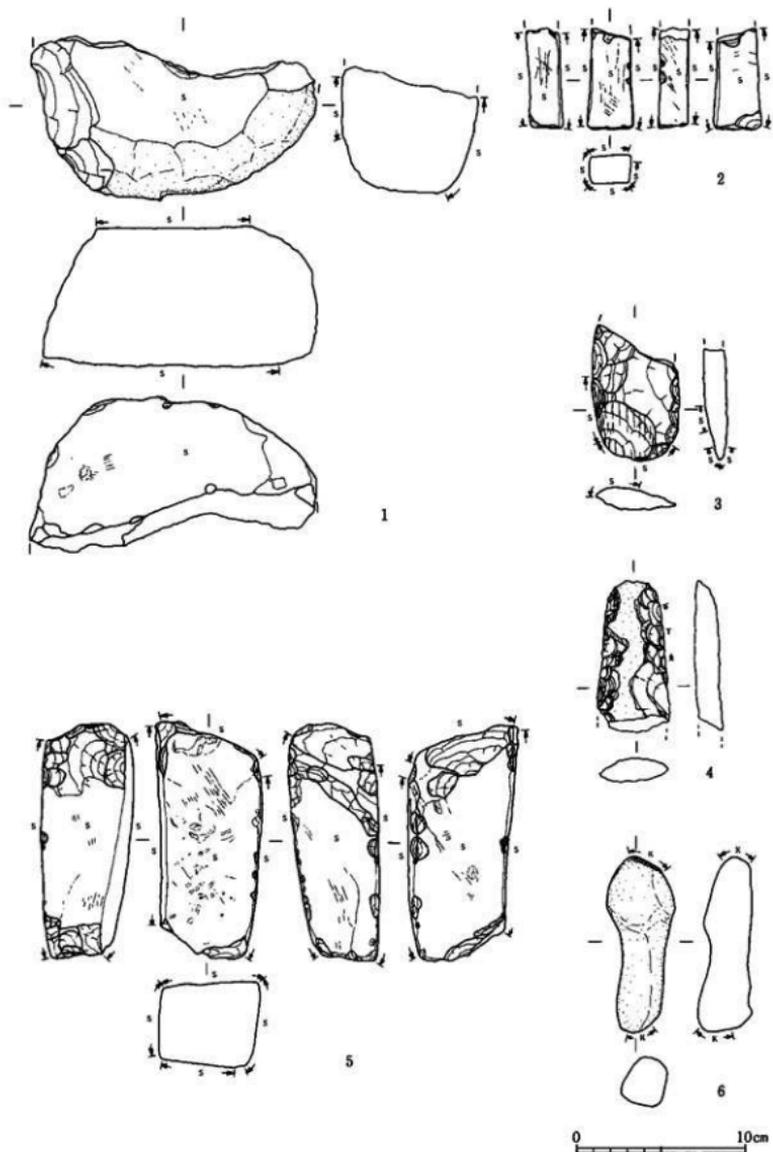
第72図 MGT 1 SM19 2~4 SM21 5・6 SK19 7・8 遺構外 9・10 SM04



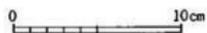
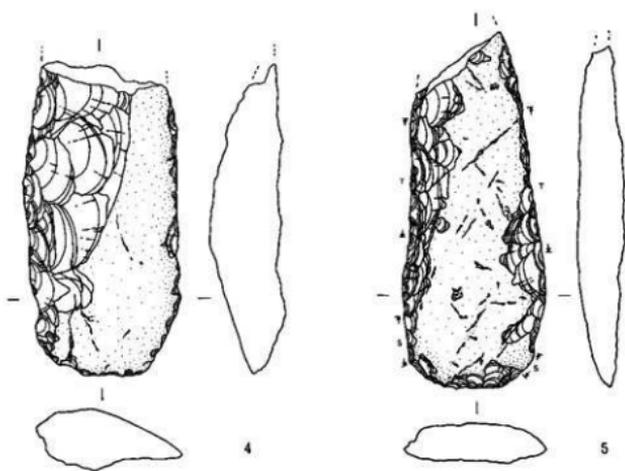
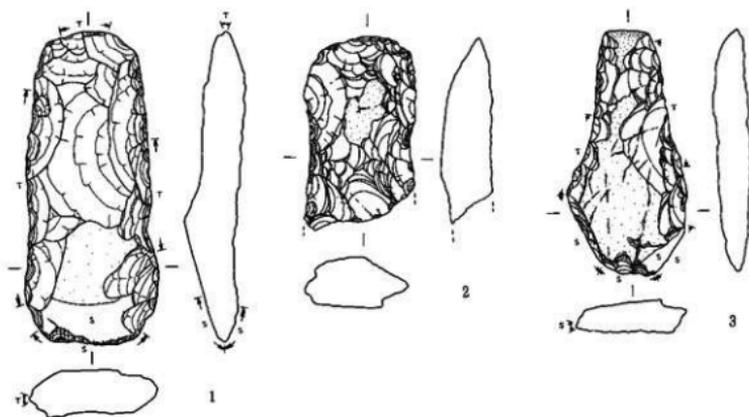
第73图 MGT SM07



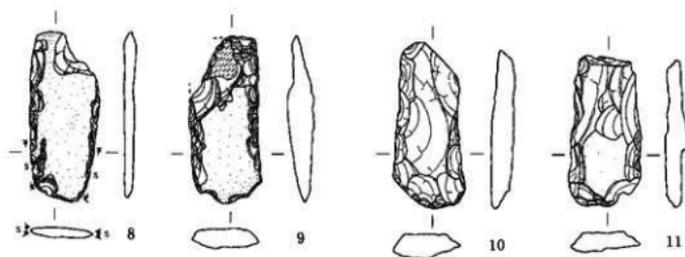
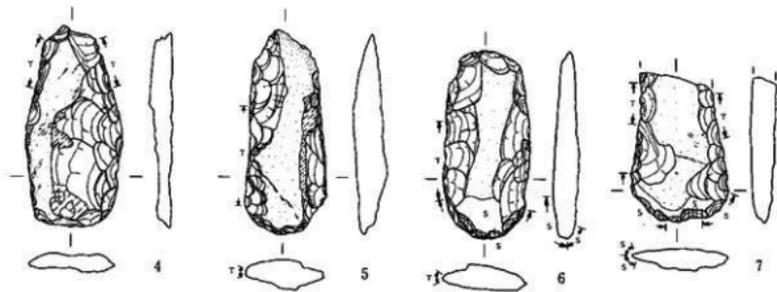
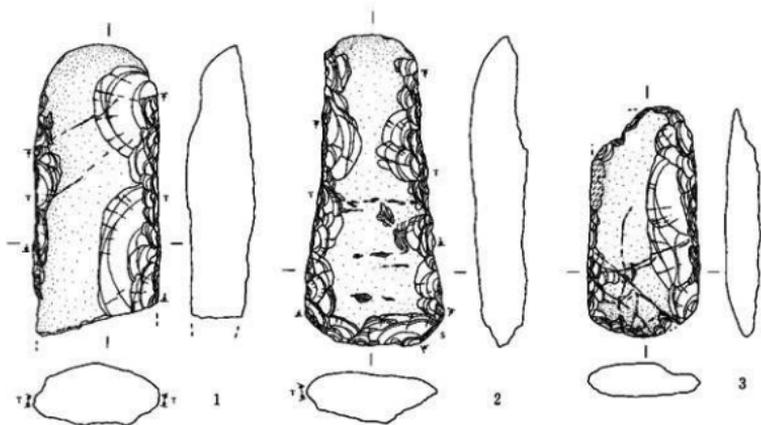
第74図 MGT 1 SB03 2 SK54 3~8 SK76 9 SK81 10~15 遺構外



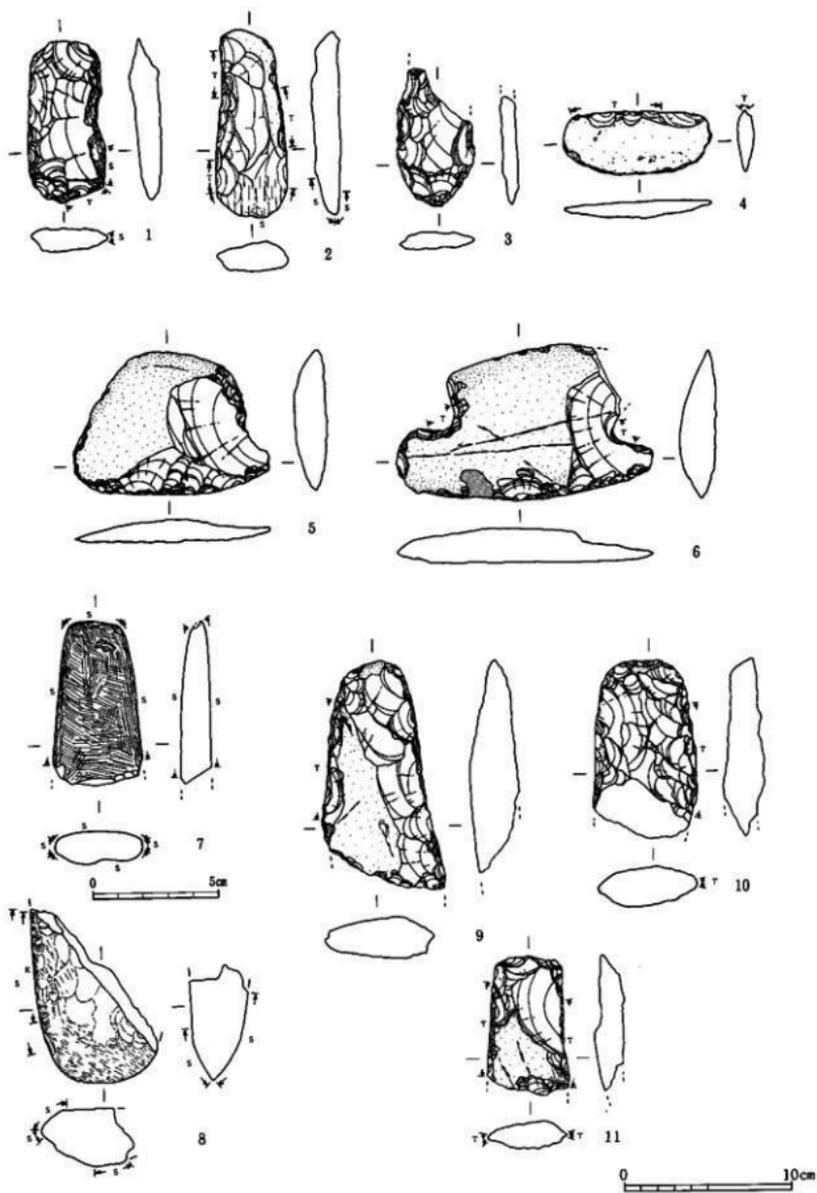
第75圖 MGT 1 SB04 2 SB15 3 SK13 4 SK34 5 SK36 6 SK57



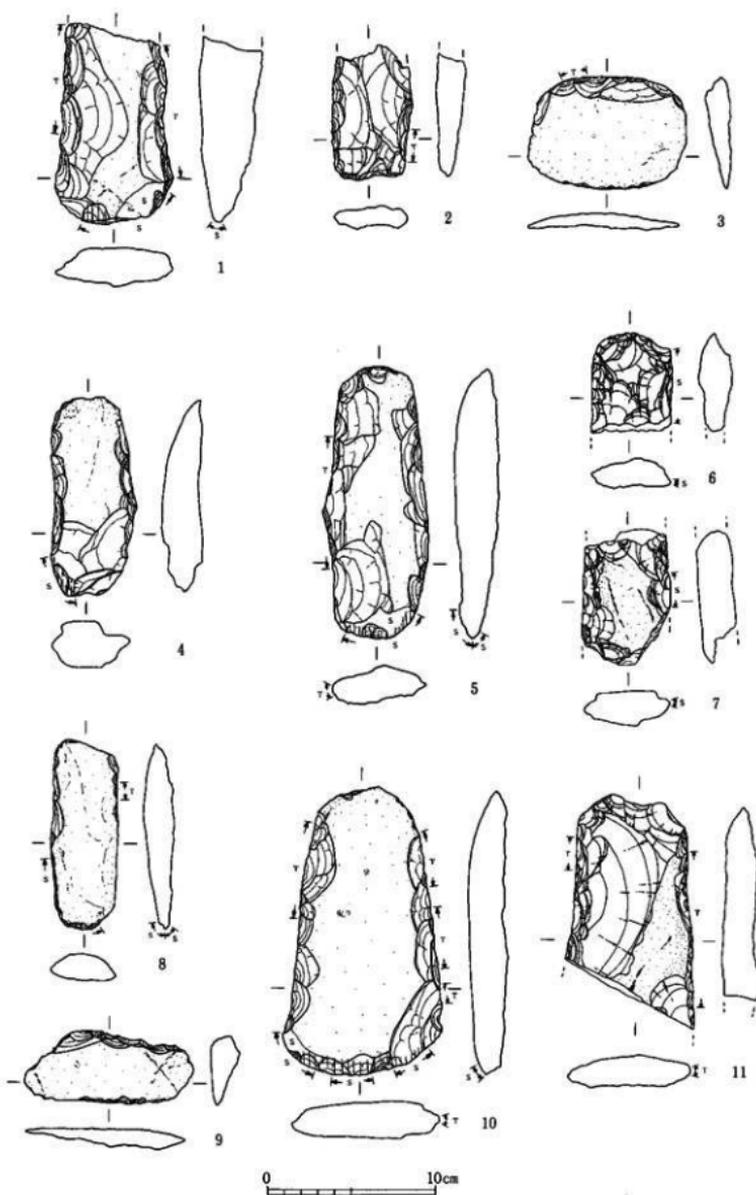
第76図 MGT 1~3 SM03 4~5 SM04



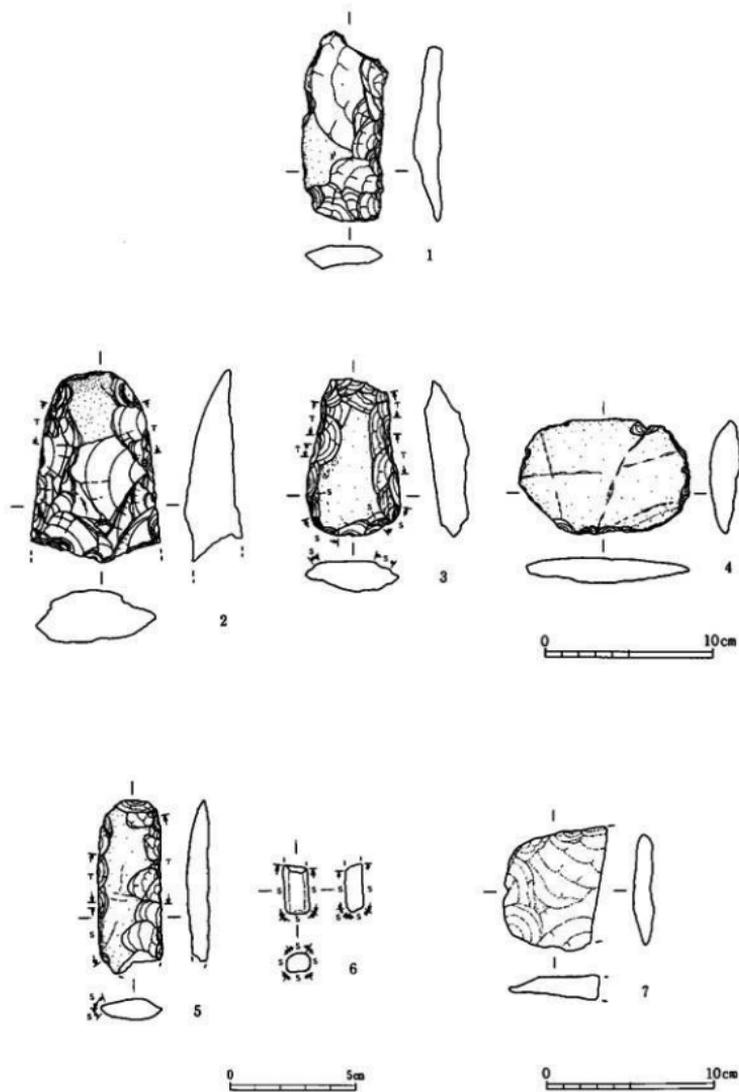
第77圖 MGT SM04



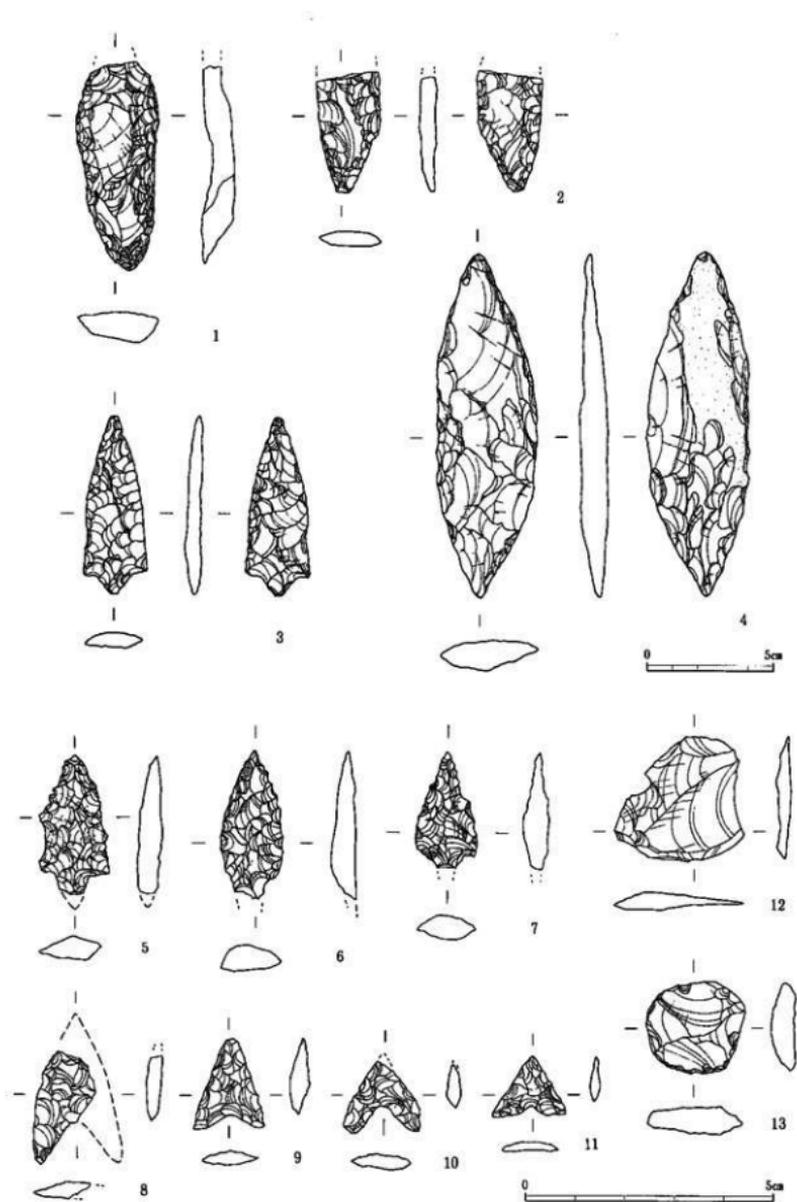
第78圖 MGT 1~8 SM04 9~11 SM06



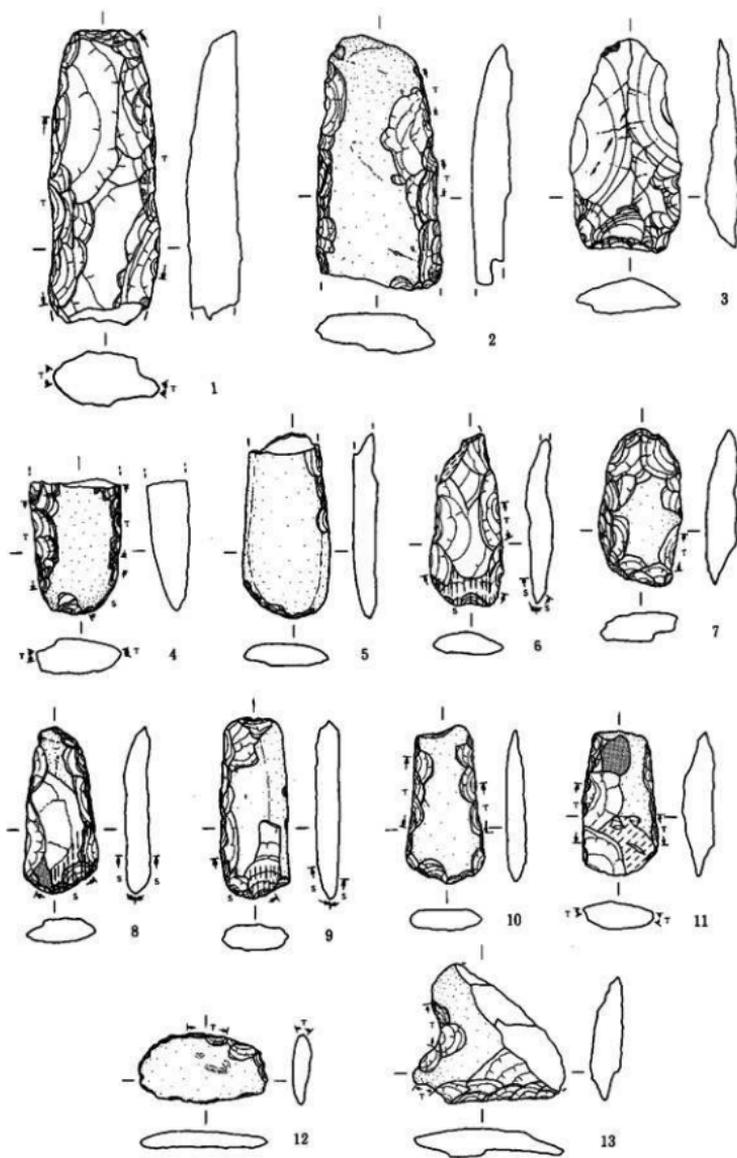
第79圖 MGT 1~3 SM07 4 SM12 5~9 SM15 10~11 SM18



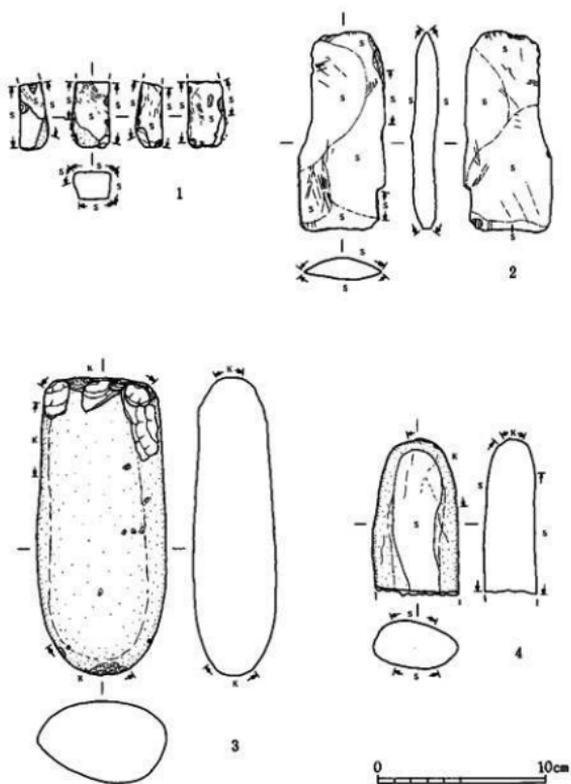
第80圖 MGT 1 SM22 2~4 SK82 5・6 SD01 7 SD09



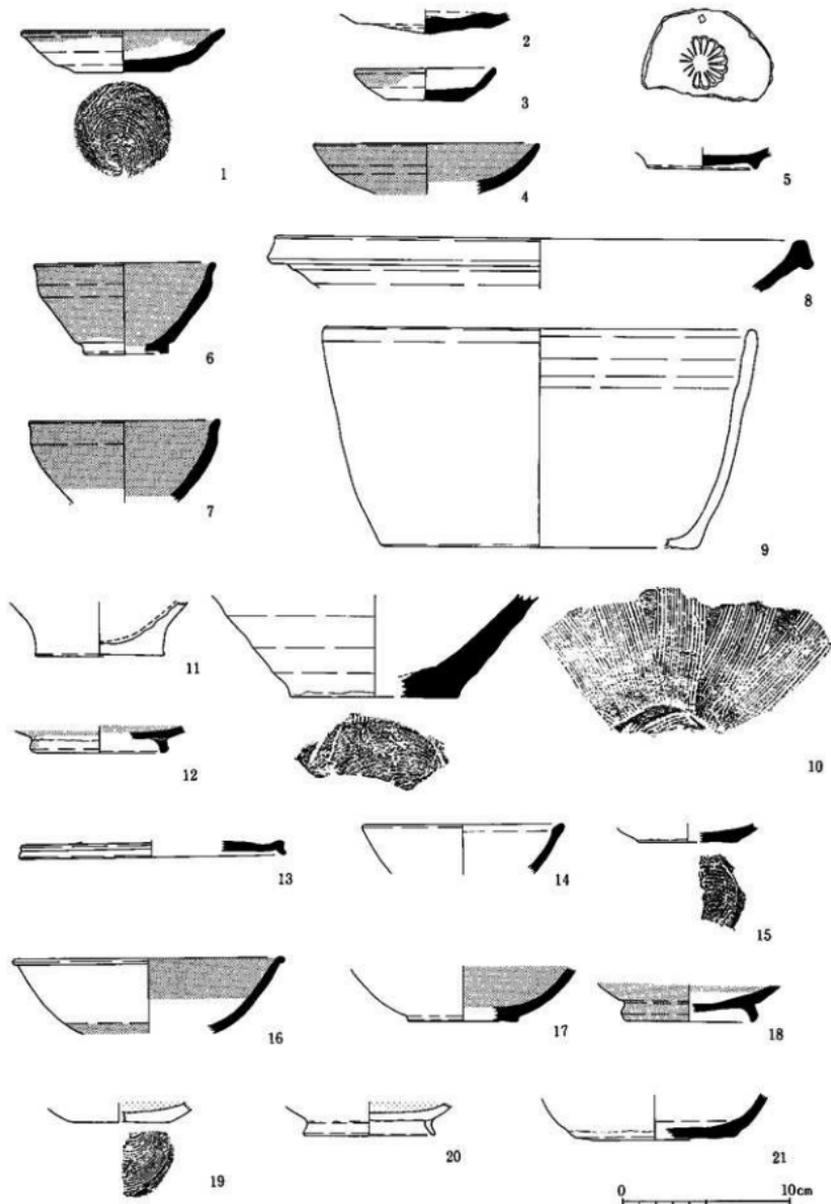
第81圖 MGT 遺構外



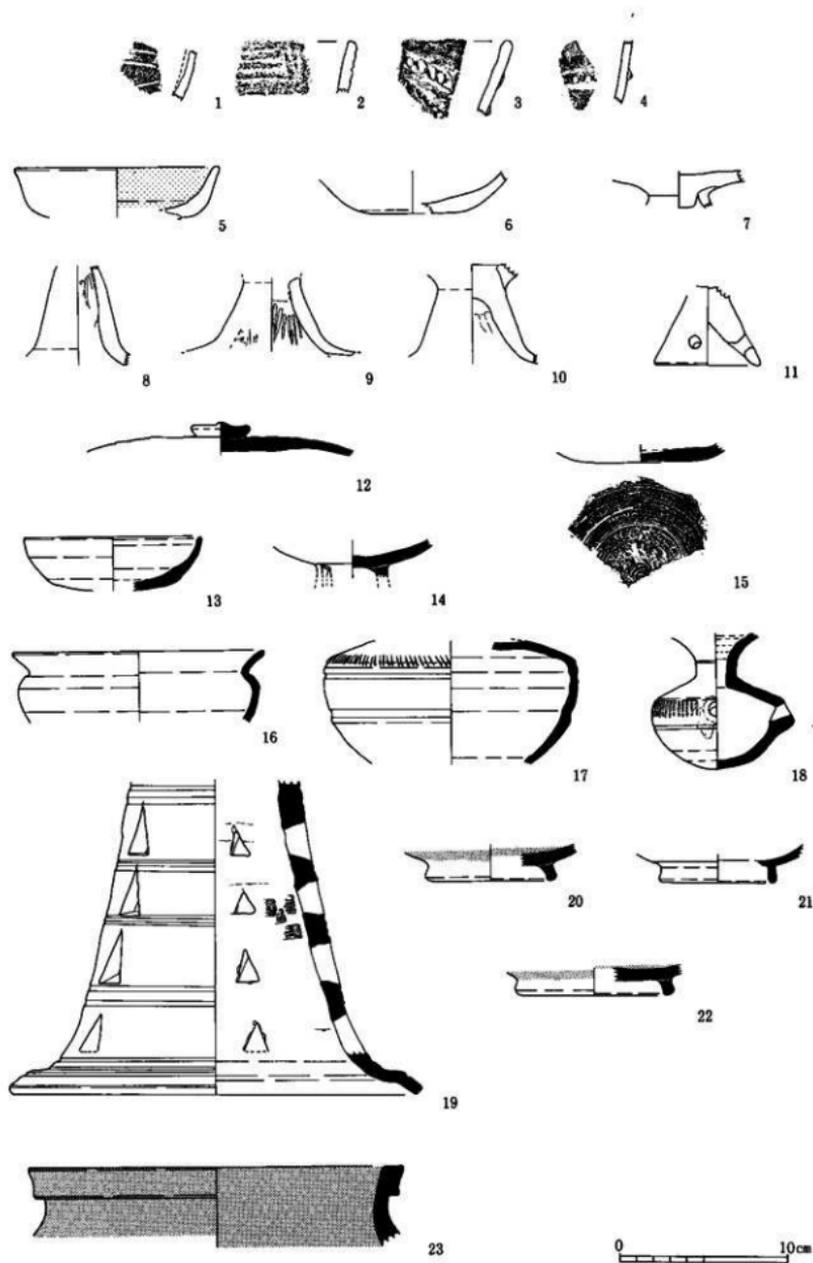
第82圖 MGT 遺構外



第83圖 MGT 遺構外

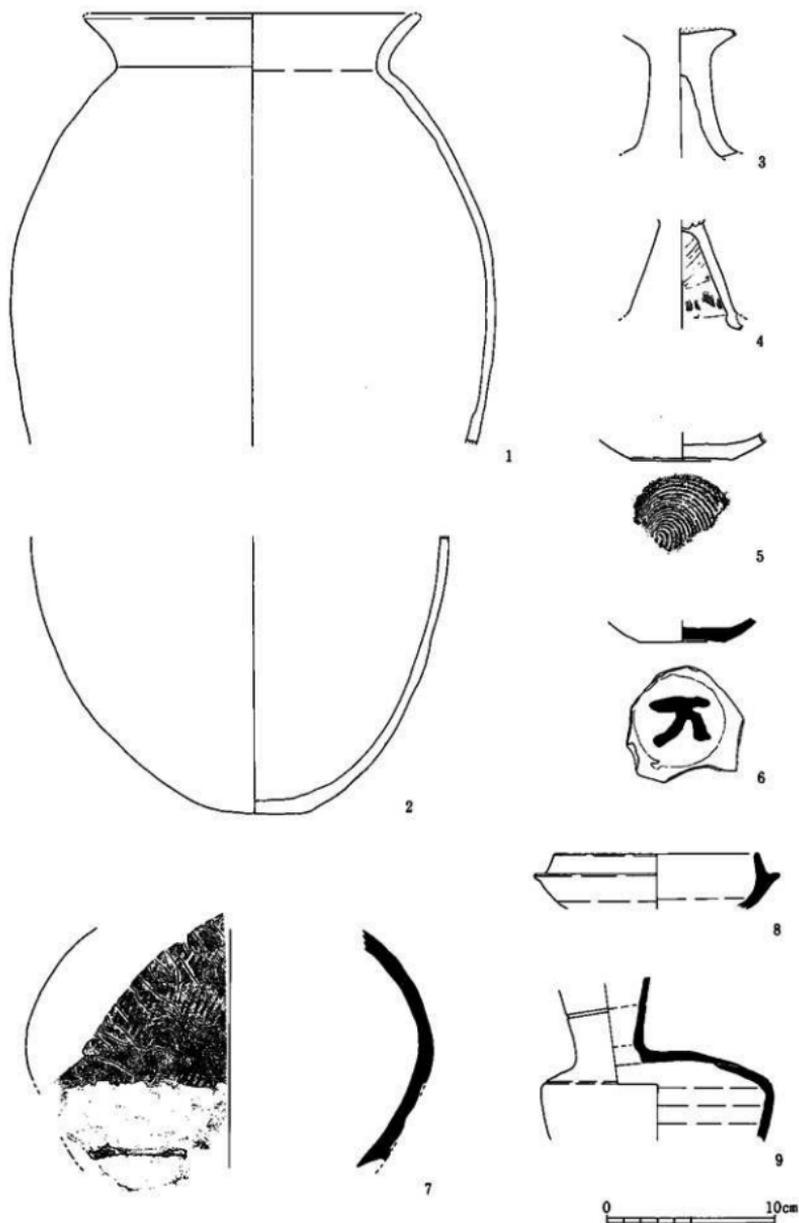


第84圖 TKY 1 SB01 2 SK25 3 SK29 4 SK31 5 SK30 6~10 SB08
 11·12 SM08 13~20 SD06 21 SD11

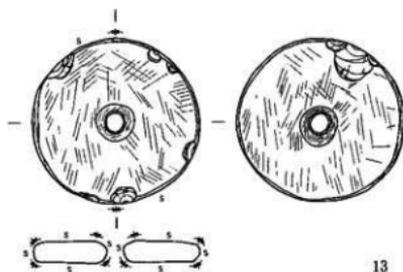
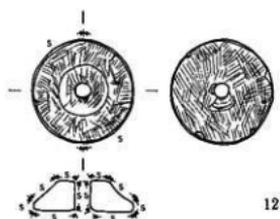
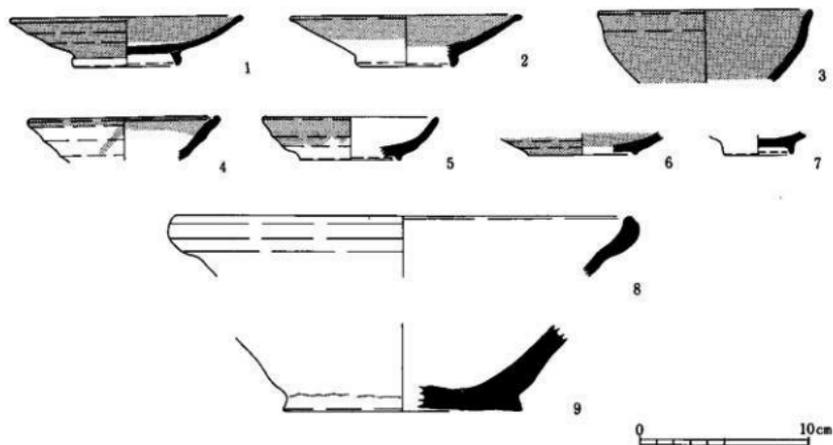


0 10cm

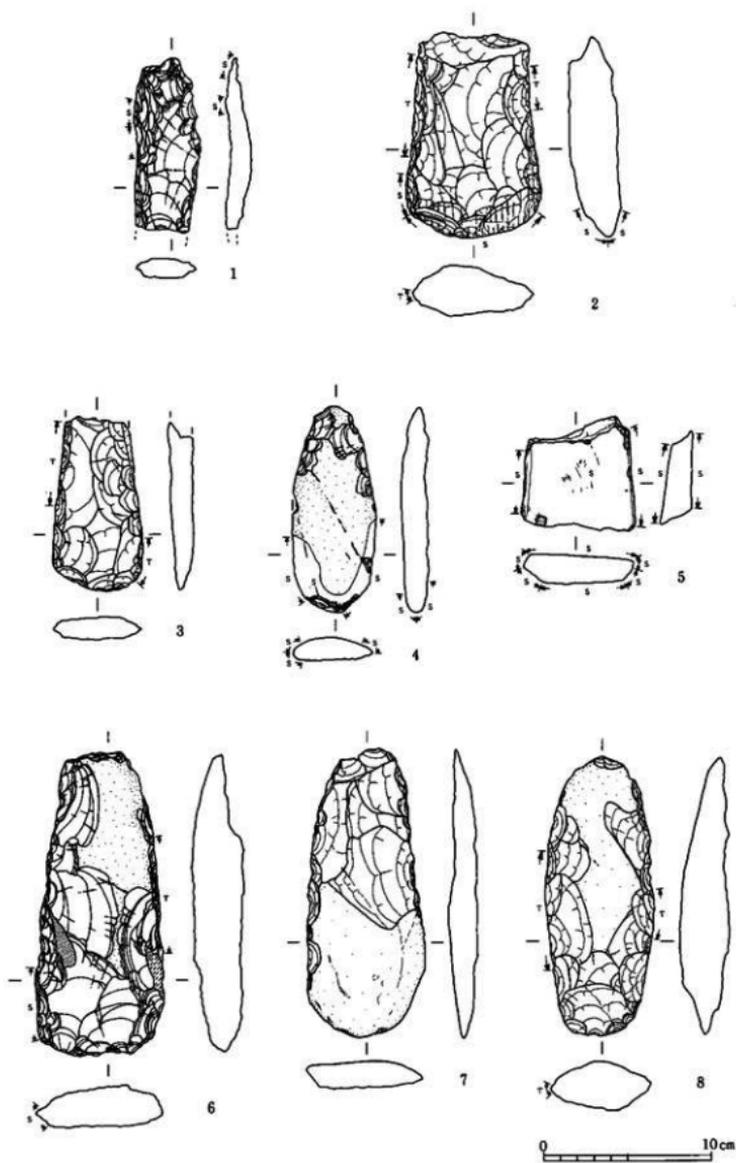
第85圖 TKY SD04



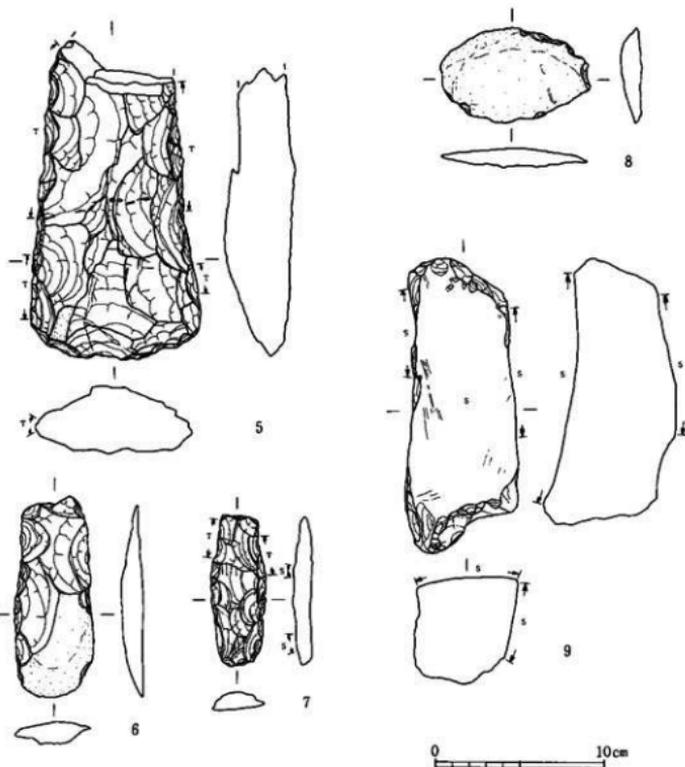
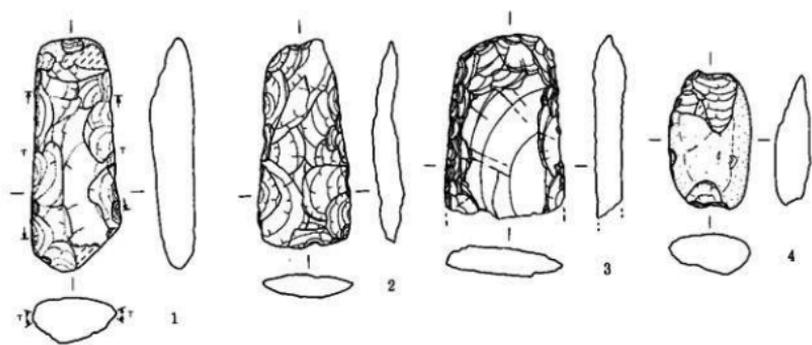
第86図 TKY 1・2 SX01 3~9 遺構外



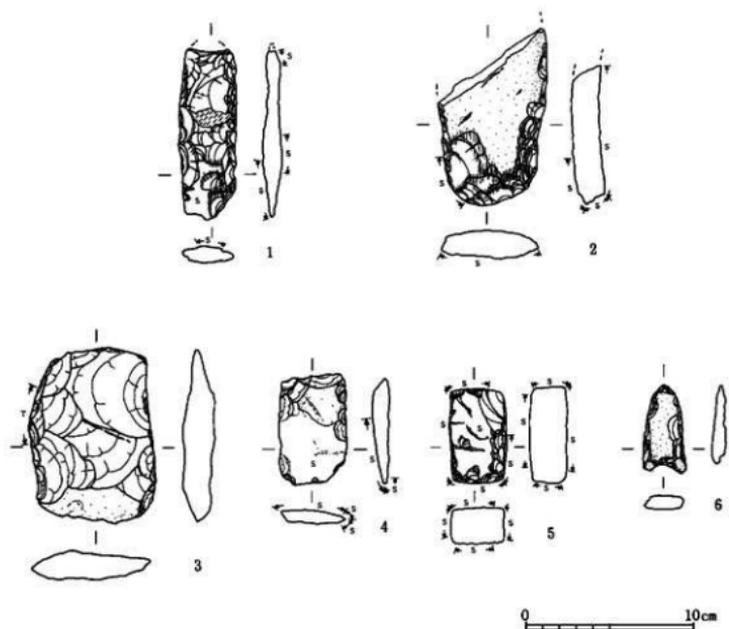
第87図 TKY 1~9 遺構外 10·13 SD04 11 SB08 12 SD06



第88图 TKY 1 SM08 2 SK21 3 SK24 4 SK32 5 SK36 6~8 SD4



第89図 TKY 1~4 SD04 5~9 SD06



第90図 TKY 1・6 SD11 2 SD12 3~5 遺構外

写 真 图 版



上：宮垣外遺跡東側調査区 下：西側調査区





S B02



S B04



S B09

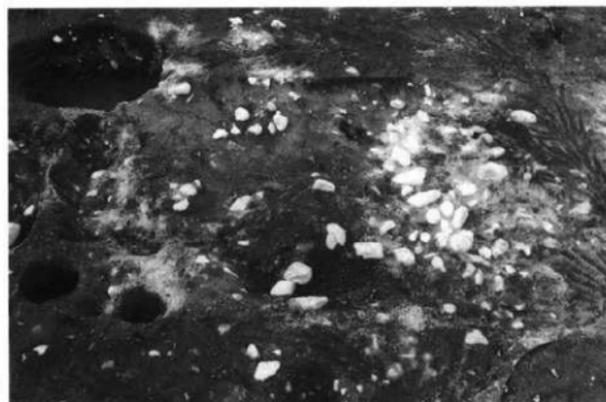
SB10

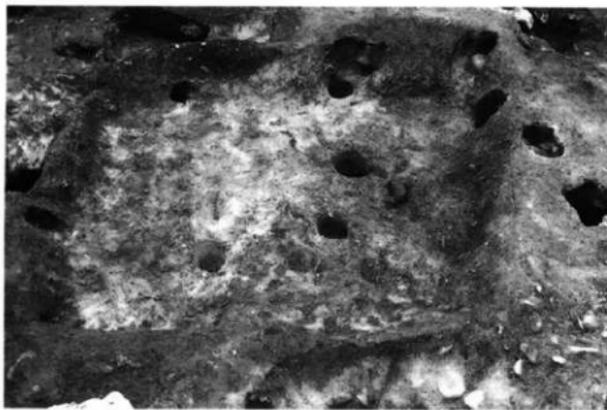


SB12

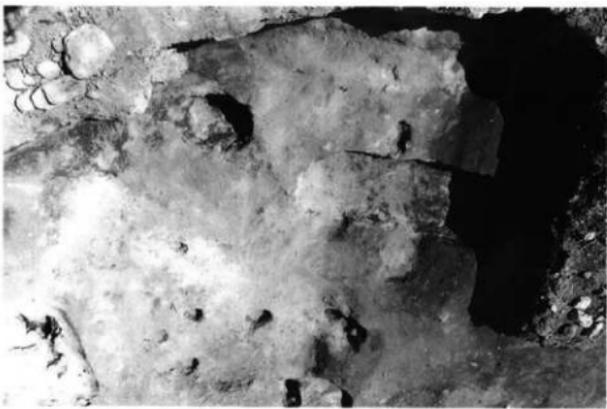


SB13

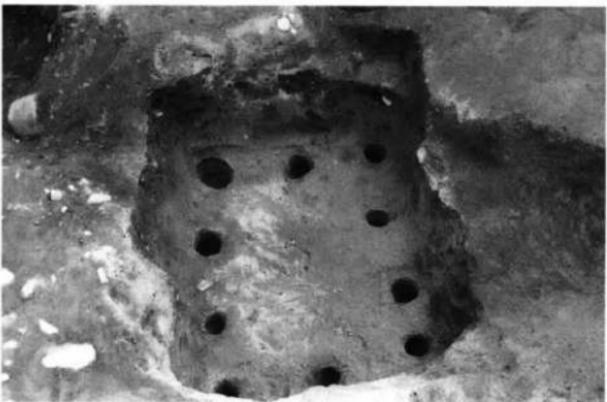




SB14



SB15



SB16



上 : SB17

下 : SB11





S M03



S M03 東側周溝土層



S M03 出土遺物



S K64



S K64 出土馬歯



S K64 出土馬具



左上：SM04

左中：SM04 出土遺物 1

左下：SM04 出土遺物 2

右下：SM04 南東側



S M06



S M08



S M10

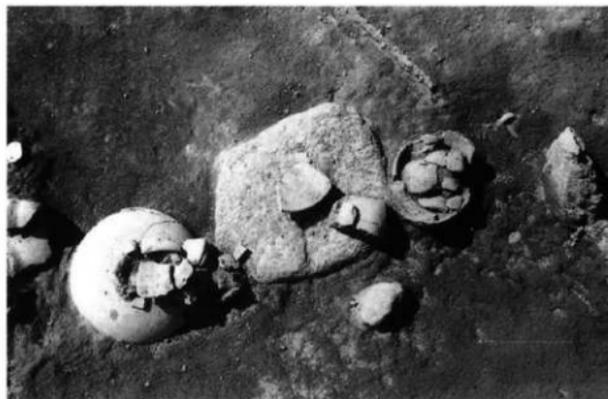




SM07



SM07 出土遺物 1



SM07 出土遺物 2

SM07 出土遺物 3

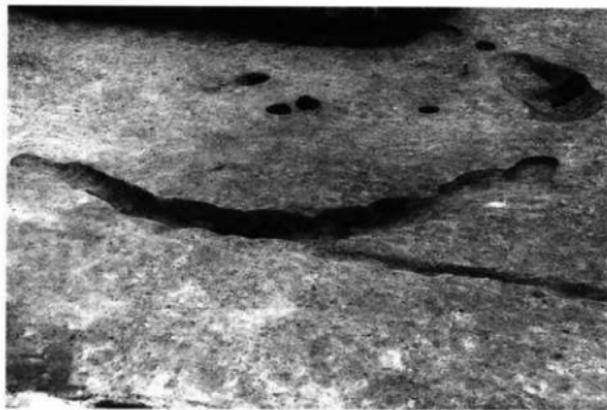


SM07 出土遺物 4



SM07 出土遺物 5





SM11



SM12



SM16



上：SM15 右下：SM15 出土馬歯 左下：SM15 南東側





SM18



SM18 出土遺物 1



SM18 出土遺物 2

SM17



SM19



SM19 出土遺物





SM20



SM21

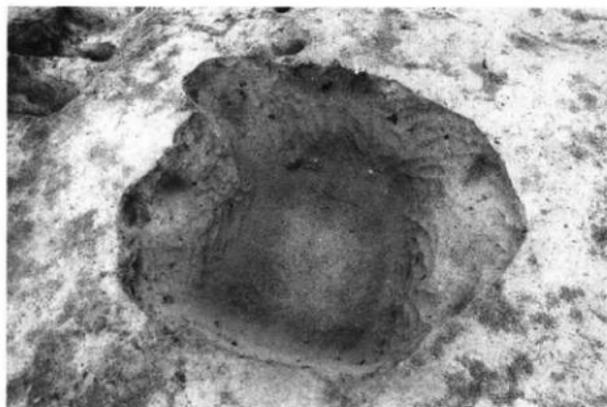


SM22 (つくね塚古墳)



上：SK10 出土馬骨 右下：SK07 左下：SK04

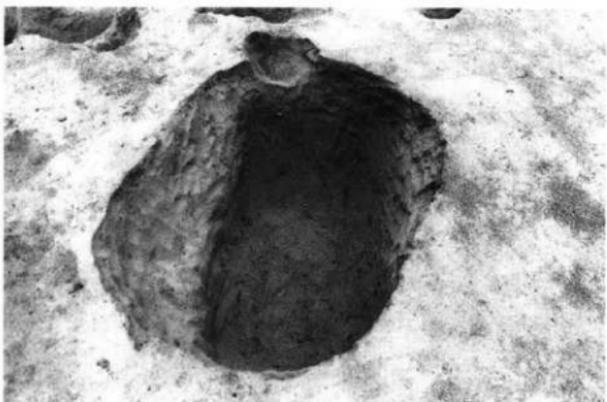




SK12



SK13



SK15



上：SK11 出土馬骨 右下：SK18 出土鉄鍬群 左下：SK18





上: SK19

右下: SK22

左下: SK21



S K23



S K24



S K45





S K46

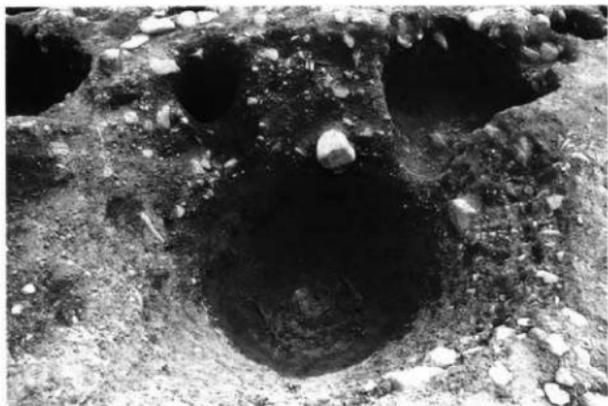


S K47



S K48

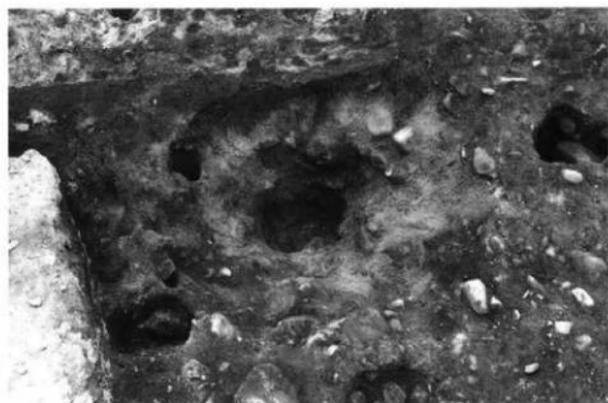
S K50

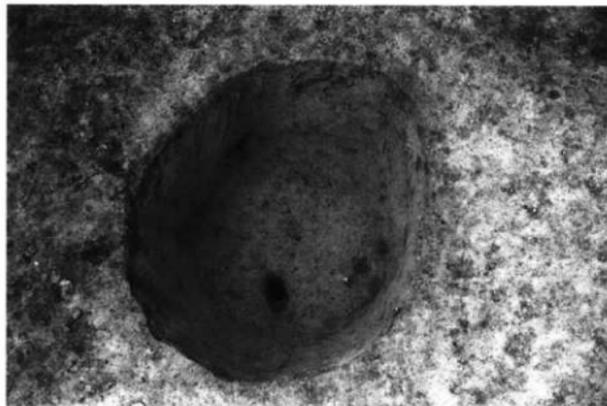


S K55

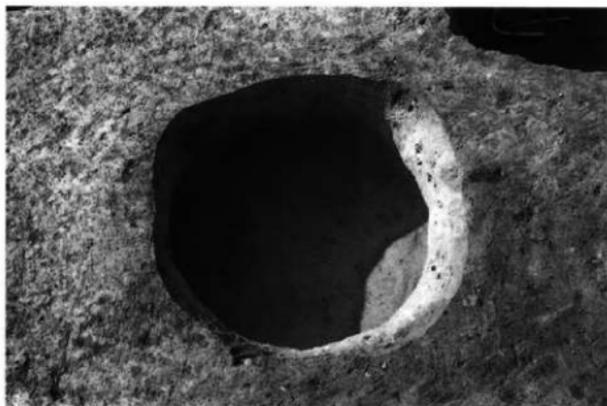


S K61





S K 65



S K 66



S K 67

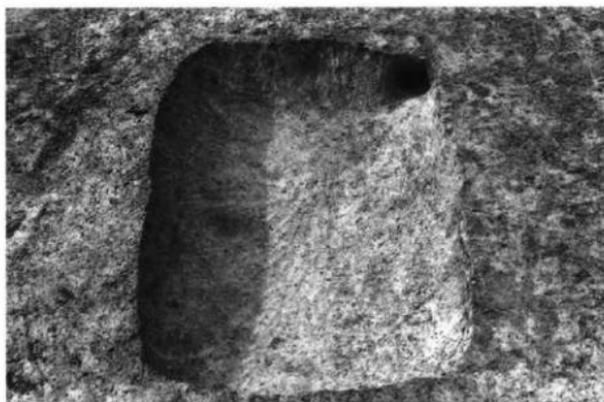
S K 68



S K 69



S K 74

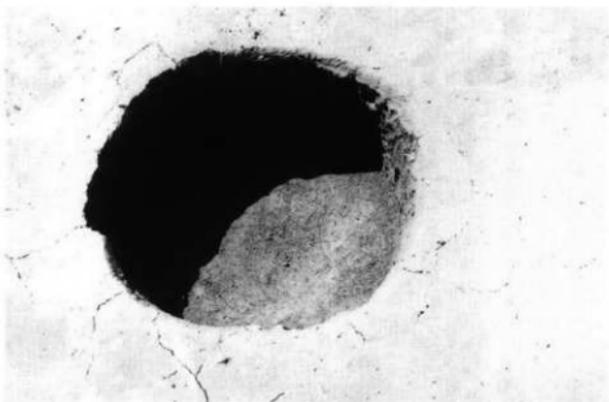




SK77



SK77 出土遺物



SK78

S K 80



S K 81



S I 01





SD01



SD05



SD09

SB02



SB08



ST04 ST06 SD11





ST02 近景



ST02



SM01 SM02

SK01 SK02 SK03

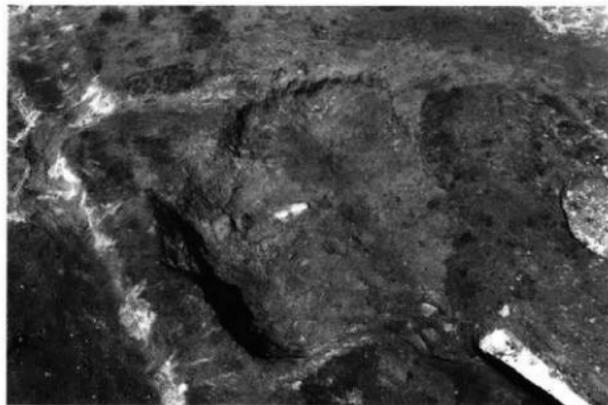


SK01



SK03





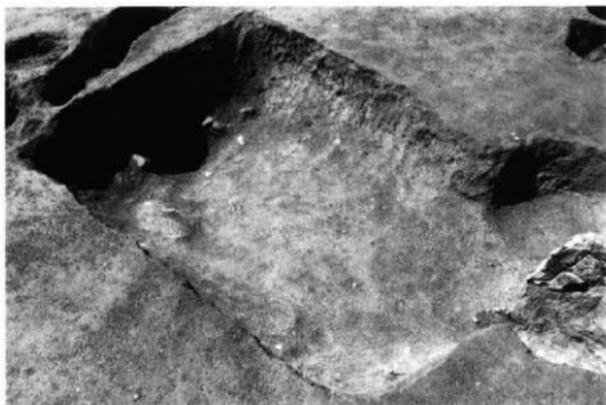
SK04



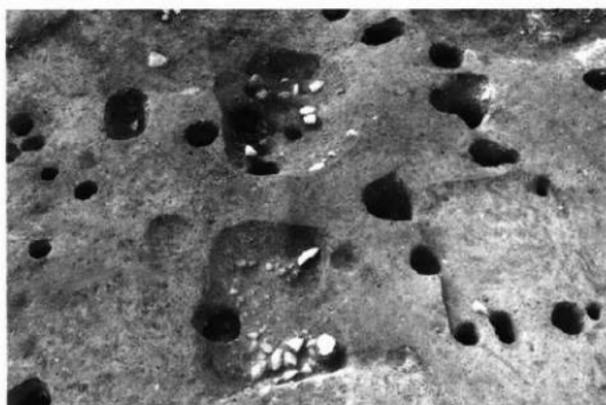
SK09 土层



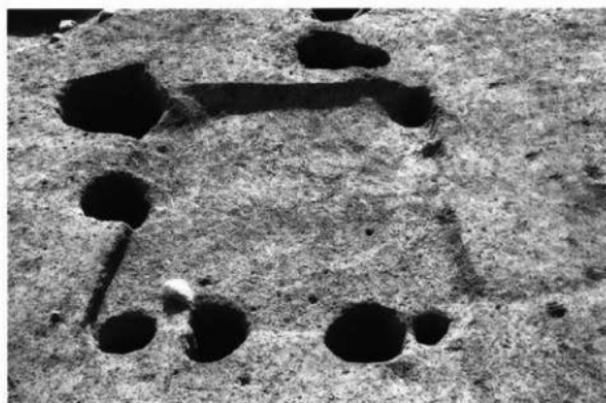
SK14



SK21



SK27 SK28



SK29